

Fate/Affection Doll

ラズリ487

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある一人の少年は諦めなかった。

だからこそ、少女はその少年を守った。

自らの意思関係なく傷つけてしまうその手で……

異なる運命の歯車は回り始める。

この物語はもう一つの物語、語られることのない異なる運命をたどった少女の話。

Fate／EXTRAのパートナーがもしパッションリップだったらというお話です。

目次

第1話	崩れゆく日常	1
第2話	聖杯戦争	13
第3話	対戦相手	23
第4話	コードキャスト	34
第5話	情報収集	42
第6話	決戦へ	53
第7話	黄金鹿と嵐の夜(ゴールデン・ワイルドハント)	61
第8話	2回戦開幕	74
第9話	イチイの毒	84
第10話	シャールウッドの森	92
第11話	祈りの弓(イー・バウ)	100
番外編1	フィオナ騎士団	112
番外編2	死の気配	119
第12話	Alice's Tea Party	124
第13話	二人のありす	140
第14話	誰かのための物語	152
第15話	永久機関・(クイーンズ・)少女帝国(グラスゲーム)	160
第16話	運命の分岐点	173
第17話	存在の証明	185
第18話	バトルロワイヤル	197
第19話	最凶の刺客	205
第20話	蠍の一撃	213
第21話	回路修復	223

第22話	愛憎のアルターエゴ	231
第23話	デッドエンド	240
第24話	宝石煌めく七つのヴェール (ダンス・オブ・ザ・セブン ヴェールズ)	252
第25話	死がふたりを (ブリュンヒルデ・) 分断つまで (ロマンシ ア)	261
第26話	必滅の (ゲイ・) 黄薔薇 (ボウ)	272
第27話	gain (解放) Beagalltach & Mor alltach (ベガルタ モラルタ)	283
第28話	消えぬ意志	293
第29話	最終決戦	309

第1話 崩れゆく日常

——地獄から私は生まれた

空が燃えている。

家が燃えている。

人が見るに堪えない姿になっている。

命は消える。思いのほかあっさりと……

肉親も友人も、名前も知らない人も、他愛もなく……

私は……

——それがどうしても、承服できなかつた。

紛争と天災の違いはあれど、なぜこのような悲劇は起きるのか。

なぜ誰も救う事は出来ないのか。

いや、そもそも……

なぜ、この世界はこのような地獄を許すのだろうか……？

赤く染まった空を見上げる。

一人の男が、天を仰ぐ

もし、もし仮に……

自分にもう一度命が与えられるとしたら……

今度こそは、今度こそは……

——決して……

だが、二度などない。

忘れるな。私は地獄から生まれた。

その意味を……

どうか忘れないでくれ。

「!?」

まどろみについていた脳が、一気に覚醒する。

目の前に広がるのは『月海原学園』と書かれた場所。そこで一人の青年の意識が覚醒した。

どうやら自分は歩きながら眠っていたらしい。これで何度目だろ

うか、そろそろこの癖を直さないと本当に倒れたりしないだろうか。

月海原学園の制服に身を包んだ、海のように煌く青い髪に森林とも連想させる緑目『寿々科^{すずしな}翔^{しょう}』は自分の頬をぺちぺちと叩きながら校門に入ろうとする。

最近、よくわからないが変な夢を見るような気がする。それがどういう意味をしているのかはわからないが、燃えているような場所に佇んでいるようなそんな夢だ。

後で、この夢の意味でも調べてみようか。

近頃のネットは偉大だ。夢占いとかいう見た夢によつて今の心理状況が分かるとかなんとか、そういうものも増えてきたのだ。

そんな変な考えをしていたところで一人の青年から声が掛かる。

「おい、なんだよ翔。前を歩いていったのか？」

「お、おはよう慎二。なんだよ、そんなにふらついていったのか俺？」

翔に声を掛けたのは、まるでワカメ……言い換えよう。個性的な紫の髪をした『間桐シンジ』。

彼の性格は正直、いいとは言えない。高慢で鼻持ちならない態度で他人を見下し、自身の実力を絶対視している。さらにはだ、自称『天才』とまで言っている人物だ。

「気にする必要はないんじゃない？ 平凡な自分を責める必要なんてないさ。誰だって、才能あふれる人間のそばじゃあ退屈な奴に見えてしまうからね」

「んだとこのやろお！ 俺が平凡だって!? 退屈な奴だって!？」

朝からいきなりのこれである。だがこれが慎二という人間なのだ。そしてこの翔の頭の足りない発言。最早、漫才かなんかなのかも知れないが、これが二人の日常である。

どうやら、この二人は友人関係でもあるらしいようだ

いつも通りの日常なのだ。

いつも通りなはずなのだ。

でもどうしてだろう。心の中でこれが日常ではないと言っている自分がある。

——目を覚ませ

ずきりと頭が痛む反射的に少し頭を押さえる翔。

なんなのだこれは、最近になって、この頭痛がひどくなった気もする。だがそう語りかけている自分がいるのも事実だ。

もしかして……自分の中にもう一人の自分がいるとか……そんな絵空事のような出来事があったりでもするのだろうか。

まさかそんなことはないだろう、ただ自分はきつと寝ぼけているだけだ。心の中でそう言い聞かせる翔。

「んじや、僕は校舎に行ってるぜ？ 精々、ふらふらして壁に頭ぶつけんなよ？」

「はいはい。また校舎内でな」

慎二が校舎内に入っていくのを見つめる翔。

空を見上げる、風が吹く。今日の風は一段と騒がしい気がする。

「あ、翔くん。おはよー！」

慎二が校門に入って間もなく、元気よく翔に声を掛けるのは、同じ月海原学園の制服に身を包む、白く輝く髪をしており、まるで灼熱を感じさせるような赤い瞳をした少女。

その少女の名前は……

待てこの子は誰だ。こんな子が今までいたのだろうか。

考えれば考えるほど先程少し収まっていた頭痛がまるで思い出したかのように、だんだん酷くなってくる。

「あ、ああ、おはよう」

「そんなにぼけーとしてたら、いつか壁に激突するわよー？」

その通りだ。気づいたら壁に激突して呻く翔が数分後には現れるかもしれない。それだけは、やだと思っただので早く脳を覚醒させなければならぬ。

「悪い。ありがとな」

笑顔でうなずき、パタパタと走っていく白髪の少女。

まあ自分は、自分でも自覚があるくらい物覚えが悪い人物だ。クラスの名前と顔を一致させるのに数時間、数日は掛かると言ってもいい。

まだ残る頭痛に頭を片手で抑えながら、校門へ入っていく翔だっ

た。

「……どうした翔」

「悪い慎二、今日頭がずっと痛い」

変な夢を最近見るせいだろうか。ここ最近、頭がずっと痛いのだ。しかも今日は一段とだ。なんだかあの白髪の少女に出会ったからだろうか。

なんだあれは、あの少女は疫病神か何かの分類なのだろうか。ともあれ年頃の女の子にとっても失礼なことを考えてしまったことを後悔しながら机に突っ伏している翔。

そんな朝から様子が変な翔に慎二が声をかけたのだ。

「気分悪いなら保健室行けよ。僕に風邪をうつさないでくれよな」

「はは、悪いな心配かけちゃってよ」

今日は早退することしよう。このまま授業をやってもきつと頭に一段と入らないに違いない。

もともと授業内容など頭に入っていない気もするが……

しかし、この頭痛はひどい、病院にでも言っつて風邪とも言われても仕方ないだろうか……

風邪になつたら学校は休めるには休めるが、正直面倒くさい部分の方が多い、だからあまり学校は休みたくはないのだが……

席を立とうとした時、廊下に異質な違和感を覚え、廊下を見つめる。

心臓が鳴り響く、あれを見てはならない。見たら最後……自分は

……

「!?」

「ん？」

フラッシュバックするかのよう鮮明な光景がよぎる。教室で何か槍のようなものに貫かれた自分。他の生徒もだ。でもどうして

……

頬杖をついた慎二が翔の様子に気づき彼を見つめる。慎二が何かを語りかけようとした時だっただろうか……

背筋にぞくりとした感覚がして慎二と翔は、廊下の方に目をやる。直後に窓に張り付く血にまみれた手。

廊下を見つめていた慎二と翔はその光景を見て小さく悲鳴をあげる。

「に、逃げろ……違反者だ。こつちに……」

ずるずると廊下を這う生徒の一人、そして、その役目を終えたかのように、まるで糸の切れた人形の如くその体が地面に倒れ反応がなくなる。

悲鳴をあげながら逃げる慎二と翔。その刹那だっただろうか……

瞬間、槍が地面から生えた。周囲の地面から無数の槍を生やしあらゆるものを串刺しにしていく、校内の生徒たちが、それになすすべもなく槍の餌食となる。

当然、翔と慎二の机もだ。一瞬でも逃げ遅れていたら自分がどうなっていたかと思うと……冷や汗が流れる翔。

逃がっている最中で一人の少女がふわりと横を通り過ぎる。その人物も翔にとつては見たことのない姿で、白く輝く髪に燃え盛るような赤い目をした少女。

いや、まて……あの少女、どこかで見たような。

思い出した。朝に校門前で出会った少女だ。同じ月海原学園の上着を着ているが、ここにきて断言できる。あの少女はこの生徒じゃない。

あの胸につつかえた違和感はこういうことだったのか。ここにきて立ち止まり、その少女を見る翔。

「違反者と聞いてきてみれば、ビンゴなんじゃない？」

その少女が口を開く。その少女の視線の先にあるのは、ピエロのような格好をした人物。そして、黒い甲冑に血塗れのマントを羽織った騎士。その成り立ちからまるで血に飢えたような狂気すら感じる。

いや、あれは人なのか、あの黒い甲冑の男性からは、なぜだか人ではないようなものを感じていた。

「ケヒャヒャヒャ、ランルーくん、イチバンスキナモノハサイゴニトツテオク」

まるでどこかのバーガー店のマスコットののような格好をしている
ピエロのような人物は、その少女に視線を合わせればそのようなこと
を口にする。なんだこれは何が起きているのだ。翔の頭では理解が
つかないことばかりだ。

「ダカラ、モドツテキタヨ？」

「およよ、私を食べたっしておいしくないよ。というわけで変装お終い
!!」

白い髪の少女が着ていた月海原学園の制服を、勢いよく剥げば、露
わになるのはその白い髪と同じ色をしたノースリーブに紫と黒が混
ざったチェックスカートの姿。

そして、その少女の隣にはいつの間にか一人の男性が立っていた。

「タベノコシハ、ヨクナイヨー？」

「食べ残しは許さないけど、それよりも今は『化け物』退治ね！ いつ
てランサー！ 契約したばかりだけどさ。さっそくだけどあなた
の力、試させてもらおうよ！」

「御意……『志波^{しなみ}白亜^{はくあ}』。貴方が主というのならば、俺は主の命令、そ
れを聞き入れよう」

その男性は漆黒の髪をした、緑色の軽装の鎧のようなものを着た人
物。顔立ちは、右目の下に泣き黒子のある美男子といてもいいだろ
う。その男性もまた対峙する甲冑に血塗れのマントを羽織った騎士
と同じような力を感じる。

そして白亜の隣の男性は、右手の赤く輝く長槍と、左手の黄色く輝
く短槍、その二本を構える。だが、その槍から発せられるのは神秘的
な力さえ感じられるほどだ。

「おお、なんと！ なんと！ 我が妻を化け物と罵るか!! 不義不徳
のヤツバラよ！ ならば事実無根の力はあるか!!」

黒い甲冑の男性が何かを喋る。同時に翔の背中にぞくりと迫る恐
怖のようなもの……

まずい、なにかがくる。翔の直感がそれを告げている。

頭によぎるのは先程の地面から生える槍、ならば逃げなければ、死
ぬ……!!

「串刺城塞!!」

瞬間、槍が地面から生えた。周囲の地面から無数の槍を生やしあらゆるものを串刺しにしていく。

翔もその槍を何とか潜り抜け、彼らがいる場所を見つめる。

ランサーと呼ばれた青年は、その槍を潜り抜け、その鎧の男性の槍と自身の槍をぶつけ合い、そこから火花が舞い散るのが翔の視線に写った。

「貴方をバーサーカーとみる人もいるだろう。だが俺は分かる。貴方は優れた戦術感と厳格さを持ち、道徳を重んじる武人である」と!

黒い髪をした二本の槍を持つ男性が、その鎧を着た男性に向けた何か言葉を発するが、翔にとってそんなことはどうでもよかった。逃げなければ、自分は死ぬ……

金属のかち合う音が響き渡る中、翔はそこから逃げ出す。

入り口が見えた。やっと学校から出ることができる。

とにかく逃げよう。この学校から逃げて……家に……

「え……家?」

なぜだろうか、このタイミングで家の位置を忘れる。違う、違う違う違う!!

——家なんてどこにもない。

いきなりなにを、頭の中の自分は何を言っているのだ。

さて、俺は何歳だ?

翔は考える。何も思い出せない。

この学校に入る前は、どこに住んでいる、家族構成は?

駄目だ、何も思い出せない。

「慎二、慎二……オレ、おかしい、記憶が……記憶が……シンジ?」

翔は玄関で辺りを見回す。

慎二がいらない……逃げている最中にはぐれてしまったのだろうか。辺りを見回すが玄関には誰もいない。

……どうして?

それにやけにここは静かだ。授業の時間ならば先生などの声が聞こえてもいいはず……

それが無い。まるで最初からなかったみたい……

「俺は……俺は……」

なにかとてつもなく、大切な何かを失っている。そのような気さえした。

翔は、この世界がなんだかわからなくなっていた。

本当にこの世界が自分の世界なのか。この世界に、疑問を持ってしまった。

自分自身の記憶がないことに疑問を持ってしまった。この言いよ
うのない違和感……

自分はなにか、なにかとてつもなく大切なものをなくしているのではないのか。真実を知りたい。真実を知らなければ……

そしてそう思考したその直後……

——水のような景色と共に世界が一変した。

まるで教会のようなステンドグラスに囲まれた空間。

さつきまで学校にいたのに、ここは……？

翔が目凝らす。直後に何かが見えた。

「リストには見えない顔だな、お前のような奴もいようとは……」

ふわりと現れる黒い影。それを見た翔は全身の毛が逆立つような
思いをした。

この男には殺気がある。とてつもなく冷たく、近くにいるだけで身
も凍るような……

逃げたい。逃げたいのになぜか足がすくんで動けない。このまま
だと、自分は……

「……構えもせんとな」

心臓が、体のあちこちが破裂しそうな威圧感。今まで会った人たち
とは比べ物にならない。

最後に見えたのは黒いコート。そしてその隣に立つのは、中華の武
術家然とした服装の男性。

その刹那、翔の身体が大きく斬り裂かれた。斬り裂かれた斜めの部
分から鮮血がほとぼしる。

何をされた。自分はどうしたというのだ。

前から攻撃されたのか、後ろから攻撃されたのか、わからない。何もできずに仰向けに倒れる翔。見れば自分は血を流して倒れている。

突然、霞んだ瞳にいくつもの土色の塊が浮かび上がった。霞がかった目でそれを見つめる。

これは塊、いや、違う。これは……人だ。

その塊は同じ月海原学園の生徒たちであった。今になって翔には見えただけで元からそこにあったのかもわからない。

『そうか』と薄れゆく意識の中で翔は理解する。自分だけではなかったのだと、ここまでたどり着き、だがどうすることもできず倒れていった者達は……

そして間もなく自分はその仲間入りに……

「いやだ……」

まだ俺は死ねない。

このまま自分は終わる……？

そんなことなど許されるはずもない。

怖い、体中から湧き出る痛みが怖い。

感覚が喪失する。それが怖い。

だけどなによりも……

——自分が無意味に消える事が何よりも恐ろしい

きっと怖いままでもいいだろう。

きっと痛いままでもいいだろう。

その上で、もう一度考える。

まだ、諦めるわけにはいかない。

「……俺はまだ」

血に塗れた手をステンドグラスの向こうにかざす。

まだ……

だってまだ、この手は一度も……

自分の意思で戦っていないじゃないか!!!

「こんな死の淵でも、怖いままでも戦うんですね。でも諦めない強さがそこにある……」

直後に声が聞こえた。幼さが残る少女の声。それは自分に語りかけているようにも聞こえた。

「なら『今度こそ』私は、あなたのような人の力になりたいです!!」

ステンドグラスが激しく音を立て割れ、一人の少女が飛び出し、部屋に光が灯った。

その姿は、一度見たら忘れなさそうなインパクトの持ち主であった。

その目の色は翔とは対照的な赤い瞳、頭についているリボンもまた赤色であり、下半身はタイトなドレス姿に身を包んだ少女だ。

そして一際目を引くのは、腕の先にあるはずの手は金色に輝く巨大な手、そして……巨大、ではない。巨大すぎると言い換えてもいいぐらいの胸。

サスペンダーのみで隠すべき部分を隠したその姿、そしてその巨大な胸は、男であれば……いや、男でなくても目に毒すぎる。

死の淵であつても誰もが凝視してしまうであろう、その胸の誘惑を何とか振り切る翔。

外見からして、普通の人間ではない。そして触れただけでも、潰れてしまいそうな圧倒的な力を感じる。

そのようなものが体の内に渦巻いている。翔には嫌でもそれが分かった。

「えっと、あなたが私のマスターですね」

おどおどとしながら、聞く少女。意味が分からない、マスターとはなんなのだろうか。

わからない、だけど今はわからなくてもいい。

激しい痛みをこらえ、立ち上がり、自分の前の少女を見つめる。

その小柄な外見とは裏腹な力は、間違いなく自分を守ってくれる存在だ、ならば……縦に頷く翔。そして叫ぶ。

「そうだ。俺がお前のマスターだ!」

そう叫んだ時、左手に、不意に焼け付くような痛みが走り、顔をしかめる翔。

見ればそこには3つの紋章だろうか、それは刻印のようにも見える

ものが左手に刻まれていた。

皮膚に染み込んでいるかのようにも見えるその刻印を見つめると、先ほど自分を倒し、背を向けていた黒いコートの男がこちらを振り返り、驚いたような顔でこちらを見ている。

「馬鹿な。お前のような奴がなぜサーヴァント契約できる。排除しろアサシン」

「呵々、さてどこから壊しているものやら」

中華の武術家然とした服装の男性が構える。

翔の直感が告げる。このままではあの人物に殺される。彼は前を見つめている少女に告げる。

「頼む、俺を守ってくれ！」

「はい！」

目の前の少女に指示を出す翔。男性が放つ一撃を少女の金色に輝く巨大な手で受け止め、反撃を放つ。

たったそれだけなのに、翔にはそれが圧倒的力を持つ二人の戦いのように感じられた。

一撃を反撃した少女に対して男性は顔をしかめ、その少女を見つめる。

「珍しい鉄の籠手だな。儂の勁が通らぬ……」

「ただの鉄だと思ったら大間違いですよ!!」

少女が対峙する相手に対して一撃を放とうとしたところで、感じる電撃のようなもの。それを感じた少女と男性は共に契約した者達の隣へと舞い戻る。

その直後、黒いコートの男は嫌そうに顔をしかめた。

「SE. RA. PHが介入してきたか。遊びは終わりだ。引き上げるぞ」

「……水を差されたか、つまらぬ」

黒いコートの男に言われ、不満そうな表情ながらも引き上げる中華の武術家然とした服装の男性。

とりあえず自分は助かったらしい。翔はほっと胸を撫で下ろす。だが今にも意識が消えそうだ。

左手の刻印はその熱さを増していくばかり、その熱さと共に視界が、意識が白く染められていく。

『手に刻まれたそれは令呪。サーヴァントのマスターの証だ。いわゆる3つの絶対命令権と言ってもいいだろう。それは同時に聖杯戦争の参加の証でもある。その令呪を失えばマスターは死ぬ、注意することだ』

何処からともなく聞こえる謎の声、翔は痛みを耐えながらその言葉を耳にするが……

駄目だ、視界が、思考が、何もかもが遠ざかっていく、そして気を失う一瞬前に先程の男の声が聞こえた。

『では、これより聖杯戦争を始めよう。いかなる時代、いかなる歳月が流れようと、戦いを持つて頂点を決するのは一人の摂理』

月に招かれた電子の世界の『魔術師』達よ。汝、自らを以つて最強を証明せよ……と。

その言葉を最後に、とうとう激しい痛みを耐えきれず翔は意識を手放した。

第2話 聖杯戦争

泥濘の日常は燃え尽きた

魔術師による生存競争

運命の車輪は回る

最も弱きものよ、剣を鍛えよ

その命が育んだ、己の価値を示すために……

「……ん」

ぼんやりとした視界が徐々に覚醒していく。ここはどこだろうか、輪部がはつきりしてくると自分が見詰めているのは白い天井という事に気付く。どうやらここは保健室らしい。

なんだが悪い夢を見ていたような、思い返せばありえないことだらけだった。いきなり槍が地面から生えたりとか、聖杯戦争とか、自分が斬り裂かれたりとか。

そして自分を守る女の子が現れたりとか……

そうだ夢だ。早く授業に戻らなければならぬ。

「あ、えっと、目が覚めたんですね。このままだったらどうしようかと思いました……」

声が出た方に顔を向ければ、タイトなドレス姿に身を包んだ少女が目映る。

その少女を見て、あれが夢でないことを気付かされる。

「君は確か……俺を守ってくれた」

「はい、パッションリップです。ええっと……」

そこまでいって言いよどむリップ。なぜだろうと翔も頭を悩ませれば自分が名前を名乗っていないことに気付いた。

「翔だ。『寿々科 翔』」

「翔さん……ですか。よろしくお願いしますね」

ぺこりとお辞儀をするリップ。その仕草が、なんだか子供っぽくてかわいいと思うが、その考えを振り払う。

しかし、校庭を見ればなんにも変哲もない光景が目映る。だが翔にはこれが現実ではないような感じがした。

「なあリップ。ここはどこなんだ？」

校庭を見ながら、リップに質問する翔。

その質問に啞然とするリップだが、微笑んで彼の質問に答えるリップ。

ここは聖杯というものが作り出した霊子虚構世界、通称『SE・RA・PH』と言われているらしい。

そして自分は聖杯を手に入れるためにこの『SE・RA・PH』の門をくぐり抜けた魔術師なのだ。

「聖杯、聖杯戦争と関係ある事か」

聖杯戦争についても、翔は知らない。それもリップは説明する。

ムーンセルオートマトン。月で発見されたという最古の遺物であるらしいそれは、人の願いをかなえる力を持っていると言われている。

そして聖杯戦争とは、そのムーンセルの所有権をめぐる戦いであり、最後の一人になるまで戦う。

そして勝ち残った一人には願いがかなう聖杯が手に入るというもののらしい。

参加者たちは『サーヴァント』と呼ばれる歴史上、神話上の英霊を召喚し、従え、戦い、競い合う。

そして英霊には7つのクラスがあるらしい。

剣の英霊『セイバー』

弓の英霊『アーチャー』

槍の英霊『ランサー』

騎兵の英霊『ライダー』

暗殺者の英霊『アサシン』

魔術師の英霊『キャスター』

そして最後、狂戦士の英霊『バーサーカー』

このクラスは真名を隠すためでもあるらしく、基本的にクラス名で呼ばれるらしい。

言われてみれば、出会った人たちもランサー、アサシンと言っていた。

「それでリップはどのクラスなんだ？」

「あ、ええっと……それは……」

顔を背けるリップ。その仕草に首をかしげる翔だが……どうやら地雷を踏みそうな勢いだ。

言うのをためらうという事はどのクラスでもないという事、つまりリップはリップのままでもいいだろう。

「ああ、すまない。無理に言わせようとしちまって、これからパツションリップでいいな？」

「はい！ あと、ええっと……できればリップって呼んでほしいなとか」

まじか、出会って間もない女の子からこういわれるとは翔は想像していなかった。だが本人が呼んでほしいというのだ。ここで断れば男として駄目だろう。

「わかった。じゃあリップって言わせてもらおうぜ？」

ニカツと笑う翔。斬られた傷はすっかり完治しており、歩いても大丈夫そうだったのでベッドから起き上がり、リップに歩み寄ろうとすると、彼女の体が不意に何かに怯えるように翔から一步離れる。

なぜだろう、なぜこんなにも自分は避けられているのだろうか。

一瞬……脳裏によぎった自分の視線。

そして思い返す光景、それは真っ先に視線を奪われたリップの胸……

む、胸を一瞬、というかかなり見つめてしまったからか……！

正直に言おう、リップの胸は目に毒過ぎる。ちよつと彼女が考えたり、身体を動かせばそれと一緒に巨大すぎる胸が揺れ動くのだ。しかもその上半身はサスペンダーで隠すべきところを隠しているだけ……

あまり女性経験がない翔にとって、そんなリップの胸がこんなにも、間近で揺れ動くのは拷問に近い何かであった。

ともすればファーストコンタクトはとてつもなく最悪。

自分を守ってくれた女の子の胸をガン見など男として最悪だ。

頭を抱えて眼を逸らす翔にリップは……

「私、手がこんなだから、近づけば翔さんの事、傷つけてしまうかもしれません……」

自分の手を見つめるリップ。両手の爪が保健室の床をこすれる音が響く。

確かにあの爪は触れるものすべてを斬り裂きそうなそんな威圧感すら感じられる。巨大な爪はほかの人からすれば恐怖以外の何物でもないだろう。

正直にいうと初めてあの爪を見た時、翔だつて怖かった。

だけど本人は傷つける意思などない……

つまりだ、本人に傷つける意思などないのにそれに怯えてはリップを否定することにもなるのではないだろうか。

だから大丈夫と言いなながらリップにゆっくり近づき……

「握手は出来ねえかもしれないけどさ、これだったら俺もしてやれる」
そのまま静かに頭を撫でた。ほぼ初対面からこうするのもどうかと思うが、手を繋げないのだ。なれば別の方法を考えるしかなかった。

その光景をリップが咄然として見つめていると、顔を赤くして喜ぶリップの姿が目映った。

どうやら喜んでくれたようだ。その仕草は何というか、かわいではないか。翔が微笑んでいると保健室の扉が開き、一人の少女が入ってきた。

その人物を見て翔は目を丸くする。そしてリップと交互に見つめる翔。彼がこうやって見るのも無理はない。

その少女とリップの姿が限りなく酷似していたからだ。

「……とてつもなく失礼なことをお聞きしますが、お二人は姉妹で？」
「わああ!?! 違います翔さん! 限りなく似ていますけど違いますってばー!」

入ってきたリップ似の少女が目を見くしている。間違いなく驚かせてしまったのだろう。ひとまず翔は変な事を聞いてしまったこと

を『間桐 桜』に謝罪する。

そしてどうやらこの子は聖杯戦争の運営をしている一人らしい。桜から一通りの説明を受ける翔。

なんでも、聖杯を求める魔術師はこの『S E・R A・P H』の門をくぐる際に記憶を消され、生徒として日常を送るらしい。

その仮初に染まった日常から自我を呼び起こし、自分という存在を取り戻した者達がマスターとして聖杯戦争本戦に参加。

その際には『S E・R A・P H』で預かった記憶を返却するらしいのだが……

翔は思い返す、思い出すのはこの学園生活の日々……

かつての自分の記憶が思い出せない、いまだに本当の自分には、家族は誰がいたのかも……

「え、記憶の返却に不備がある……ですか？ それにはどうしよも……私は運営用に作られたAIですので」

「そうか……悪かったな、変な気を使わせちゃって」

「あ、あとこれ渡しておきますね」

翔からの返事をあっさり流されたことに少し疑問を思うが、少し考えて納得する。

彼女はAIなのだ。与えられた役割をこなすだけの仮想人格……とでも言えばいいだろうか。

そして渡されたものは、何かの携帯端末のようだった。翔は感心な声を上げながら、それを少しいじってみるが……分からないものまみれだ。

これは後でいろいろいじってみよう、連絡用らしいが他にも何かわかることがあるかもしれない。

「ありがとな、間桐さん」

桜に礼を言うと、それに応じるかのようにぺこりと礼をする。

しかし、よく見れば見るほどリップと似ている。知らない人が見れば姉妹と勘違いされてもおかしくないはずだ。

……心なしか、リップの視線が痛い気がする。これ以上は考えるな、という事だろうか。

それに応えるかのように、考えるのやめ、翔は保健室を後にした。

「いやあ、しかし本当に晴天。これが仮想現実なんてなあ……最近の技術はやつぱりすごいんじゃないか？」

フェンスに手を駆けながら空を見ている翔。彼が来ているところは学校の屋上であった。

彼が見上げる空には雲一つない。今でも走りたくなりそうな晴天。宝石で例えるならそれはトルコ石のような真つ青な空。

地面を駆ける風が、自分の身体に直接触れていく感覚はひどくとても懐かしいものに感じた。

どうして、懐かしいと感じたのかは自分にはわからない。だが、そのように思いながら向こうの景色を見ていると……

「二通り調べてみたけど、ほとんど予選の学校と同じなのね」

壁などをぺたぺたと触って何やら呟いている。黒い髪に赤い服を着た少女がこちらに向かってくる。その佇まいの凜とした雰囲気漂わせている少女。

あれは……前に慎二から聞いたことがある。容姿端麗、成績優秀な月海原学園のアイドル。その名前は『遠坂^{とおさか} 凜』。

だがあの瞳の奥に宿る意思是……

ただものではない。翔の直感がそう感じ取る。あの強い意志はアイドルなどという存在ではありえないもの。

その意思で彼に改めて思い知らされるのはただ一つ。

——『聖杯戦争』

いくら自分に記憶がないとはいえ、ここは戦いの場、少しでも気を抜けば自分がどうなるかわからない場所なのだ。

彼女の纏うその空気が、それを確実に翔にもわからせる。

そんな事実が、翔に嫌でも突き刺さる。

「あら、そのあなた？」

「あ？ 俺か？」

「そう、そういえばまだキャラの方は……」

『チエックしていなかった、ちよつとそこを動かないでね』と言われ、不意に伸びた指先が翔を触れる。その瞳の奥の意思は、きつとどこかの戦場にいたであろう。

だが……

まだその少女は、あどけなさを残るといふ事を伝える指先であった。

細く、柔く……

が、翔にしてみれば拷問そのものであった。顔つきは美少女と言つてもいい子がそんな指使いで、突然自分の体を触ってくるのだ。鼓動が早くならないのがおかしいぐらいであった。

「あれ？ おかしいわね、顔が赤くなってきているような」

少女の顔が鼻先まで迫った時、翔は驚き『わあっ!?!』という掛け声と共にその場から勢いよく離れる翔。正直、いきなりの出来事で耐えられなくなるこの連続であった。

「ちよ、ちよつと待ってよ!?! あんたNPCじゃないの!?!」

「ああ！ 正直正銘、俺はマスターだ！」

「ええ!?! じゃあさつきまで調査で体をべたべた触っていた私っていったい……」

先程の行動を思い返してしまったのか、顔が熱くなる。それに釣られるかのように彼女から顔を背ける翔。

それを聞けば突然後方を向き『ち、痴女とか言うなー!』と何かに怒っている彼女、恐らく近くに彼女のサーヴァントが存在するのだから。

そんなサーヴァントが彼女に対して余計な茶々を入れたのが原因だろう。

「大体、そつちも紛らわしいのよ。マスターのくせにそこらに存在する一般生徒のキャラと同程度つてどうなのよ」

「うっ……そういわれるとなあ……」

良く慎二からも突っ込まれていた影の薄さを指摘され、肩を落とす翔。この青い髪でも緑色の瞳でも駄目なのか……肩を落とす翔に凜から声が掛かる。

「今だつてなによぼんやりとして、まさか記憶がちやんと戻つてないとかじゃないでしょうね」

「うっ……それがだなあ」

彼女からしてみればそれこそ冗談のつもりで言ったのだろう。だが翔にとつてはそれは紛れもない事実であつた。

何ごとも楽しく行こうとする彼にすら途方に暮れてしまうほどの……どうしよもない事実だ。

だがここで誤魔化しても仕方ないので本当のことを言う事にする翔。

その言葉を聞いた凜は、冗談じゃないというような驚きの表情であつた。

「嘘……本当に記憶、戻つてないの？ それ、かなりまずいわよ」

凜の言葉は続く、聖杯戦争のシステム上、ここから出れるのは最後まで勝ち残ったマスターただ一人。途中退出など当然許されることではない。

記憶に不備があろうとも、今までの戦闘経験などなくても戻る事などできはしない。

そして……

……
聖杯戦争の勝者は『一人』きり。他の人はどこかで脱落するのだと

ああ、そうか、翔は理解する。目の前にいるのは『敵』だ。

聖杯を奪い合う敵。その真実を改めて思い出した。

目の前の彼女だけではない。この聖杯戦争に参加しているのは全員、敵なのだ……

「翔さん、大丈夫ですか？」

「心配してくれてありがとうリップ。だがわかつていたことさ。俺は戦うさ、お前と一緒にな」

凜と別れを告げ、校舎を歩いている最中に心配そうに声を掛ける霊体化しているリップに対して『大丈夫』と意思を伝える翔。

だが、不安が渦巻くのも事実だ。

なにせ自分には戦いを参加する覚悟もないし、記憶もない。そんな状態で戦いの場に立たされれば不安にもなるはずだ。だが……その場にいるはずのリップを見つめる。

こんな何もない自分にも、ただ死を待っただけだった自分に手を差し伸べてくれた少女がいる。

その少女に応えてあげたい。まだ自分はここで死ぬことは許されない。それが今の自分の戦う理由なのだろうか。

考えながら歩いていると、不意に声を掛けられる。

「待ちたまえ、マスターよ」

声を掛けた相手は神父のような格好をした人物であった。この声は……令呪の説明をしてくれた人と同じ声だ。

その神父に呼び止められ、振り向く翔。

「なんです？ 俺なんか呼び止めて」

「いや、私はただ本戦出場おめでとうと言いに来ただけだ」

彼の名前は言峰というらしい。彼は聖杯戦争の監督役をしているNPCらしかった。彼から聖杯戦争のルールを聞く翔。

「どうやらこの聖杯戦争はトーナメント方式らしい。その戦いは七回戦まで続く、そして最終的に生き残った人に聖杯が与えられるシステムだそうさ。」

その戦いには一回戦毎、七日間で行われるらしい。

「つまり、一日目から六日目までに準備をして本戦つてことか？」

「その通り、どんなに愚鈍な頭でも理解可能な非常に分かりやすいシステムというわけだ」

その神父の言葉が突き刺さるが、今は気にしてはいられない。

何か聞きたいことはあるか、そう神父に言われたときに、桜から受け取った端末を思い出す。

聖杯戦争の監督役ならこれの使い方も知っているだろう。

翔は言峰に端末を見せ、どうやって使うのかを聞く。

「ほう、その端末か。それは聖杯からシステムメッセージを受け取るものだ。そこからくるのは注意深く見ておくといいだろう」

なるほど、トーナメント形式となれば恐らく聖杯からくるメッセー
ジは対戦相手の発表なりそのようなものだろう。

最後に……と、言峰が付け加える。

一回戦毎にアリーナと呼ばれる場所に暗号鍵トリガーが出現するらしい、そ
れを手に入れる事が出来なければ決戦を迎える事が出来ず、脱落とい
うことになる。

つまり、6日の間にその暗号鍵を手に入る事が出来なければ、自分
たちは問答無用で負けるといふ事……

教えてくれた言峰に礼を言いながら、翔はそこから立ち去った。

第3話 対戦相手

自分の状況を改めて整理しよう。

自分は今、霊子虚構世界『SE・RA・PH』で聖杯戦争というも
のに参加させられている。

予選から本戦に進んだマスターの数は128人。

トーナメント形式で1回戦から7回戦まで進み、最後に勝ち残った
一人が聖杯を手に入れることができる。

現実世界に戻れるのは最後まで勝ち残ったマスターのみ。

「はあ……」

ため息をつきながら食堂で頼んだ特製麻婆豆腐を食べる翔。自分
は正直覚悟がないまま流されている状態だ。こんなものでいいのだ
ろうか。

しかし、目の前の食事を見つめる翔。この麻婆豆腐、なかなか美
味しいのだ。確かにこれはかなり辛い。しかしその辛味の最奥には
至高の旨味が秘されているまさに至高の一品なのだ。

これをこの世界に提案したものは誰なのかと正直気になる。もし
どこかで出会えるならば、一度この麻婆豆腐について言葉を交わした
いものだ。

そんなことを考えていれば、霊体化を解いたリップがこちらを見つ
めている。

「あ、翔さん。それ……ちよつと食べてみたいなあつて」

「あ？ いいけど少し辛いぞっ」

翔が、ひよいと少し麻婆豆腐を掬い、リップの口に近づけては、ぱ
くりと食べる彼女。しかし直後、顔が真っ赤になり、むせるリップ。

だから言ったのに……といいながらコップの水をリップにの口に
近づける翔。

「ま、待ってください！これ殺人的な辛さじゃないですか!」

翔が差し出した水を飲んでようやく落ち着くリップ。そんな光景
に翔が笑っていると、ふわりと一人の人物が現れる。白く輝く髪に燃
え盛るような赤い目をした少女。

あの人物……どこかで見たとような……

思い出した、予選の校舎にいた時にランサーを連れていた子だ。

その子がどうやらキョロキョロとお盆を持って辺りを見渡している。席を探しているのだろうか。

「えっと、志波……だっけ。向かい側の席、空いてるぞ」

「あー！ 翔くんじゃない！ ありがとー、意外に席がなくて困っていたんだよねー」

パタパタと駆け寄り、そこに『焼きそばパン』と飲み物が乗ったお盆を置けば、それを食べ始める白亜。しかし、周りを見渡してみればかなりの人物がこの聖杯戦争に参加しているようだ。しかし、聖杯……というものはどういうものだろうか、彼女もまた聖杯戦争の参加者。

翔は白亜に聖杯とはなんなのかを聞いてみることにする。

「うーん、実物は見たことないからわからないけど、地上の事実的な支配者である『西欧財閥』が封印指定にするくらいだからね。つまり聖杯に眠っている力は計り知れないという事、世界を容易に変えることができる力、私はそう睨んでいるかな」

「そうですよ。そして聖杯は僕たちの管理下に置かせてもらいます」

白亜が続きを喋ろうとした時、不意に聞こえた青年の声によって遮られる。

そして、その声が食堂に響いたとき、周りの生徒が一気にざわめく。白銀の鎧に身を包んだ男性を隣に置いたまさに『王』がそこには立っていた……

彼が誰だかは分からない。ただ翔はその人物がただものではない雰囲気を出している……とまではわかった。

サーヴァントとは全く異なったオーラを放つ人物。

「翔くん、彼の名は『レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ』。西欧財閥の次期盟主の地上の実質的な地上の支配者よ」

白亜の言葉にレオはニコリと微笑み、自分をレオでいいと言う。『ですが最も気になるのは……』と彼がその言葉を紡ぎながら見るのは翔と隣のリップ。

「驚きましたよ寿々科翔さん。実を言うと僕はあなたがとても興味深い。あの状況でよくサーヴァントを引き当て、彼の攻撃を凌ぐとは……」

その言葉に背筋がぞくりとするような感覚に襲われる翔。どうして彼がそのような事を知っているのだと……あの場には自分と黒いコートをやつしかいなかったはずなのに……

彼の気迫に圧倒されながらも、レオを見据える翔。

全てを見通している、あれが地上の王というものなのか……

気づけばレオが白銀の鎧の騎士に対して何かを言っているようだった。

「ガウエイン、紹介を」

「はっ……従者ガウエインです。以後、お見知りおきを……願わくば、我が主のよき好敵手であらんことを……」

そこまで言い、ガウエインは下がる。

ガウエイン……アーサー王物語に登場する伝説上の人物。アーサー王の甥として最も優秀な騎士として活躍したと言われる騎士だ。そのような騎士を連れてくるとは、まさしく王の騎士にふさわしい人物。今の自分がまともに戦えば、きっと為す術もなくやられる。クラスはどう見てもセイバークラス。それ以外は考えられないだろう。

アーサー王物語と言えば、有名すぎる書物の一つだ。調べれば間違いなく弱点だってわかる。

それをレオが分かっているはずなどない。

あれは、絶対なる自信なのだろう。明かせるものはすべて明かす。その上で勝利する絶対なる自信の表れ……

白亜もなにやら張りつめた表情をしている。緊迫した状況の中、翔は一つの予測を立てる。

きっとあのコンビは決勝近くまで上がってくるだろうと、もし自分が本戦を突破していくなんてことがあれば、どこかでこの二人と当たるということを……

しかし、なぜだろうか、あのレオという人物。傍から見ればすべて

完璧にみえる。

だが翔には、彼には何か欠けているような感じの雰囲気を感じ取った。

「はあ……ご飯食べただけなのに疲れた」

そういうしながら椅子に腰かける翔。彼らがいるのは教室のようなところであった。

本戦に勝ち進んだマスターには個室が与えられ、そこで過ごせるといふものらしい。

しかし、元は教室であったところだ。外見は殺風景極まりないといつてもいい。

今度何か、いろいろ買うか。とりあえずは寝床を確保しないとゆつくり休むことすらできないとは……

その思考を遮るかのように、無機質な音が辺り一面に響き渡った。どうやら携帯端末からのようだ。

翔がその携帯端末をポケットから取り出すと、文字が浮かび上がっていた。

『2階掲示板にて次の対戦者を発表する』

対戦相手の発表、つまりその相手の名前が分かるという事だ。とにかくそれは掲示板を見ればわかるという事。

翔がマイルームから出て、その掲示板に向かえば、見られぬ紙が張り出されていた。

一人の名前は『寿々科翔』。これは間違いなく自分の名前、そしてもう一つは……

マスター：間桐慎二

決戦場　：一の月想海

「間桐……慎二」

慎二、予選の時から友人。いや、仮初の友人といつてもいいだろうか。だが、あの中で過ごした日々を忘れてはいるわけではない。

この戦いは殺し合い。だが、まさか一回戦から仮初とはいえ言葉

交わした友人に当たるなど……

「へえ、お前が一回戦の相手か」

いつの間にか慎二が隣に立っていた。恐らく、自分と同じく掲示板を見に来たのだろう。真剣な顔つきで慎二を見つめる翔。

当の本人はこの戦いを、まるでゲームをしているような感覚さえ感じる雰囲気であった。

だが実力はおそらく高いだろう。彼がこの本戦にいる以上、彼もまた聖杯を求めてこの世界に来た人間。油断はできない。

「ま、正々堂々と戦おうじゃないか、結構いい勝負になると思うぜ？君だって選ばれたマスターなんだからさ」

次会うときは敵同士だ。仮初とはいえ、友情に恥じないいい戦いをしようじゃないか。そう言っただけは、彼はその場から立ち去る。

慎二とそのサーヴァントと戦う。駄目だ。実感がわかない。頭の中で復唱しても学園で知り合った彼の姿ばかり思い浮かぶ。

自分には記憶がないのに、意思を持っている人間と殺しあえと言うのか……こんなにあんまりすぎる。

まるで悪夢を見ているかのようだ。考えれば考えるほど、自分が沼の中に嵌り、沈んでいくかのように……

「翔さん、こういうのもあれですけど、あんまり考えすぎても体に毒だと思えますよ？」

霊体化を解いたリップが、翔の顔を見つめながらそのようなことを言う。確かに言われてみればそうだ。ここで考えすぎてもしょうがない。

これも記憶がまだ戻ってない障害だということのか。

ああ、でもよかった。リップの言葉で何とかなつた気がする。翔はリップに『ありがとう』といい気持ちを落ち着かせていると、再び端末から音が鳴り響く。

『プライマルトリガー第一暗号鍵を生成。第一層にて習得されたし』

これが言峰の言っていた暗号鍵。これを手に入れる事が出来なければ決戦を迎える事が出来ず、脱落ということになる。

となればやるべきことは一つだ。この鍵を取りに行く。そのため

にはアリーナという場所に向かう必要がある。

ならば次やることは決まっている。翔とリップは一階にあるアリーナへと向かう事にした。

「ここが、アリーナ……」

扉をくぐれば校舎の光景などすでになくなっていった。海の中に浮かぶ迷宮のようなところ、そこに翔とリップは立っていた。

それはまるで神秘そのものであった。ここに始めて入った人は必ずやこの光景に一度は目を奪われるのではないだろうか。

ここは電子の海、ムーンスセルの中なのだ。この光景を目の当たりにして改めて思い知らされる。

そのアリーナを進めば、顔をしかめ周囲を警戒するリップの姿がそこにあった。

リップがなにかを感じ取っている。戦いなどを知らない翔でもそれだけははつきりと伝わってきた。

「気を付けてください。あの方がサーヴァントを連れて既に着ているようです」

なんてことだ。まだ自分は戦いを知らないというのに……
ともかくだ。彼らに出会う前に少しでも戦いを知らないといけな

い。

リップにそのことを伝えると『潰すのは得意です!』と誇らしげに言う彼女の姿が目映った。

それに微笑みながら先を進んでいく翔とリップ。

しばらく行くとその視界に写るのは立体キューブの姿。あれがエネミー……というやつだろう。

「リップ、あれがエネミーというやつか？」

「はい、そうです。翔さん。指示をお願いしますか？」

「りょーかい。よしリップ、あいつを倒してくれ！」

指示を受けたリップは、弾丸の如き速度でエネミーに迫る。そのリップを姿を発見したエネミーは迎撃の体勢を取る。

接近した相手に対しリップはその巨大な爪を大きく薙ぎ払うかの

ように振るう。その攻撃に防御などまるで意味をなさない一撃。

圧倒的すぎる彼女のパワーは、エネミーを横薙ぎに一閃する。

大きく斬りされた箇所からはノイズのような紫色の靄が現れている。一撃は成功。

そしてすかさずその巨大な爪を自分に向け、防御の体勢を取るリップ。そして襲い掛かるエネミーの攻撃。

その一撃に金属が勢い良くぶつかる音が響く。だがリップには大したダメージは入っていない。あの巨大な手は攻撃にも防御にも使えるという事か。翔が見ながらリップの戦い方を分析する。

彼女のスタイルはまさに『一撃必殺』を体現したスタイルだ。その光景はまるで生きた要塞だ。正面から渡り合えばどんなサーヴァントでも受け止めることは困難だろう。

「甘い！」

そしてリップの反撃の一撃、最初の一撃で大ダメージを受けていたエネミーに二撃目を防御できるはずもない。彼女の攻撃は相手を軽々と引き裂き、そして消滅させた。

防御の上からでもお構いなしの一撃、もし自分が敵ならば正面からはやはり相手にしたくはないなと苦笑いしながらも感じる。

「凄いな……たった二撃でエネミーを……」

「力と耐久力だけはどんなサーヴァントにも負けません……けど」
「けど？」

申し訳なきそうにリップは口を紡ぐ。どうやら今の自分は本来の実力を出し切れて無いようだ。

それは間違いなく自分のせいだ。マスターの力によつてそのサーヴァントの強さは変わる。

それがリップにも影響されている。自分が新米のマスターだから、リップが全力を出し切れていない。だから、今を生き残るためにも自分を強くしなければならぬ。

リップからそう聞かされたとき、翔はその思いを強くする。

「でも、今は駄目でも鍛えれば本来の私になるはずです。私も精一杯頑張りますから！」

励ますようにリップに言われ、微笑む翔。まさかりップに励まされるとは思わなかった。

立ちはだかるエネミーを倒しながら、アリーナを進む翔とリップ。その前進が吉と出るか凶と出るか。アリーナでは対戦相手と出くわすこともある。

それを知らしめるかのように、二人の前には一人の男と一人の女性が佇んでいた。

一人は慎二本人、もう一人はクラシックな二丁拳銃を持ち、顔に大きな傷のある女性だ。

その容姿は胸部を大きく開けた赤いコートに紅く色づいた長い髪。そしてそれがなければきつと美しいのと思わせる、顔に大きく入った斜めの傷。

だがその傷の影響なのか、どこかワイルドさを感じる女性だ。

「遅かったじゃないか翔。お前がモタモタしてたから僕は暗号鍵^{トリッガー}をゲットしちゃたよ！ まあ、才能の差ってやつだね！」

翔の目の前でカードのような鍵をヒラヒラと見せびらかす慎二。あっちのほうはやはり早かった。

顔をしかめる翔に慎二は言葉を続ける。どうせなら僕のサーヴァントを見せてあげるよと……

恐らく、彼はここで自分を倒すつもりだ。翔を庇うようにリップが前に立ち、慎二を見つめる。

あの女性が彼のサーヴァントなのは間違いないだろう。

「おや？ おしゃべりはお終いかい？ もつたいないねえ、人間付き合いがへたくそなマスターがお前とは意気投合しているもんで平和的解決もアリかと思っていたんだけどねえ……」

その慎二の隣にいるサーヴァントは残念そうに溜め息をつきながら、その視線を慎二に向ける。

その顔つきは、ニヤつきながらと言ってもいいぐらいの表情だ。そんな表情で慎二を見る女性のサーヴァント。

それを聞いた慎二は驚きの顔を浮かべながら女性サーヴァントと翔を交互に見つめる。

慎二のサーヴァントである女性はどうかやら慎二をからかっているらしい。

「な、なに勝手に分析してるんだよお前！ いいから痛めつけてやってつけてくれよ！」

「ははは、素直じゃないねえ。だがまあ自称親友を叩きのめすその性根の悪さはアタシ好みだ。構えな、ここで相手してやろうじゃないか」

銃を構える女性のサーヴァント。それに応じるかのように巨大な爪を構えるリップ。

相手の実力は未知数だ。それにここでやられるわけにもいかない。両者、共に戦闘態勢。危険はあるがこの戦いで少しの情報も得られる可能性がある。

「さあシンジ。報酬をたんまり用意しておきな！」

最初に動いたのは慎二のサーヴァントであった。二丁の拳銃を巧みに扱い、その二つの銃口から火が吹く。

それは無遠慮に乱雑に……

放たれる弾丸を自身の爪で防御しながら、足に力を籠め、弾丸のように慎二のサーヴァントへ爪を振りかぶる。

「その爪、ただの爪じゃあないね。ならこれならどうだい！」

慎二のサーヴァントに目掛けて振り下ろされる直前に勢いよく後退、そして現れるは複数の巨大な大砲。

「まだまだ、たんまり喰らいな！」

「リップ！ そこから離れろ！」

そして弾丸が巨大な大砲より放たれる。耳をつんざくような、空を遠雷の如き唸りを伴った砲声が渡る。

笛のような高い音と共に放たれる流弾は、地面にたどりついた瞬間、爆発が起こり、それによって起こった熱気で辺りの地面が焦げる。『セラフより警告 アリーナ内でのマスター同士の戦闘は禁止されています』

辺りに響き渡るアナウンス。恐らくあと数分にも満たない時間で強制的に戦闘は終わるだろう。

そして爆炎の中から、飛び出し、慎二のサーヴァントへ向かうリッ
プ。

だが、爪を振りかぶる直前、ノイズのようなものが走り、二人はマ
スターの側へと強制的に戻される。

間違いなくセラフが介入し、戦闘を強制終了させたのだろう。

「チツ……もう気づかれたのか、まあいい、止めを刺すまでもないから
ね。そうやってゴミのように這いつくばっていればいいさ！」

「つたく、その口は相変わらずなんだな慎二」

翔の発言など気にせず、そのまま高笑いしながらサーヴァントと
共に消える慎二。

明らかにこちらを見下したような発言、だが無理もない。

こちらは魔術師の戦い方をまるで知らないのだ。いうならば戦い
方すら知らない初心者同然だ。

それを慎二が見下すのも無理はない。現にあのまま戦い続けてい
たら、こちらが危なかったかもしれない。

現にあの慎二のサーヴァント、あれは間違いなく今のリッパよりも
力は上回っていたはずだ。

翔とリッパ以外、誰もいなくなった空間でリッパは何か気付いた
ように翔に顔を向ける。

「翔さん、あのサーヴァント。もしかしてクラスはアーチャーではな
いですか？ ほら、飛び道具とか使っていたし」

確定ではないがリッパはそのような予測を立てているようだ。

今回の収穫は翔には大きかった。確かにあのサーヴァントは銃を
使った。

つまり飛び道具でクラスを絞ればアーチャーではないだろうかと
いうのがリッパの意見だろう。

しかし、翔は納得がいかなかった。

あの戦闘で使った敵サーヴァントの道具は二つある。

一つは両手の銃、そしてもう一つは……複数の大砲。あれをいつの
時代か翔は本で見たことがある。

「リッパ、俺の予想なんだが、あの種類の大砲はな、艦載砲としても搭

載されていたんだ。名前はカルバリン砲だったな」

「かるばりんほう？」

おそらく頭に『？』が浮かんでいるであろうリップ。
簡単に言えばと翔がリップに説明する。

カルバリン砲、近世に用いられた大砲だ。主に16世紀から17世紀に用いられ、騎乗兵等に危害を加えたといわれている。

そしてこのカルバリン砲。艦載砲としても使用されたいとの事なのだ。

つまり翔の予想はあのサーヴァントは船を使っていた者であるという予想だ。

船を自在に扱えるクラスとなればライダークラス辺りが妥当だろう。つまりあのサーヴァントのクラスはアーチャーかライダー、その二つとなる。

7クラスのうちの2クラスまで絞り込めた。あの戦いだけであのサーヴァントのクラスを絞れたのはとても大きな収穫だろう。

翔とリップはもう少しアリーナを探索することにした。

第4話 コードキャスト

あれからアリーナの探索をし、トリガ暗号鍵と呼ばれるものは入手することができた。

そして更なる探索をしている途中、不意にリップから声が掛かる。「翔さん、コードキャストって知ってますか？」

「コードキャスト？　なんだそりゃ」

首を傾げる翔にリップが説明を入れる。

コードキャスト、電脳空間で使用されるプログラム簡易術式であり、ウィザードはコードを予め設計や製造しておき、これに魔力を通すことで起動させるというものらしい。

地上にいたころはそれを使う事が出来たのだろうか……

もしそのコードキャストとやらが使えるのなら、リップに補助などを掛けることができるはずなのだが……

「試しにあのエネミーに使ってみましょう！」

巨大な爪を向ける先には、このアリーナで最初に会ったエネミー、今の二人ならやられることなく倒せるはずと踏んでリップがそう言ったのだろう。

ともあれやってみなければわからないことだ。翔は魔力を通してみる。

魔力を通せば浮かび上がる文字列のようなもの。今あのエネミーに打つのはこれが最適という事か……？

『shock(32)！』

その文字列のようなものを発動させれば、エネミーに向けて魔力の弾を発射。

その直撃を受けたエネミーは多少ながら行動を停止する。

それをリップが見逃すはずがない。即座にコードキャストを受けたエネミーに近づき、その爪を振り抜く。

あのエネミーはいうなればスタン状態だ。防御すらも出来ないエネミーに、リップの攻撃を耐えきれぬはずもない。

見事に真つ二つに斬り裂かれ四散するエネミー。あのコードキャ

ストはどうやら敵にダメージとスタンの効果を与えるようだ。

「へえ、これなかなかすごいな……」

関心を上げる声を上げる翔に、彼の身体を見つめるリップ。自分の身体におかしい所があるだろうか。

疑問の声を上げるリップに翔は首を傾げ、そのリップの仕草を見つめている。

「えっと、翔さん。コードキャスト、自由に使えるみたいですね。見た所、特別な礼装とか装備して無いようですし」

「礼装……？」

さっきの魔力の弾は、元からあったかのように使えた。

それは、自分の体の中にそれが刻み込まれているかのように……

それがどういふ事かは今は分からない。だが、使ってみて分かった。このコードキャストは翔が推測するに、魔術のような物だろう。

そしてリップの言っていた礼装……間違いなく先程、翔が使ったコードキャストを使用するために必要なもの。

それがいらなくなれば、戦術の幅も大幅に広がるといふもの。

簡単に言ってしまうえば、なぜだか自分はコードキャストが自由に使えるという事だ。まだ全てを試していないのでどのような種類があるかは不明だが、攻撃するものがあれば、補助や防御に使えるものがあるはず。

それを、うまくリップとの連携に組み合わせれば、その効果はさらにあがるはずだ。

アリーナを探索しながらさりげなく自身に魔力を通してみれば、さっきのやつ以外にもあることが身体が知らせている。

これは何だろうか、試しに翔はこのコードキャストを使ってみることにする。

『add | regen (32)』

「ひゃあ!？」

さりげなく翔が詠唱してみれば、隣で身体をびくりと震わせるリップ。その仕草に一体何が起きたのかわからず驚く翔。

だが少しすると、リップが関心を上げた声で自身の身体を見つめて

いる。

「翔さん、今のコードキャストは徐々に私の傷を癒すやつみたいです」
「おお、つまり自動回復ってやつか？」

翔の発言に頷くリップ。体力の自動回復となれば多少の長期戦は出来るという事。

発動には少しばかり時間を要したことから、これは少し難易度が高いコードキャストという事か……

生前の自分はいろんなコードキャストを使えたのだろうか。

自分がコードキャストの天才とかだったら面白いのになと一瞬、考えるもののすぐにその考えをなくす翔。

どちらにせよ、コードキャストについては、こうやって分からない部分を埋めていくしか無いようだ。

探索はこれでいいだろう。二人は校舎へと戻ることにした。

マイルーム、それは本戦に勝ち進んだマスターに与えられし個室だ。

しかし、ここは教室、個室は個室でも教室をそのまま与えられた為、ベッドなどなにもないのだ。

「少し殺風景だと思えますが、大丈夫だと思います！」

リップは励ましのつもりで言っただろうが、翔にとつては心に深く刺さった一撃となった。

表情にこそ彼はそれを見せない。だが彼には、つまらぬ一つの意味が宿ってしまった。

いつか絶対、部屋をもう少し充実させる。そんな意思を燃やしなが
ら、机を動かす翔。

大半の机は必要ない。片隅に、もしくは『お前の席ねえから！』の
如く、窓から投げ捨ててもいいぐらい、今はいらぬものだ。

まあそんな物騒な事など許せることではないと思うので、適当に大
半の机を一か所にまとめ上げる。

それをした理由としては、リップの腕だ。その巨大な腕では、机が
並べられていれば移動できる場所などほぼないと言ってもいいだろ

う。

その腕が当たってしまう可能性なども考えて、翔は机を一か所へとまとめあげたのだ。

ふと、リップのあの腕で机を壊せるだろうか……とか考えてしまった頭はすぐに振り払うとする。

「まあベッドとかは近々、買い揃えるとして……これで動きやすくなっただろう」

部屋の中心に立って、どこか当たらないか確認しているリップ。

見た所、移動する際に障害になるものは無いもないようだ。

「ありがとうございます翔さん。私のためにこんな……」

「ああ？ 別にいいだろうよ。リップのためにやったようなことだしな」

微笑むリップの頭に優しく手を乗せ、撫でながら微笑む翔。

彼女は撫でられるのが好きなのだろうか。こうやって撫でていると、喜ぶ姿の彼女が目映るのだ。

しかし、マイルームの整理も終わったところで、いろいろ買い揃えたかったところだが、妙に体が上手く動かない。

思い返してみれば当たり前だ。魔術師としてもままならない状態で慎二のサーヴァントと戦闘。そして初めてのコードキャストの使用。

体が動かないのも納得はいく。今日は少し休むことにしよう。

「少し休むか、明日からもお願いなりリップ。お前もゆっくり休んでくれ」

「はい、翔さんもゆっくりお休みください」

そういって、翔は椅子に腰かけて眠り始める。

そんな翔をずっと見つめているリップ。

目の前に自分と契約してくれた人物がいる。意識を失った翔が目覚めた時、リップは翔に触れようとした。

自分の腕にある巨大な金色の腕を見つめるリップ。あの時、直後に自分の手を思い出し、その手で彼を傷つけてしまうかもしれない。そう怯えた彼女に翔は……

『握手は出来ねえかもしれないけどさ、これだったら俺もしてやれる』
そう言つて優しく、自身の頭に触れてくれた。近くにある腕などに
せずに……

正直言つと翔は頭の悪い方であろう。

とてつもなくバカで、一直線に走るを体現したような性格をして
て、感情がすぐ表に出るような人だけど。

実は凄い努力家で、諦めることは絶対にしない。自分の戦い方を見
て戦況を分析していくその姿は、どこかの世界で出会った人に良く似
ていた。

その人が女なのか、男なのかわからない。そして連れていたサー
ヴァントも赤いドレスを身にまとつた女性でもあつたし、赤い服を身
にまとつた男性でもあつたし、着物を着た狐耳の生えた女性でもあつ
たし、さらには黄金の鎧を着ていたサーヴァントだったのかもしれない。
い。

でも、その人は自分を許してくれた。あの人のおかげで、ある一つ
の事を知ることができた。

きつと、もうその人とは出会う事はないだろう。だけどあの人に救
われた自分にふさわしい人物になりたい。

まだこの気持ちはわからない。でもこの気持ちに向き合つていき
たい。

そしていつかは、自分も人のように愛したい、人のように愛された
い。でもそれは叶う事なのだろうか。今の彼女にはわからない。

このS E・R A・P Hでの戦いが終われば彼女は翔と別れること
になる。だけど、彼女は初めて翔と出会つた時を忘れたくない。

彼もまた、自分を受け入れてくれた人物なのだから……

「翔さん。また明日からもお願いしますね」

寝ている翔に対してリップは優しく微笑んだ……

朝、空が明るくなり始めた所で翔は目覚める。

起きようと思つていた時間よりも随分と早い時間に目が覚めてし

まった。ちょうどいいから何か買いに行こうか、そう思い、椅子から立ち上ったところでリップは目を覚ます。どうやら椅子が動く音で目を覚ましたようであった。

「あ、おはようございませう翔さん」

「ああ、おはようリップ。よく眠れたか？」

「私は大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

ペこりと頭を下げるリップ。とりあえずは今日はアリーナへ行く前にこちらで情報集めだ。

そう、ここはNPCなどいない本戦会場。ここにいるのは生きた人間。もしかしたら、思いもよらない情報があるかもしれないのだ。

NPCなどいないという事は、聞き逃した情報は二度と聞けないという事。

今知りたいのは、慎二のサーヴァントではあるが、それ以外にもきっと収穫はあるはず。

だからまず最初にと、部屋を見る翔。そこに広がるのは殺風景な光景。

「……なんか買い出しするか！」

先程考えていたことと関係ない気もするが、もうリップに殺風景な光景と言われたくないために、購買にていろいろ買う事とし、個室より外に出る翔とリップ。

リップは霊体化しているため、他の人に気付かれることはない。そして少し進んでいけば、誰かが話しているのを見つける翔。

一人は昨日も会った慎二、もう一人は黒い髪に赤い服を着た少女、あちらは遠坂凛だろう。その二人が廊下で話していた。

「僕と彼女の『艦隊』。いくら君が逆立ちしても今回は届かない存在さ」

「へえ、サーヴァントの情報を喋っちゃうなんてマトウくんだったら随分と余裕なんだ」

優雅さを含みながらも保護者さながらの表情で流す凛。そして失態に気付いたのか動揺している仕草が翔には見て分かる。

恐らく翔からは見えないが、その顔は赤いだろうと翔は考える。

「う……そ……そうさ！ あんまり一方的だとつまらないからハンデってやつさ！」

でも、ブラフかもしれないから、あんまり価値はないかもだよとつけ加える慎二。その口ぶりからするに、あの口調はいつもの慎二ではない。

間違いなく本当の情報だろう。彼の言っていた『艦隊』。間違いなくあの慎二のサーヴァントの情報だ。

あのサーヴァントが使ったカルバリン砲に今言った『艦隊』という言葉、間違いない。慎二のサーヴァントは船を使っていた者だ。

となればほぼクラスは間違いないライダー。翔が考察している間に慎二が、わなわなと顔を青くしている。

どちらにせよ、今の自分にできることは防壁のコードキャストを用意しておくことだろうか。

翔が考え終わる頃には、慎二は凜に捨て台詞を吐いて立ち去っているところであった。

だが、立ち去る方向がこちらだ。隠れようと思ったがもう遅い。

もうこうなれば仕方がない、いい情報も聞けたし、ちよつと慎二をからかってやろうと翔は思う。

「な、なんだよお前。まさかそこでずっと見ていたのか!?!」

「いやーたまたま買い出しに行こうかと思っただらまさかの光景にびつくりだったんだよな！ で、どうだった。容姿端麗、成績優秀な月海原学園のアイドルと話せた感想は？」

「お、お前まで僕をからかうんじゃないよ！ どうせお前じゃ、僕の無敵艦……僕のサーヴァントは止められないはずさ！」

無敵艦隊……間違いなく慎二はこう言おうとしたはずだ。

これはまたいい情報を聞いた。まさか慎二がここまで喋るとは思わなかったが、収穫は大きい。

あとは自分とリップがどこまでやれるか……だが。

「どっちにしても、お前の勝ち目はない。じゃあな、お前もせいぜい頑張れば？」

いつもの口調に戻りつつ、翔に語りかけながら隣を通り過ぎる慎

二。

確かに無敵艦隊、そしてリップとの戦闘の時に出したカルバリン砲、ここまで情報は集める事が出来た。しかし……

翔は、あの時の戦いを思い出す。今のままでは明らかに実力不足。情報は足りていても力が及ばず敗退……なんてこともあり得る。

凜もため息をつきながら立ち去るところを見届ける翔。そのまま図書館……と行きたかったが、まずは買い出した。翔は部屋の充実のために購買へと向かった。

第5話 情報収集

「さて……」

「うわあ……興味ある本がいっぱいです！」

彼らの向かった先は図書室。買い出しが済んだので、それら全てを
購買から転送してもらい。翔とリップは校内の図書室へ来ていた。

調べるのはもちろん、無敵艦隊についてだ。

リップが興味関心にいるんな場所を見つめるのを見ながら、翔は目
的の本を探しだし読み始める。

無敵艦隊といえば大航海時代におけるスペイン海軍の異名だ。そ
の数は、千トン以上の大型艦100隻以上を主軸とし、合計6万5千
人からなる英国征服艦隊だ。

それはスペインを『太陽の沈まぬ王国』とも言われるようになった
無敵の艦隊だ。

まさに力こそパワーを体現した編成……俺好みの編成だなと翔が
思いながら本をめくる。

だがその無敵とも言われたスペインも僅か80隻しかなかったイ
ギリス艦隊に敗れ去るのだ。

『太陽の沈まぬ王国』のスペインとその太陽を落としたイギリス
……

ふと背中に妙な違和感を感じ、顔だけ後ろに向ける翔。

「……情報が絞れてきたな。リップ？」

「本ってこんなに文字があるんですね……」

ふと背中に妙な違和感を感じ、顔だけ後ろに向ける翔。

気づけば翔の背後にびったりくっついて、彼の後ろから本を見てい
たリップ。背中に妙な違和感があると思ったらこういう事だったの
か。

無意識にリップから押し当てられている何かを気にしないように、
本をしまう翔。

いや、正確に言えば、背後で何が起きているかを連想すれば、确实
に理性がやばいことになる。だから考えないようにしているという

事が正しいのだろうか。

この状態を続けるなど、もはや拷問に近い何かを感じる。なので、さりげなく体を動かし、うまくリップのそれに当たらないようにする翔。

話を戻そう。大航海時代、それは主に15世紀から16世紀を指す言葉だ。

翔は推測する。もし艦隊こそサーヴァントが敵宝具なら……彼女が船員ではない。艦隊を率いた人物ともなればまずはクラスはライダーで確定。

だが、英国で艦隊を率いた英雄の女性など聞いたことがない。しかし……だ。

確定的証拠はないが候補であるならば一人いる。

それは『太陽の沈まぬ王国』を破った『太陽を落とした男』。

だがあの慎二のサーヴァントは女性であった。この時代に名を広めた女性であり、艦隊を率いた人物などいただろうか。

なにがともあれ、これについてまずは調べてみよう。

もしかしたらあの女性についてわかるかもしれない。

リップにも頼み、それ関連の本を探していたが……

「馬鹿な。ない……だと!?!」

「こつちもです翔さん」

馬鹿な、本が全て見つからないとは、歴史好きな物好きにちようど全て借りられてしまったのだろうか。

がつくりと肩を落とす翔に、リップが声を掛ける。それはリップの視線の先を見て欲しいとの事。

彼女の手の関係上、本棚は触る事が出来ない。触れば間違いなく本棚が大変なことになる。翔はリップの視線の先の本棚を指で触れてみる。

翔が手を触れ、リップに『この辺りか?』と云えば、それに頷く彼女。

彼が見ており、手で触れている場所は、大航海時代関連のありそうな本棚。翔が指を進めていけば、そこにはいくつか抜かれている形跡

があった。

「……なるほど」

「あ、やっぱり……ですか？」

翔は頷く。もし自分が慎二の立場ならば、ここの図書室の本棚全部、アリーナに転送する。絶対そうする。

それか、この図書室丸ごと爆破。そうでなきゃ『正解』を教えるようなものではないか。

資料を隠すなら辺り一帯をぶち壊すぐらいの隠滅をしなければならぬ。

ともあれこれは間違いなく慎二の仕業。だがそんな彼が、やらかしたことによつて、翔が知りたいことは知ることができた。

あとは自分のマイルームに行つて、やるべきことをやるだけだ。

そう、殺風景と言われていたマイルーム改造計画。ついにそれを実行する 때가来たようだ。

「……ふう、こんな感じだな」

「随分と雰囲気変わりましたね！」

ある程度値段を調べ、買ってきた手ごろなインテリアを並べていった翔。

やはり前にリップに殺風景といわれたのが今でも心に残っていたというのが原因でもあるが、ここまで人に言われると、グサリとくるものなのだろうか。

少なくとも、今までよりは外見は良くなった。ちゃんと人が住んでいる生活感みたいなのがちゃんとある。

もうこれで机を移動させただけの殺風景極まりない教室……なんて言わせない。

あとはベッドが二つ、あくまで就寝用である。大事な事なのでもう一度言おう。あくまで就寝用である。

今のままでは寢床が定まっていなため、そしてリップにも休息が必要だと思い、ベッドは二つ、購入することとしたのだ。

ちなみに、ここにある二つのベッドはリップの、あの腕にも耐えられるように、自分で少し細工をしてある。

まさか自分に、こんな技術があるとは思えなかったが、まあ使える技術などがあれば、どんどん使うのが自分という人間だ。

「すごい、ベッドってこんなにふかふかだったんですね翔さん！」

ベッドに飛び移って、凄く表情が緩んでいるリップ。まあともあれベッドでこんなに彼女が喜んでくれるならいいことだ。

そんな喜ぶ彼女を見て、翔が微笑んでいれば、前に鳴った携帯端末が鳴り響く。

『セカンダリトリガー第二暗号鍵を生成。第二層にて習得されたし』

早いな、もう二つ目の鍵が生成されたのか。

決戦まで時間はあるものの、戦いというものに慣れておかなければ慎二のサーヴァントを倒すことはきつとできない。

部屋の整理を一通り整理したら、リップと共に二層に向かってみよう。

幸せな表情でベッドで転がっているリップを見ながら翔はそう思った。

第2層は、1層とはまた違い、異なる雰囲気を放っていた。

その光景はまるで海の深くまで来てしまったかのような錯覚さえ覚えるほど……

そんな深海のような場所を翔とリップは歩いている。

おそらく、このエネミーの特性は1層とは違うだろう。

そして……翔の推測が正しければ間違いなくここに慎二が隠した書物がある。

あのサーヴァントの真名は絞れてきている。だがまだ完全な真名看破にはまだ足りない。だがここには必ず最後の一押しがここにあるはず。

「あ？ なんだこりゃ……」

少し進んだところで、通路を塞ぐものを発見した。青色の通路とは

対照的の赤い壁。これは侵入者を拒む何かに近いものだった。

ここは電子の世界、その単語で言うならばファイアウォールに近いだろう。

翔がそれに触れてみるが、何も起きない。どこかに解除キーでもあるのだろうか。

違う通路を進もうとしたところで、リップが自分について来ていることに気付く。

見れば彼女は赤い防壁を見て『うーん……』と唸っている様子だった。見た感じ力づくでは破壊できそうにもないが……

「翔さん、魔力を回してくればこれ、破壊できるかもしれません」
なんてことだ。もし破壊できるとなればそれに越したことはない。

だが本当にあの腕があれど、あの防壁を破壊することができのだろうか……

まあリップがそう言うのだ。一度は試してみるのがいいだろう。

「では私の合図で翔さんは魔力を私に回してください」

「わかった、やってみるぜリップ」

そう言い、リップが翔のその言葉に頷くと、巨大な腕を防壁に当て、目を閉じるリップ。一体何をしているのだろうか。

その静寂は少しの間続いた。翔はただリップの合図を待つのみ。

彼女は何をしているのだろうか。だが彼女の真剣な顔を見る限り、今語りかけるのは厳禁だ。

集中力を乱さないために、自分ができるとはただ見守るのみ。

そして翔がいつでも魔力を回せる準備が整うと……

「今です翔さん！」

言われるがままにリップに魔力を回す翔。直後、彼女の『潰れて!』という声と共に、巨大な金色の爪が防壁に目掛け放たれる。

その光景に目を見開く翔。彼の目の前の光景は、障壁が音を立ててガラスのようにバラバラに崩れ、周りに散っていく光景だったのだ。

正直に言うとならば何が起きたかわからない光景である。

「ははは、さすがだなリップ。ところで今のつて……」

「はい！ ちよつとこの壁の中身を覗いて弱い部分に一撃を入れただ

けです！」

嬉しそうに腕を振り上げてはしゃいでいるリップ。なるほど、弱い部分に一撃を入れたのなら納得できる。

今まではリップは一撃必殺しか頭の中では考えてないのだろうかと思っていたのだが、こういったことも出来なるなら役に立つことがいづれあるかもしれない。彼女の意外な

一面に感心しながら翔とリップは進み始める。

この2層は進んでいけば、進んでいくほど、周囲の光景が深く暗くなつていく、まるで海底の奥深くに自分たちが進んでいるような感覚で、不気味な感じさえ覚える。

そしていたるところに浮かぶ沈没船。まるで船の墓場ともいえる深海の光景が見渡せばそこに広がっているのが分かる。

しかし、歩いてみれば慎二のサーヴァントに関する資料は見当たらない。しかしあの慎二の事だ。普段ならば気付かない場所に隠しているのだろう。

どこか探してないところは、考えながら翔が壁に手をかけながら進んでいると……

「あ、え、ちよ、ぬわっ!?!」

手が壁をすり抜け、間抜けな声を出しながら転倒する翔。

だがすり抜けた先で翔が落ちることなく、身体はそこにある。

言うなればここは隠し通路……見えない道がそれを物語っている。思わぬ収穫だ。良く見ればその先には沈没船の甲板らしきところもある。いかにも慎二が何かを隠しそうなところだ。

翔とリップがそこへ向かい、アイテムが入った箱に触れてみる。

「これは……手記?」

「みたい……ですね」

どうやらこれが慎二が必死になって隠した物らしい。羊皮紙に書かれたそれは何かの航海日誌のようだった。

文字の霞み具合から察するに、かなり前に書かれた物のようだ。翔が辛うじて呼んでいると、そこにはいくつかの島の名前や襲った船の積荷。

正に荒海を駆けた航海日誌。襲った船の積荷まで書いてあるという事はこれを書いた人物は海賊ということがわかる。

そしてこの書物は間違いなくムーンセルが再現したデータだ。慎二もこのフォルダを消去することが出来ず、仕方なくここに隠したのだろう。

そして彼が気になった文字がそこにあった。

ゴールデンハインド
「黄金の鹿号……」

ゴールデンハインド
黄金の鹿号。イングラント王国のガレオン船でありとある人物の私掠船と用いた船だ。

慎二が必死になって隠した物とゴールデンハインド黄金の鹿号という単語。そして無敵艦隊、カルバリン砲……そしてこの無敵艦隊という言葉が彼、いや彼女にとつて敵側のあだ名だとしたら……？

答えは絞れた。慎二のサーヴァントの真名。

その人物は商人にして冒険家、私掠船船長にして艦隊司令官。

世界一周を初めて生きたまま成し遂げた人類最初の偉人。人類史においてターニングポイントになった星の開拓者。

そして、自ら得たその収益で母国イギリスを、当時世界最強だったスペインを打ち破るまでに導いた英傑。

そう、『太陽の沈まぬ王国』を歴史の盟主から引き摺り下ろした……太陽を落とした男。違う、太陽を落とした女だ。

忠実とは違って女性だったのが驚きだが……これで答えは出た。

「リップ、慎二のサーヴァントの真名がわかった。彼女の名前は……『フランシス・ドレイク』だ」

その後、第2層のトリガーをゲット。道中でのエネミーとの戦闘。その戦闘を積み重ねていく毎に、リップの細かな戦い方までわかってきた。

後は、その時に応じてリップに合った戦術を指示していくのが自分の役目。

今日はアリーナから出ようとし、出口に向かったところでリップが

何かに気付いたように、辺りを見回す。

「翔さん！ アリーナの階層データを全表示できるコードキャストつてありますか！」

翔に向き直ればそのような事を口にするリップ。自身に魔力を通して、その文字列を探る翔。

階層データ表示、検索、一致……これだな。見つけたコードキャストを使う翔。

「これか……『viewmap()；』」

そのコードキャストを使えば頭の中に大量の情報が流れ込む……それをリップにも見えるようにマップ出力すれば、その中に勢いよく近づいてくる二つの点が分かる。

間違いない、これは慎二とそのサーヴァントだ。

おそらく、手記を手に入れたことが何らかの形で慎二にばれたのだろう。

正反対に逃げることはできる。だがそこから逃げた所で、近くにエネミーの反応がある。逃げようにも、エネミーがいる状態慎二のサーヴァントと挟み撃ちになるのもごめん
だ。

ならば、ここで迎え撃つしかないのか。慎二達が向かってくる方向を見つめる翔。

「……チッ！ こんなところまで探すなんて、ずいぶんと必死じゃないか。まあその本はすぐに僕の手元に戻るんだけどさあ！ さあ、思いつきりやつちやいなライダー！」

「仕方ないねえ、慎二。追加分の報酬は用意しておくんだよ！」

慎二が自身のサーヴァントに命令し、彼の前に出る女海賊。戦闘は避けられない。翔を守るようにリップが前に立つ。

二回目の慎二のサーヴァントとの戦闘。だが前の戦いを知らない翔ではない。少しはできるようになったはずだ。

そして、今気づいたことだが、前のように焦りが意外とない。敵の情報も少し知れたからだろうか……

「いけ！ ライダー！ ありったけの弾をぶち込んでやれ！」

「はっ！ 派手に散らしていくその戦法、アタシは嫌いじゃないよ！」
先に動いたのは慎二のサーヴァント、ライダーであった。慎二の言葉と共に、突進しながら二丁の拳銃を巧みに扱い、その二つの銃口から火が吹く。

突進しながらの連射、それを簡単にやってのけるあたりやはり英霊。対するリップも、その弾丸を自身の腕で防御しながら、慎二のサーヴァントを迎え撃つ。

そしてリップの巨大な腕の振り下ろし、それを読んでいたかのようにライダーは横に回避、零距离で銃を向ける。

彼女が気づいた時にはもう遅い、ライダーがリップの頭部に目掛けて引き金を引く。

その弾丸は容易くりップを貫く、マスターが何もしなければの話だが……

「『g a i n | a g i (3 2) . 』！」
「なっ!?」

すかさず翔のコードキャストにより、襲い掛かる弾丸から身を逸らすリップ。彼の使ったコードキャストは敏捷強化。

これにより、間一髪でリップは弾丸から身を避けることに成功したのだ。

翔のコードキャストを見た慎二は焦りの表情を浮かべているのが分かる。最初に戦った時には、戦い方をまるで知らなかった翔が、今突然コードキャストを使ったことに驚いているのだろう。

僅かだがライダーの攻撃パターンが読める。ならばこの好機を逃さない手はない。

リップの腕の横薙ぎを、後退しながら避けたライダーが右手の拳銃を上空に放つ。

後退しながらライダーの背後の現れるのは、前の戦闘で見せた大砲の群れ。

次の行動は、カルバリン砲……！！

「いっつをくらいな！」

まだリップの敏捷強化が残っている。ならば……！！

「今だリップー！」

巨大な大砲より弾丸が放たれ、耳をつんぎくような、空を遠雷の如き唸りを伴った砲声が渡る。

だが、前のようにやられっぱなしではない。それに突進するかのようには砲弾の群れを突き進むリップ。

チャンスは一瞬、翔は右手を前に出し砲台を見つめる。一発だ、一発撃ち落とせばいい。

彼女へ、リップへ向かってくるのだけでいいのだ。

『shock(32)！』^{弾丸}

翔より放たれし弾丸、それはリップへ襲い掛かる弾丸のみを撃ち落とし、彼女の道を作る。

地面が抉られ、立ち込める煙、その煙の中から飛び出すリップ。リップの傷は少ない。翔がコードキャストで補助したおかげだ。

大砲の爆撃より生還したリップはそのままライダーに向け、その巨大な爪を振るった。

「っ!？」

顔をしかめるライダー。

リップの爪を掠らせる程度で回避した彼女だが、その一撃は重い。その傷は決して浅くはなく手痛い一撃となっただろう。

そしてライダーが銃を放つ直前に、アリーナ全体へ警告音が鳴り響き、ノイズのようなものが走り、二人はマスターの側へと強制的に戻される。

セラフが介入し、戦闘を強制終了させたのだ。

爆撃によつて少しの傷を負っているリップだが、相手側の傷はそれよりも深かった。前回とは結果が大違いだ。

「うっ……嘘だ。この僕が傷を受けるなんて……」

その結果に慎二も取り乱さずにはいられなかった。

まるで信じられないと言わんばかりに目を見開き、身体を震わせている。

「俺だつてなにも学んでないわけじゃない。少しは分かったか慎二」

険しい表情で慎二に言う翔。相手の行動を読みながら戦術を即座

に組み立て、リップに指示する。ぶつつけ本番でどうかと思ったが、なんとかイケたようだ。

だがこちらにも疲労がないわけじゃない。今でも倒れそうなくらいには疲労している。

「く、くそ、調子に乗りやがって！ 決着は本番で付けてやる！」

「ああ、こつちもそのつもりだ。次会うときに決着の時だぜ慎二」

まるで吐き捨てるかのように慎二が言うと、サーヴァント共に消える慎二。

どうやら撤退したらしい。なんとかなったということか。

とにかく目標であった第2層のトリガーをゲットもした。そして出口も近い、ここは一回帰った方がいいだろう。

着実にタイムリミットは迫っているが、これでトリガーがなくなると戦いはなくなつた。

あとは慎二との決着までに力をつけるだけ。

ともあれ、今日は休んだ方がいいだろう。翔とリップはアリーナから出ることにした。

第6話 決戦へ

——夢を見ている

ここは海の中だろうか、深く、けど上を見上げれば明かりが見える海の底。

だが足はつけるようだ。そんな不思議な場所に翔は立っていた。「ちよつと貴方がうたた寝してれば、そこは海の底。これは夢か、単なる幻か。まあ、わたしにとってはどちらでもいいんですけどね」

翔の元へ歩いて来る一つの影、その人影に警戒する翔だが、直後、その容姿に目を見開く。

服装はレオタードのようなものにマントを羽織った小悪魔的な服装、だが限りなくその顔つきがリップに似ていたからだ。顔立ちはリップとほぼ同じと言ってもいいだろう。

だが、時折見せる挑発的な表情や淫靡さを漂わせた物腰、そしてなにより服装が違う事から別人であると分かった。

「はい。ようこそいらっしゃいましたー！ 俺は寝たと思ったら、なぜか変な場所にいた。何を言っているのか、わたしにもわかりませんが、そんなメタ発言はこのわたしが許しません。頼れる後輩系ヒロイン、BBちゃんの登場です！」

なんだこの少女は、人が気持ちよく寝たと思ったら変な場所に連れてきて……

頭を抱える翔にきやつきやとはしゃぐBBという少女。

多分、自分がいるのはこいつの仕業だろう。なぜ自分がここに連れてこられたのかが分からないが、こうなればやけだ。

「センパイの考えている事、このBBちゃんはゼーんぶお見通しですよ？ あなたは頭の片隅でリップの事を考えている。彼女が何者なのか、どういう存在なのか」

彼女の言葉に驚愕する翔。なぜ彼女がリップの事を知っているのだろうか。

このBBという少女はリップの事について何かを知っている……？

「ですが残念ながら、私からは全部言えません。だって最初からネタバレなんて楽しくないじゃないですか」

な……この少女、とても意地悪すぎる。もっとも聞きたいことを焦らされるなど……

恐らくその表情が顔に出ているのだろう。きやつきはしゃいでいるBBが翔の視界に写る。

「でも、そんな歯を食いしばっている困り果ててるセンパイにちよつとだけ情報を与えましょうか。きゃーBBちゃん優しいー！」

こいつ、ぶん殴る。

この少女は間違いなく、人をイラつかせるのが得意な人間だ。こつちに連行しておいて重要な情報を焦らすだけでもなおさらだ。

翔がそう思っている間にBBが喋りだす。

「では言いますね。BBちゃんマル秘情報その一。パッションリップはアルターエゴという存在。BBわたしから分かれた分身なんです。わたしは頭脳担当であの子は肉体労働。今では弱体化してますが、結構強いんですよの子」

「アルターエゴ……？」

聞いたことない言葉だ。それに今ここにいるBBは、リップは自分から生まれた分身と言っていた……？

ということは、パッションリップは正規のサーヴァントと言われる存在ではない……？

BBにさらに聞いたただそうとする翔だが、彼が口を開く前にBBの人差し指が彼の唇の前に当てられる。

「はい、今日はここでおしまい。あとはセンパイの1GB止まりの頭でしっかり考えてくださいね」

「な……う、うるせえ！俺の頭は3GBはある！」

「え、突っ込むのそこですか？ 意外にセンパイって欲張りなんです
ね」

『まあ、1GBっていう評価は変わりませんがね☆』と付け加えるBB。結局その部分は覆らないのかと肩を落とす翔。

しかし、このBBという少女がリップの秘密を知っているのは本当

のようだ。先程『BBちゃんマル秘情報その一』とか言っていたから、その二とかあるのではないだろうか。

「では、期待してしますので、死なないように頑張ってくださいねセンパイ。生きていければいいことあるかもしれませんよ」

そのような言葉と共にBBの姿が泡しぶきのように消えた。

彼女は一体なんだっただろうか。翔が考えを巡らせているうちに、彼の視界は黒へと染まっていった。

朝、日の光と共に翔はベッドで目を覚ます。

どうやら朝がやってきたようだ。

翔は自分が見ていた夢を思い返していた。今思えば騒がしすぎる夢であった。

なんか突然BBちゃんとかいう人物が現れて、リップがどういう人物なのかを語った人物。

彼女の存在がどういうものなのかはわからない。だがリップの事をよく知っているのもまた事実だ。

隣を見ればリップもまた目を覚ましたようだ。

夢の内容についてリップに聞くのは、この戦いが終わってからでもいいかもしれない。

「あ、おはようございます。今日が決戦の日……ですよね？」

「おはようリップ。そうだ、今日がその日だな」

そう、今日は決戦の日。翔か慎二、どちらかが退場する日なのだ。

この聖杯戦争で負けたものは死ぬ。それは命を散らすという意味。

正直に言うと、あまり実感がわかない。

あまりに現実からかけ離れすぎた『死』という言葉。それにはあまり強い響きを感じられなかった。

だが、最初の決戦であることは変わらない。

行くしかないのだ。慎二の待つ、決戦場へ……

「あ、翔さん。その前に一度、情報整理した方がいいかと……」

「え？ ああ、そうだな」

リップの言うとおりだ。まだ決戦の時間までは長い。今のうちに情報を整理した方がいいかも知れない。

実感はわからないが、命をかけた戦いなのだ。それが真実かどうかはわからない。

だが情報だけは今のうちに整理しておこう。リップと翔は慎二とそのサーヴァントの情報を整理する。

間桐慎二。まだ予選と言われている場所では自分を友達と言ってくれた、どこか憎めない男だ。

正直、自称天才と言っていた慎二だが、さすがゲームチャンプと言われただけであって、その実力は本物であった。

正直に言うと、翔にとっては予選の学校の時から、彼の實力には尊敬していたほどに……

彼は生まれながらにして天才であった。だが翔にはそんな才能などはない。

才能の面では慎二の方が上であるだろう。だがこちらには『情報』というアドバンテージがある。

そんな彼が自慢していたサーヴァントの武器は……
「あのサーヴァントの武器は……銃だったな」

情報を整理していく翔。初戦からアリーナで力を見せつけられたとき、彼女の使っていた武器はクラシックな二丁拳銃だった。

正直、あの性格のせいで人付き合いがうまくない慎二とはいいコンビのように見えた。彼女が姉、いや豪快な姉といった感じだろうか。となれば相性は良好。相性の関係で自滅する事はないという事だ。

そして慎二は図書館にあった彼のサーヴァントの手記を隠した。結果的には翔に真名を絞らせる結果に繋がったのだが……

そして手記に書かれていた宝具……それは船に關係するもの。
「ゴールドデンハインド黄金の鹿号だったかな」

そう、擦れた文字列の中に確かにその文字が読み取れたのだ。

さらには彼女が使ったカルバリン砲。あれによって船に乗る英霊という事が分かり、クラスはライダーと確定できた。

最初こそ余裕を見せていた慎二も情報を得ていくことで、焦りを見

せていたのは明確であった。

「しかし……海賊か」

船に乗る英霊ともなれば武器は銃以外にもあるはず。

確か、船乗りが好んで使う武器と言えば……

「リップ、あのライダー。近接も十分に強いと思う」

翔が警戒したのは、銃のほかにもあのサーヴァントは近接武器を持つている可能性が高いという事だった。

さらにはあのライダーが活躍したのは大航海時代だ。カトラスの一本や二本、持っていても不思議ではない。

慎二はどこか抜けている性格ではある。だが自分とは比べ物にならないほどの一流ハッカーである事もまた事実。

その差が情報で埋まるといいのだが……

「大丈夫です翔さん！ あの増えるワカメを限界まで圧縮して、1cm四方のコンソメキューブにしてやりますから！」

「お、おうー」

なんかリップがすごく物騒な台詞を吐いている気がするが、その巨大な両腕で自身に満ちたポーズをしているのを見るとなんだかとても心強い。

まあともかく彼女の言葉で自身もついた。自分にできることは……今できることを精一杯やるだけだ。

リップと翔は、マイルームから出て決戦場へと足を進めた。

「ようこそ決戦の地へ。身支度は整えたかね？」

その扉の前には言峰が立っていた。彼は管理AIだった。ならばこの管理の彼の仕事なのだろう。

扉は一つ、再びこの校舎へ足をつけるのも一組。覚悟は決まっている。後はこの『闘技場』^{コロッセオ}の扉を開くだけ……

「大丈夫だ。全て済ませた」

「そうか、では……若き闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。造られし者達よ。存分に殺し合い給え」

彼の言葉に若干違和感を覚えるも、翔は二つの暗号鍵トリガーをセットする。

言峰が横に立ち、扉が開かれ、翔とリップはその中へと入っていく。その扉が完全に閉じた後に感じる浮遊感。これはエレベーターか。

そして数秒後に見えたのは慎二とそのサーヴァント。自分の隣を見ればリップが彼らを見つめていた。

大丈夫、リップを信じろ。胸に手を当て、彼女を信じる翔。

「なあんだ。逃げずにちゃんと来たんだ。面倒なことは嫌いな奴だと思っていたけど」

「つたりまえだ。俺がここに来ないことはリップを否定することになるからな」

徐々に辺りが明るくなっていく。どうやら自分と慎二は薄い障壁でお互いを見つめている様だった。

さすがにこれをリップが破壊するのは不可能に近いだろう。薄い障壁が張られているのは勿論、ここで攻撃しないようにするためののだろう。

「それはちゃんと戦うってことか？ はあ、お前ってやつぱりバカだな。呆れを通り越して哀れだよ全く。そのサーヴァントも言ってるやいなよ。諦めた方が早いって」

視線をリップに合わせながら言う慎二。だが当の本人は目を閉じ、首をふんつと背けている。

最早、呆れて返事すらしない……という事なのだろうか。

「ワカメの分際でよくしゃべりますね全く。なんですかその顔、見ていただけでなんだかイライラしてくるんです。とりあえずここ出たらクシャつとしてやりますから」

リップからもこの返答だ。それを聞いてしまい、顔が赤くなる慎二。

案外、彼女は煽りスキルが高いのかもしれない。いや、ただ単に慎二が分かりやすいだけかもしれないが。

「なっ!? なんだよお前!? サーヴァントの分際で!？」

「アハハハハ！ 言われちゃまったなマスター。その嬢ちゃんもよく

言うねえ」

「お、お前もどつちの味方なんだよ！」

笑いながら慎二の隣に立つライダーに突っ込みを入れている慎二。「そりやアンタに決まっているさ。アタシはあんたの副官だからねえ。金額分はきっちり働くさ」

「さすがは提督さんだ。報酬分はきっちり働くってことか？」

翔が放った言葉に慎二は『はっ』とした表情でこちらを見つめている。それを聞いたライダーはなぜだか楽しそうにこちらに向きなおる。

「そのアンタ。アタシの名前を知ったのかい？」

「まあな、んじゃあここで真名当ての最終確認といこうか。慎二が必死になって隠した物と黄金の鹿号ゴールドデンハインドという単語。そして無敵艦隊、カルバリン砲……そしてこの無敵艦隊という言葉が彼、いや彼女にとつて敵側のあだ名だとしたら……？」

「だとしたら……？」

ライダーが楽しそうに聞き返す。一方、慎二の方がわなわなと震えているのがわかる。では、最後の一押しだ。

「太陽の沈まぬ王国』を歴史の盟主から引き摺り下ろした……太陽を落とした男。違う、太陽を落とした女。その真名なは『フランシス・ドレイク』！」

肩を震わせて聞いていた彼女は、その名前を聞いた瞬間、豪快に笑いだした。一方で慎二は青ざめた表情だ。ぴったりどんぴしゃ、翔の言った名前は慎二のサーヴァントの真名なのだから……

「な、何笑っているんだよ!？」

「ハハハハハ！ いいじゃないかシンジ。お宝情報なんて倒して奪い返しちまえばチャラになるってやつさ！」

あのライダーは真名が分かったところで気にしている様子はないらしい。ああ言えばこういう慎二の言う事を聞き流しながら豪快に彼の頭を撫でていた。

……本当にあのコンビは相性がいいと翔は感じる。

ようやくエレベーターが止まる。その背後には決戦場へ続く扉。

「まあいいさ、寿々科翔。お前は僕のエル・ドラゴのカルバリン砲の餌食になって後悔することだね！」

そう言い残し、慎二は歩いていく。

こちらも行くしかない。翔とリップはお互いを見つめ頷き、扉へと歩いて行った。

決戦場は海底のようなフィールドであった。見渡せば沈んだ船の残骸が見える。

その残骸はもう引き上げられることはない。ただ海底に沈み、歴史から忘れ去られ、今や魚の住処になっているような船。

しかしその甲板のような場所は広い。リップが両腕広げて暴れても申し分ない広きである。

「ただ勝つだけじゃだめだライダー。生きているのが耐えられないくらい赤っ恥をかかせてやれ！」

「おや？ 勝つだけじゃなく恥までかかせるん？ 強欲だねえシンジ。いいよ、ロープの準備をしておこう。マストに吊り下げるなり好きにするといいさ」

ライダーは二丁の拳銃を取りだし構える。

リップもまた、巨大な腕を構え、決戦の準備をする。

そして……

「さあ、こいつは大詰め、正念場つてやつだ！ 破産する覚悟はいいかい？」

「あなたの船、まるごと潰してあげます！」

——死にたくなければ剣を取れ Sword, or Death

空気を斬る音が開戦を告げた。

第7話 黄金鹿と嵐の夜（ゴールデン・ワイルドハン ト）

戦いはここに始まった。

翔はいつでもコードキャストが発動できるように身構え、ライダーの動きを見ていた。

彼女の得意武器はあの拳銃。リップから距離を取られれば、圧倒的にライダーの独壇場となるだろう。

ライダーから放たれる銃弾をその爪で防ぎながら、横薙ぎに振りかぶる。

だが、その攻撃はいとも簡単にライダーに躲かれてしまう。さすがはライダー、海賊だけであってその身のこなしがとても軽い。

これではリップの攻撃はまず当たらないだろう。ましてやこれが3度目の戦いなのだ。

ライダーからすれば、見慣れているリップの攻撃は回避できて当然なのだろう。

「くっ！」

ともなれば、自分のコードキャストとの連携を使えば、多少の突破は可能になるかもしれない。

後退し、マスターの隣に立つライダーとリップ。翔はリップに指示を伝える。

「わかりました。ですけど今は試したいことがあるんです。翔さん、私が出たと同時に筋力強化のコードキャストの使用を頼みます」

彼の指示の前に一度試したいことがあるというリップ。ひとまずはあのライダーに僅かでも、隙を作らせないといけない。

彼女がこのタイミングでそのようなことを言うのなら、何か考えがあるのだろう。リップの言葉に翔は頷く。

「わかった。やってみる」

そしてそのまま前に勢いよく出るリップとライダー。翔は右手をかざし、リップへコードキャストを放つ準備をする。

もしかしたらこちらが優位にたてるかもしれない、そう信じて自身に魔力を通す。

『g a i n | s t r (3 2) : !』
「やあー！」

翔が使ったのはサーヴアントの筋力強化のコードキャストだ。

その恩恵を受けたリップが右手で拳を作り、ライダーへと構えると、その巨大な右手が勢いよく身体を離れ、ライダーに目掛けて飛んで行く。

その光景に翔は驚きの声を上げる。あれは間違いなくロケットパンチだ。

彼女の腕には、そのような機構もあったのかと驚くが、感心している場合ではない。

だが、向こうも翔と同じ反応のようだ。あの巨大な金の腕が飛んでくる光景を想像するなどあまり出来ないことだ。

その腕から回避するライダーだが、その腕に一瞬でも注意を向けられたのをリップは見逃さない。

『g a i n | a g i (3 2) : !』

その隙を逃さず、リップへ敏捷強化のコードキャストを使い、弾丸の如き速度の移動を手に入れるリップ。

その速度でライダーの懐へ入り、左腕をライダーに振るうリップ。刹那、金属が交わる音と共にライダーの、右手の銃が宙を舞う。彼女の一撃はライダーにこそ直撃はしなかったが、武装を一つ弾き飛ばすことができた。

そのまま流れるように左腕で一撃を放つリップだが……

「甘いねえー！」

ライダーが即座に右手に湾曲した刀を振り抜き、その爪を受け流すように応戦。金属がこすれる音と共にライダーはその一撃を回避する。

あれは、間違いない、切ることを重視した湾曲した刃を持つ剣『カトラス』。やはり持っていたかと翔は歯を食いしばる。

まともに打ち合えば、あのカトラスは粉々に砕け散るだろう。それ

だけリップの爪とライダーのカトラスは武器の性能そのものに大きな違いがある。

だがそれは、まともに打ち合えば……の話。正面から打ち合う事が出来ないのならば受け流す。それならば、カトラスが砕かれずにリップの爪を逸らすくらいはできる。

「アタシにこれを抜かせるなんてねえ。こいつは高くつくよ?」

そして左手の拳銃からの、すぐの発砲。最早構え無しの早撃ち技。弾丸がリップの頭を貫かんと迫る。あの技を難なくできるあたりはさすがは英霊。

自分たちは勝つためにここに来たのだ。この攻撃を止めて回避するしかない。

敏捷強化が残ったりリップはその攻撃を回避する。

ライダーから距離を離れたと同時に、飛んでいった右手が戻り、再びリップに装着される。

リップが追い詰め、ライダーが追い詰める戦いはまだ続く……

「少しはやるじゃないか。正直に言うと、お前がここまでできるなんて僕は知らなかったよ」

リップとライダーが戦っている頃、こつちではマスター同士の戦闘が始まっていた。リップに敏捷強化をかけた直後に、慎二から翔に目掛けて衝撃弾のコードキャストを放ったのだ。

実力では明らかに慎二の方が上だ。自分が回避しながら攻撃しても傷を受けているのは翔だけなのだから……

「だから思い知らせてあげるよ! 天才たる僕と君の実力の差をさあ!!」

コンソールのようなものを叩き、何かのプログラムを作動させる慎二。なにをした……

それと同時に感じる別の気配。どこから襲われてもいいように身構える翔。そして起きた光景に翔は目を見開く。

地面から現れるのは骨のみで構成された骸骨の騎士。そのどれも

が手には剣を持っており、その全てが翔に向いている。

「しかもただの骸骨じゃないぞ翔！ こいつらは竜牙兵だ！」

竜牙兵。大地に撒かれた竜の牙より生み出されたという伝説をもつ兵士という事。

人間ならば容易く殺せるという実力を持つ存在だ。そんなものが一斉に襲い掛かったものならば、翔では太刀打ちできない。

だが、やらなければならない。竜牙兵は既に翔を取り囲んでおり、逃げ場は一切なくなっている。

リップの助けは……翔はリップを見る。彼女はライダーと戦闘。翔を助けに入ればたちまちライダーの弾丸がリップを貫くだろう。

一体の竜牙兵が翔に襲い掛かる。右手を竜牙兵に向け、コードキャストを発動する準備に入る。

「shock (32)！」

今まで使っていたコードキャスト。その一撃を受けた竜牙兵は音を立てながら崩れ去る。

だがまだ一体、それを皮切りに竜牙兵が次々に翔へと襲い掛かる。

「move | speed ()！」

自身を移動速度を上昇させるコードキャスト。それによって翔はすぐさま今いるところを離れた。

その刹那、自分の居た場所に剣が振り下ろされる。あれは自分を容易く殺す一撃になる。離れた所で冷や汗をかく翔。

だが竜牙兵は一体だけではない。他の竜牙兵たちが次々に突きを翔へ向けて放ってくる。

その攻撃をかわしながら、その場所を離れる翔。移動速度が速くないだけまだ幸いというところか……

自身の弾丸のコードキャストで応戦しているがさすがにまずい。竜牙兵全てを自身のコードキャストで撃ち砕こうとするも……

「っ!？」

翔がコードキャストを使用しすぎた反応なのだろう。一瞬だけその膝が力はあることなく地面へと着く。

歯を食いしばり、立ち上がろうとするも、身体は反応しない。

慎二にとっては絶好の攻撃チャンス。それを彼が見逃すはずがなかった。

右手を上へ挙げ竜牙兵に命令を下す慎二。

「終わりにしようじゃないか。一斉処理」

慎二の掛け声、そして右手を振り下ろすと共に一体の竜牙兵が翔の腹部へ剣を突き立てる。

鋭い痛みが走り、目を見開く翔。それに続いて数十体の竜牙兵が翔へ剣を突き立てた。

「翔さん!？」

「よそ見している場合か!」

「くっ!？」

リップがすぐさま、翔へ駆け寄ろうとするが、その進路をライダーによつて阻まれる。

あまりにも激しすぎる痛みのせいで貫かれた腹部を押さえ、両膝をつく翔。刺された部分からは鮮血が流れだし、周囲の地面を自身の鮮血で染め上げる。

腹部からこみあげる感覚を飲み込み、歯を食いしばる。

意識が薄れていく。だが倒れるわけにはいかない。必死に開けているその目で前を見つめる。その視界の向こうにいるのは慎二本人。

このまま目を閉じればきつと楽になるだろう。ここで諦めればきつと楽になるだろう。

「諦める……?」

いいのか、このまま終わっていいのか？

いいのか、このまま諦めていいのか？

いいのか、このまま彼女の、リップの思いを無駄にしているのか？

いいや、そんなの、そんなことなど……

「いいわけあるかよ……!」

ここで終わらない。ここで終わらせない。

無意識に虚空に手を伸ばし、その先にある何かを掴み、コードキヤストをそれに流し込めば直後、突風が巻き起こり、翔を突き刺していた竜牙兵が吹き飛ばされ、周囲の竜牙兵も吹き飛ばされる。

その突風は最早、暴風の域であった。ライダーこそには効果は薄いかも知れないが、竜牙兵全てを吹き飛ばすには十分すぎる暴風であった。

地面に勢いよく叩きつけられ、消滅する竜牙兵。

その光景、そして翔が手に持つその剣を見れば慎二は驚愕した表情を浮かべるのみであった。

「な、なんで生きているんだよ。それにその剣……まるで、お前がサーヴァントみたいじゃないか」

慎二は即座にその剣の名前を思い出す。その剣を知らぬものなど誰もいない。

人ではなく星に鍛えられた神造兵装。人々の「こうあって欲しい」という願いが地上に蓄えられ、星の内部で精製された正に『最強の幻想』ラストファンタズム。

聖剣というカテゴリーの中で頂点に位置し常に『最強』とも言われている剣。

その剣の名前は……

——『約束されし勝利の剣』

何故翔がこれを持っているのかはわからない。だがその魔力を感じたライダーは、素早く距離を取り慎二の隣へと立つ。

「いやあ、あれはシャレにならない代物だよシンジ。こうなりや、アレ使って決めるしかないかもねえ」

「く……仕方ない。さすがにアレをくらえば生き残れないだろうしな」

慎二とライダーが一区切り言葉を交わすと、慎二はすつと右手を前へ掲げる。

その直後から感じる、魔力の違和感によって翔とリップは、彼らが自分達にとつての『とつておき』を使うことがわかった。

「ライダー！ 宝具解放！ 加減はなした！」

「あいよ！ ここが命の張りどころってね！ ヤロウども、時間だよ！」

ライダーが高く飛び上がった瞬間、彼女の足元から巨大な海賊船が

現れる。

そして船首にはライダー自身、その出現に伴い、大量に現れる海賊船の群れ、それらすべてが彼女の宝具であった。

あれこそライダーの宝具『黄金鹿と嵐の夜』。

ドレイクの生前の愛船である主船『黄金の鹿号』を中心に、生前指揮していた無数の小舟の船団を亡霊として召喚し展開する、ドレイクの奥の手にして日常の具現とも言える宝具。

「嵐の王、亡霊の群れ、ワイルドハントの始まりだ!!」

火船を含めた、前方の海域すべてを蹂躪する面での攻撃。それら全てがリップを仕留めようと迫ってくる。

まさに、リップと翔だけを倒す必殺の攻撃。

防壁のコードキャストを使って防ぐのもいい。だが今の翔では防ぎきる前に防壁が砕かれ、彼の体に風穴が開く未来しか見えない。

ともなれば翔に出来ることは一つだけ。なぜ持っているかわからないこの剣。この剣の力を借りるまでだ。

「約束されし……勝利の剣!!」

リップを信じ、自分はその剣を振るう。振り上げられた剣から黄金が炸裂する。星の光を集めしその一撃はまさに究極の斬撃。

だがしかしながらアーサー王の剣を持って、彼の戦術、記憶までは与えられず、そして魔力も提供されない。

なのでこの一撃を放てば翔自身が戦闘が困難になる。それでも彼はこの剣を放った。ただリップを信じて……

リップがそれに応えるかのように黄金の中に飛び込む。光と大量の砲弾がぶつかり合う。

翔自身も砲撃の嵐に飲まれてしまったかのように見える。艦隊の一斉射撃。

慎二からは炸裂される黄金と今でも続く砲撃により、リップも翔も、そして自身のサーヴァントであるライダーすらも見えなくなっていた。

だが慎二は確信していた。自身の持てる最高の攻撃を放つたのだ。完全に自分が勝つたと言ってもいい。

今にも笑い出しそうだ。しかし笑うのはまだ早い。まだ翔のサーヴァントが敗北した姿を見ていないのだ。

砲撃が止んだ。自分の目の前には勝ち誇ったライダーの姿が映るはず。慎二はそう信じていた。

——だが

「かはっ……アタシにも焼きが回ったか……」

慎二の目の前に写る光景は、膝をつき、必死に呼吸している翔。手に持っていたあの剣はいつの間になくなっていく。

あの翔を倒すのは造作もない事だろう。だがライダーの方を見れば驚愕の表情を浮かべる慎二。

彼が見た光景は、巨大な爪によって身体が貫通し、霊核たる部分を抉られたライダー。

リップが爪を引き抜けば、多量の鮮血を吹き出し、膝をつくライダー

「アタシに聞かせな……どうやってアタシの宝具を耐えた」

ライダーにとっては自分の胸を貫かれたことより、なぜ艦隊の一斉射撃を耐えきれたのが疑問で仕方なかったのだ。

「翔さんのおかげです。あの人の攻撃が私の通路を切り開いた。それであなたに近づくことが出来ました」

「はっ……弱いサーヴァント2騎じゃアタシの力もうまく使えなかったってことか……」

リップに迫る攻撃を翔の黄金が薙ぎ払った。そのおかげでリップはライダーに一撃を加えることができた。

ただそれだけだったのだ。マスターとの信頼がなければきつとそのような戦術など思いつくはずもない。

あまりにも自身が描いた結末とはかけ離れた光景。

慎二は叫び声を上げる。なぜ自分に勝利ではなく敗北がやってきたのだと。現実が彼を叩きつける。

「な、なんでだよ！　なんで僕のサーヴァントが負けるんだよ！　ど

う考えても僕の方が優れている！ 天才たるこの僕が！ 負けるわけにはいかないのに！」

自分の宝具を使い、それでも倒れなかったリップ。それがどうしてなのか理解できなかった。

負けたのはライダーのせいなのだ。そうであってほしいと思う慎二。決してこれは自分の慢心ではない。

「そうだ。全部お前のせいだぞ！ エル・ドラゴ！」

「うん？ ボロボロのアタシに鞭打つのかい？ さっすがアタシのマスターだ。筋がいい」

最早、喋るのがやつとなはずなのに、その身体で立ち上がり、慎二の近くへ寄るライダー。

その様子からかなり無理をしていることがわかるのに、なお彼に喋ろうとするのは信頼故なのだろうか……

「なっ……そんな憎まれ口叩けるなら戦えよライダー！ 僕が、違う……僕たちが負けるわけないだろう！」

「あー、そりゃ無理。アタシ、心臓撃ち抜かれたし、そろそろこの身体、消えるっばいし」

負けたサーヴァントとマスターは消滅する。実感がわからない翔であつたが、改めてここで敗者の結末を付き付けられることになる。

慎二が翔たちに向き直り、彼らを掴むように必死に手を伸ばす。

「そ、そうだ！ お前に話があるんだ！ 僕に勝ちを譲らないか！ そうすれば——」

そこまで言いかけた時だつた。まるで前にリップたちを阻んだ障壁のようなものが横からスライドしながら現れ、慎二と翔を分け隔てる。

そして慎二の腕には黒いノイズのようなものが現れ、慎二の身体を侵食していった。

唾然とした慎二の表情が、直後に恐怖に染まる。彼の手が、足が、身体が、消えていこうとしている。彼のサーヴァントと共に……

「な、なんだよこれ!? 聞いてないぞこんなアウトの仕方!？」

慎二の背景全てが赤に染まっている。血に染まった地獄のような

世界。

そんな慎二をライダーはやれやれと言った表情で見つめている。「聖杯戦争で敗れたものは死ぬ。シンジ、アンタもマスターとして、それだけは聞いていたはずだよな」

「し、死ぬってそんなの。よくある脅しだろ!？」 電脳死なんて本当なわけ……」

そのような言葉を言うライダーも、黒いノイズに飲まれ、消滅しかけていた。

そんな現実が慎二を、助かる道はないという現実を付きつける。

「そりゃ死ぬだろ普通。戦争に負けるっていうのはそういうコトだ。だいたいなシンジ。ここに来た時点でお前ら全員死んでいるようなものだ。生きて帰れるのは本当に一人だけなんだよ」

慎二へと向けられたライダーの言葉、だが彼女の言った言葉はここにいる全ての人にも当てはまる事だ。

白亜にも、凜にも、そして、翔自身にも……勝者は一人、生存する者もまた一人。

「でもまあ、善人も悪党も最後にはみーんな、あの世行きだぜ？ 別段、文句を言うようなコトじゃないだろ？」

『だがねえ』と言葉をつづけるライダー。

「一番初めに契約したときに言っただろう、坊や。”覚悟しておけよ？ 勝とうが負けようが、悪党の最期っていうのは笑っちゃまうほどみじめなもんだ”ってねえ！」

心から愉快そうに笑うライダー。悪党の最期、翔はフランシスドレイクの最期の伝承を思い出す。

世界の航海者は疫病により倒れた。その死の直前、錯乱してだがかどうかは分からない。だが病床で鎧を着ようとするなどの奇行が目立ったという伝承を……

黒いノイズがライダーの顔を覆い始め、その表情が分かることはない、そして顔半分までノイズが浸食され始めた時、翔たちに向き直るライダー。

「ともあれ、良い航海を。次があるならあの剣、アタシより強くなつて

いてくれよ？ アタシは本業は軍艦専門の海賊だからねえ。自分より弱い相手と戦うってというのはどうも駄目みたいらしいからねえ」

こうして女海賊は苦笑しながら、ノイズと共に光となった。人類初の生きたまま世界を一周した英雄『フランシス・ドレイク』。

世界の歴史を変えた星の開拓者は、消える直前まで楽しげに笑っていた。

その最期は、慎二の結末を、もう逃れることのできない運命を物語っていた。

「あ、あわわわ。翔、お前、友達だっただろ！ 助けてくれよなあ！ 僕はまだ8才なんだぞ！ こんなところでまだ死にたくない！」

仮初の友人に助けを求める。まさに他人から見れば滑稽な姿だっただろう。

そんな二人を分け隔てる障壁を立ち上った翔は触れる。

この壁は強固だ。きつとりップの力を以ってしてもこじ開けることはできないであろう。だが仮初とはいえど、翔にとっては彼、慎二は、数少ない友人であった。

きつと最初は自分を手駒にする予定だったのかもしれない。でも存在が薄いから友達になってやると声を掛けたのも彼だった。

自分という人間を認めてくれた存在であった。

そんな慎二が……この世から消える……

「……すまねえ慎二」

俯いた彼からは表情が読み取れない。だが彼の顔から一粒の滴が落ちたのは分かった。

例え仮初でも、記憶がいまだに戻らない翔にとっては数少ない友人であった。

そんな彼を助けることができない。

そして……

——消えた。

間桐慎二という人間。その存在も、その魂も……

何も痕跡を残さずに、そして残ったのは、ただ一人の勝者のみ。

聖杯戦争の一回戦は、こうして終結した。

戦いは終わった。

自分が勝った、そして慎二は負けた。

その結果、慎二は死んだ。

すなわちそれは、慎二が死を迎えたということ。

それを目の前で見せつけられた。

命が一つ、永久に消え去った。何の説明も何の価値もないまま、何も知らない翔の手によって。

「一回戦、終わったみたいね」

エレベーターから出て、放心状態で窓から外を見ていたところ、遠坂凜がこちらを睨みつけていた。

「シンジはアンタと戦うって言っていたから、負けて死んだのはアイツのほうね。まあ命のやりとりなんて話、あのバカには未体験だっただろうけど、どう？ みつともない死に様だった？」

「てめえ……！ なにを……！」

明らかに死者を、慎二を馬鹿にしたセリフに反射的に言葉を出そうとするも、彼女の眼差しが翔の続く言葉を遮る。

戦場では負けたものがただ死ぬ。それだけの事なのだ。ライダーも言っていたではないか。

誰もそんなことなどわかっている。わかっただけで当然なのだ。分かっている。慎二や翔がただ異常なのだ。

言い返せない自分に腹が立つ。なにも知らない自分に腹が立つ。翔はただ拳を勢い良く握りしめ、歯を食いしばる。

「ここで勝利した一人は、手にした聖杯でどんな願いも叶えることができる」

だから、この場所に来た者達は、願いを、望みを、叶えたい願いがあると凜が続ける。

そして、そのために、命を奪う覚悟も、奪われる覚悟も持っている
と……

自分に、そんな覚悟があるのか。翔は自身に問い詰める。

そんな覚悟は……まだ自分には……

「まだその様子じゃ、記憶戻ってないみたいね。目的がないのはいいけど、覚悟ぐらいいは持つておきなさい。覚悟もなしに戦われるのは目障りなのよ。もし死ぬ覚悟も殺す覚悟もなければ世界の隅で縮こまっついていなさい」

「っ……」

彼女の言葉全てが言うとおりであった。

この場にいるものは皆、強い意志を持っている。

そんな相手の前に流される覚悟の自分が戦えばどうなるのか。

間違いなく自分は死ぬだろう。

流されるままに戦っついていては当然勝てないのだから……

自分にはまだ記憶がない。

自分には勝つ理由が存在しない。

そんな自分が彼らの、戦う相手の願いを踏みにじり、そして殺す。

そんな権利が自分にはあるのだろうか……

凜は何も言い返せない翔にため息をつき、その場を離れる。

そんな凜を、ただ翔は見つめている事しかできなかった。

第8話 2回戦開幕

目的のない旅

海図を忘れた航海

君の漂流の果てにあるものは
迷った末の無惨な餓死だ。

……だが

生に執着し、魚を口にし

星の巡りを覚え

名も知らぬ陸地を目指すのならば、あるいは
誰も始めは未熟な航海者にすぎない。
骨子もない思想では、聖杯には届かない。

2回戦、開幕。

残りのマスターも128人から64人へと半分になった。

昨日のうちに半分の命が失われた。

朝、翔は自室のベッドで目を覚ます。昨日の言葉がいまだに心に深く刺さってる。

慎二の死、そして投げつけられた凧の言葉、そのどちらも翔の心を混乱させるには十分すぎるほどであった。

凧の言葉は正しい、だが、それを受け止めきれないのが今の自分だ。
どちらかが死に、どちらかが生き残る聖杯戦争。

凧はそれを自覚し、この魔術大戦に参加している、この戦いにいるものは、みんな強い意志を持って、この戦場に来ている。

そんな相手を前に、成り行きなどで戦っているのは、絶対に勝てない。
自分はきつとどこかで死ぬ。

なにより、自分にはまだ戦う理由が存在しない。

そんな自分が、この戦場に立つ資格などあるのだろうか。

こんな自分が悔しい、戦う理由なんて見つけられない、こんな自分

がとても悔しい。

気付けば視界までぼんやりとしてくる。ここで泣くわけにはいかないのに……

戦わなければ生き残る事などできないのに、こんなところで泣いている自分が情けなく感じる。

そんな翔に声が掛かる。

「翔さん？ あんまり重く考えなくていいとおもいます」

「リップ？」

この声はリップの声か。なんてことだ。リップに泣いている自分を見られてしまっている。

こんな涙にぬれた自分なんかを見て愛想を尽かさないだろうか。そのようなことを考えている翔にリップは言葉を続ける。

「理由があるから強いとか、覚悟があるから立派とか、私は変だと思っ
んです」

目の前にいる翔という人物には、まだ記憶がない。記憶がなくても、自分と共に戦っている。

それは立派な覚悟ではないのか。翔が予選で死にかけた時、彼は目を閉じることを選ばなかった。

そしてあの人物とサーヴァントに立ち向かう道を選んだ。

それもまた覚悟がないとできないことだ。

「ですから翔さんは、戦う事が出来ると思います。それはこれからもずっとです。だからくじけないで下さい！」

覚悟や理由など今はどうでもいい。『死にたくない』ということも立派な覚悟だと思ったりリップは言っているのか……？

それをリップに問えば、彼女は勢いよく頷いた。

「そうです！ 『死にたくない』のも立派な覚悟です！ それに、負けたら死んじゃうんです。私、翔さんには消えて欲しくないんです！」

その言葉でそうかと翔は納得する。

覚悟が持てなくても、前に進むしかない。

もし死んでしまったら、それはリップの思いを無駄にするという事だ。

自分は、一人のマスターを倒した。
つまり、自分は勝ち残ったという事。

どうであれ、ここで立ち止まることは許されない。自分は前に進む
しかないのだ。

「ありがとうリップ」

「抱きしめることはできませんけど、元気出してください！」

リップのその言葉に翔が微笑んでみると、ポケットの携帯端末から
音が鳴り響く。となると自分が次に対戦する相手が決まったらしい。

『2階掲示板にて次の対戦者を発表する』

やはりメッセージにはこう書かれてあった。ならば確認するしか
ない。

翔がマイルームから出て、その掲示板に向かえば、再び紙が張り出
されていた。

1つは自分の名前、もう一つは……

マスター：ダン・ブラックモア

決戦場　：二の月想海

「ふむ、君か、次の相手は」

いつの間にか隣に立っていた老人が翔に声を掛ける。

髭も髪も、混じり気もない白。身体、顔には刻まれた老いの印であ
る皺が刻まれている。

しかし、この老人からは衰えらしきものは微塵にも感じられなかつ
た。

その強さ、長い年月に相応した風格は、まるで深く、長い年月を重
ねた大樹のように……

この老人、間違いなく強い。

こんな自分が……この人物に勝てるのだろうか……

「……迷っているなその目は。案山子以前だ。そのような状態で戦場
に赴くとは……決戦日、君の迷いが晴れていることを祈っている」

彼はこちらを見ては残念そうに見ており、そして立ち去っていく。

今の自分の心情すらも見抜くあの目は、歴戦の強者を思わせるかの
ようであった。

あんな相手で勝てるのだろうか、だが負けるのなら、今度は自分が死ぬ。

「……見抜かれちゃいましたね翔さん。でも大丈夫です。励ましになるかはわからないですけど、私は翔さんを信じてますから！」

「はは、ありがとなりリップ」

戦って勝つ。それはわかっている。そうでなければ自分は死ぬのだから……

だがそれは相手の命を奪うという事、その理由が自分の中には無い。

今の自分は、気がつけば迷っている状態だ。

本当は今すぐにでも、この迷いを捨てたい。そうすれば思い悩むはずもないのだから……

リップも自分の言葉に頷いていたではないか。『死にたくない』というのも立派な覚悟だと。

こんな自分にリップはついて来てくれる。ならば彼女の思いを無駄にはしたくない。

この聖杯戦争に参加した以上。自分は立ち止まることは許されない。

「あら、翔くんじゃない。こんなところで会うなんて奇遇だねー」

校庭に出て、歩いていけば、見慣れた女性に声を掛けられる。

あの姿は志波白亜だ。物覚えが悪い翔だって、同じ顔を見続ければ名前と顔は一致する。

笑顔で手を振る白亜に対して、翔もまた手を上げる。

「よお志波。おはよう」

「おはよう翔くん。それにしても君の対戦相手を聞いたよー？ 現役じゃあないけどダン・ブラックモアは名のある軍人さんらしいよ？」

西欧財閥の一角を担うある王国の狙撃手だったってさ」

対峙しただけでわかったあの重圧感。翔ですらこの人物は強いと思わせた人物。

今考えてみれば、あれは修羅場をくぐり抜けてきた目だ。まさに強者と言ってもいいほどの……

しかし、まさか本当に軍人だったとは、彼はどのような事をしていたのだろうか。

気になった翔は白亜に聞いてみる。

「うーん、私も記録でしかわからないけどさ。匍匐前進で1キロ以上進んで敵の司令官を撃破したりとか並の精神力ではないことは確かだね」

匍匐前進で1キロ、それは普通の人間にはどう考えてもできないことだ。

そして西欧財閥、確かレオが次期盟主とか言われているところだったような……

「まあ、とにかく気をつけなきゃいけない相手ってこと。宝具があっても、狙撃とかで死んじゃったら死にきれないしね」

「宝具……？ 慎二とライダーが使っていたアレか……？」

「いやいや、私に聞かれても困るんだけどさ。なんでそんな顔してるの？ 宝具だよ？ 宝具。アーサー王ならエクスカリバーとかそんな感じにサーヴァントをサーヴァント足らしめる絶対的な力だよ？」

エクスカリバーなら自分が使ったからよくわかる。あの威力は尋常ではないぐらいに強い。だがサーヴァントをサーヴァント足らしめるとはどういう事なのだろうか。

問い詰めてみれば、白亜はポカンとした表情でこちらを見つめていた。

「え、もしかして、君がエクスカリバー使ったの？」

「ああ、そうなるな」

白亜は『ほほう』といった感じで翔を見つめる。あの時のライダーとの戦いは、自分のエクスカリバーでライダーの宝具の突破口を作り、そしてリップが隙についてライダーを倒したのだ。

しかし、それはほかの人から見れば驚愕の事実らしい。現に白亜は興味関心に翔を見続けている。

「……少し君の事、気に入ったかも。まあまあ同じ存在同士、仲良く行

くとしましようよ!」

「あ、ああ……よろしくな」

そういってヒラヒラと手を振って、ふらりと消える白亜。

彼女の同じ存在という言葉が少し引つかかったが、それはきつと聖杯戦争の参加者という意味であるだろう。

ダン・ブラックモア。軍人であり、白亜の言っていた精神力の持ち主であるならば情報収集もきつちりと手を付けなければならぬ。

それを怠れば、間違いなく自分は敗北するのだから……

白亜と別れ、そろそろアリーナへ向かおうかと考えていた時、見慣れない姿の子がこちらに向かって歩いて来る。

その姿は、褐色の肌色をしている、紫色の髪、そしてその髪と同じ色をした瞳に、胸元が大きく開いた白い服に身を包んでいる少女。

あの少女は誰だろうか、少なくとも今までに翔は会ったことがない。そして翔の前まで来たかと思うと『ごきげんよう』と言い、ペコリとお辞儀をする少女。

「私はラニ。警戒しないで下さい。私はあなたの対戦者ではないです」

機械的な表情が印象的な少女だが、こうやって言葉を聞けば、済んだ鈴のような声に感情が少し乗ったことで彼女が同じ人であることに安堵する翔。

しかし、あちらのラニという少女はこちらを知っているような雰囲気を感じる。なぜだろうか……

「あなたの照らす星を見ていました。他のマスター達も同様に詠んでいたのですが、あなただけが、霧に隠れた存在。どうか教えてください。あなたはなんなのですか?」

星を見た。けど自分の星は霧に隠れた存在。この少女が言っている事、他の人から見れば何のことだろうと思うだろう。

だが翔にはなんとなくだが、その意味が分かった。これはきつと過去の事を差しているのだろう。

未だに記憶が戻らない自分、そう考えれば納得はいく。だがそれは自分が一番知りたいことなのだが……

「正体を隠すのですか？ ブラックモアの前ではあんなに無防備だったのに」

「なっ……」

見られていた。咄嗟に後ずさりしてしまう翔。

あの場には自分と相手しかいなかったはず、翔が不審に思ったのをラニは気付いたのだろう。それに気付いたのかラニは言葉が続ける。

「警戒しないで下さい。私はあなたの対戦者ではないのですから……星が語るのです。あなたの事を、私はただ、それを伝えただけ」

星を詠むといえ、占星術辺りが候補に挙がる。となると彼女はそれらを習得した魔術師……ということだろうか。

ただ一つ分かる事と言えば、彼女からは敵意は感じられない、ということだ。

「師は言いました。人形である私に命を入れるものがあるのか見よと。ですので協力を要請します」

蔵書アトラスの巨人の最後の末として、私はそれを示したいとラニは言葉が続ける。彼女がなにかを知りたいという意味はわかった。

だが協力と言っても、何をすればいいのだろうか、ラニにそれを訪ねることにする。

「彼の遺物を見つける事が出来たら、私のところに持ってきてください。星の巡りがいい晩に詠む事が出来るでしょう」

彼女は星を詠むことができる。そしてブラックモアと会っていることを考えれば彼女に隠し事は通じないだろう。だが必要以上にこちらの情報を開示しなければいい協力関係になれるかもしれない。

「わかった。気が向けば持っていくさ」

「わかりました。それでは……」

背後を向き、歩き出すラニ。不思議な少女ではあった。だが少なくとも翔は敵意は感じなかった。

もし本当にダンの情報が分かれば彼女に協力するのもありだ。少なくとも彼らに關係する何かを見つければ、翔は持っていくつもり

ではあった。

そして、彼らの様子をそつと木の上で見ている男が一人いた。

その姿は緑衣のマントに軽鎧に身を包んだ瘦躯の男。

「そんなに隙だらけだと、誰かに狙われちまうぜ？　回りくどい手はナシ、このとおり真つ直ぐ勝負を決めに行く。オレは嘘は言つてないぜ？」

その男が短弓を構えば一人の人物に狙いを定めた。彼の狙いの標準は寿々科翔ただ一人。

「二丁上がりだな。これで」

そのまま放たれた弓は、翔の頭へまっすぐに向う。風を切る音が一瞬、校庭を響く。

その瞬間、翔の前に霊体化を解除したリップが飛び出て、翔に向かう矢を自身の腕で弾く。

狙った矢は、リップによって防がれた……だが。

「おーうまいことうまいこと、だが矢が一つだけだと思つたかい？」
「なっ!？」

リップが背後を見れば、腕を押さえて、膝をついている翔が目に見えた。

彼の抑えているところを良く見れば、僅かな傷が刻まれているのが分かる。

苦痛と吐き気を堪える翔。そして襲い掛かる苦痛。

このまま時間が立てば翔の身体は蝕まれ、立つことすらできなくなるだろう。

リップは奇襲には対応することはできた。だが隠されたもう一本の矢は気付くことが出来なかったのだ。

二つ矢、これほど正確な射撃を可能とする英霊など……敵はアーチャーで間違いないだろう。

この情報をなんとしてでも生かす、リップの思いを無駄にしたくない。その意思だけで翔はその場から離れようとする。

「掠り傷でも十分なのさ。そのうち呼吸もできなくなる」
「ぐっ……」

込み上げてくる何かを堪え、震える足を無理矢理立たせる。

まだ歩けるのだ。指も震える。校舎の中に逃げ込めば何とかなるだろう。

意識を手放せと脳が告げてくる。そうすれば確かに楽にはなる。

だが……

それを受け入れたら駄目だ。リップは自分に消えて欲しくないと言った。ならばそれに応えてあげたい。

だから歩き続ける。生きるために。

アーチャーから受けた毒は既に体の自由を奪い、なんとか意識を保つだけで精一杯だった。

僅かでも足が動くうちに、保健室に……

少し耳を傾ければ、弓を弾く音が聞こえる。リップがアーチャーから、翔を守っているのだろう。

「ヤロウ……たどり着きやがった。こりやちよいと予想外だ。あの体で動けるとはあ、考えてもいなかったな。いやあ、まいったまいった」
アーチャーが何かを言っているが、翔の耳には入ってくることはなかった。ただそう言って校舎に入る翔たちを見つめるアーチャー。

彼は確信している。校舎内に入ってマスターが死んだとは到底思えない。

間違いなくあのマスターは生きているだろう。毒をくらってもなお歩き続け、校舎に入って見せた精神力。それを見ていれば、彼が毒で簡単にはくたばらないだろうと思ったのだ。

「ここで仕留められたらよかつたんだけどねえ……いやいや全く面倒なもんだぜ。こりや帰ったら叱責確定だなこりや。奇襲バレてるだろうし」

面倒くさそうにアーチャーはため息をつき、帰路に付く。

帰路に付いている最中、アーチャーは思った。あの対戦相手の翔の事だ。

彼は間違いなく強敵だろう。正直、毒をくらってもなお生き延びるのはアーチャーにとっては想定外の出来事であった。

あの精神力、下手すれば自身のマスターでもあるダン・ブラックモ

アといい勝負をするのではないかと……

この先間違いないで起こるであろう出来事に、やれやれといった雰囲気
気で首を傾げれば帰路に付くアーチャーであった。

第9話 イチイの毒

ぼんやりとした意識が徐々に覚醒していく……

白い天井がはつきりと見えたところに体を起こす翔。

そういえばと、自分の記憶をたどる。確か保健室まで走り、扉を開けたと同時に倒れた所までは覚えている。

そして自分がここにいるということは、桜がここまで運んでくれたのだろうか。申し訳ない事をしたなと思う。だかこちらとて必死だったのだ。保健室ではなく、違う場所で倒れていたら間違いなく自分の聖杯戦争はそこで終わっていただろう。

しかし……身体を見つめる翔。全身から倦怠感が抜けない。間違いなくあのアーチャーから毒を貰ったせいだろう。

「あ、目を覚ましたんですね。突然、扉が開いてあなたが倒れてきたからびつくりしましたよ」

カーテンが空き、桜が入ってくる。自身の魔力を辿ればリップもまた近くにいるようだ。

彼女がいるであろう場所に『大丈夫』とアイコンタクトをしてから桜の診断結果を聞く。

桜からの診断結果は、自分が受けた毒が、イチイの木の毒だということであった。だが自然界から抽出された毒としては随分と凶悪なものらしかった。

そのような強力な毒を受けていたとは……良くここまで歩いてくれたなと苦笑する翔。

「とりあえず私の権限ちからで解毒できるところまではやりましたけど、体の具合とかはどうですか？」

「ありがとう、それのおかげだな。随分と体は動くぜ？」
まだ全身の倦怠感は一気になるが、体は動くのだ。なら問題はないだろう。

こうやって彼女の治療を受けたのはムーンセルのルールによって決闘以外の私闘が禁じられているからであろう。

この場を借りて少し休むとしよう。そうすれば万全な状態まで回

復できるはずだ。

翔が休もうと思った時、保健室の扉が開かれ、予想外の来客を告げた。

その人物は真っ直ぐに翔の元へ向かう。

「なっ……お前……」

その人物は髭も髪も、混じり気もない白。身体、顔には刻まれた老いの印である皺が刻まれている。

そしてそこから衰えらしきものは微塵にも感じられない人物、それは紛れもないダン・ブラックモアであった。

「っー」

霊体化を解いたリップが翔とダンの間に割り込む。その表情は陰しく、翔に手を上げるようなことを少しでもすれば、たちまちその腕がダンに襲い掛かるだろう。良く見ればダンの後方にはあのアーチャーも霊体化を解いていた。

予想外すぎる敵マスターとサーヴァントの来訪。翔もいち早く体を動かそうとするが、力が入らない。

だがダン本人は、リップの行動を見るなり、静かに両手を上げる。

あの行動は、交戦する意思はないという事なのだろうか……

しかし彼は軍人だ。警戒する必要があるだろうが……だが、あちらから交戦する意思はないというのを示すならば、今自分が持っている警戒心を少しばかり解いてもいいかもしれない。

「リップ、警戒を解いてくれ。彼らには戦う意思がないみたいだ」

翔の言う事を聞き、口を膨らませながら、間を開ける。

そしてダンがゆっくりと口を開けるが、その言葉の内容は翔とリップが予想していたものを大きく裏切っていた。

「イチイの矢の元になった宝具を破却した。宝具が消滅した時点でイチイの毒は消え去るだろう」

身勝手な言い分だが、これを謝罪としてほしい。そう言い、静かにあげていた両手を降ろすダンだが、そんな彼の言葉に翔は目を見開く。彼は今なんと言った……？

宝具を封じた、自分の耳が正常であればダンはそのような事を言っ

たのだ。

「これは国と国の戦いではない。人と人の戦いだ。畜生に落ちる必要はもうないのだ。だが……失望したぞアーチャー。許可なく校内で仕掛けたばかりか、毒矢まで用いるとはな」

確固たる信念に基づいた何かを感じる。老騎士の双眸。

ダンは目を閉じ、手をアーチャーの前に出せば言葉を紡ぐ。

あれは令呪を使うのか。倦怠感が拭えない体を身構えながら翔はダンを見つめ続ける。

「アーチャーよ、汝がマスター、ダン・ブラックモアが令呪を以って命ずる。学園サイドでの『祈りの弓』による攻撃を永久に禁ずる」

「はあ!? おいおい!」

「な……!」

翔も、そしてアーチャーも驚愕するがダンの右手の甲から赤い光が輝き、そして消えた。

想定外の出来事に翔は驚愕していた。サーヴァントの宝具を学園サイドという限定的な場所ではあるが封じたのだ。

アーチャーが驚きの表情を浮かべながらダンに詰め寄る。

「ダンナ、正気かよおい! 負けられない戦いじゃなかったのか!」

「無論だ。わしは自身に懸けて負けられぬし当然のように勝つ。その覚悟だ」

『だが……』と言葉を続けるダン。

「アーチャーよ。貴君にまでそれを強制するつもりはない。わしの戦いとお前の戦いは別のものだ」

ダンにとつて負けられない戦いでも、アーチャーにとつてはそうではない。何をしても勝てとはだれも言わない。あの老騎士はそのようなことを言っているのだ。

その言葉に納得のいかない表情をしながらも、アーチャーはその場から姿を消した。

あの輝きは命令が行使されたという事。

令呪、この聖杯戦争の本戦参加者に与えられた。3つの絶対命令行使権利。

今でも納得はできないが、ダンはそれを使ったのだ。

アーチャーに『正々堂々と戦え』と。

敵の目の前で自分たちの行動を阻害する行為。そして敵の宝具名まで明かされた。

今の情報はこちら側が優位に立てる行為であることは確かであった。

「……サーヴァントが無礼な真似をした。君とは決戦場で正面から雌雄を決するつもりだ」

そう言い残すとダンは踵を返し立ち去って行った。

翔がダンの行動に呆然としているとなにやら呻き声が聞こえる。

その声の発生源はリップのようであった。彼女が隣で何やら呻いている。彼女がこんな表情をするのは珍しい。

『どうした?』と、リップに声をかける翔。

「あのアーチャーって人、なんか見覚えがあるようなないような……すいません。なんか記憶がぼんやりしているみたいで……」

首を傾げる翔にリップが説明を入れる。どうやらリップは一度、あのアーチャーという人物に会ったような気がしているのだが、どうもその部分の記憶がぼんやりとしていて、確実に会ったという記憶がないみたいだ。

でも、あのアーチャーを見ていると嫌な気持ちにもなるらしい。

過去に彼と何かあったのだろうか。どちらにせよ、今のリップではどうやら分からないみたいだ。

付き添ってくれた桜にお礼を言い、保健室を出て校内を歩いている翔。彼が向かう先は図書館。ダンが言っていた祈りの弓イイ・バウについてさらなる情報を得ようと思ったからだ。

「確か、イチイは北欧とかケルトだと聖なる樹木の種類だったな……」
自分の記憶を頼りに、北欧神話の棚を調べてみれば、そこに祈りの弓について書かれた書物を見つけ出す。

祈りの弓とは、イチイの樹によって作られた短弓。イチイはケルトや北欧では聖なる樹木の種類でありこれを素材とすることで「この森と一体になる」……という儀式を意味している物らしい。

よくわからないが、ドルイドのようなものなのだろうか。

これだけではまだ真名にはたどり着かない。

「森の狩人ってところか、そうなれば確かに二つ矢とかできるのも納得はいくな」

ともかくあのアーチャーは森に関係していることが少しわかった。

今は、これぐらいの情報を入手できたことに感謝をしよう。

アリーナでの奇襲は考えられるが、暗号鍵^{トリガー}を入手しなければ始まらない。

リップと翔はアリーナへと向かう事にした。

「いまだリップ！」

「やあ!!」

翔の指示により放たれたリップの一撃がスタンしているエネミーを叩き潰し消滅させる。

暗号鍵^{トリガー}はアリーナを探索して入手することはできた。なので二人は今、エネミーと戦い、自分たちの戦い方を見直している最中だった。

慎二の戦いの時は突然、手にした『約束^{エクス}されし勝利^{カス}の剣^{リバー}』で勝機を掴む事が出来たのだ。もしあの剣がなかったら自分たちはあそこで負けていただろう。

だからこそもっとエネミーと戦い力をつけなければならない。次の戦いは老兵であるダン・ブラックモア。間違いなく生半可な戦いは通用しない。

エネミーの強さも変わってきている。気を抜けばエネミーに自分たちがやられるだろう。

「そういえば……翔さん、ラニさんの所に持って行く遺物……でし たっけ？ これならどうでしょうか」

エネミーを倒し、一段落ついたころ、キューブ状にされたデータを腕の上で展開させるリップ。

見ればそれは折れた矢のようなものが腕の上にあるのが確認できる。これは間違いなく、校庭で襲撃してきたアーチャーの矢だろう。

どうやら真つ二つにした矢をリップが回収していたみたいだ。確かにこれを見せればあのアーチャーの何かが分かるかもしれない。「それならなにかわかるかもしれない。ラニに会うときにそれを見せようか」

翔の言葉に頷くりっ。これで敵の真名にたどり着けばいいのだが……

アーチャー、そして敵の宝具名である『イー・バウ祈りの弓』。これもまた重要な情報だがまだ真名にはあと足りない欠片がある。

ラニにあの矢を見せることで最後の手掛かりをつかめればいいのだが……

何の気があったわけでもない。むしろここにこんなものがあつたのかとさえ驚いてしまっているほどだ。

この辺りは今まで、歩いていかなかったから分からなかったが、改めて思い直すと自分の探索範囲が限りなく狭かったと感じてしまうほどにだ。

あのアリーナの戦闘から数日後、翔は昼に教会に訪れていた。だが何か目的があつたわけではない。ただ何の気もなしに教会に訪れたのだ。

昼という事もあつてか、生徒も多いと思つてはいたのだが、ここには人の気配があまり感じられなかった。

教室の騒がしさから一転、まるで音が吸収されたみたいに静かだ。翔の耳を通り抜けるのは一筋の風の音のみ。

そんな中、誰かが翔を見つけ軽くお辞儀をしてくる。それは緑色の服に身を包んだ老人。ダンであった。

「昨日はすまなかつたな。あの傷が命に関わらなかつたことだけは不幸中の幸いとは思うが……」

ダンの謝罪。それに反応したのかりっプが姿を現し、ダンを見つめている。

「……やっぱり私、理解できません。どうして令呪まで使つたんです

か？」

「そうだな。自分でもどうかしていたと思っていたところだ」

3つしかない令呪をあるうことか、敵を利するために使ってしまうとはな、ダンはこう呟いた。

翔は左手に刻まれた自分の令呪を見つめる。

令呪、それは聖杯戦争参加者に与えられる3つの命令権。これはいわば物凄い魔力の塊と言ってもいい。

聖杯の可能範囲ならば、3回まで、絶対の実行力として行使される。万能の例外。

もし、もしだ。自分が令呪を知り合いとはいえ敵のために使用する場面があるとしたら……自分はどうなるだろうか。

迷うことなく助ける？

それとも……

いや、この考えは辞めた方がいいだろう。

少し経った頃だろうか、老騎士は静かに口を開く。

「だが、あの時はそれが自然に思えた」

そして続けて老騎士は口を開く。

「この戦いは、女王陛下からたつての願いという事もあったが、わたしにとっては久方ぶりの……いや、初めての個人的な戦いだ」

「個人的？」

リップが首をかしげながら老騎士に聞き返せば、彼は静かに首を縦に振る。

個人的な戦い。もし軍務であつたのなら、アーチャーの奇襲なども許すという事なのだろうか。

リップが、気になる疑問をダンに投げてみれば、それもまた老騎士は首を縦に振った。

「だがあいにくと今のわしは騎士でな。そう思った時、妻の影がよぎったのだよ。妻は、そんなわしを喜ぶかどうかとな」

「妻……ですか。でも、その感じですと大切にしていたのですね」

「老人の昔話だがね。今は声も顔も忘れてしまった。面影すら思い返す事が出来ない。それも当然の話だ。軍人として生き、軍規に徹し

た。そこに己ひととしての人生こうふくなど立ち入る余地はない」

ダンの言葉を聞く翔。今、この老騎士はどのような気持ちで戦っているのだろうか。

もしこの老騎士が妻の面影を思い返すとしたら、それはどの瞬間になるのだろうか。

それは翔にはわからない。老騎士のみぞそれを理解し知ることができるのだから。

「君も気をつけたまえ、結末は全て過程の産物にすぎない。後悔は轍に咲く花のようだ。歩いた軌跡にその実を結ばせる」

故に、だ。そう言い一拍おくとダンは言葉を続ける。

「少年。己に恥じない行為だけが後顧の憂いから自身を解放する鍵なのだよ」

それは誤りだったと感じた過程からは何も生み出すことはない。

自身の誇れる道程の先にこそ、聖杯を掴む道がある。

いや、聖杯だけではない。これからもきつとそれはある。

「……らしくない。つまらぬ話に付きあわせた。老人の独り言だと思ってくれ」

「いや、そうは思わないさ。ありがとう、ダン・ブラックモア」

翔がダンにお礼を言うと、心なしか彼の表情が少し和らいだように感じた。

そしてダンは翔たちに背を向けると、再び目をつぶった。

それは何かに対して祈りをささげている様だった。

誰に祈りをささげているのだろうか。信仰するものにか、それとも……

ともかく静かに祈りを捧げている彼を邪魔しては悪いだらう。

翔とリップは静かにそこを立ち去ることにした。

第10話 シャーウッドの森

「ごきげんよう、寿々科翔。協力に伝えてくれるのですね」

「ああ、今は少しでも情報が欲しいからな」

やはりここにいたか。予想は的中していたようだ。

翔は、前にラニに会ったところである、校庭へと来ていた。

彼女は人を知りたいと言っていた。だが、いいのだろうか。彼女がここにいるという事は、彼女もまた聖杯戦争の参加者の一人、つまりは翔ともいづれ

戦うかも知れないということ。

そんな自分にここまでしてくれることには違和感が残る。

「あなたが気にすることは何もありません。私にとつて師の言葉こそが道標なのですから、その師が言ったのです。人間ひとを知ることだと」

翔が答えるより先に機械的に答えたラニはリップから貰っていたアーチャーの矢と思わしき遺物を見ると、一言、二言呟き、そして頷いた。

「ラニ、これが星を詠む手がかりに？」

「……これならば」

ラニは翔から渡された物を柔らかな手つきで撫でると、目を閉じ空を仰いだ。

占星術、正直よくわからないものではあるが、今日が星を詠むのに適していて、ラニにはあのサーヴァントが見えている。

アーチャーの矢を手添え、空を見上げるラニは静かに語りだした。

深く深く暗い森。そこには荷台がひっそりとそびえ立っていた。

形からして、放置されていたわけではない。今まさに誰かが引いていたのだろうか。

荷台の上にある米や作物。その状態が放置されていたわけではないのを物語っていた。

だが今はそれを引く者は誰もいない。その者は地面に倒れていたのだから……

倒れている者の背中には矢が刺さっていた。

「盗賊め、毒を混ぜるとは卑怯な……」

膝をついていた兵士のような存在が口を開く。その兵士の命も僅かだろう。顔色は悪く、口からは鮮血を吐き出し出している。

その兵士の目の前に鋭利な鉄の刃がきらりと光る。

その姿は緑衣のマントに軽鎧に身を包んだ瘦躯の男。弓矢を構えているその男は、まさにその姿はダン・ブラックモアのサーヴァントであるアーチャーであった。

「何言っただ役人さん。これは村人が作った作物だぜ。生きるのに必要な分を返してもらっただけさ」

とてもとても暗い色。静寂の中に矢が放たれ、何かが倒れる音が響く。

場面は変わり、とある小さな村、そこにいる子供が疑問の声をあげた。

——お父さん、食べ物有家の前にあるよ？

小さな村の人達は歓喜の声を上げた。これで畑に種が撒ける。冬に餓死者を出さずに済む。

しかし、一人の村人が静かに口にする。ここまでのを一体誰がと……

その様子を緑衣の狩人は建物の上から静かに見つめていた。

それから数日たった後だろうか、馬に乗った兵士がとある男の顔写真を見せて大声で言い放った。

——この男は本当に村のものではないのだな？

村人たちはすぐに答えた。そいつはシャーウッドの森にすむ盗賊だ。

俺達には何の関係もありません。

村人たちは一斉に否定する。時には汚名を背負い、暗い闇に潜んだ人生。

子供が言い直そうとするも、それを静かに大人達が今は言わないよ

うにと伝える。

賞賛の影には自ら歩んだ道に対する苦渋の色が混じったそんな色。緑衣の狩人は弓矢で兵士を射抜く。

だが二年足らずで彼は敵の凶弾に倒れる。

木にもたれかかった緑衣の狩人は静かに言葉を紡ぐ。

———かっこよいかねえもんだなあ。ガキの頃憧れてた騎士サマみたいにさ……

「彼の記憶はここで途切れています」

ラニが静かに翔に向かって言葉を紡ぐ。緑衣のアーチャー。その生き様が身を隠す宝具として形作ったというのだろうか。

隠れ続け、卑怯者として、闇から敵を討つ人生。マスターであるダン卿の騎士たる戦いとは、それはあまりにも対照的すぎた。

いや、だからこそ緑衣のアーチャーは憧憬があったのかもしれない。陽炎に照らされた偽りのない人生。騎士としての人生を。

そんなアーチャーの過去があったからこそ、ダンのやり方に反発したのかもしれない。

「ありがとうラニ。おかげで一つ知りたいことを、知る事が出来た」

「こちらこそ、ありがとうございます」

ラニはそういうと、再び空を見上げてしまった。

そして彼女と別れ、校庭周辺を歩いていた頃に一つの花を見つけ、翔は佇む。

その視線の先には地面に落ちた一輪の花。花を見つめている翔が気になったのか霊体化を解き、その花を見つめるリップ。

「なありップ。ミセバヤの花言葉を知っているか？」

「みせばや……？」

地面に落ちていたその花を翔は手に取ると、なにか悲しむような表情でその花を見つめる。

翔は語る。ミセバヤの花言葉を……

「そうミセバヤ。この花言葉は『憧れ』だ」

思いを手に出せず、手を伸ばしても届かない感情、道化を演じるしかなかった男、緑衣のアーチャー。

翔には彼の気持ち分からない。でもそんな翔でも少しだけ分かった気がした。

ダン・ブラックモア。老練な軍人。マスターとしての実力、そして経験はあちらの方が上なのは間違いない。

そしてあの時放った二つ矢、その手慣れた動作は彼をアーチャーと確定するには十分すぎる情報であった。

だがそれはダン・ブラックモアとアーチャーとの溝を明らかにする一撃でもあった。

毒矢の使用を知ったダンはアーチャーに『祈りの弓』に制限を掛けたのだ。

誇りを持って正面から戦う。アーチャーの生き方とは正反対すぎる。その戦い方は生前の事もあり、彼に葛藤を与えていた。

シャーウッドの森……これでわかった。祈りの弓イール・バウにシャーウッドの森、そこで活躍した英雄の正体は……

「リップ。彼の真名は『ロビンフッド』だ」

明日の決戦、自分達は倒れるわけにはいかない。必ず勝つて見せる。翔がその花を手放すと、離れた花は静かに光となった。

「……」

翌日、決戦日のエレベーター内。慎二の時と同じように翔とリップに対面するのは、ダン・ブラックモアとそのサーヴァント、アーチャーであった。

ダンは一言も喋ることなく、ただそこに佇むのみ、だがそこから発せられるのは他ならぬ意志の強さ。挑発程度に動じるとは到底思わないその強さ。

だが、翔は一つ気になったことがあった。それをダンに聞く。

「ダン・ブラックモア。あなたはなぜ戦うのですか」

それは戦う意味。軍人として陛下に命令されたからとはいえど、その死ぬかもしれない戦いに挑む理由を聞ききたかった。

翔の言葉を聞いたダンは、今まで閉じていたその口をゆっくりと開く。

「戦いに何故はない。戦地に赴いた以上あるのは目的だけだ。加えるなら、わしは国に仕える軍人でもあった。個人に戦う理由は必要とされていなかった」

その後、ダンは『……今は多少違うがな』と小さく発したのを翔は聞き逃さなかった。彼がその意味をダンに聞いても彼はそれ以上は語らない。

その一連のやりとりを聞いていたアーチャーが呑気に笑いだす。

「どうやら、自分が話しかけてマスターがどんな反応をするか楽しみだったらしい。」

「あらら、これ以上が無理だったか。つまみ程度に楽しめたぜ。そちらのマスターさん」

「……趣味の悪い男です。だから嫌なことばかり言うし、すぐにお尻なんて叩くんですよ」

「おいおい、誰が言っているのよそんなこと。というかアレ？ おたく、俺の事知っている？ まったくやれやれ、どっかで出会っちゃまったのかねえ？」

「どうやらリップはロビンフットの事を知っているようだ。翔が聞いた時には記憶にもやが、かかっているとかどうとかであったが……言われてみれば、彼女はアーチャーのサーヴァントの名前を翔が言った時に、何かを思い出したような表情をしていた。前に出会った時に、このアーチャーがリップのお尻を叩いたのだろうか……？」

「彼が連想したのはあのアーチャーが『おら、尻を出しな！昔から悪ガキにはこれと決まってるんだ！』などをリップに言っている光景。」

その光景は翔が思い描いても異様な光景すぎる。あまり想像しないようにしよう。

まずは目の前の戦いに集中しなければ……

「まあそちらさんのサーヴァントも真つ当じやないと見た。俺の勘がそう言っているからな。となると、お互い真つ当な英霊じやないにしたってなんでこうも、マスターに差があるのかねえ。うちの旦那はちよいと潔癖すぎてねえ。英霊らしからぬ俺としちやあちよいと困りものだ」

「あなたのマスターはそれこそ、暗殺者で正義の味方なんかがお似合なんじゃないですか」

「うわ、それ表面上でうまくいって土壇場で決裂するやつだわ。おたく、そんな顔して平気で毒吐くのなおい」

「どうやら相当リップは彼の事を気に入っては無いようだ。平気な顔で毒を吐くのは慎二の時以来というのもあるが、なにより彼女の顔で語っているのが分かる。」

完全に顔に、あの人私、気に入らんと書いてあるようなものなのだ。

「ははーん、そっちもそっちで大変そうで。そっちのマスターさんよ。闇討ち、だまし討ち、不意打ちは嫌いかい？ てか、汚い殺し合い自体ダメ？ 卑怯な手口は認められないかい？」

「いつからか、アーチャーの話の相手は翔に変わっていたようだ。卑怯な手口……翔は考える。」

「そういつたやり方は好ましくない。だが否定もできない。相手が自分よりも各上の相手に挑戦するなら、自分だってその卑怯な手口を使う可能性だってあるのだから……」

「これは聖杯戦争だ。いくらルールがあるとはいえ、殺し方もその工夫も人それぞれ違う。」

「それに……自分は慎二を殺しているのだ。そんな自分が否定なんて出来ない。」

「あんまり好ましくはないと思う。けど否定もできない。これは聖杯戦争だ」

「そいつあ上々だ。毒と女は使いようってな」

「アーチャーが笑みを浮かべながら『いい勝負になりそうだ』と呟くと、今まで翔への返答以外、口を開かなかったダンがアーチャーを見

て、言葉を発したのだ。

「随分と楽しそうだなアーチャーよ」

「敵と話すこと自体珍しくてですねえ。この際、ダンナもちつと若者の生の声に耳を傾けてもいいんじゃないですかい？」

「気遣い感謝する。だがそれは無用よアーチャー。戦いに相互理解は余分となるのでな」

そういうと、アーチャーから視線を離したただ一点を見据えるダン。当のアーチャーはというと口笛を吹き、両手を静かに上げていた。表面上は関係が危ないかと思われるこのコンビ。だが翔は確信していた。

あの二人にも確かに見えない絆がある。あのアーチャーの狙撃の腕は、あのダン・ブラックモアでさえも信頼しているほどに……

翔が考えをめぐらせようとしたとき、大きな音と共に激しい振動が伝わる。どうやら到着したようだ。

戦うときが来た。自身の拳を握り締める翔。

「発つぞアーチャー。戦場に還る時が来たようだ」

その言葉と共に、扉へ向かう、アーチャーとそのサーヴァント。深呼吸をし、翔も向かおうとした時、リップから声がかかる。

彼女のほうへと振り向けば、微笑む彼女の顔が目の前に写る。

「一緒に頑張りましょうね」

リップの発したその声に翔は我に帰る。自分は一人ではない……

自分にはリップがいる。彼女と共に力を合わせれば、出来ない事だつてやれるかもしれない。

いや、やらなければならぬのだ。やらなければ自分が死ぬのだから。ならば自分は、自分を信じてくれたリップに応えてあげよう。

翔は自分の腕でリップの頭を撫でれば再び扉へと向き直る。

「ああ、一緒に行くぞリップ！」

二人の出た場所はコロッセオのような場所であった。

海の底に沈んだコロッセオ、底から見える光景はアリーナとは違

い、逆に神秘的にさえ見える。

そしてコロッセオから外に見えるのは、成長しコロッセオからでも見える木や時計台。

どうやらこの下がまだ存在するらしい。だが決戦場の広さはリッ
プも戦いやすい広さとしては申し分ない。

「ここで決めるぞアーチャー。決戦では宝具や罫の使用も咎めるつも
りはない」

「つまりようやく本領発揮って出来るって事ですかい。そんじやあ行
くとしませうかねえ。つーわけで、悪いけどあんたらには退場してもら
うわ」

リップもまた、巨大な腕を構え、決戦の準備をする。アーチャーも
またマントを翻し、ボウガンのような弓を構える。

あれこそ、翔に毒矢を放った弓矢『祈りの弓』なのであろう。

「ここで退場するのは哀れで惨めなロビンさんですよ！あの時、お尻
叩こうとした恨み、ここで清算させていただきます！」

「そつちの俺がなにしでかしたか知らんが、あいにく俺は人間でねえ、
支払いは金貨にしてくれや！」

———死にたくなければ剣を取れ
Sword, or Death

両者の間に、なんともいえない空気が漂っている。果たしてこれで
よかったのだろうかと翔は思うが、その考えを振り切る。

今は目の前を見つめろ。そこにどんな結末があろうとも自分はや
れるべき事をやるだけ。

開幕の鐘は、二人の得物がぶつかり合った音によりここに今鳴つ
た。

第二回戦の決戦、勝つのはリップか、アーチャーか……その戦いが
始まった。

第11話 祈りの弓（イー・バウ）

戦いの火蓋は今ここに切って落とされた。

最初に動いたのはリップであった。その巨大な爪で、アーチャーに襲い掛かるも、軽い身のこなしでそれを避けてしまう。

「そちらさんの武器はそれかい。物騒だね全く」

「それ以上言うなら、キューブにして捨てますよ」

「おっと、そいつあごめんだね」

前方に広く、弓を放つとリップが一瞬動きを止めた隙に後退。その勢いであらゆる障害物を足場にしながら矢を放つアーチャー。

彼にとって壁は第二の足場だ。死後、英霊となり生前の能力が昇華されたものなのだろう。

彼の放つ矢をリップは、自身に当たらないように確実に腕を振るい、その矢を落としている。

明らかに敏捷でリップが負けている。このままではどこかであの矢の餌食になる。

「そらよつとー！」

その敏捷を武器に、短剣を持ち、リップを上空から斬りかかるアーチャー。

それを防いでもいいが、今は回避が優先だ。アーチャーの上空からの襲撃を後退することで避けるリップ。

その光景を見たアーチャーは……

——静かに口元から笑みがこぼれた

「そこ、爆発するぜ？」

「なっ!？」

突然の光景に翔の目が見開く。リップの足元が大爆発を起こしたのだ。爆発の余波により、周りの足元が崩れ始める。

彼の真名は『ロビンフッド』。奇襲、暗殺、破壊工作といった『卑劣な作戦』を得意とする一人の英霊なのだ。

彼の持つスキル『破壊工作』。戦闘の準備段階で相手の戦力を削ぎ落とす才能。所謂、トラップの達人である。

そして彼のそのランクはA。進軍前の、敵軍に六割の打撃を与えるだけの才能を持つ男だ。

あの地雷をいつ仕掛けたのかはわからない。だがあのアーチャーだ。いつのまにか仕掛けていたのだろう。

爆炎による熱気が翔に襲い掛かる中、煙の中からリップが後退し、翔の隣へと舞い戻る。

無傷……というわけにはいかなかったようだ。歯を食いしばりリップはアーチャーを見つめているが、身体のところどころに傷が出来ている。

コードキャストに治療を即座に行う翔。軽くなった体を自身で伺えば、翔に語りかけるリップ。

「悔しいけど、実力は確か見たいです」

「……リップ。少し体を見せてくれ」

首を傾げるリップに翔は彼女に手をかざし、一つのコードキャストを発動する。

この言葉は小さく聞き取ることも困難。だがリップは、彼女だけは聞き取る事が出来た。

間違いなく、この後の展開を考えているのだろう。それを使ってくれた翔に、リップは微笑む。

「おっと、そろそろ時間だぜ？ そんなところで油売ってちゃあ、おたくら奈落の底に真つ逆さまよ」

アーチャーの言葉に翔は、はっとする。

音がする。何かにひびが入ってる。目を凝らせ、耳を澄ませ、発生源はどこだ。

「そんじゃあ、どこまでやれるか、見せてもらおうぜ？」

「!?」
音の発生源を特定した翔。下だ、自分達の足元にひびが入ってる。口元に笑みを浮かべているアーチャー。

なんとということか、アーチャーはこのフィールド全ての足元を崩したのだ。

その考えにたどりついたとき、地響きと共に翔の足元が崩れ去る。

アーチャーはダンを連れて、どこかへと移動したようだ。翔がアーチャーがいた場所を見てみればもう誰もいない。

声を上げる暇もなく翔とリップは、なすがままに落ちていった。

「いつてえ、あの野郎……」

「ほんと、やることなす事えげつない陰湿男ですなあいつ」

打った場所を押さえながら立ち上がる翔。どうやらリップも近くに落ちたようだ。この落下で分断されないのは幸いだった。

落ちた場所はどうかやら高台の近くのような。決戦場の下にこんな場所があるなんて驚きだった。

まずは状況把握が先決だ。今見える建物や地形、その全てを見る翔。

まず、高台の下には深い森。底は見えない。あまり見ることのなかった巨大に成長した木が数本。

そして所々に存在する建物、時計台が一つ。時計台に見えるのは鐘……だろうか。

だがまずい。翔は直感で感じ取る。シャーウッドの森に潜んでいたアーチャー。森の中というのは彼の独壇場でもある。間違いなく森の中に潜んでいるに違いない。

「ん？」

張りつめた空気を感じる。マスターであるダンもどこかにいるはずだ。翔が思ったその時、不意にリップが翔の前に踊り出て何かを弾く。翔の近くに転がるのは、ひしゃげた銃弾。

その銃弾は光となって消える。恐らく弾丸型のコードキャストだろう。

「翔さん下がって！ スナイパーです！」

「ダン・ブラックモアか……！」

注意を払う翔。それに遅れるかのように、再び腕を振るい銃弾を弾くりップ。弾かれた銃弾が飛び、上のガラスを砕きながら通過する。

弾道予測、発射地点はあの時計台だ。彼は名のあるスナイパーと聞

いた。狙撃銃型の礼装に弾丸型のコードキャスト。

正にそれはダン・ブラックモアの為だけにあるような気がした。とにかく、ここから離れないといけない。このまま、ここにはダンの餌食になるという事だ。

「それじゃあ仕切り直し、いや……大詰めだ！」

だがその隙を与える暇もなく、目の前にアーチャーが目の前に現れた。城壁を跳躍で超えてきたのだ。

彼が、飛びながら構えるのは、自身の右腕に装着されたボウガン形状の弓矢『祈りの弓』。そこより放たれる矢を翔の目の前に躍り出たリップは、自身の腕を振るい矢を砕く。

矢をリップへ放ち、後退しながら彼女へ攻撃を続ける。彼の狙いは適格すぎるほどだ。一撃でも受ければそれはかなりの痛手となる。

振り下ろされた爪を、バク転しながらアーチャーが回避すれば、その最中に何かがリップに投げられる。

それは上へ上へのぼり、しばらくすれば落ちてくる。その存在に戦慄を感じた。これを撃ち落とさなければリップが危ないと悟った。

翔は即座にコードキャストを練り上げる。

『shock (32)』！

翔がコードキャストを発動すれば、彼より放たれた弾丸は真っ直ぐにアーチャーから投げられた何かにぶつかり、重々しい音と共に爆発を起こす。

爆発音が周辺に轟き、周辺が爆炎によって見えなくなる。アーチャーが投げたのはピンが抜けたグレネードであった。爆発物も持ち出すあたり彼も本気のようなだ。

空気の塊が翔に襲い掛かる。その衝撃と圧力には耐えきる事が出来ずに吹き飛び、転倒する。

この城から真っ逆さまに、落ちなかった辺り、自分が幸運だったと翔は知る。

煙によって先は見えない、だが金属がかちあう音が響く辺りからして、交戦は続いているのだろう。

煙が晴れ、視界が戻る頃にはリップとアーチャーが背中合わせになっっているのが翔の視線から確認できた。

「正々堂々と、来ますか。しかも私の攻撃を受け止めているなんて」「すぐに消えるさ。焦るなよ！」

流れるように、リップの前に現れながら、若干遠い間合いより回し蹴りを放つアーチャー。

その間合いによって彼女は助けられたと言っても過言ではない。首を即座に上げることによって、足の先が間近で通りすぎるのを彼女は感じる。

直後、左腕に鋭い痛みが彼女の身体を走った。視線をそこにやれば、細い一本傷が彼女の左腕に刻まれていた。

アーチャーが蹴りから即座に弓を放ったのだ。アーチャーから視線を一瞬でも外してしまったことをリップは後悔する。

「リップ！」

駆け出そうとした翔が何かに撃ち抜かれる。

体が吹き飛ぶ、視界が回転する。

そこでようやく自分の身に何が起こったのかが分かった。

自分は撃たれたのだ。ダン・ブラックモアによって……

敵はサーヴァントだけではないことは初めからわかっていたはずだ。だが感情だけでリップに近づいてしまった。

それはあまりにも命取りな行動という事も自分の頭の中に入っていたはずだ。

自分が受けたのは、翔も先程使った『shock^{弾丸}』だろう。この種類はサーヴァントにも効果がある、それをただのマスターが受けられようか。

地面に数回打ち付けられながら、転がる翔。思わず翔の名前を叫ぶリップ。それを合図と言わんばかりにアーチャーが自身の弓矢をリップに構える。

その矢の形状は先程までのとは違っていた。アーチャーが切り札を切るつもりだ。

これは矢というより起爆装置だ。撃ち抜く必要はない。当てるだ

けで十分なのだ。その標的はリップただ一人。

「我が墓地はこの矢の先に、森の恵みよ、圧政者への毒となれ。
『祈りの弓』!!」

宝具解放。これこそがアーチャーの宝具『祈りの弓』。

標的が溜め込んでいる『毒』や『病』を瞬間的に増幅させ、それを流出させる力を持ち、毒が放ったものに対して回っていけば、その毒を火薬のように爆発させる効果がある。

要するに、内側からドカンだ。

その起爆装置である矢が放たれる。獲物をみつけた狩人の如く、その矢はただ一人。パツシヨンリップへと放たれる。

それに気づいたのだろうか。リップがこちらに突進してくるのが分かった。

アーチャーの予測では、その腕で矢を防いでこちらに一撃を当てるつもりなのだろう。だが無駄だ。これはあの腕に触れても起爆する。

当たればどうなるか、問答無用、内側から爆散。相手は見事倒れるという事だ。

「やあああー！」

「なにっ!?!」

だが彼の予測は外れた。

リップがその矢を弾き飛ばし、その腕で薙ぎ払いを行い、アーチャーの身体を深く抉る。

抉られた箇所から鮮血が吹き出し、アーチャーは膝をつく。汗が滲んだ顔で、背後を振り向く。

そこには紛れもないパツシヨンリップがいた。おかしい、なぜ『祈りの弓』が作動しなかった……

「なぜ、爆心が作動しなかった」

リップの身体を見てアーチャーは目を見開く。いや、作動したのだ。

彼女の左腕が深く抉れているのだ。さらにはその箇所から煙が出ているのも確認できる。それはリップが『祈りの弓』の直撃を受けたというのを明らかにしている出来事であった。

だがおかしい。本来の威力ならば、左腕ぐらいは軽々と吹き飛ばせていたはずだ。それなのにリップは挟れたぐらいの傷で済んでいる。「炸裂する不浄は血に混じります。だけど翔さんはそれを少し抑えることをしてくれた」

まだ上で戦っていた時、地雷が作動した後であっただろう。『体を見せてくれ』と言った翔は一つのコードキャストをリップに対して使った。

その名前は『Resistance^毒 | Poison^性』。だがコードキャスト程度でアーチャーの毒を抑えきれるとは彼女は思っていない。精々、毒の進行を抑えるぐらいだった。

まさに彼女がやったのは肉を切らせて骨を断つそのものであったのだ。

「ははは、めちやくちやすぎるでしょこんなの。なんでおたく生きているのよ」

決戦場全体へ警告音が鳴り響き、ノイズのようなものが走ったと思えば、二人は再びコロッセオのような場所へと戻される。

力なく地面に倒れていた翔が目を覚まし、あたりを見回す。どうやらムーンセルが決戦場の地形を修復したようだ。

「リップ……!?!」

彼女を探す翔。彼の声掛けに振り返り微笑むリップ。そして彼女の左腕を見て驚愕する翔。

その様子では『祈りの弓^{イ・バウ}』による一撃を貰ったのだろう。即座に回復のコードキャストを練り、リップに使う。

挟れた部分は数日たてば治る。とりあえずはこれで応急処置はいだらう。

「すみません。私が油断しなければ……」

「大丈夫だ。俺も油断しなきや意識を失わずに済んだんだ」

向こう側を見つめる翔。そこではアーチャーがダンから回復のコードキャストを受けている状態であった。

とはいえど、お互い手負いの状態。次の局面で勝負が決まるだろう。

アーチャーがこちらに向く。それに気づいた二人もまた戦闘態勢を取る。

あと一撃だ。それが当たれば勝負がつく。アーチャーが懐から何かを取り出す。それは刃が銀色に輝く鋭利な短剣のようだった。

どうやらアーチャーは正面から来る様らしかった。だとすればこちらに勝機はある。

「正面から来るんですね」

「さて、そいつはどうかな？」

アーチャーの、その言葉を皮切りに、両者が走り出す。最初の一撃はアーチャーであった。

流れるような短剣の捌きにリップが目を見開くが、即座にそれを自身の腕で受け流し、一撃を入れる。

だがその一撃を短剣で最小限に受け流し、即座に放たれる蹴り。それにはリップは対応できず、直撃をくらい距離を引き離される。

森で使えるような装備なら何でも彼は使えるのか。弓だけではない。短剣も体術も彼は使えるのだ。

「さて、出し惜しみ無しと行きますかね……無貌の王、参る」

その刹那、リップと翔は驚きの眼差しをする。アーチャーの姿が一瞬にして消えたのだ。

生前、ロビンフッドは顔や素性を隠して圧制者と戦った。姿を隠し、誰にも知られず、見つけられず、戦い続けること。これこそが彼の生き方であり、その在り方。それが伝承化され宝具となった一つの道具がある。それこそ今発動した宝具『ノーフェイス・メイキング顔のない王』だ。

正に完全ステルス。完全なる透明化だ。だが彼がどこかに必ず潜んでいる……

姿を隠す宝具があるのはわかっていた。だがこのタイミングは正直悪すぎる。だがここで気を抜くような真似などできない。

リップも翔も警戒心を強め、辺りを見回す。

風を切る音が通り過ぎるのをリップは感じた。その直感と同時に腕をその空間に振り抜く。ジャストだ。

金属音を奏でながら、一本の短剣が姿を現し、空中を舞った後に力

なく地面に落ちる。アーチャーが短剣を投擲したのだ。

「注意逸れすぎだぜ。おたく」

「!?」

ふわりを風を切る音がリップの隣を通り過ぎた時にはすでに遅い。アーチャーが宝具を解除し、リップの首筋に短剣を当てていた。

間違いなく、彼があのまま短剣を引けばリップが一撃で即死するだろう。さすがは森の狩人、その位置は寸分も狂いはなかった。

翔には短剣が引かれる光景がとてもゆっくりに感じた。コードキヤスト、駄目だ。間に合わない。

なにか、コードキヤストよりも早く、そして的確にアーチャーの短剣を射抜けるものは……

なんでもいい、なにかリップを助ける事が出来るものは……

——その時、ぼんやりとした何かが見えた。

『それ』が『そこ』にあるのかわからない。でも今は使えるものであってもなくてもそれを使う。その思いで、それを手に掴む。

それが光り輝いたと思えば、突風が巻き起こり、翔の手になかったものが握られていた。

それは黒塗りの弓であった。矢はなかったが、それを構え、魔力を流し込めば、螺旋を描く刀身のような、光り輝く矢が作り出される。

チャンスはこの一瞬、それを逃せばリップはやられる。

「……頼む、当たってくれ!」

細く光り輝く閃光が走る。その閃光は鋭く、空気を裂く音を奏でながら、一筋に真っ直ぐアーチャーの短剣へと吸い込まれ、無慈悲にも彼の手から短剣を吹き飛ばす。

『微笑むサロメ』——」

今のアーチャーには一瞬の隙が出来ている。そこをリップが見逃すはずがなかった。

リップが翔に顔を向けて微笑み、金色の巨大な爪を構えれば、同時にリップの魔力が変わる。その魔力は守りを捨て、攻撃に特化されたもの。

『ヨカナーンを籠に』!!』

鉤爪での薙ぎ払い、武装解除された一瞬の隙にリップはその爪でアーチャーを薙ぎ払った。

最後の一撃が敵を討った。その一撃により目を見開くアーチャー。体の大部分がその爪によって引き裂かれる。

「……そうか」

その光景を目を見開きながら見つめ、そして目を閉じながらそう呟いた人物がいた。それはダン・ブラックモアのものであった。

彼は何か納得したような眼差しで自らを倒したパッションリップを……翔を見つめる

「バカな、どうしてオレ達が押し負けた。地力も決意も旦那のほうが上だっというのにどうして……!？」

「……わしもまだまだ未熟だったようだ。わしは自分の心を見誤った」

立つことができないのか膝を突くアーチャー。そして慎二との戦いするときにも見た。赤い壁が両者を隔てる。

赤い背景に変化し、ノイズによって蝕まれ始めたのは、アーチャー側のほう。翔たちは戦いに勝ったのだ。そのノイズに蝕まれながらも、ダンは翔たちを見つめる。

「聖杯戦争において意志の強さは二の次だ。ここでは意志の質が前に進む力になる」

その目は静かに、だが力強く、翔を見つめる。

意志の質とはなんだろうか……翔にはわからない。だがダンには彼の心が見えているように、再び語り始める。

まるでノイズに蝕まれているのを気にしないように……

「わしは生涯を軍に捧げた。軍人として生きる為、冷徹な無個人性を由とした。だがそんなわしは軍人である事を捨てた。今際の際に個人の願いに固執したのだ。今回だけは一人の男として戦いに挑むなどど……こんな言葉をかざして柵の奥にしまっていた騎士の誇りを持ち出すとは……」

黒いノイズは老騎士の体を蝕んでいき、彼の体が薄くなり始めていた。同時にアーチャーもまたそれを受け入れるかのように、体が消え

始める。

「……本当に愚かだ。わしは最後に亡くしたものを取り戻したかった。だが、わしの願ったものは一体どちらだったのか。そして、君の最後の一撃には迷いはなかった。譲れぬものが間違いない、その心の中にある。」

ダンには他人ひとに誇るに足る願いはなかった。自身の胸にあったのは死人の願いだつたと、彼はそう言っているようにも翔は聞こえた。そしてダンはアーチャーのほうを見つめる。

「そしてすまないなアーチャー。わしの我儘ゆえに戦い方を縛りつけお前の誇りを汚してしまった」

「今さらおせえーつつーの。でもなんだ。たまには悪くないですかね。くだらない騎士の真似事もいい経験になった。生前、縁は無かつたですし、かつこよくやってみたかつたんですよ、ガキの頃憧れてた騎士サマみたいなさ」

最後の言葉は小声で呟いた。聞こえないような、それこそ聞かせるつもりなど無いだろう声で……

「生前のオレはさ、名誉とか友情とか平和も大抵のものは手に入れたけどさ、それだけは手に入れる事が出来なかつた」

——だから、いいんだ。

「……最期にどうしても手に入らなかつたものを掴ませて貰ったさ」

その言葉が彼の最期、緑衣のアーチャー、ロビンフッドはこの世界から完全に姿を消した。だが彼の横顔には悔いは残っていなかつた。

かつて村を守るために、勝つために森に隠れ続けた英雄。彼は一度たりとも村人達に讃えられる事はなかつた。

そんな彼は、満足げに微笑みながら姿を消した。

「すまない、ありがとうアーチャー」

彼の姿もそれに続いて消えようとしていた。だがダンは翔に向き直ると言葉を口にする。

「寿々科翔よ。これから先、誰を敵に迎えようとも、誰を討つ事になろうとも、必ずその結果を受け入れてほしい。迷いも悔いも残してもよい。ただ結果を拒む事だけはしてはならない」

「結果を拒む事……」

「そうだ。すべてを糧に進め。覚悟とはそういうことだ。それが無ければ必ず君は未練を残す」

そして可能であるならば……ダン・ブラックモアは言葉を続ける。翔はダンの言葉を胸に刻む。

「そして可能であるならば、戦いに意味を持たせて欲しい。君は何の為に強くなり、何のために負けられない戦いをする。その意味も可能ならば持つて欲しい」

戦いに意味を、これが、この言葉こそが翔に対するダン・ブラックモアの願いであった。

翔には記憶が無い。だからこそダン・ブラックモアはその言葉を伝えた。彼に記憶が戻っていないのは度々会う翔を見ていればこの老騎士には全てがわかったのだ。

きっと彼はこれからつらい戦いが待っている。超えなければいけない相手がいる。迷いも悔いも当然これからだってあるはずだ。

だからこそ、この聖杯戦争という命をかけた戦いに意味を持つて欲しかった。

「寿々科翔よ、それだけは、決して忘れるな。さて、ようやく会えそうだ。アン……又」

ダン・ブラックモア。威厳ある老騎士は完全に世界から消滅した。その間に咳いたのは女性の名前、その名前こそ彼の妻だったのだらう。

それを口にした時のダンの顔は未練も無く後悔も無く……

彼は静かな答えを胸に抱いたままゆっくりと姿を消していった。

「ダン・ブラックモア。いや、ダン卿。あなたに教えてもらいました。俺の在り方を」

あとの戦い、この次は3回戦がある。そしてその先も当然存在する。

しかし、自分は戦うしかない。だから戦うしかないのならば……

せめて戦った過去に、そして命を奪った相手に恥じない戦いを、翔は心の中でそれを刻むのであった。

番外編1　ファイオナ騎士団

ここはどこだろうか……

志波白亜は夢を見ていた。時代からしてはるか昔のようだ。

契約のラインで結ばれているマスターとサーヴァントの間にはラインを通じてお互いの過去を見ることがある。以前、知識として知っていたのがよかったのだろうか、今見る光景をすんなりと受け入れる事が出来た。

ならばこの夢はその一人の騎士の生前の夢なのだろう。

ここにはとある騎士団がいた。ケルト神話に伝わる騎士団『ファイオナ騎士団』だ。

その英雄『フィン・マツクール』が騎士団長を務めた騎士団でもあり、後に伝わるフランスの武勲詩ローランの歌に登場する十二勇士やアーサー王率いる円卓の騎士の原型であるとも言われているのだ。

そのファイオナ騎士団の中に騎士団最強の戦士ともいわれていた騎士がいた。

——その騎士の名前は『デイルムツド・オディナ』。

誰もが一度は振り向くであろう美貌の持ち主で、愛と美を司る神にして妖精王であるオエングスを育ての親に持つ騎士だ。

騎士団長でもあるフィンに信頼されていたデイルムツドは同時に騎士団の仲間たちからもまた信頼されていた。

伝承によればデイルムツドは二つの槍も操れるが、同時に二つの剣もまた操れると白亜は知っている。だがその4つの武器を同時に操れるデイルムツドは通常の聖杯戦争ではエクストラクラスでもない限り無理にも等しい。

——だがそれを可能にできる手段がこの月の聖杯戦争にはある。

だがそれを使うにはまだ早いだろう。現に今の実力で2回戦までやってこれたのだ。これを使うのは、その実力を持つ相手に出くわしたとき。切り札は最後まで取っておいた方がいい時もある。

話を戻そう。このデイルムツド・オディナ。そんな彼に人生を狂わせたと言つてもいい出来事が起きた。

それは、主君であるフィンマツクールと美しいと言わしめた姫君グラニアの婚姻の宴であった。

その宴では、デイルムツドを始めとした騎士団の人達は皆、フィン
の婚姻を祝福した。

誰もが喜びに満ち溢れていた宴。その中で一人、表情を暗くさせていた者がいた。

その名前はグラニア。フィン
の婚約者である者だ。

英雄と言われたフィンは既に老人と言つていいほどの年齢に達していた。グラニアにとってはこの婚姻は望まない婚姻であったのだろう。

だがそれだけならば、グラニアも諦めフィンと共にあったかもしれない。

そう、この宴には美しい騎士がいた。デイルムツド、その騎士を一目見た時、彼女はその騎士に恋をしてしまった。

もしフィンがデイルムツドを席から外しておけばこの悲劇は起こらなかつたであろう。

その恋の感情がデイルムツドの頬についていた女性を虜にしてしまふ魔法の黒子のせいなのか、デイルムツドそのものに惹かれていたかは今となっては分からないことだ。

だがそれほどの恋をグラニアは抱いた。抱いてしまった。

皆に廻す祝杯に眠り薬を盛つて、フィンを含む騎士たちを眠らせた後にグラニアはデイルムツドに願った。

——どうか、私を連れて逃げてください、と

だが、騎士団長フィンへの忠誠心篤いデイルムツドには、花嫁の責務を放棄してはならないと言ひそれを断つた。

グラニアはこの拒絶に怒り『皆の起き出す前に、自分を連れて逃げなければ破滅が訪れる』というゲツシュをデイルムツドに与えたのだ。

ゲツシュとはケルトにおいて絶対的なものであり、誓約であり、禁

忌であつたものだった。

だからデイルムツドはこのゲツシュに背く事が出来なかつた。彼はグラニアを連れて逃亡することになってしまった。

自らの婚約者、そして信頼していた者からの裏切り、フィンが激怒しないはずがない。すぐさまフィンは追撃の命令を下した。

だがデイルムツドには騎士団最強と言うにふさわしい武勇がある。そして知略もある、さらにはデイルムツドの養父である妖精王オエングスの助けや、デイルムツドへの信望や友情を保ち続けている騎士たちの手心もあつて、デイルムツドは幾度も追撃を振り切つた。

長い年月が過ぎても、2人に対する追跡の成果は出ず、フィンに損害と痛手を与える一方であつた。

そしてオエングスの仲介もあつてことにより、フィンは苦渋の末、2人を許した。

——だが、フィンはデイルムツドに裏切られた恨みを忘れはしなかつた。

山での狩りでの時、デイルムツドは異父弟の化身である耳と尾のない大きな魔猪に瀕死の重傷を負わされてしまうのだ。

瀕死の重傷を負つたデイルムツド、そんな彼の重傷を治せる一人の人物がいた。

その人物こそフィンマックールであつた。彼にはすくつた水で傷を治すことのできる癒しの手をもっていたのだ。

——我が主よ、どうか癒しの力を……

デイルムツドと、彼の親友であるフィンの孫オスカに救命を懇願されたフィン。だがフィンにはグラニアの恨みがある。

そのこともありフィンの心は揺れていた。その時の動揺なのかはわからない。泉からすくつた水をデイルムツドのもとに運ぶまでに2度もこぼした。そして3度目になつて、ようやくたどり着いた時には既にデイルムツドは事切れてしまつていた。

——誰よりも主君に忠義を捧げた騎士は、主君によつて見殺しにされた。

デイルムツドの死後、グラニアは深く悲しんだ。そして息子たちに

フィンへの復讐を誓わせるほどだったが、月日が経ち、その悲しみが薄れだした時、フィン求婚に応え彼と再婚、それからは一生フィンの妻として過ごしたと言われている。

それからしばらく経ち、王座を継いだケルブレは、強大になりすぎたフィオナ騎士団の排除を目論み、その戦いの中でフィンには五人の敵兵に槍で貫かれ戦死した。この戦いでフィオナ騎士団も壊滅したという。

フィオナ騎士団、デイルムツド、グラニア、フィン。こうして、騎士団と騎士達の物語は神話の中に消えていった。

小鳥のさえずる音で白亜は目を覚ました。

2回戦が終わり、自分達の陣営が勝ったんだっけと微睡の中で頭の整理をする。

「あれは間違いなくランサーの……」

あの光景は明らかに自分が見た光景ではないものであった。となれば自身のサーヴァントであるランサーのものだろう。

白亜は自分が見たランサーの記憶を思い起こしていた。

「我が主よ、お目覚めですか？」

「あ、ランサー。結局私が寝ている間ずっと見張りしてたんでしょ？」

白亜が起きた時、マイルームで見張りをしていたランサーが実体化する。この聖杯戦争では奇襲の心配はほぼないといってもいい。

だがランサーは、いくら学園サイドでは奇襲の心配はないと言われるところで、それを突破してくるサーヴァントもいるかもしれない。なので警戒することにしたことではないというのがランサーの意見であった。

確かに言われてみればそうだ。この聖杯戦争は128人のマスターとサーヴァントがいる。今では数も減ってしまったが、その中には暗殺に長けたアサシンや探してみればアーチャーなどにいるかもしれない。

フィオナ騎士団からの追手などからグラニアを連れて逃げたラン

サーの警戒心は確かだ。信用してもいいだろう。

「でもありがとうランサー。あなたのおかげで私は警戒することなく休めるわ」

「主の身を守る事。それが騎士たる者の務めであり我が義務でもありません」

本当は休んでもいいだろうと思うが、自分のサーヴァントでもあるランサーを尊重し礼を言った。それに対し、ランサーもまた騎士の礼にて応える。

こう見れば見るほど、ランサーは騎士としての在り方では隙がない。だが先程、自分の意思ではなかったとはいえ主君を裏切ってしまった光景を、夢で白亜は見たばかりだ。

マスターが聖杯に望みがあるように、サーヴァントにもまた望みがあるはず……

だが白亜のランサーはそうではなかった。ランサーは召喚されて間もなく、自分にこう言ったのだ。

『私が聖杯に託す望みはありません。聖杯を主に捧げる事、それだけがこの私の望みです』と……

その時は白亜は納得した。だがランサーの過去を見たことでその疑問がまた湧いてきたのだ。

裏切られたのに？

本当に恨んでないの？

本当にランサーは聖杯に託す願いはないのかと……

生前、騎士道を貫き通せなかった。それはグラニアの求愛ゆえに……そして最期には忠義を捧げた主君に見捨てられた。

そしてグラニアは自分を見捨てた主君と再婚した。

恨まないはずがない要素がたくさんあるのだ。フィン・マツクールを、グラニアを……

もし自分がデイルムツドの立場なら、二人への報復か、生を望むかしていたに違いない。

「主、どうかなされたのですか？」

ランサーが自分の顔を覗き込んでくる。いい機会だ。このまま疑

間に思っけていても拗らせるだけかもしれない。

だから白亜は思い切つてランサーに聞くことにした。

本当にあなたは聖杯を望まないのかと……

「ランサー、実はね、今日初めてあなたの過去を見たの」

「過去を……確かにラインを通してお互いの過去をみることはあります。ですがそれが？」

「あの時言ったこと、もう一度聞くね。ランサー、いえデイルムツド。あなたは本当に聖杯が欲しくないんですか？」

それを聞いたランサーは黙り込んでしまう。確かにデイルムツドは聖杯を主である自分に捧げる事、それだけが自分の望みと言った。

でもランサーの過去を見た今、どうしても聖杯をいらぬと言えぬのかわからない。

「あなたはグラニアの愛に応えた。でもそれで騎士団からほぼ追放ともいえる感じにされた。そして最後には忠義を誓ったフィンにも見捨てられた。恨んだつておかしくない。そしてあなたに愛を求めたグラニアだつて……」

数々の疑問をランサーに聞いてみた。それを静かに聞くランサー。白亜の疑問を言い終え、しばらく経つた後だろうか、ランサーは静かに語り始めた。

「主よ、俺は恨んでないのです」

「恨んでない？」

ランサーは白亜の言葉に頷く。そして再びゆっくりと語り始める。「フィンも、グラニアも、あの時確かに俺は忠義に背きグラニアの愛を選んだ。もし後悔があるとすれば俺は自分が愛したグラニアを裏切ることになる。生前の主君であったフィンもまた同じ、俺が死ぬ間際に助けることを躊躇したとしても、俺が非難することはできない」

白亜はこの言葉には迷いが無い事を知った。

彼は本当に恨んでないのだ。自分の人生の狂わせた元凶であるグラニアを、自分の命を見捨てたフィンを……

「でもグラニアはあなたが死んだあと、フィンと再婚してるんだよ？」

そしてフィンの妻になったよ？ それも、恨んでないの？」

「少々寂しくはある……だが俺はグラニアを愛した。だからこそその未来に幸福あれと願うだけ。俺が死んだあとの孤独を考えれば、むしろフィンとの再婚に俺は感謝するのみ」

『だが……』とランサーは言葉が続ける。

「未練はある。生前の人生にもう後悔はない。愛を選んだデイルムツドの人生は完遂した。なら次がある時は、騎士として忠義を果たす人生を全うしたいと……だから、サーヴァントとして俺の主君である志波白亜。貴方に聖杯を捧げる。それが忠義を選んだデイルムツドの人生の完遂となるだろう」

なるほど、白亜の中に生まれていた疑問が全て解けた。そしてランサーの願いの意味が全てわかった。

無欲だなあと白亜は思う。だがそれが口に出ていたのか、微笑みながらランサーは言葉が続ける。

「いいえ主よ。むしろ俺は欲にまみれている。サーヴァントの願いは生前の延長線。だというのに俺は生前とは真逆の生き方をしようとしているのですから」

志波白亜と今のランサー、そして白亜の疑問もすべて晴れた。ならば今の自分はきつと敵なしであるだろう。

同時に端末の音が鳴る。対戦相手の発表がされたのだろう。

「分かったわ。ありがとうランサー。んじゃあ早速行きますか！ もしもの時はお願いね！」

「はっ！ お任せあれ、我が主よ」

白亜とランサーがマイルームから出て、戦場へと向かう。一人は生きるために、一人は騎士としての生き方を全うするために……

番外編2 死の気配

生存の為の搾取

繁栄の為の決断

その行為は野蛮ではあるが――

否定することも、またできない

……死の淵でこそ、得るものもあるだろう

マイルームを出てから翔は妙な違和感を覚えた。

残りマスターも32人となった。それだけならばこの静けさも納得はいく。

だが彼の感じているのはそうではない。何かが迫ってくる気配を感じる。

周りの空気が冷たく感じる。何が来てもおかしくない。

「!?」

突然、背筋にありえない寒気が襲い掛かった。

サーヴァントを呼ぶ間など存在しない。何か圧倒的力に引っ張られるようだ。

両足を思いつきり踏みしめ、それを踏ん張りながら、後ろに視線を向ける翔。後ろは壁だ。

このまま吹き飛ばされれば命が危ういだろう。こんなところで、死ぬ気などない。

こんなところで死んだら、戦った慎二やダン卿に申し訳ないではないか……

「……やはり貴様、只者ではないな。何者だ」

校舎に変わりはない。だが翔でも感じるこの異様な殺気は……異常すぎる。この校舎に一体何が起こっているのだ。

いや、なにかがいる。誰だ、さっきまで人の気配はなかった。

「少しばかり不正規な手段^{イレギュラー}を以つてもそれが通用しないなど……貴様、ムーンセルの管理から外れている存在か」

殺気が濃くなる。この殺気には覚えがある。

ああ、最悪だ。あいつが襲ってくる。

そいつはサーヴァントの出会っていない状態で出会ったらひとたまりもない。

目の前に一人の人物が現れる。その姿は見覚えがあつた。そしてこの心臓が、体のあちこちが破裂しそうな威圧感にも覚えがある。

「黒コートの野郎……！ てめえに二度殺されるなんざごめんだぜ！」

翔は叫ぶ。顔にかかる長い髪の下、刺し貫く視線を翔に向けていた。

「あの時はただの雑魚かと思つたが、どちらにせよ、あの手段を以つてもそれが通用しないのだ」

黒コートの男が構える。それと同時に彼の纏う気配が変わつたのを翔は気付いた。

あの強烈な殺気が一点に集中し、全てを刺し貫く鋭利な刃物のように翔に向けられている。

「ここで始末するに越したことはない」

翔の汗が頬を伝いゆっくりと落ちる。その水滴が合図のように黒コートの男は翔へと駆け出し、同時に翔は一つのコードキャストを詠唱した。

「死ね……！」

「Creati短ng剣 | dagger作」

黒コートの男は一瞬目を見開いた。翔は黒コートの男が自分の首に視線を向けているのが分かつた。

そして自分は、彼に対抗する手段がないと黒コートの男は踏んだのだろう。そう考えるのが当然だ。だって翔はこの黒コートの男になんにもできずに斬り裂かれたのだから……

だが、翔はダンの戦いが終わり、一つのコードキャストを自分の中から見つけ出していた。もしかしたら今後マスターである自分が狙われるかもしれない。

そしてあの『約束エされし勝利スの剣カ』や黒塗りの弓はいつでも使える

わけではないのだ。

ならばと思い、探し当てた一つのコードキャストだ。

その作成した短剣で、首筋を裂こうとした黒コートの男の短剣を自身のもつ短剣で防いだのだ。

「驚いた……だが」

だが戦い方まで身につけているわけではない。黒コートの男と翔の潜り抜けた修羅場の数は違い過ぎる。

簡単に翔から短剣を吹き飛ばし、斬り裂こうとする。

だが、その短剣によつて稼いだ一瞬の時間は無駄ではなかった。

「翔さん！」

なにかを一振りで砕いたリップがユリウスへと迫り自身の腕を振るう。

だが彼が動くことはない。突然目の前に現れたサーヴァントが彼女の一撃を防いだからだ。

その姿は燃えるような衣装に身を包んだ鋭い目つきのサーヴァント。

「っ！」

あの時と同じだ。体が震える。あの男に近づくなと全身が警報を発する。

初めてリップと出会った時と同じ男だ。となると彼はあの黒コートの男のサーヴァントなのは間違いないだろう。

それにしても……だ。殺意とはこんなにも明確に、そして濃密に漏らす事が出来るものなのだろうか。

その男はまるで『死』が形を取った姿。まさに『死』そのものであった。今まで単語のみで聞いていた『暗殺者』の名が脳裏によぎる。

一瞬でも他の事に気を逸らせば、あの死そのものに命を絶たれる。「ぬ……. またもや時間切れとはな。殺しきれぬのでは仕方がない。舞

台裏ではこれが限度というもの。おぬしとはいづれまた闘りあう事になるかもしれんな。その時まで楽しみにしておこう」

「時間切れだと……っ!?!」

黒コートの男が構え直そうとした時に、その表情が変わる。空気を

斬り裂きながら、飛んできたレイピア状の剣のようなものである、黒鍵こっけんによつて、黒コートの男の手から短剣が勢い良く引き離される。「争い事はそこまでにして頂こうか」

「……くそ」

翔と黒コートの男の間に立ったのは、あの言峰神父であった。

彼はこの聖杯戦争の監督役のNPCだ。校内の異常を感知し、止めに来たのだらう。

「校舎内で不正なハッキングをしているという情報をムーンセルから感知した。こうしてきてみたのだが、これは、随分と派手にやってくれたな。この周辺もサーヴァントすら寄り付かせない場所にしてるとは」

そして言峰は黒コートの男を見ると、何かを気づいたように。口元に笑みを浮かべる。今まで感じてきた事なのだが、この神父は本当に何を考えているかわからない。

できれば敵にまわしたくはないなと翔は心の中で思う。

「なるほど……『ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ』か」

「ハーウェイ?」

翔がその単語に反応したところに、ユリウスと言われた男が舌打ちをする。それを見た言峰が笑みを浮かべたような感じに見えたのは翔の気のせいなのだろうか……

一連の流れを見たユリウスが、この場は悪いと判断したのか背を向ける。その際に殺気の籠った凍てつく視線が翔に向けられる。

「確か……寿々科翔と言ったな。覚えておこう」

殺気の籠った瞳をこの身に据えたまま、ユリウスはまるで背景に溶け込むように消えていった。

そしてこの場所に渦巻いていた何かが消えた。自分は本当に今いるべきところに返ってきたのだ。

「しかしなんだったんだ今の……急にリップと繋がっていた魔力が途切れたと思ったらあの野郎が出てきて……」

「途切れた。なるほど、今まで私が見つけれなかったのはこういう事か。これを見るがいい」

言峰が手を触れた箇所、そこはどう見ても壁だが、なにかうつすらとひびが入っているのが確認できる。言峰が説明する。

これは、あのユリウスという男がハッキングした痕跡らしい。不正行為によりアリーナに接続、マスター達を引きづり込んでいたようだ。

彼が言うにはこれは悪質な反則ルールブレイクに当たる行為である為、処罰対象になるそうだ。くれぐれもやることはしないようにと言われるが、翔にはそんな高度なハッキングなどできるわけがない。

「ともあれ、このようなことをするマスターもいるという事だ。寿々科翔。お前も注意することだ」

言峰が翔に注意を促した後『それと……』と言葉を続ける。

「食堂の麻婆豆腐は食べたかね？ あれは私のオススメの品でもあり、私が食堂に入れたものでもある」

「あ、あれ。あなたが入れてくれたんですか!？」

余りにも衝撃な真実に翔が立ち上がり目をキラキラとさせるかのように言峰の前に立つ翔。そして、このまま麻婆談義が始まりそうであろう雰囲気醸し出したところでリップが止めに入る。

彼女はあの麻婆豆腐の洗礼を受けた一人なのだ。止めるのも無理はないだろう。

「……ようやくあの味が分かる人を見つけたと思ったんだがな。私はこれにて失礼しよう」

言峰もまた立ち去り、この廊下に取り残されるのは翔とリップのみとなる。翔には言峰が放ったあの言葉が頭に残っていた。

ユリウスという男、名前にはハーウェイの言葉があつた。そこからレオとは身内のような関係であることは明白。そして西欧財閥の一人であるだろう。

あの男とはできれば当たりたくはない相手だ。次、戦う事になれば自分は生きていられるのかどうかすらわからない。彼はそれほどまでの殺気を持っていたのだ。

まさか死と隣り合わせになるとは思ってもいなかった。翔は重い足取りで自身のマイルームへと帰って行った。

第12話 Alice's Tea Party

死を悼め

失った物への追悼は恥ずべきものではない

死は不可避であり

争いがそれを助長するのなら

死を悼み、戦いを憎み

死を認め、戦いを治めるがいい

第三回戦、開幕。

残りマスターの数は32人となった。

この戦いに参加した半分以上の人数がこの聖杯戦争で命を散らした。

「ここまですれば当然、廊下や図書室、食堂などで会う人数も当然減るものだ。

この戦いは戦争であり、頂点を決める戦い、だが翔にはこの光景が寂しく感じた。

だが、このままではこの先、生き残ることはできないと翔は感じていた。

1回戦では、慎二の作戦に為す術もなく陥り、腹部を貫かれた。

2回戦では、感情に任せて狙撃が直撃し、リップはあと一步遅ければやられていた。

「……何とかしないとなほんと」

自分はほかのマスターに比べて圧倒的に経験が少なすぎる。

せめて失われた記憶さえ戻ればいいと思うのだが、今のところ思い出す事もない。

次の対戦相手の選出までは時間があるようだ。ならば今のうちにアーリーナへいき、鍛錬した方がいいかも知れない。

アリーナにて、ふと決戦の時の光景を思い返す翔。

自分は慎二の時もダン卿の時の戦いでも、必ず状況を打破できるものを持つていた。

あの『約束されし勝利の剣』と黒い弓だ。あれは何なのだろうか……

コードキャストの時のように魔力を練り、あれを具現化しようとするも今では手に出てくることはない。

「あれをうまく使えればな……」

翔の直感で思う。あれをうまく使う事が出来たら間違いなく今まで以上にリップの支援はできる。

あの天才の慎二でさえ、翔自身がサーヴァントみたいだと言わせたことだ。

使いこなせれば必ず役に立つものではあるとは思う。だが出せなければ意味がない。

「なありップ。決戦の時に俺の魔力が急激に上がったりはしなかったか？」

リップは歩きながら考える仕草をした後に口を開く。

「ない……ですね。でもあのすごい剣とか弓とか、威力はサーヴァントよりも下だとは思うんですけど、並のコードキャスト以上はあったと思います。あのロビンさんから短剣を引きはがしたくらいですし」
「そうか……」

ますますわからない。そういえば決戦で思い出したが、自分の夢の世界をぶち壊してきやつきやしてた、BBちゃんとか言う小悪魔的なあいつは元気になっているのだろうか。

あれ自身は生きていればいいことあるかもしれないと言っていたが、どうも彼女が言うところ胡散臭くなるのはなぜだろうか……あの性格のせいであろうか。

翔が考えていれば、影がふわりと通り過ぎるのを確認できた。リップが何も言わないことから彼女は気付いていないのだろうか。

「おいリップ、今なんか横切ったような……」

翔の言葉を言い終える前に、自身の袖を何かにぐいと掴まれる

翔。

始めはリップだろうかと思ったが、彼女の腕で気付かないのはおかしい。振り向けばそこには少女がいた。

姿は白いエプロンみたいなドレスを身にまとった少女……ということだろうか。

そしてなんとなくだが、この子は自分に近い何かを感じた。

外見は、似ても似つかない二人だ。でも翔からはこの子からは近い何かを感じたのだ。

「お兄ちゃん！ 遊ぼ！」

その言葉に翔もリップも目を丸くした。

誰という言葉をいう事も忘れ、目を丸くしながらびよんびよん跳ねる白い少女を見つめる。

見た所、十歳ぐらいだろうか、だがその仕草はまるで人形のように無邪気だ。

「あたしはあたしありす！ ねえ遊んで遊んで！ いいでしょ？」

ありすと言った少女が跳ねるように翔にとびかかれば、背中に抱き着き、よじよじと彼の背中を登り、翔がおんぶしている状態へとなっていた。

あまりにも無邪気すぎる。この子はNPCなのだろうか。

そもそもここはアリーナだ。NPCがここに入れたのだろうか。もしかして期間限定のクエストみたいな感じなのだろうか。

リップが不機嫌な目つきで少女を見つめると、その少女は『べー』といったふうに出す。自分もいつかはあんなふうに背中に抱き着いてみたいのに自分の腕がそれを許さない。

それを得意げにされ、その仕草に歯をギリギリとするリップであったが……

「なあ、リップ。学園でこんなやつ見たか？」

「えっ!? あっ!? えっと……見てないかと」

翔が振り向く直前に、リップの表情が元に戻る。あまりにもリップが動揺していたので、翔も気になったが、彼女は突然振るのが苦手なのだろうかと思う事とした。

「ねーねー、あたしオニゴっこがいいなあ」

「……しようがないなあ。ちよつとだけだぞ」

それを聞いたありすが笑顔で『やったー!』というと、背中から勢いよく飛び降り、走り出す。

だがそれを見た翔が危険を察知する。ここはアリーナだ。そして彼女は奥に行こうとしている。

「お兄ちゃんならきつと遊んでくれると思ったの!　じゃあお兄ちゃんがオニだよ!」

「お、おいまて!」

翔の言う事を聞くこともなく、ありすはアリーナの奥へと走り去ってしまう。

たとえNPCでも放っておくのは危険だ。捕まえるしかない。

「追うぞリップ!」

「はい!」

アリーナを走る翔とリップ。ちよつとずるいが悪く思わないでくれ、そう思いながら翔が使うのは『階層データを全表示viewmap○:』。この辺には通路が二つあり、しばらくく進めば合流するという事が分かった。

そしてリップが走ればあの彼女に追いつくことも容易だ。ならばできることは挟み撃ちだろう。

翔がアイコンタクトをすれば、リップはそれに気づき、頷いて別の道へと入る。

だが妙だ。この辺はまだエネミーが存在するはずなのにそれが1体も……いない。

「お兄ちゃんこつちだよー!」

「よそ見はいけません!　お姉ちゃんが通せんぼしちゃいます!」

ありますが『あつ!』と声を上げた時にはもう遅い。リップが両手を広げれば、もう隙間からは逃げられない完全な通せんぼとなる。

少々ずるい気もするが、それがリップなのだ。許せあります。

何とか追いついた翔がありすの肩を触れば少女は『あーあ』と声を漏らす。

「ははは！ リップはすごいだろ！」

「すごいよ！ つかまつちやっただー」

「つかまつちやっただねー」

もう一つの声に翔もリップも目を丸くした。先程までいなかった黒いエプロンドレスの少女がいたのだ。

しかも顔つきまでありすそっくり、傍から見ればありすが二人いるという事になる。

「ねえねえ、今度はあたしのお話、きいてくれる？ あたらしい遊び場にしようたいするわ！」

——ようこそ！ ありすのお茶会へ！

気づけば何かに座っていた。それが椅子だという事には数秒と掛からない。

先程までアリーナにいたはずなのに、ここはまるで宮廷の庭だ。

まるで写真などで良く見る豪華な宮廷の庭だ。そして翔の目に映るのは豪華な椅子。純白のテーブルクロスの上に乗っかっている物は、紅茶やタルト、あとは食パンなり一目見れば美味しそうなものばかりで、しばらく見ていればお腹がすくものばかりだ。

リップは向かい側に座っていた。よく彼女を支える椅子があったもんだと一瞬思ったが、そんなことを口にすれば彼女に何されるかわからないので今思ったことはなしにしよう。

「わたしはあたし」

「あたしもあたし」

ありすたちはずっとお兄ちゃんを見ていたの。彼女たちはそう言葉が続ける。だって翔はありす達と一緒にだから、きつと遊んでくれると思った。

彼女たちはそう言葉を続けている。

なんだろうか、まずい。頭がぼんやりする。

「お兄ちゃん、貴方のお名前はなあに？」

名前、名前、なんだっけ、思い出せない。

ここからぬけ出さないとまずい。名まえが思い出せない。

そもそも、はじめからなまえなんてなかったんじゃないか……？

猛烈な吐き気が襲い掛かる。まるで体中から、体温という体温が抜け落ちた気分だ。

翔が直感で感じる事は、ここには自分達が危ないということだ。

「うっ……お兄ちゃん、ちよつと具合悪くなっちゃったから帰るね。ほんとごめん」

「翔さん、肩貸しますよ！　ここは退きましよう！」

口を押え、まるで本当に具合が悪いようにすると、あらかじめ立っていたリップに肩を貸してもらい。走り出す。

この場所に来てから、妙に悪寒が走っていた。今では自分の名前が思い出せない。

これは明らかに敵の攻撃を受けている。ここはあの子たちの結界……ということだろうか。

そしてその性質は『忘却』。名前も姿も、最終的には何もかも忘れられる。そんな結界。

「翔さん！　無事ですか！」

アリーナから退却した後、リップに下ろしてもらい。肩で息をする翔。

アリーナで戦闘するよりも疲れが半端ない。一息ついたところで自分の名前を確認する翔。

「俺は、寿々科翔。よかつたちゃん覚えてる」

「翔さん……」

翔の微笑む顔を見れば、ほつと息をつくりリップ。自分の名前を互いに確認した後、リップが感じたことを翔に説明する。

彼女たちが発動したのは固有結界というものらしい。術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、内部の世界そのものを変えてしまう大規模な結界のことらしいのだ。

そんなもの大規模な魔術を使うなど……相当な相手のようだ。できればあたりたくないのだが……

そんなことを考えていればポケットの携帯端末から音が鳴り響く。となると自分が次に対戦する相手が決まったらしい。

『2階掲示板にて次の対戦者を発表する』

やはりメッセージにはこう書かれてあった。ならば確認するしかない。

翔がその場から立ち上がり、その掲示板に向かえば、再び紙が張り出されていた。

一つは自分の名前、もう一つは……

「まじかよ……あいつを倒さなくちゃいけねえのか」

紛れもなく対戦相手の欄には『ありす』と書かれてあった文字を見つけたのであった。

マイルームに戻れば翔は頭を抱える。

無垢な子供の遊び程、冷酷なものは存在しないと思う。

可愛がっていた蝶も、愛でるのに飽きると、優雅に飛んでいる生きる手段でもある羽を、何のためらいもなくむしってしまう。

自分も油断していればすっぱりと手足を切り落とされるかもしれない。そんな蝶のように……

正に自分が受けた攻撃はそれであった。自分はもう少しであの少女達に存在を消されてしまうかもしれないのだ。

それはまるで白紙のように真っ白と……

だがそれでもあんなに小さな子も倒さなければならぬとは……

「あの固有結界とやらは厄介だな」

もし決戦場であんなものを使われたら厄介だ。あれをどうにかしなければ存在を消されて即退場だ。

何かしなければ、こちらからは手を出せない。

だが翔の予測だが、あそこで存在を消されるのならもしかしたらそれに抗えるのではないかと感じる。

そんな考えに辿りついたのは、最後に彼女たちが投げかけた言葉

……

『お兄ちゃん、貴方のお名前はなあに？』

思い返す無邪気な言葉。もしかしたら自分の名前さえ分かっている

ればあの結界に抗えるのではないかと考えたのだ。

だがこれが仮にヒントになったとしよう。結界に入れば自分の名前が消される。

自分の名前を忘れない、いい方法を考えなければならぬ。

「……あいつに聞けば分かるかな」

「自分の名前を忘れない方法？　翔くん、もしや君は記憶喪失が進行しているのでは？」

「いや、それとこれとは話が別なだけだよ」

食堂の席で美味しそうに『焼きそばパン』を頬張りながら、白亜は考えていた。

ちなみに、この焼きそばパンは翔の相談料だ。翔から、自身のオススメの品でもある、あの麻婆豆腐を進めてみたのだが……白亜はそれを聞くやすぐに翔に向けて『あんたバカあ？』と言われてしまい、仕方なく、彼女が今まで、よくおいしそうに食べていた焼きそばパンにしたのだ。

なぜここの麻婆豆腐を勧めただけで、そんなこと言われるのか翔にはわからなかったが……

「しかし、記憶を消される結界なんてねえ、アリーナ全体を書き換えちゃうなんて凄まじいことするね全く」

「だから結界の中で名前を思い出せばどうにかなると思ってな」

「そんなの簡単よ」

彼女の明るい返答が帰ってくれば翔が目丸くする。そんな簡単に名前を思い出す方法などあるというのか……？

「手にも書いておけばいいじゃない。子供だましには子供だましをつてやつ」

「手……か」

自分の手を見つめている翔に白亜は微笑む。あまりにも笑顔で白亜から顔をじろじろと見られてしまい、顔を背けてしまう翔。

「翔くん、変わったね。生き残ることを考えるようになったし」

焼きそばパンを食べ終え、食堂を出て廊下を歩く翔と白亜。

しかし、手に書く……か。まさかそういうふうな答えがあるとは思わなかった。

確かに自分の名前を手にも書いておけば、それをきっかけに思い出せるかもしれない。

結界に入った瞬間に消されてしまえばそれまでだが、やってみる価値はある。

とりあえず自分にできることはマイルームに戻って対策か、トリガーの入手のためにアリーナに行くことぐらいか。

だがアリーナにはあの子たちがいる可能性もある。そう考えていれば、ひらりと一枚の紙が翔の目の前に舞い落ちる。それを拾う翔。どうやらトランプのようだ。

『Pussycat pussycat where have you been?』

この文章、訳せば『子猫ちゃん、子猫ちゃん、いったいどこに行ったの?』だ。

この文章は英米を中心に親しまれている童謡『マザーグース』の歌の一つ。だがなぜこの文章が……

翔が考えていれば、コンコンと窓を叩く音が聞こえた。

その刹那、背筋に悪寒が走る。振り向いてはいけけない。振り向いたら……

「お兄ちゃん、見つけたー。お兄ちゃん、ここに秘密の抜け穴があるの。ここから遊び場に自由に出入りできるんだよー?」

「ありす……!」

翔が叫べば、ぼかんとした表情で白亜が翔を見つめる。

白亜はその場所を見て、声を上げる。その場所はユリウスがハッキングし、まだ修復されていない抜け穴のような場所なのだ。

「まずい……! 志波! 逃げ……!」

翔が声を掛けた時にはもう遅かった。竜巻のようなものが発生し、

翔、白亜を飲み込みながら、二人は抜け穴の中に飲み込まれていく。

それに抗う事は出来ずに、二人は為すがままにありすたちによつて

引き込まれていった……

「う……」

翔が目覚めた所はとてつもなく広い空間であった。

外見はとてつもなく広いドーム……と言ったところだろうか。その中心にそびえ立つ塔が一つ、その周囲に同じような塔が複数。それ以外は何もない場所だ。

確かユリウスは、あの校舎をハッキングし、強制的に決戦場へと飛ばしていた。この場所は、見たことない場所である事から本来なら自分達が行けない場所なのだろう。

近くにいた、白亜が目覚めます。彼女が離れずに飛ばされたのが幸いした。

「志波、無事か？」

「おえー……強制的にワープさせられるのって結構気持ち悪いのね」

どうやら自分は相当、ありすに気に入られたようだ。こんな広いドームに招待されるとは思わなかった。

そして彼女たちが何処にいるのかもわかる。

「翔さん、気に入られたんですね。あの子達にすぐく」

「らしいな……」

リップの言葉に翔はそう返答しながら、そびえ立つ塔の一番上に彼女たちはいた。白いエプロンドレスの少女と黒いエプロンドレスの少女、その二人がなにやら手をつなぎ、何か歌を歌いながら。楽しんでいる様子であった。

それを見届けてここから返してくれるのならばそれでいいのだが

……

「そうだあたし。あの子も呼んでみようよ！」

「そうねあたし。いい考えだわ」

二人が楽しげな表情で片手を上げればそこから練られるのは、膨大な魔力の塊……だろうか。

そして現れるのは全身が赤色の巨人。その出現にこの場所の床や

天井、何もかもが揺れていた。

ありす達の目の前に現れたもの、あれは一言で言えば『怪物』だろう。

「一緒に遊びましょう！ ジャバウオック！」

ジャバウオック、それがあの怪物の名前だろう。

本来ならば逃げるしかない敵だろう。だがここは逃げ場のない広場。

どうする。本当に詰みか……？

「お兄ちゃんとは遊びたいけど隣のお姉ちゃんはいらなーい。潰しちゃえージャバウオック」

「ちっ、呼ぶしかないか……！ 来て！ ランサー！」

呼びかけに答えたランサーは漆黒の髪をした、緑色の軽装の鎧のようなものを着た人物。顔立ちは、右目の下に泣き黒子のある美男子といてもいいだろう。その男性が右手の赤く輝く長槍と、左手の黄色く輝く短槍、その二本を構える。

「これは、ずいぶんと大物だ我が主よ」

「お願い、私を守ってくれるかしら」

「当然の事……！」

ランサーが白亜の前に躍り出れば、振り下ろされるジャバウオックの腕を黄色く輝く槍で受け流し、俊足の槍兵は赤の槍の一撃を放つ。

だが直後の光景にランサーは目を細めた。彼自身が予想していた、ジャバウオックを斬り裂くという光景は起こらなかったのだ。

ランサーの赤い槍がジャバウオックに触れた瞬間、あの怪物がただの幻であつたかのように”通過”したのだ。

「……槍が通り抜けるか」

もし貫いていたならば手ごたえは確実にあつたはず。もしジャバウオックを穿つたのであれば、それを貫く鈍い音が響き渡つたはずなのだ。

だから貫いたのではない。槍が通り抜けたのは間違いないようだった。

この事態に驚いているのは誰でもないランサー本人であつた。ラ

ンサーにとつても、これは想定して無かったイレギュラーであるらしい。

「なるほど、あなたはサーヴァントではないという事か。どのような手段で呼び出したかはわからないが、それは0から魔力で編み上げたもの。ならば我が槍が通り抜けるのも納得がいく」

槍を手慣れた手つきで回し、持ち直せばランサーはジャバウオックを見つめる。

存在自体が魔力となれば、ランサーの槍の一本は封じられたようなもの、相性は限りなく悪い。

「邪魔をするの?」

黒いアリスが彼に向けそう発言すれば、ジャバウオックが殺意の咆哮を上げる。翔とリップはそれに身を竦ませるが、白亜の隣に立つのはサーヴァントの三騎士の一人でもある槍の英霊だ。

彼らが身を竦ませるような咆哮など彼にとつては自身に纏う風のようなもの。

そのアリスの言葉に対し、ランサーはまるで挑発するように笑みを浮かべながら、もう片方の黄色い槍の先をジャバウオックへ向ける。

「邪魔をする? それは間違っているぞ。ここでの聖杯戦争は128人のマスター、128人のサーヴァントによる闘争。俺を邪魔者というのであれば、魔力で0から編み上げられたジャバウオックこそ部外者であり、邪魔者。お前の言葉が『失せろ』と同義ならば、まずジャバウオックから自害させ果てさせるがいい」

槍を回し、構えるランサー。相性は限りなく悪い相手ではある。だがこのサーヴァントは三騎士の一人であるランサーだ。

その程度で後れは取らない。ランサーは白亜に一言伝えれば、ジャバウオックへと突進する。

「ランサーはなにを?」

「出口を探してくれだつてさ!」

翔の質問に勢いよく答えると、地面に手を付き、目を閉じる白亜。

ここでの戦いはジャバウオックに勝利することではない。二人で協力してどうかこの、場所を抜け出すかだ。

送られた場所から推測すればどこかに必ず綻びがあることは白亜は知っていた。ここはユリウスがハツキングし、まだ修復されていない抜け穴だ。

問題はそこを探すまでランサーが時間稼ぎできるかどうかだが……

今のランサーでは限りなく分が悪い。

「来るか……い！」

ジャバウオックが腕を振り上げるのをランサーは見つめたとき、彼は即座に動いた。あれはまさに破壊という概念が具現化した何かだ。

あの存在相手ではまともに槍を交える事すらできないのは彼自身が一番わかっていた。

故にランサーはあのジャバウオックと真つ向勝負などという愚は侵さなかった。

周囲にはありす達がいられるぐらいの柱が数本そびえ立っている。その壁を足場とし、ジャバウオックの攻撃を掻い潜りながら、黄色い槍を突き刺す。

「槍の効果は発揮しているようだ。だがこれではきついものがある」
黄色い槍は確かにジャバウオックの右腕を貫いた。だがジャバウオックはそれをまるで気にしないが如くランサーに腕を振り回していた。

だが効き目があると分かっていたれば多少はいい。この黄色い槍の効果は戦闘が長引けば長引くほど効果が発揮される言わばボディブローのようなものだ。

まるでその場所に災害が発生している様だった。ジャバウオックという災害が、ありす達がいる柱以外を残し粉碎されていつている。

あの一撃をひとたびくらえばそれこそ、ランサーが潰されることは間違いない。

「援護しますー！」

「助かるー！」

ジャバウオックの振り回す片腕をリップが正面で受け止める。能力こそ落ちてはいれど彼女の豪腕と爪の破壊力はほかのサーヴァン

トからすれば脅威である。

意を決してランサーへ襲い掛かるジャバウオックの一撃を止める事が出来た。

「はあー！」

リップがジャバウオックの一撃を押し返した際に、ランサーは黄色い槍をジャバウオックへと伸ばした。

狙うが先はジャバウオックの足元。いくら強靱な肉体を誇るジャバウオックでも足への一撃は大きい。深々と足へ槍が刺さり、ジャバウオックは地面へ転がる。

いつもならこの場で止めを刺しておくのだが、今のランサーの槍ではジャバウオックに致命傷を与えられないのは本人が一番わかっていた。

「どうやらあれを倒すには特定の道具が必要らしい。」

「なのでランサーとリップは後退し、様子をうかがった。」

「主よ、状況は」

「見つけたわよ。でもあの高さじゃランサーの槍でも……」

白亜が見つけたデータを今いる人に送り、それをリップ、ランサー、翔が見つめる。

彼女の見つけた空間の綻びは遙か上空に存在する。そこに大きな魔力の一撃を食らわせれば転送コードを用いて脱出できるが、あまりにも高度が高すぎるためこれではここからランサーが跳躍し、空間に一撃を与えても綻びを斬り裂く一撃にはならないのだ。

「令呪を使うしか方法がないのか……白亜が苦い表情で左手を見つめていると……」

「いや、一つ方法がある。リップ、一回戦の時のあれ。できるか？」

突然、翔が放った言葉に白亜は目を丸くする。転倒したジャバウオックが起き上がりつつある。

理由を聞きたいが、今はそんな時間すらも許してくれないらしい。

「いいわ、翔くん。それでやってみて。時間がないの」

「ああー！」

彼がやろうとしていることをリップは理解している様だった。

まさかメルト以外にこれをする事になるとは、彼女でも思っていなかった。

だがやらなければ、翔が死ぬ。それだけは許してはならないのだ。

「ランサーさん！私の腕に乗ってください！」

「……そういうことか。了解した！」

彼女がやろうとしているのは一回戦でライダーに放ったリップのロケットパンチ。その応用だった。

彼女の腕は巨大だ。下手すれば人、一人は乗れるサイズはあるであろう。

そこにランサーを乗せ、途中までは彼女のロケットパンチの推進力で移動。その後ランサーが一気に跳躍、その綻びに穴をあけるという作戦だ。

それが成功するかはわからない。だがそれしか方法がないのもまた事実。

「行きます！振り落とされたら知りませんからね！」

彼女の掛け声と共に巨大な金色の腕がランサーを乗せ、空を舞う。

チャンスはこの一瞬。それに全てを賭ける。

そしてランサーは確信した。この距離ならば自身の跳躍力のみでいけると……

「穿て……！我が槍よ！」

ランサーが跳躍する。紅く輝く魔力を噴射させ、ランサーが宙を舞う。狙うは一点。

渾身の一撃を込め、赤い槍を前へと向ける。

赤い閃光が綻びに穴をあけたのは白亜達の距離でも十分に分かった。

綻びに穴が開き、そこから光が漏れる。それを見届けた白亜は即座に転移のコードを打ち込む。

「ああ、逃げられちゃった。あの子も寂しそう」

「また一緒に遊べるわあたしありす」

ジャバウオックが起き上がったころには、翔達の姿は光となって消えた後だった。

それを見届けたありすが残念そうにがつくりと首を落とす。

ありす達が残されたこの場所には、静寂のみが漂うのみ。

「さあ、本をまた読ませて。あたしはあたしのお話好きよ」

「うん！　じゃあ穴に飛び込んだ白兔の話の続きをするね」

ありすが笑顔を浮かべれば、黒いアリスに話の続きを読み聞かせる。

そのお話を聞いている黒いアリスは嬉しそうに笑うのであった。

第13話 二人のありす

ふと、誰かに呼ばれた気がした。

普段はめつたに通らないはずの3階の廊下だ。

なんも変哲のないただの廊下。なのにとても気になる。

翔は白亜と別れた後に、どうしよもない感覚に包まれてこの廊下を歩いていた。

自分はありませんと戦う。そしてあんな若い少女を自分の手で殺めなければいけないのだ。

覚悟はしたつもりだった。でもどこかで割り切れていない自分がそこにいる。

なので少し散歩をしようと思い、普段は歩かない場所を歩いていたのだが……そこで誰かに呼ばれた気がしたのだ。

目を凝らせばうつすらと遠くに人が見えている気がした。

それは白衣を着た存在の薄い男のようだった。

普段なら気にならないはずなのだが、その男はどうしても気になった。

ゆつくりと男は翔に近づき、直ぐ近くまで来たところで、消えた。

「あ、なんだありや……」

「サイバーゴーストですね。今のは」

「うお!? なんだレオか。脅かすなよおい……」

凜とした声で飛びのいた翔。いつの間にか隣にレオが立っていた。

間違いなく後ろから歩いてきて翔を見つけたのだろう。そして彼もまたあの白衣の男の幻を見たのだろうか。

「サイバーゴースト……?」

「はい。セラフには何千、それこそ何兆という生命の記憶があります。

それは細菌から人間まで様々。原始海洋の有機物の中から単細胞の生物が生まれ生と死の連鎖が、やがて人を生み出した奇跡に比べれば、あらかじめ設計図が用意されているセラフの中で疑似的生命が生まれることは、それは不思議ではないかもしれませんね」

「……すまん、よくわからない」

「おや、わかりずらかったですか？ 簡単に言えば生きて肉体を持たない死者の記録。無害のデータと言えはいいでしょう。気にする必要はありませんよ」

つまり、無害という事なのか。かつて人間だったころの記録。それがふと現れたという事か。

ならばなぜ自分を呼び止めたのかが気になる。生きている頃を思い出してふと声を掛けてしまった……？

ならばそれはそれで、自分はただ呼び止められた、ただの人間という事になるが。とりあえずこの考えはよそう。変なものまで連れてきてしまいそうな気がする。

「ありがとうレオ。あんなの見ちまったから、もしかしたらあっちの世界に連れて行かれるのかもって思ったぞ」

「ははは、面白いことを言うのですねあなたは。間違ってもそんなことはありませんよ。それではまたどこかで」

笑顔で、お辞儀をするとレオはどこかへ歩いて行ってしまう。その場所が気になるところではあるが、王の隣を歩くとか翔にとつては考えられないことだ。間違いなく自分の胃が張り裂けてしまうだろう。それだけはおめんなので、翔もまたマイルームへと戻っていった。

「いやー翔くん。意外に普通なんだね部屋の中」
「悪かったかよ」

翌日、白亜がリップの使っているベッドに腰掛け、足をぶらぶらさせながらそのようなことを言う。

彼女から連絡があったのはつい数分前だ。

白亜曰く、翔の対戦相手の事だ話があるらしく、自分の部屋を借りたいとの事であった。

彼女とはいつか戦うかもしれない敵同士ではある。だが今の段階ではあまりにも情報が少なすぎる。

本来であれば断つても良かったかもしれないが正直、情報が一つでも欲しいことは事実だ。

大丈夫ではあると思うがリップに警戒させ、翔はそれを聞くことにしたのだ。

「そんじやあ翔くん。あの子と手合せして少しだけど……あの子の事、分かったわ」

リップと翔は目を細める。

白亜のいう事はこうだ。固有結界を使うと思っていたから、相手のサーヴァントはキャスターだと思った。

だが彼女が呼び出したのは『ジャバウオック』。あの凶悪な性能は最早バーサーカー並だ。サーヴァント二人でも歯が立たないことから性能はバーサーカーの中でも上位に入るといふ事。

「つまり、ありすのサーヴァントはキャスターとバーサーカーなのか？」

「違う。ランサーも言っていたけどあのジャバウオックはサーヴァントじゃないわ。手ごたえが今までの敵と違ったそうよ。それに……」

白亜は付け加える。あの場には翔と白亜。そしてもう一つの令呪の反応しかなかったというのだ。

となると、彼女たちは双子のマスターではない。つまりどちらかが偽物という事だ。

「ムーンセルの記録をちよこつと調べてみたけど、過去の記録では見つけられなかったわ。あんな強力な怪物も使えて、固有結界も展開できるサーヴァント。それはそれで凄まじいけどさ、そのサーヴァントにちゃんとした魔力を供給できるマスターも規格外よね」

白亜が言うにはサーヴァントが固有結界などを作ることの特化した英霊でも、結局その負荷……所謂、魔力消費はマスターにもかかる。生きた人間では、それぐらいの負荷がかかれば脳が焼き切れてしまいうらしい。

となれば、なにか秘密があるはずだ。たとえば、ありすの魔力を補助する何かがあるとかだ。

ふと、翔は今日、レオと話したことを思い出した。

なんで、そのようなことを今のタイミングで思い出したのかはわからない。

もし彼女が本来の肉体を持たないゴーストのような存在だとしたら……

そんなことはありえないだろう。でも、そんなことを考えてしまった。

だが、それもある意味疑問の一つだ。

「なあ、志波。もしサイバーゴーストとか、データだけの塊の場合はどうなる？」

「うーん、その場合は肉体による制限を受け付けられないも同然だから、規格外の魔力も納得はできるんだけど……翔くんは、あの、ありますが元から死んでるとも言いたいのかな？」

「いや、単に気になっただけだ。気にしないでくれ」

とりあえず、白亜の助言のおかげであのサーヴァントのクラスを掴むことはできた。

クラスはキャスター。あの黒い方のありす、という事で間違いないだろう。

となると次は、あのジャバウオックについて調べなければならぬ。

あのジャバウオックという化け物は、白亜のランサーと自分のリツプ2人相手にしても、余裕だったのだ。

ジャバウオックに対して白亜のランサーの槍、その一本が通らなかつたという、イレギュラーが発生はしたものの、白亜ではなく他の人物と一緒に共闘しても結果は同じであっただろう。

これは図書館辺りで調べるのが一番良い方法なのだろうか。

白亜が別れの言葉を言い、自分の部屋から出ていき、翔もまた図書館に行こうと部屋を出たところに、白いエプロンドレスの少女がこちらを見つめ走ってきた。

間違いなく彼女はありすだ。

「あ、お兄ちゃん！ 今日遊ぼう！ 今日、学校でかくれんぼがしたいな」

ありすの遊びに乗るか、どうしようかと悩む翔であったが、霊体化している状態のリツプが自身の脳内に声を掛けてくる。どうやら、彼

女に何か考えがあるらしい。

『翔さん、もしかしたらチャンスかもしれないよ。あの子には申し訳ないですけど、こっちが遊ぶフリをして探りを入れるというのはどうでしょうか』

確かにそれはいい案だ。何せ相手は子供なのだ。その純粹さに付け込む……と言いつつ方を変えれば悪くなってしまいが、良い情報が手に入るかもしれない。たとえばあの怪物を何とかする方法とかだ。

まあそれが一番欲しい情報ではあるのだが、果たして彼女がそれを言ってくれるかどうか……

リップの言葉に翔は静かにうなずくと、ありすに向き直る。

「ああ、いいぜ。となると前に俺がオニをやったから、ありすがオニになるのか？」

「違うよ。お兄ちゃんが鬼だよ！　じゃああたしありす隠れるからちゃんと見つけてね！」

そういうと、こちらの意見を言う暇もなくぱたぱたと走り去ってしまふありす。

たまには隠れる側もやってみたかったというのもあるが、まあ年齢的に考えてこっちが鬼になるのは仕方がないだろう。

「しようがねえ、行くぞリップ」

「はい！」

『学校でかくれんぼ』というならば、校舎のどこかにいるはず、アリーナに行ったりはしないだろう。

翔とリップは、ありすを探すことにした。

そして探し回る事、数十分……

見つけた……この学校というところには似つかわしくない、大きくフリルの広がった白のエプロンドレスみたいな姿。

間違いない、ありすだ。

「よっしゃ！　ありす見つけた！」

「あ！　見つかったやつ……」

アリーナの死角に当たるところに彼女はいた。まさかよく人が出入りするところに彼女がいたとは……このあたり、できるなど翔は感心しているところに彼女から声が掛かる。

「じゃあぐ褒美に、お兄ちゃんの願い事何か聞いてあげる。何がいい？」

おお、これはいいチャンスだ。

二人のアリスについて聞こうと思ったが……これは除外しよう。

もう正体はわかっているようなものなのだ。となれば問題はあの怪物。ジャバウオックを何とかしてもらおう事だ。

なんて言おう、『あのお友達を倒したいんだけど』。いや、これでは駄目だろ。

数分、悩みだした答えは……

「じゃあ、あのお友達をどかしてほしいな」

「お友達？ それはあの子に聞かないと分からないわ」

あの子、というのは間違いなくあのキャスター。黒いアリスだろう。

駄目だったか、翔ががつくりと肩を落とすと、ありすはなにか思い出したように、表情が明るくなる。

「あ、そうだ。じゃあ今度は宝探しね。『ヴォーパルの剣』を見つけたら、きつとあの子もどいてくれるわ！ えっと、特別にヒントもあげる！ 『ヴォーパルの剣』はただアリーナに行っても見つからないわよ」

ありすが言葉を続ける。

「それは、どこにあるかもしれない架空の剣。さあ、どうやって見つけたらいいでしょう。じゃあがんばってね！ バイバイお兄ちゃん！」
別れを告げれば彼女はパタパタと走り去ってしまふ。うまく情報は引きだせたようだ。しかし『ヴォーパルの剣』……架空の剣など、見つけるなんてできるのだろうか。

悩んでいれば霊体化を解除したリップが翔の目の前に現れる。

「良い情報ですよ！ その『ヴォーパルの剣』を見つければジャバウオックも倒せますね！」

「見つけなきや話にならねえけどな？」

ともあれ目的が更新された。次の目的は『ヴォーパルの剣』を見つけることだ。

確か『ヴォーパルの剣』は鏡の国のアリスで出てきた剣の名前だった気がするが……架空の物をどうやって見つけなければいいというのだ。とりあえず気になった時は図書館だ。あそこなら手がかりを得られるかもしれない。

図書館に入り、探してみても数十分、ようやく見つけた。

なにせセラフが用意した図書館だ。情報の宝庫過ぎてどこに何があるかわからない。

今回もまた運が良かったと言えるのだろうか。

そこにはこう書いてあった。

『荒ぶる思いで歩みを止めれば、燃え滾る炎を瞳に宿したジャバウオック。』

鼻息荒々しくタルジの森を駆け下り眼前に嵐のごとく現れる。

一撃、二撃！ 一撃、二撃！

ヴォーパルの剣で切り裂いて、悪たる獣が死するとき、その首持って、意気揚々と帰 路につかん』

翔が手に取った本はルイスキャロルの有名な小説『鏡の国のアリス』。その中の一つ『ジャバウオックの詩』だ。

ジャバウオックはヴォーパルの剣により命を絶たれた怪物。確かにありすの言った通り、そのヴォーパルの剣さえ見つけ出せば、ジャバウオックを倒せるかもしれない。

だがそう簡単には見つからないだろう。なにせあれは架空の剣なのだ。どうやって見つければ……

「おや、お悩みの様ですね。なにかあったのですか？」

「お前は……レオか。ああいや、ヴォーパルの剣を探していてな」

翔が頭を抱えていれば、レオが図書室に入って来て、翔に声を掛ける。

やはりハーウェイ家の次期当主といえど、調べ物をしにここに来たのだろうか。

どちらにしろ、彼がここに来たのは予想外であった。

「ヴォーパルの剣……理性のない怪物に有効な概念武装ロジックカンサーですか。作るにしても錬金術アルケミーの領域です」

レオが翔に話していれば、彼の視線が別の方に向き、微笑みながら軽く手を振る。翔が目を見れば、かつてロビンの情報をくれた少女ラニが奥にいるのが見えた。

「ちようどあそこにいるのがアトラス院の方ですね。アトラス院は占星術と錬金術に通じていると言われています。一度聞いてみたらどうでしょうか？」

「ああ、そうさせてもらうさ。ありがとなレオ」

レオに別れを告げ、ラニのもとへと歩みを進める翔。しかしアトラス院というところが占星術のほかにも錬金術に長けているとは思わなかった。あのレオが言う事なのだ。間違いではないだろう。

ラニの元へ寄れば彼女が何やら本を読んでいる様だった。翔の存在に彼女が気づくと、本を閉じ、ペこりとお辞儀をする。

「ごきげんよう。星は常に事象を照らす。私に何かご用ですか？」

「ごきげんようラニ。質問だけど『ヴォーパルの剣』について聞いたことではないか？」

「ヴォーパルの剣ですか、聞いたことがあります。特定対象のみ有効な魔術武装ですね。錬金に必要な素材……そうですね、例えば『マラカイト』などがあれば錬成は可能でしょう」

「その剣が必要なんだ。錬金術で作れないか？」

翔の言葉にラニは考える仕草をする。

ラニは、彼女が勝ち進み、翔が勝ち進めば、いづれ対戦者になる相手、マスターの一人なのだ。

例え『マラカイト』を持ってきてラニに、ヴォーパルの剣を錬成する術があったとしても、こちらを助ける理由がない。

正直、賭けのような事だ。ここでラニが断れば翔は再びトリガーを探しつつ、あのジャバウオックを倒す方法を考えなければならぬ。

その時、不意に後ろから幼げな声が掛かる。

「あつた！ この本探していたんだ！」

「うお、ありす!？」

後ろを振り向けばありすが翔が持っている本を、目をキラキラさせながら見つめていた。

「どうやらこの本が欲しいらしい。」

まあ情報は分かったし、なにより少女の願いをかなえてやるのもいいだろう。

「これか？ ああこれ、うん。ありすにあげよう。でもこれ借り物だからな。読んだらちゃんと返すんだぞ？」

「わーい！ ありがとうー！」

そしてありすがパタパタと後ろを向けて走れば、その姿が一瞬にして消えた。

その速さは霊子ハッカーとして考えると、桁違いの能力。慎二などとは比較にならないと言ってもいいだろう。

一瞬で自分達の目の前に現れ、一瞬で消える。それはきつと学園サイドのセキュリティなどすり抜けてしまうような感じさえする。

その行動はどう見ても……

——亡霊だ。ゴースト

「今のが寿々科翔の対戦相手ですか？ 生きた人間の電脳的揺らぎを感じ取れませんでしたが……」

「そうだ。彼女が対戦相手だ」

わかりたくないが、少しだけ、ありすの核心に近づいた気がする。だがそれが本当なのかわからない。仮に当たっていたとしてもそうであってほしくない。

だってそれはあまりにも、残酷すぎる。

「いいでしょう。あの子供の星にも興味がわきました。『ヴォーパルの剣』を錬成してみましよう」

「いいのか？」

翔の言葉にラニはこくりと頷く。トリガーも取らなければならぬ。

ここでラニの協力を得られたことが大きいだろう。
そして彼女は懐から緑色に輝く宝石を取り出す。

まさかあれがマラカイト……もう既に持っていたというのか……？

「あなたが来る少し前に、白い髪の女性から手渡されました。これを自分に為に使うか、他人のために使うかはあなた次第と、私はこれを寿々科翔に使います」

白髪の女性。となるとマラカイトを渡したのは白亜という事なのだろうか。

だがもし本当に彼女だとしたら……ふと違和感を覚える翔。

偶然なのかもしれない、だとしてもあまりに都合がよすぎる。彼女はなぜ自分にこんなに手を貸してくれるのだろうか……

今回もそうだ。まるで分かっていたかのようにラニに、マラカイトを渡したようにも感じたのだ。

「よし、トリガー一個目入手つと」

ラニに感謝の言葉を言い彼女と別れた後、アリーナにてようやく一個目のトリガーを入手した。

今回はトリガー入手がだいぶ遅れた。恐らく余裕もなく二個目のトリガーもすぐに生成されるはずだ。

だがひとまず、あとは帰るだけ。その時に一瞬で目の前に白いエプロンドレスの少女がやってきた。

また一瞬だ。そんな考えを遮るかのように、ありすが翔の所へ駆け寄る。

「あ、お兄ちゃん！ お兄ちゃんお兄ちゃん。もつと遊びたいけど、今日はありすの話をするね」

「うん？ 今日にはありすの話聞かせてくるのか。そりゃあ楽しみだ」

だが翔の聞く内容は、あまり明るいものではなかった。
ありすはずつとむかしは違うところに行きました。

それはこことは違う国。

毎日楽しくご本を読んでいたのに……

戦車とか飛行機とか鉄のかぶとと鉄のてっぽう。

黒い四角の国がやってきて……

空はまっかつか。

おうちはまっくろになって、ありすはまっしろなおへやにつれていかれました。

そこはたのしくないばしょでした。

まいにちかわらない。たのしくあそべない。

おともだちもいない。パパとママもいない。

あるひがまんできないくらいいたいことがあって……

「気がついたら月の中にいたの。でもいいんだ。ここはとつても楽しいわ。それにお兄ちゃんがいる。お兄ちゃんはようやく出会えたありすの仲間なもの」

「ありす……」

ああ、わかつてしまった。

彼女の謎の正体が見えてきた。

デフォルト 始まりで彼女は死んでいる。つまりありすの身体は……

——もうこの世に存在しない。

ムーンセルはなぜこんな少女を対戦相手に選ぶのか……

きつと隣にいる、ありすは、死んでいることに気付いてさえないだろう。

ありすは長い夢を見ている。

それを覚まさせてしまつていいのだろうか。

翔は思い返す。今までの対戦相手を……

自分はこれまで相手が強大だったからこそ必死に戦えた。

ダン卿も、慎二も、自分よりはるか各上の相手だ。

だが今回は立場が逆だ。

「じゃあね。お兄ちゃん」

「ああ、またな」

アリーナから出た所で、ありすがパタパタと走って行ってしまう。

ダン卿も慎二も聖杯に願望を持ち、自分に立ち向かった相手だった。

だが、ありすは……？

彼女は聖杯戦争に自ら進んで飛び込んできていない。

彼女にとってそれこそ絵本の中の物語だろう。

自分に……あの子を倒す事などできるのだろうか……

翔は複雑な顔をしながら、走っている、ありすを見つめていた。

第14話 誰かのための物語

「トリガーは……これで二つ。三回戦もいけそうだ」

アリーナにて二つ目のトリガーを入手したとき、翔はふと黒いアリスを思い出す。

あの二人はまるで鏡のような存在だった。

鏡の国に移ったあたり。

誰もがきつと一度は思う物語の主人公。

もしあの黒いアリスが本当に架空の存在だとしたら……？

彼女のサーヴァントは物語が生み出した架空の存在。架空の存在を英霊にしたサーヴァント。

「もしあのアリスが本当に架空の存在だったら……」

「ありすのための物語、『誰かの為の物語』^{ナイスリータイム}ってことじゃないですか？」

「うまいこというなりッ。そうだな、もしあの黒いアリスに名前を付けるとしたら、きつとそうなる」

だが確定したわけではない。翔はありすを探し出す。

そして今まで浮かんだ数々の結論を確定する。今日で6日、決戦は明日なのだ。

白亜と共闘したジャバウォックはあれ以来姿を見せていなかった。恐らく決戦で間違いなくあれを使ってくるだろう。

その対策も考えなければならぬ。もう時間はあまり残されていないのだ。

翔は考えながらアリーナの出口をくぐると……

「うおお！」

「あ、お兄ちゃん。どうしたの顔が怖いよ？」

目の前に白いエプロンドレスを纏った少女。ありすがいた。

まさかアリーナから出て目の前にいるとは思わなかった。

だがこれで探す時間が省けたというもの。

答えてくれるかはわからない。だけど問わなければならない。

怪訝な顔をするありす。これを付き付けるのはあまりにも残酷だろう。

明日には敵同士なのだ。なのに心が痛む。

「なああります、お前は……」

「あたしはありますの夢。ありますが読んだお話の姿」
「!？」

全く予測もしていなかった声。その声があったと同時にリップが実体化し、翔の側面を守るように立つ。

リップの目の先に移るのは、本人ではない黒いもう一人のアリスが立っていた。

「……ありますが望んで聖杯が答えたお友達」

ジャバウオックもお友達だよ。

けどあの子はサーヴァントじゃない。

あの子はアリス。

アリスはあります。

ありますアリス。

全く同じ声で交互に喋るが、最終的には意識が混濁してくる。

まさに鏡。彼女たちはまるで一枚の鏡のような存在だ。

これで確定した。誰もがきつと一度は思う物語の主人公。

あの黒いアリスは架空の存在。

彼女のサーヴァントは物語が生み出した架空の存在。架空の存在を英霊にしたサーヴァント。

そんなことは構わず、目の前の少女はにこりと笑う。

これが戦いじゃなければどんなによかったことだろう。

「いよいよ明日だね！お兄ちゃん！新しい遊び、楽しみにしててね！」
「楽しみにしててね！」

ありますアリスはそんな言葉を残しながら目の前から消える。

決戦前でこんなことを思うのは駄目だと思う。だが思ってしまった。

——倒せるのか？

だが一人じゃない。

自分にはパッションリップという強力なパートナーがいるのだ。リップは見つめている翔に気付いたのか、にこりと笑うリップ。

自分は一人じゃない。挫けそうになる心は奇跡的にも彼女が支えてくれているようなものだ。

そんな彼女に感謝しつつマイルームへと向かった。

「決戦前にあの子達の正体が分かってよかったですね。あとは正面からぶつかり合うだけです!」

「はは、まあな。正面からの突っ張り合いはお前の得意分野だしな」「お任せください!」

マイルームにて元気に腕を振り回すリップ。

やめてくれ、そんなことをしてこの部屋が壊れても俺は責任は取れないぞ。

決戦前だというのに、別の事にひやひやさせられながら、情報を整理する翔。

「翔さん。あの子達の事、かわいそうだと思いますか?」

腕を振り回すのをやめ、翔に向き直るリップ。

正直に言えば、戦いたくない相手だ。

ダン卿も慎二も聖杯に願望を持ち、自分に立ち向かった相手だった。

そしてその実力は強大だった。だからこそ必死に戦えた。

「正直に言うと、そう思っている。だからこそどうすればいいかわからない」

「だったら次の戦い、絶対に勝ちましょう」

予想外の言葉に翔は目を丸くする。彼女はなにかあの、ありす達に對して思うところがあるのだろうか……

「私は頭がいい方じゃないからよくわからないけどこれだけはいえます。彼女たちは、この月の聖杯戦争という悪い夢を見続けているんです。一回戦の人も二回戦の人も彼女を倒す事が出来ず、未だ彼女は悪い夢を見続けている。だから私達で終わらせるのが、せめてもの彼女達への手向け……じゃないんでしょうか」

「リップ……」

「私も悪い夢なんて見ていたら、誰か覚まさせてくれって思っちゃいますから」

最後にニコリと笑うリップ。確かに言われてみればそうだ。彼女たちは残酷なこの月の聖杯戦争という悪い夢を見ているのだ。

自分達が彼女の描く絵本の最後のページにならないといけないのだ。

そうでなければ彼女たちはこれからもずっとこの夢を見続ける。

リップに助けられるのはこれで何度目だろう。心に張り付いていた重い何かが取れる音がした。

自分に向けて無邪気な笑顔を向けてくる相手を倒さなければいけないのは心が痛むが、乗り越えなければ自分の命がなくなるのだ。

それこそ、最初に放たれた結界のように……

突きつけられる選択。それはきつと、とても残酷だろう。だがそれでも負けるわけにはいかない。

「リップ。情報を整理しよう」

まずはありますが『お友達』と呼んだあの怪物。

あの生物の名前はジャバウオック。リップと白亜のランサー二人で挑んでも勝ちには至らなかった相手。

あの凶暴さ、破壊が形を取ったような相手。あれを初めはバーサーカーだと思った。

間違いなくありすは、あのジャバウオックを決戦でも使ってくるだろう。問題はどうかやってヴォーパルの剣を当てるかだが、そこは後程考えよう。

「翔さん、志波さんからのアドバイスは覚えていますか？」

「勿論だ」

当然覚えている。あのアリスが固有結界を張った時の対処法。

その力は自我と共に存在を消滅させるもの。

ありすは、人の名前が分からなくなるとだけしか言わなかったが、そんな生易しいものではない。あれは自我と共に存在を消滅させる結界だ。

あそこに長時間いればいるほど、こちらが不利になり最終的には負

ける。まるで猛毒のような結界だ。

そこで白亜がくれたアドバイス。それを使う。

『お兄ちゃん、貴方のお名前はなあに？』

あの時ありすが放った無邪気な言葉。もしかしたら自分の名前さえ分かっていればあの結界に抗えるのではないかと翔は考えたのだ。

そして最後、白亜のランサー言っていたジャバウオックはサーヴァントではないという言葉。

そう、仮にあのジャバウオックをサーヴァントだとしよう。

そうするとありすは双子のマスターという事になってしまう。聖杯の定めた定義ではマスターとサーヴァントは一对。

そして白亜が自分のマイルームで言っていた言葉、令呪の反応が自分を含め、翔ともう一つの反応しかなかったという言葉。

そこから導き出される答えは……

「全てが同じモノか……」

ジャバウオックも固有結界も、あの黒いアリスがしたことなのだ。

そこまでできるといふ事は間違いなくそれが彼女の宝具であることは間違いないだろう。

そして……翔は二人のありすを思い出す。

あの少女自体がサーヴァントに取り込まれてしまっているのだろう。

ありすのサーヴァントはありすの夢がなければ動かない。

その逆もまた然り……あの、ありす自身もまたサーヴァントがなければ生きていけない。

おそらくは戦争か何かで死に伏した少女の想いの終着点。

少女が望んだ最期の希望。最後の夢をかなえる泡飛沫のような存在。

それがあの黒いアリスの正体。

あれが何と呼ばれるのかはわからない。

あえて名付けるなら……ありすのための物語、『ナーサリー・ライム誰かの為の物語』だろう。

「ようこそ、決戦の地へ。扉は一つ、再びこの校舎へ戻るのも一組。覚悟を決めたのなら闘技場の扉を開こう」

この言葉を聞くのは三回目、言峰の言葉に頷き、翔は二つの暗号鍵トリガーをセットする。

言峰が横に立ち、翔とリップは扉の中に入っていく。

いつもなら、この後、目の前に対戦がいるはずだ。

だが……この日は何もかもが違った。

目を開く翔。何か違和感を感じる。ここはエレベーター。翔の目の前には攻撃防止用の障壁がそびえ立っている。

だが目の前に、ありす達は……

「いない……!?!」

身構える翔とリップ。本来なら対戦相手が目の前にいるはずなのにそれが存在しない。

『あ、お兄ちゃんたち来てくれたんだ！　じゃあ、また遊べるね!』

『きょうはなにをして遊ぶの？　かくれんぼ？　オニごっこ？　おままごと?』

だがこのエレベーター内に響くように聞こえるのは、間違いなくありす達の声だ。

どこかにいるはずなのに、どこにもいない。

決戦前に分かったことといえば、ありすはサイバースト。

その存在ともなれば、エレベーター内で姿を隠すことなど造作もないという事なのか……

『あ、じゃあかくれんぼにしよう！　ありすはもうお城にいるから』

お城……?　彼女たちは既に決戦場にいるというのか。

エレベーターを介さずに、そのようなことまでするとは……やはりこれも、ありすがサイバーストであるからだろうか。

『そうだね。あたしたち、だれの目にもとまらないのはとくいだもんね。そうして探しているところ、首をちょんぎっちゃうの』

『……ちょんぎっちゃうの?』

『うん。ゲームでダメな人はちょんぎっちゃうの。それが

『ファンダーランド』のルールだもの。だから見つけてくれないお兄ちゃんはやっつけちゃおうね』

首をちよん切るとはまた物騒な……

だが、それを平気で笑顔でやってしまうのが、ありすなのだろう。しかし、本気で首をちよん切られればこちらの命がないので別の遊びを提案するのでもいいかもしれない。

「なあ、ありす。別の遊びにしないか？」

『じゃましないでよ。お兄ちゃんとはもう話してないよ』

『ええ、あたしはあたしと話しているだけだもの』

『そうだよ。あたしはあたしだけと話すの』

せっかくなじだと思っただのに。

ようやく、おなじひとだとおもったのに。

やつとやつと、さみしくなくなるとおもったのに。

わたしのコトをきらうなら、お兄ちゃんなんていららないの。

彼女、ありすは言葉を続ける。ありすはずっと一人なのだ。

今もムーンセル聖杯戦争という悪い夢を一人で見続けているのだ。

夢はいづれ泡飛沫のように消え、目覚める。2回戦までの人達はあ

りすの夢を覚まさせることはできなかった。

心が痛む、胸を抑える翔。だからこそ自分達がありすの夢を覚まさ

せてやるのだ。

『そうよ。あたしはあたしだけいればいいの。だってあたしはあたし

だけのあたしだもの』

『お兄ちゃんはあたしだけのあたしじゃない。だからお兄ちゃんも

ういらぬの』

『そう。もうじゃまなの』

まるで飽きたおもちゃ道具を捨てるかのような言葉だ。

本当に無邪気で残酷。油断すれば生きる手段の羽をむしり取られた蝶のようになってしまうのは明らか。

彼女たちからすればこれは『戦い』ではない。これは『遊び』なのだ。

翔が考えている間にエレベーターが止まる。どうやらついたよう

だ。

『……でも、お兄ちゃんが遊びたいっていうんだったら、今日だけは
いっしょにあそんであげるね』

『やさしいねあたし。だからあたしも遊んであげる』

『いっぱい遊ぼうね。もう逃げ出しちゃイヤだよ』

誰が逃げ出すものか。必ず、ありすを見つけ出す。

そしてこの戦いを終わらせる。それがどういう意味かわかってい
るとしても、やらなければならぬ。

翔はエレベーターの扉をくぐる。

扉をくぐり抜ければ、全身に感じる突き刺すような寒さ……

「ここが決戦場か……！」

「データが書き換わってる……ここまでなんて……！」

リップと翔が驚きの声を上げる。

エレベーターを抜け、彼らの目に映ったのは決戦場の光景ではな
かった。

極寒の地、遠くに見えるのはお城だろうか。息が詰まるほど激しい
雪と風の中、彼は遠くの城を見つめる。

寂しいアナタに悲しいワタシ。最期の望みを叶えましょう。

戦いの火蓋はここに切って落とされた。

第15話 永久機関・(クイーンズ・)少女帝国 (グラフィック)

『あわれで可愛いトミーサム、いろいろここまでご苦労さま、でも、ぼうけんはおしまいよ』

”だってもうじき夢の中。夜のとぼりは落ちきった。アナタの首も、ポトンと落ちる”

”さあ——嘘みたいに殺してあげる。ページを閉じて、さよならね！”

「翔さんは、私が守ります。誰が首なんて落とさせるものですか……！」

決戦場全体に響き渡る声。アリス達はこのどこかにいる。

まずは彼女たちを探さなければ話にならない。

『階層データ全表示
view | map (.)』

翔がコードキャストを発動させれば、頭に流れ込む情報。それをデータ出力し、マップ表示させればこの決戦場全体のマップが現れる。

マップに移るのは広大な雪原と、真ん中に佇む城のみ。間違いなくアリス達がこの階層のデータを書き換えたのだろう。

広大な雪原、そこにそびえ立つ城を目指し歩く翔とリップ。

——ここでは、だれもがただのモノ

——鳥は鳥、人は人でいいじゃない

——お兄ちゃん、貴方のお名前はなあに？

頭の中に響く声、それと同時に響く頭痛。

まるで頭の中から、何かが抜き取られていくような感じだ。

前にも同じような感覚に陥ったのを翔は思い出す。

あれは、いつだっけ。

「翔さん！ あなたの名前を思い出せますか！ 右手に残しているでしょう！ それがあなたの名前です！」

陣地作成に置いて、かなりの手慣れ、もう彼女たちの結界に入つて

いる。

しかし、なまえてなんだっけ。となりのかのじよはだれだっけ。かのじよはだれと、なにとはなしているんだろう。

「なまえ……」

右手に残された希望。翔は自分の右手を見る。

青く静かに燃える炎。これはいわゆるメモ帳のような役割を果たすやつだ。

それを静かに見つめる翔。見えるのは漢字の羅列。

ああ、そうか。思い出した。

俺のやるべき事、右手に灯された希望。

「俺の名は、『寿々科 翔』」

翔が自分の名前を口にする、張りつめていた空気が一気に弾け飛んだ気がした。

間違いなく敵の結界を無効化したのだ。

白亜の言っていたことは間違いではなかった。彼女に感謝しながら、城を目指し、走るリップと翔。

——手に名前を残しておくなんてずるいわ

——そんなずるいお兄ちゃん、あの子にお仕置きしてもらいましよう

——首を刎ねてしましましょう

「翔さん、あの怪物の気配です。来ます！」

アリスの言葉と共に現れるのは、白亜とのランサーの共闘の時に見た怪物『ジャバウオック』。

あの災害が、地面から雪を引き裂くように現れ、即座に後退する翔とリップ。

だが少しばかりか、あの共闘の時より動きが鈍い気がする。

ジャバウオックの攻撃を回避し、爪で胴体を斬り裂くリップ。

「ランサーさんの槍が効いているみたいですね。今は感謝するばかりです」

険しい顔つきでジャバウオックを見つめるリップ。どうやらあの怪物には再生能力が追加されているらしい。

リップが斬り裂いた場所が見る見るうちに塞がっているのが分かる。

だが、あの一連の動きでリップはあの時の、ランサーの槍に何か特殊能力がついていることを一瞬で理解した。

ジャバウオックの右腕と右足、あの時ランサーの槍を突き刺した場所だけ明らかに動きが鈍いのだ。

動きが鈍くなったというならば、リップと言えど対処は可能。

「翔さん、私があいつを引き付けます」

「……わかった」

あの時、ラニが作ってくれた剣『ヴォーパルの剣』を取りだす翔。

この剣のコードを発動できるのはマスターのみ。

つまり、翔自身が、この剣をあゝの怪物に直接、突き刺しコードを起動しなければならぬ。

心臓が高鳴る翔。この剣を突き刺すにはリップがあゝの怪物の注意を引き付けなければならぬのだ。

そして翔が怪物に気付かれず接近、ヴォーパルの剣を突き刺しコードを起動する。

普通に考えればあゝの破壊の化身に近づくこと自体が無茶だ。

だがやらなければ、こちらがやられる。ありすは再び悪夢に捕らわれることになるのだ。

リップが飛び立ち、ジャバウオックの目の前に自身の姿を晒す。

「■■■■■■■■!!!」

それを見つけたジャバウオックは、まるで獲物をみつけたが如く殺意の咆哮をあげる。

あの時はただ翔とリップは身を竦ませるばかりであったが、今回はそうではない。

自分達には切り札がある。リップは翔が必ずやるべきことを成し遂げてくれると信じていた。

それは翔もまた同じ、二人は少しづつではあるが、お互いの背中を任せられる存在となってきた。

「やあー」

リップの巨大な腕が怪物の喉元を捉える。
ジャバウオックの硬さは想像以上だ。彼女の爪を以ってしても傷つけることは容易ではない。

「!?」

不意にジャバウオックの動きが変わる。

あの怪物の周囲に電気が纏い、それが膨張し爆発。辺り一面に衝撃波が襲い掛かる。

明るく地面を白く染めていた雪が辺り一斉に飛び散り、あまりの衝撃に翔は目を閉じ腕で顔を覆う。

目を開けたところにはジャバウオックはどこかへ消えていた。

消滅……したのだろうか。いや違う。あの怪物の魔力を感じる。どこかに、必ずいる。

「奴はどこに……」

翔とリップは、薄暗い闇の中、あの怪物を探す。

この時、彼らは一つの勘違いをしていた。

あのジャバウオックは巨体でもあるので隠密能力は皆無、そう予想を二人は立てていた。

だが現実は違う。直後、アリーナの床が、壁が、空が揺れる。

「!?」

不意に横から現れた何者かに、リップの腕が掴まれ、一回転した後、何者かの手が離され、吹き飛ばされる。

間違いなく、その正体はジャバウオック。

あの怪物は驚くことに、衝撃波とそれによって吹き荒ぶ雪によって姿をくらし、リップに奇襲をかけたのだ。

「リップー!」

叫びながら翔は怪物に向けて走り出す。

あれはまさに動く絶望だ。だが、ここで立ち止まってどうする。

自分にはまだ切り札があるではないか。使うなら今が絶好のチャンス。

リップを信じろ。彼女を信じる。そうすれば道は切り開ける。

「ぐっ!」

即座に立ち上ったリップがジャバウオックを正面から打ち合う。怪物の攻撃を受け止めたリップは顔をしかめる。

あのジャバウオックのパワーは凄まじい。

恐らくパワーなら、あの怪物はどんなサーヴァントをも上回る。このままではジャバウオックの爪が、リップを貫くのも時間の問題であろう。

「!?」

両腕でジャバウオックの左腕の攻撃を受け止めるリップ。

だが彼女のその策が仇となった。間髪入れずにジャバウオックの右腕が襲い掛かってきたからだ。

右腕は傷が残っていれど、両腕を封じられたリップに為す術はありはしない。

その右腕は防ぐ手立てもなくリップを貫く……

——直前で、その右腕が止まった。

予想外の光景にリップは目を丸くする。

ジャバウオックは何かに抗うように咆哮をあげていた。

怪物の身体に白い亀裂が入り始める。どうやらその発生源は足のようだ。

リップがその場所を見てみれば、翔がいた。

歯を食いしばり、手には白く輝く剣を持ち、それをジャバウオックの足に突き刺しながら……

「今だリップー！」

「翔さんと私の道を開けるために、ここで倒れてください！」

彼女の金色の腕が稲妻のように横を薙ぐ。

亀裂が入ったジャバウオックの身体は、あまりにも脆かった。

まるで砂の城を壊したかのように、簡単に崩壊していく。

光の粒子となった怪物だったものは突風に吹かれ、その粒子は闇の深くへと消えていった。

ジャバウオックを倒したのだ。そしてそれと同時に翔が持っていた剣は、役目を果たしたかのように静かに消えていく。

「行きましょう翔さん。戦いはまだ終わっていません」

「ああ」

奥へ佇む城へと走るリップと翔。

ジャバウオックがいなくなった雪原は、まるで、もう何かが通り過ぎたかのように静かであり、敵も何も来なかった。

もう手駒が尽きたのだろうか。だがありすの隣にはサーヴァントのアリスがいる。

赤い障壁が現れていないことからまだ戦いは終わっていないのだろう。

「ありす！」

城へ入り、しばらく進めば、ありすはいた。どこか悲しそうな顔で、翔を見つめている。

となりには、黒いアリスもいる。後ろを向いているので、彼女がどんな表情をしているのかまでは分からない。

「ジャバウオック。負けちゃった」

ありすが静かに言葉を紡ぐ、もう彼女には手駒はないという事だろうか。

翔がありすに近づこうとした時、後ろを向いていたアリスの顔がこちらに向く。

「まだ……まだだよお兄ちゃん。ありすの夢は終わらない。私が終わらせない！」

凄まじく、怒りのようなものを込めた、その表情を翔に向け、彼女は詠唱を始める。

『越えて越えて虹色草原、白黒マス目の王様ゲーム。』

走って走って鏡の迷宮。みじめなウサギはサヨナラね？』

本というものにはいつか終わりが来るもの。だが読み手がそれを拒絶すれば、物語は永遠に続く。

彼女の宝具は、その具現化。それは、終わりのない物語。

「ありすを、消させるものですか！ 『永久機関・少女帝国』!!」

この城が、雪原が、何もかもが閉じていく。

なにもない、白と黒に覆われた世界。

間違いない、翔は確信する。この魔力、アリスの宝具だ。

不意に何かを感じたりリップが、爪を上には振り。彼女に目掛けて落ちてくる何かを砕く。

砕かれた何かは、小さな氷の粒となって、周囲に乾ききった音を立てる。

翔はそれを一瞬で理解する。あれは魔力が込められた氷塊だろう。

「ただだよ……おいで！ その無礼者の首を刎ねちやえ！」

黒いアリスが手を掲げ、無数の魔方陣より何かを呼び出す。

同じような間隔でダイヤやハート、スペード、クローバーが彩られたトランプの兵隊が並んでいる。

感覚からすれば、丁度合せ鏡をしたような印象だ。

あれはトランプの兵隊だ。アリスはこんなものまで召喚できるといふのか。

無数のトランプ兵は、アリスの命令を聞けば、一斉にリップたちに襲い掛かってくる。

「薙ぎ払えリップ！ 『Wind | mgi ()』！」

「全員まとめて吹き飛んで！」

右腕を大きく振りかぶり、周りの物を視界から消すように、大きくその腕を振り払うリップ。

リップが振り払う直前に、翔がリップへ対しコードキャストを発動。

彼が使ったのは、対象者に風属性を一時的に付与するコードキャスト。これによって彼女の腕から放たれる一撃に風属性が付与されることになる。

彼女が振り払った前方が、まるで空が暴れ出したかのような突風と共に、小さな竜巻を作りだし、襲い掛かるトランプ兵達を嘲笑うかのように吹き飛ばしていく。

パッションリップという要塞に辿りつく前に、荒れ狂う風によって倒れ伏すトランプ兵。

今が好機、リップが突進を仕掛けようとしたところで、何かに感ずいた翔が叫ぶ。

「リップ！ 上だ！ 『shock (64)』！」

「え？」

槍を持ち、リップの頭上へ急降下してきた一体のトランプ兵を翔のコードキャストにより、吹き飛ばす。

何かが、おかしい。トランプ兵は先程の攻撃で、全て倒したはずだ。なのになぜ動いている……

翔が先程、リップが突風によって吹き飛ばした一面を見れば、目を見開く。

先程倒したトランプ兵達を動いているのだ。それも傷一つなく……

目の前のリップもそれに気づき、翔の隣へと急ぎ、後退する。

「翔さん、倒した敵が復活していますー！」

本というものにはいつか終わりが来るもの。だが読み手がそれを拒絶すれば、物語は永遠に続く。

目を閉じ、翔は何が起きたのかを考える。

そして気付く。リップの手によって吹き飛ばされた、あのトランプ兵達がなぜ、傷一つなく立っているのかを……

「リップ。俺達が図書館で見ている本。たとえば、好きな場面を何度も読みたいとき、お前だったらどうする？」

「それは……もし本を読んで、面白い所があれば何度も読み返す……あ」

「そういうことだ。アリスの宝具。それは彼女自身に類する時間全てを巻き戻す力がある。厄介だなおい……！」

終わりなんてない。この物語は永遠に続く。まさに彼女そのものの宝具だ。

あれがある以上、どんなに敵を倒しても、永遠に振り出しに戻ることはない。

翔達に残された勝利方法は、あの宝具を使われる前に決着をつける事。

だが、アリスに辿りつく前に、あのトランプ兵の大軍を突破しなければならぬ。しかしあの大軍を倒せば、アリスが時間を逆行する。「翔さん。あの宝具を使うときを狙ってみます。あの兵士達の攻撃を

防げるコードキャストをお願いします」

「わかった。頼むぞリップ『C作reating shield』
リップの周囲に薄い縦のような魔力壁が展開される。この術式は、かつてユリウスに襲われた際、咄嗟に発動出来たコードキャストの応用だ。

対象の周囲に魔力壁を展開。攻撃を展開した盾が防ぐコードキャスト。魔力を無効化する者には、全くの無意味ではあるが、このアリスとの戦いでは役に立ってくれるだろう。

「いきます……い！」

リップが駆けだす。それを見届けたトランプ兵達が一斉に彼女を斬らんと突進していく。

波のように群れたトランプ兵を、その腕で吹き飛ばしていくリップ。

彼女の一薙ぎで、兵隊の大半は吹き飛ばすことは可能。だがそれも数が多い。

しかし、目的はトランプ兵の殲滅ではない。翔とリップの狙いは、あのキャストのサーヴァントであるアリスへと攻撃を仕掛ける事。

『g敏ain | a捷gi強(32)・!』

使うなら今だと判断したのだろう。敏捷強化のコードキャストをリップへと発動する翔。

トランプ兵の大半を倒されたのを見届けたアリスは、再び宝具を発動しようとする。

おそらくアリスの作戦は、トランプ兵の物量によつて、リップの体力を奪う作戦。

だが、この瞬間をリップは待ち構えていた。宝具を発動とすれば、他の部分に魔力を回すことは不可能。

つまり、魔力壁などを作り出すことは難しいはず。まさに、この瞬間はリップが狙っていた局面であった。

倒れたトランプ兵を、リップが掴み、それをアリスへ目掛けて投げ飛ばした。

「きゃあー！」

彼女の自慢の怪力により、トランプ兵そのものを投げ飛ばし、アリスへ当ててる。

この時点で、無茶苦茶な作戦。だが彼女の作戦はこれで終わりではない。

よろけて視界がリップから外れた瞬間に、右手で拳を作り、それをアリスへと構えれば、その巨大な右手が勢いよく身体を離れ、アリスに目掛けて飛んで行く。

トランプ兵の直撃により、よろけたアリスに回避する術はない。彼女のロケットパンチは、勢いよくアリスへと直撃し、その小さな体を吹き飛ばした。

「あたしー！」

白いありすが小さな悲鳴をあげ、アリスへと駆けより、その小さな黒い体を揺する。

そんな光景を、歯を食いしばりながら見る翔。

どうして彼女は、この聖杯戦争という舞台に来てしまったんだ……死ぬまで傷つけ合い、血を流しあうこの戦場に、聖杯戦争にどうして来てしまったんだ。

「どうして……お兄ちゃんはあるあたしの事、嫌いな……？」

「嫌いなんじゃない。俺は、ありすのことが大好きだ」

涙を浮かべるありすに、翔は目を閉じ、歯を食いしばり、静かに答える。

これは、彼女が見ている夢。ありすが、ずっと覚めないと思っていた夢の中の出来事。

だから、俺が、夢を……いや、ありすの物語を終わらせる。

俺が、ありすの物語の最後のページになろう。

本当のことを言うなら、救えるなら今ここで彼女を救いたい。

だが、それは出来ない。

今の彼女を救うという事は翔も一緒に、この永遠の中に閉じこもる事。

だから、彼にはできなかった。翔は前に進まなければならぬのだから……

「だからこの夢は、もう終わりにしようありす」

翔が静かに語る一言。青い髪に隠れてその眼は見ることはできない。

だが彼の頬には、一筋の涙が伝っていた。

それに気付く二人のアリス。その刹那……リップの腕に一振りだが、黒いアリスの身体を大きく抉った。

——勝敗は今ここに決した。

まるで糸が切れた人形のように倒れるありす。

その姿を見て、黒いアリスは足を引きずりながら、彼女の傍へと近づき、小さな白い手を優しく握る。

翔達とアリス達の間には赤い障壁が両者を隔てる。

ノイズによって蝕まれ出したのは、ありす達のほうだ。

消えゆく主人の手を従者^{アリス}はしっかりと握りしめる。

「ありすは寂しくて、ずっと一人だったのに……やっと居場所を、幸せを見つけたのに……それだけでよかったのに」

悲痛な声を上げるアリスを静かに見つめるありす。そして、ありすは静かに微笑んだ。

その瞳は彼女に対して『もういいんだよ』と告げているようにも見える。

「……いいんだ。あたし^{ありす}、本当はわかっていたよ。きつとなにもかもなくなっちゃうって……だって、よくわからないけどわたしはたぶん、もう死んでるもの」

あの病院に、あたし^{ありす}の体はないの。彼女はそう言葉をつづけた。

本当は知っていたのか。翔は硬く目を閉ざそうとしたが、それはしなかった。静かにありす達を見続ける。

彼女には最初から何もなかった。いや、もつとずっと前、あの病院にいたところから、ありすには何もなかった。

だれもありすを見てくれなかった。

ありすはずっと一人だった。すごく痛かった。

そして、だれもありすを、人間として扱ってくれなかった。

それは『ふしぎな世界』^{ワンダーランド}に来ても同じこと……

「あたしは一人で、さびしくて……だからね、わかった。あたしも……居場所も、きつとすぐになくなっちゃうって……」

お兄ちゃん、ありすの為に泣いてくれるんだね。

翔には届かなかった言葉だろう。だが確かにありすはそう口にした。

「お兄ちゃんはあたしに似ているから……あたしと違ってちゃんと居場所があるけど……」

そしてありがとう。あたし。

いつも一緒に居てくれて、友達になってくれて……

そしてありがとうお兄ちゃん。あたしと遊んでくれて、あたしの事を見てくれて、そして、あたしのために泣いてくれて……

「ありす、また一緒に遊ぼう」

翔のその言葉に、翔へ笑顔を作るありす。

本当はもつと遊びたかった。けどもうここでお別れ。

白いありすは、静かに電子の海へと消える。

それを、何も言わずに黒いありすは静かに見届けた。

「……あたしはあたしの物。語。いつもあたしは誰かの夢。次のせ

いはいせんそうで呼ばれても、あたしは今のあたしじゃない」

でも、それでも、彼女は、ありすと一緒に居られて幸せだった。

黒いありすが倒れる直前、彼女の目から一粒の雫が落ちた。

「あれ……あたし、なんで泣いているのかな。わかっていないのに、ないてもほんものになんかなれないって……」

黒いありすも、少女の後を追うように静かに電子の海へと消える。

赤い障壁が解除され、景色が決戦場のそれへと戻る。

翔の視界には、もうありすたちの姿が写る事はない。決戦場の静寂さが、翔の勝利を、そしてありすの死を残酷にも思い知らせてくれた。

「……くそつたれ！　こんなものってありかよ！　なんだよこんなもの！　くそ……くそ！」

地面に膝を付き、拳で地面と叩きつける翔。

これが聖杯戦争のルール。これで3度目だ。だがこんなものが当然だと思いたくなかった。

こんなものが当然と言うなら、彼は怒りながらこう言うだろう。こんなシステムは根本から歪んでいると……

少女は電子の海の彼方に消えた。

それは、少女の死を望んだわけではない。何を望んだわけでもない。
い。

そんな自分^{人間}が、彼女を死へと追いやった。

これが戦いの道理である事は理解している。

ただ、それでも、あの少女が二度と還らない……

その事実が、翔の胸に重くのしかかる。

「あ、翔さん。空から何か……」

リップの言葉に顔を見上げる翔。

決戦場の空から、小さな細長い紙が、ひらひらと花びらが舞い込むように落ちてくる。

それを手に取る翔。白と黒が交わるような色合いをした不思議な紙。それはどうやら葉の様だった。

その色合いは先程までいた二人の少女を連想させる。

葉を持ち、静かに目を閉じる翔。

彼のその姿は、彼女の死を悼むようにも見えた……

ワンダーランドはおとぎの国。ライムの響きは夢のゆりかご。

1 シリングの価値もない。保証期間は十年足らず。

いずれ消える甘い記憶。でも必要な甘い痛み。

本の内容は忘れても、夢に挟んだ葉のことは忘れないで……

第16話 運命の分岐点

決戦場のエレベーターから出てきた翔は、歩き続けることなく、近くの壁へともたれ掛り、座り込む。

今は歩く気力さえない。彼が目の前で見たありすの死。

あの光景は、彼の心を沈ませるには十分すぎるほどであった。

そんな沈んだ心に、何かが染み込むような暖かい声が掛けられる。

「死を悼んでいるんですね」

ゆっくり顔を見上げれば、レオがお辞儀をしているところであった。

おそらく彼がここにいるという事は、彼もまた無事三回戦を終えたという事。

彼の言葉に翔は「そうだな」と返す。

「命が失われるのは悲しい事です。それがこのような無慈悲な戦いであればなおのこと」

「意外だな、お前がそんな言葉を掛けるなんて」

彼は次期盟主である存在。西欧財閥のレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。

そんな彼には、最強の一角であるセイバーのサーヴァント『ガウエイン』を従えている。

そしてあの黒コートのユリウスの関係者であることは明白だろう。

そんな彼が、まさか自分にこんな言葉をかけてくるとは思わなかった。

「しかし、無慈悲ねえ……無意味じゃなくてか？」

「ええ」

レオは眼を閉じ、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

この聖杯戦争は、憎しみによって殺し合うのではない。お互いに同じ目的を持ったまま相容れずに戦うしかないのだ。

それは、人々としての心を持ったまま、人を殺めるということ、それはとても悲しい。レオは言葉を続ける。

「何かに渴望するから人は聖杯きせきへと手を伸ばします。自分以上の物に

采配をゆだねるしかない。そう、誰も自分がこの世で一番正しいと信じる事が出来ないから」

「……だから無慈悲な戦いか」

「ええ、それが悲しい。いや、哀れと言ってもいいでしょう。地上の貧困もこの戦いもまた同じこと。足りていないから奪うしかない。その調停をするために僕はここに来たのです」

まるで救世主だ。それは混迷した世を導く一人の救世主のような言葉にも感じ取れた。

彼は西欧財閥の当主、地上の世界の王になるためにここに来ている。

だけど、やはり何か足りない。翔から見てもレオは完璧すぎる存在だ。それは他の人から見ても同じであろう。しかし、なぜレオには何か一つだけ足りないものがあると感じてしまうのだろうか。

それさえあれば、彼はもつと完璧に近づくはずなのに。

翔にはその違和感の正体は何かはわからない。だがそう感じたのは紛れもない事実であった。

「あなたの悼みも、彼女の痛みも認めます。いずれは誰も無慈悲な死を迎えないように、欠如がなければ争いはありません。人々に完全な平等を」

世界に徹底した管理と秩序、それが今のレオの目指す世界という事か。

彼に賛同を求めるかのように、彼は翔に近づく。

レオの言葉は、癒す薬の様だった。

ありすの死で沈んだ心を優しく包むように癒すような……

「これがこの世界にあるべき姿、理想世界なのだ、彼女の消滅を悼んだあなたなら賛同してもらえるはずだ。そうでしょう?」

「……一つ気になったことがある」

ゆっくりと翔は立ち上がり、レオを見つめる。

翔にとっては救世主にしか聞こえない彼の言葉、そんなレオの言葉に少し疑問が出来たのだ。

「そいつはハーウェイの……いや違うな、西欧財閥にとっての理想か？」

「万人にとっての、ですよ。理不尽な死が待つ世界は誰しもが避けたいものでしょう？」

「ひどい言葉ね。資源まで独占されて生き死にまでアンタらに管理される社会が万人にとっての理想っていうの？」

どこからか聞こえる言葉によって、レオを翔はその方角を見つめる。

歩いてきたのは赤い服を着ている少女、凜であった。

放った声には、その瞳に負けないぐらいの敵意がこもっている。

彼女はレオと関係があるのだろうか。

「生まれた子供を平気で飢え死にさせる世界が？ 十年先の人生まで、寿命までデザインされる人間が？」

余計なお世話よ、と凜は言葉を続ける。

「噂通りの人ですね、ミス遠坂。国連からその将来を期待されながら、中東の武装集団に身を投じた若き魔術師」

中東の武装集団に……なるほど、通りでと翔は思う。

初めて凜を見た時に感じた、瞳の奥に宿る意思、あれはただものではないと思った。

あの強い意志はアイドルなどという存在では到底、ありえないものと翔は彼女を初めて見たとき感じたのだ。

「あなたの言い分もわからないではありません。ですが資源の配分は効率のいい配分をするための物です。それは富むための富。支配欲から生まれた資源の独占は決して行いません。それは僕らの支配圏の実態を見ていただければわかると思います」

ハーウェイの管理都市なら知っていると凜は言葉を続ける。

階級に応じた生活が保障されている。不安要素のない平穏な世界。それはどこにも行けない。いや……行く必要がない楽園。けれどそこには未来がない。希望も幸せも……

人がただ生きているだけの世界。

翔は眼を閉じ考える。

そんなものがハーウェイの望む世界？

それではまるで停滞を目指しているだけなのでは……？

「笑わせるわ。娯楽あつての人間じゃない。私、見ての通り肉食なの。農園ファーム暮らしは性に合わない」

まさに凜の戦いは生きるための戦いのようなものなのだ。

だがそれは凜の強さがあつてこそその生き方ではないのか。

「生きるための戦い……それを肯定するのでもいいでしょう。ですが、ミス遠坂。だからこそ僕はあなたに問います」

——あなたは全ての人間に自分と同じ強さを求めますか？

鋭い視線で凜に問うレオ。その返答には予想外であつたのだろうか。

凜も眼を逸らし、言葉を詰まらせる。

それを見たレオはやはりと言つた顔をする。それは『できませんよね?』と言っているふうにも捉えられる。

「あなたは、自分の身勝手さも傲慢さもわかっている」

だからこそ、その苦しみを共有出来ない、全ての力なき人々に自分と同じ苦悩を負えと強制できない。レオの言葉に凜は歯を食いしばる。

「で、できるわよ。私、そんなお人好しじゃないし」

「そうですね。脱落する人間がいれば自分が助ければいいと思つている。だから……」

——あなたでは、僕に勝てない

はつきりと、そして断言とも取れる言葉でレオは言い放つた。

レオは言葉が続ける。凜の言う幸せは狭いのだと、人間を救いたければ人間を捨てなければならぬと。今は支配者が必要なのだと……

それはあなたには無理だ。そして……

「今の僕にもありません。ですが、聖杯の力があれば」

地上の全て、いやこの星を照らす光になれる。

そう、この少年王は断言した。

「西欧財閥の支配領域は現在、世界の約3割です。ですがその市民達

から不満の声は出ていません。反抗は常に域外から発生しています。それは、あなたの言うファームが完全であることの証。故に僕は言いましょう」

——羊になれないなら死んでください。

これが西欧財閥の本質。本当に……？

レオが掲げるのは本当に停滞を目指した世界なのか……？

そうは思えない。彼は地上の王でもある存在。

その停滞は無意味ではなく何か意味があるのではないのか？

だがその答えは今の翔には出てこない。

「……筋金入りね。その王様ぶりだけは褒めてあげる。一つだけ分かったことがあるわ」

「わかっていただけましたか？」

「ええ、私がこの聖杯戦争に参加したのは間違っていないなかったってね！」

それは間違いなく凜の宣戦布告であった。

レオが王道なら凜もまた王道。

戦うは聖杯戦争の決戦場。どの道勝ち上がるのはただ一人だ。

そして凜とレオは立ち去る。

そこには何も無い自分ただ一人。

「翔さん……」

リップが実体化し、静かに、そして心配そうに翔に声をかける。

閉じていた目を静かにあける翔。

レオの理想、凜の決意。だが自分は……？

自分にはなにもない。何も無いまま人の命を奪い続ける。

それが翔にはとてつもなくつらかった。

本当に今の自分には何もない。それは自分こそ価値があるとはとてもじゃないが言えないほどには……

「あの二人には、信念があるのか。命をかけられるほどの理由が、決意が……」

今の自分はそれを探している最中。

もちろん、探すことなど容易な事ではない。時間も無い。

だが何も無いままでは一步も進む事は出来ない。
自分のほうが価値があるなど、とは言えない。
自分のほうが生き残るべきなど、とは言えない。
今の自分には何も無い。だからそれを見つける。
それは立派な事でなくていいだろう。

いつか彼らと戦場で会うときには、戦う理由として恥じない何かを見つけよう。

「翔さん。あんなに沈んだのに、あの二人に会って顔が変わりましたね」

「そうか？」

「ええ、短期間ですけどとっても強くなりました」

リップの微笑みに、翔も笑顔で返した時、背筋が凍りつくような感覚に襲われた。

何者だろうか。振り向くが、なにもいない。

前にも同じような感覚に襲われたのを思い出す。

あの時は……そうだ。ユリウスに襲われた時と全く同じだ。

となると、近くに彼がいる事は明白……だが不意にその殺気が遠ざかる。

どうやら翔が感じた殺気は、視聴覚室に向かったらしい。

なぜユリウスが視聴覚室に……彼の事だ。何かをしでかすつもりなのだろう。

「リップ。ついて来てくれ」

「はい」

リップもその気配を感じとったようだ。リップと翔は視聴覚室へと向かう。

その扉の前まで物音を立てずに進んでいく。そしてやはりだろうか。その中から声が聞こえる。

翔は物陰に隠れ、耳を澄ませる。

その声の正確な内容までは分からない。だが、これは間違いなく
プログラム^{プログラム} 記述^{記述} 呪文の詠唱だ。

はつきりとは聞こえないが、なぜだがそう感じ取れることは出来た。

「やはり決戦場ともなるとセキュリティは最高レベル。この障壁はさすがに……くそ」

決戦場。もしや彼は今、決戦場の中身を覗こうとしていた……？
確かに対戦相手の情報が分かればそれだけでこちらが優位になれる。

視聴覚室からでたユリウスは、そそくさと廊下を歩いて翔の視界から見えなくなる。

もし決戦場を見ていたとすれば誰の戦いを見ていたのだろうか。少し興味がわく。

『のうユリウスよ。あの時の小童が部屋に入っただぞ。あのカラークリを見られても良いのか？』

歩くユリウスに対して、誰かの声がユリウスの耳に届く。

間違いなく、アサシンのサーヴァントだろう。

そのサーヴァントの言葉にユリウスは眼を閉じ、言葉を放つ

「奴の力ではあれをどうにもできない。いや、むしろこちら側で始末する手間が省ける」

視聴覚室の中に入った翔。その中は薄暗く、一つのスクリーンの明るさのみがこの空間に明かりをつけている。

本来なら天井にプロテクターとかありそうなものだが、置いてあるのは旧式の映写機。

電脳世界のはずなのに妙にレトロにも感じられる。

ここに訪れる機会などめったにない。だが見た所、特に変わったところが無い様にも感じられる。

「翔さん。あの真ん中の機械。何か変ですよ？」

「そうか？」

リップが視線を映写機に向ければ、翔もまたそれを見る。

確かにリップの言った通り、映写機らしくない余計な筆遣いを感じる。

間違いなく何かコードを使ったのだろう。他ならぬユリウスの手

によって。

何が目的か調べればわかるはず……翔はゆっくりとその映写機に手を伸ばして……

「!?」

訳の分からない呪文プログラムの羅列。

頭の中が一気に焼ける感覚に陥る。

それは全てこちらの攻撃に向けられている。

「うわああああああ!」

「翔さん!」

まるで脳内で花火が起きたような感覚に、翔は叫び声をあげる。

映写機から吹き飛ばされるように翔の身体が宙に浮き、仰向けで勢いよく倒れる。

今のは何だったのだ。幻覚か何かだったのだろうか。

「大丈夫ですか!」

「な、なんとか……」

これは並大抵の人間が触れていいものではない。触れたらそれこそ、その目の前にあるのは『死』そのものであるだろう。

そんな翔を強引に引き戻したのは、剣がぶつかり合う音。

必殺の意志すら感じる。空を裂き、地を割るような勢いの音。

翔はユリウスが再び来たのではないかと疑うが、どうやらそうではないらしい。

鼓膜越しでは無く、直接電腦に写るのは……

「ラニと凜……!」

これは、二人の決戦場の戦いだ。

動き出した映写機がそのスクリーンに二人の戦いの様子を映し出している。

二人の戦いはまさに圧倒的であった。

お互いの武器で突き、斬り、薙ぎ払い、そして受ける。

その軌跡は目で追う事は到底できなかつた。ただわかるのは刃の散らす花火のみが二人の戦いの存在を証明している事。

威力においてはラニが優勢だろう。だが凜の方も押されてはいな

い。

勝負は全くの互角に見える。

しかし、なぜユリウスは途中で退出したのだろうか……

他者の戦いを見る。それは情報なしに戦うことになる聖杯戦争において圧倒的なアドバンテージを誇れる。

勿論、それは言うまでもなく違法だ。

これは闇討ちなど反^{ルルールブレイク}則など関係ない、ユリウスの企みだろう。

だとしたらなぜ彼は途中で退出した……なにか意図があるのかそれとも、問題が……？

「翔さん、これ……凛さんの勝ちだと思います」

サーヴァントは全くの互角、しかし、マスターに差があるという事か。

確かによく見れば、凛の方が咄嗟の対応力が一枚上手である。

対してラニの方は無表情ではあるが、若干の焦りが見える。

一方の凛には、確かな自信が見える。あの、自信はおそらく勝機をつかんだ自信だ。

と、突然戦闘の音が鳴り止む。

動きがあったのはラニの方。サーヴァントが構え、力が、エネルギーが集まっていくようにも感じる。

それはスクリーン越しでもわかる、桁外れの力。

「全高速思考、乗速、無制限。『北天に蛇を』^{モード・オシリス}任務継続を不可能と判断。申し訳ありません師よ。あなたに頂いた筐体^{からだ}と命をお返しします」

——入手が叶わぬ場合、月と共に自壊せよ。

それはラニによる自爆であった。

あまりにも馬鹿げている。あんなのは自殺行為なんてものではない。あの魔力の消費量は、凛どころか、決戦場そのものが融解してしまうのではないだろうか。

そして翔は見た。ラニの手の甲にある刻印が消えるのを……

『令呪』。この聖杯戦争、全ての戦いを通して使える。たった2回だけの切り札。ラニはそのカードをここで切ったのだ。

「まさか、ラニの身体は……！」

翔は叫ぶ、ここまで来てしまえば翔だってわかる。
ラニの身体は、元からこういうった機能があつたのだと……

「捨て身にもほどがある……！ あれは間違いなく魔力回路の臨界収束。そんなのただの自爆じゃない！」

「ヒュウ。カミカゼってやつか。さて、どうするかねお嬢ちゃん。確かアンタらの専売特許だろ？ ありゃあ」

凜のサーヴァントが緊迫した状況に不釣り合いな飄々とした口調で凜に尋ねる。

ラニの心臓に位置する光り輝くあれは、凜の推測が間違いなければ、間違いなく本物の第五真説要素だ。

それは爆発すれば、間違いない。アリーナは軽々と消し飛ばすだろう。

「いつの時代の話よ！ 軽口は後よランサー。あれが爆発する前に、宝具で中心を穿ちきつて！」

「おう、らしくない大盤振る舞いか！ いいね、いよいよ決着だ！」
凜の槍兵は力を溜め、ラニのサーヴァントを見つめる。

力と力……あれの決着は間もなくつく。負けた方は令呪の剥奪を待つまでもなく、消し飛ぶ。そんな力同士の激突。

いや、勝った方も、無事で済むかは怪しいだろう。二人ともここで共倒れの可能性もある。

スクリーン越しに戦いを見つめている翔が息を飲む。

「もしかして翔さん。二人を救いたいとか思っていたりしてませんか？」

リップの言葉に翔は彼女の方へと顔を向ける。

自分はただここで見ていただけなのか、それとも……

しかし、リップの言葉には違和感があつた。

救う手段などない、そういう言い方ではなかった。

リップは何かを知っているのか……？

「あの幕スクリーンとここは繋がっています。私でもそれはわかる。だから助

けに行くことはきつとできません」

ですけど……と、リップは言葉を続ける。

ここから決戦場までの距離、多くの障害、それらを抜けて瞬間移動すると考えれば間違いなく令呪が必要だと……

不可能を可能にするたつた2回の奇跡、それが令呪。

帰り道もまた同じ、間違いなくその2回はここで使うことになる。

「ここは私の意見は言いません。翔さん……いや、マスターの意見に従います。あなたを救うかもしれない、未来を変えるかもしれない奇跡『令呪』を2つ、今ここで本当に使うのですか？」

二つの令呪、二つの奇跡、二つの切り札。それをここで切る。それはあまりにも重すぎる。

あと何戦あるかもわからないのだ。この聖杯戦争でそれを選ぶことは死を選ぶにも等しい。

令呪を見つめる翔。自分は何のために戦っている。翔はあの二人の戦いを間近で見ってしまった。

少なくとも、今の實力では到底、間違いなく倒す事が出来ない二人。次の戦いで二人の内どちらかに当たったら、自分は間違いなくそこで倒れる。

自分が死ぬことを承知で、そこまでしてあの二人を救う理由があるのか。

恐れてしまった、恐怖してしまった。

手が震える、口が震える。

そのためらいが、すなわち……

——他にも選べたはずであろう選択肢を奪う事となった。

交差する光の中、凜の青いサーヴァントが動く、激突の時、もう間に合わない。

全てが白く輝いた。それはビッグバンにも匹敵するような衝撃。

「うわあああああああー！」

四散するエネルギー。それが容赦なくスクリーンをも叩き、空間がひび割れ、爆発の衝撃で翔は吹き飛ばされる。

リップが翔の名前を叫び、駆け寄る音がする。

映写機は音を立てながら、その部品が弾け飛び、小さな爆発と共に煙を立て、その役目を終える。

もうスクリーンは何も写すことはない。あるのは虚無の暗闇だけ……

衝撃で吹き飛ばされた翔。その威力があまりにも大きかったらしい。立つ力さえなく、彼は意識を失う。

「……アクセスできていたようだな」

「あなたは……！」

意識がない翔を庇うようにリップがその男の前に立つ。

去ったかと思っていたユリウスが、まだ残っていたようだ。

「あそこまでの強力なセキユリテイを破ってまだ命があるとは……それほどの魔術師という事か。いや、それでは理屈に合わないな」

となると残る可能性は『——』ということか。

彼が何を言ったかはリップには、その声が小さく、聞き取ることはできなかった。

ユリウスは、リップの背後にいる翔をみつめると、彼は『なるほどな』と声を漏らし、去っていく。

今度こそ……本当に……

第17話 存在の証明

「う……」

ぼんやりとした視界が徐々に覚醒していく。ここはどこだろうか、輪部がはつきりしてくると自分が見詰めているのは白い天井という事に気付く。どうやらここは保健室らしい。

どうやら、自分は視聴覚室で起きた爆発で、意識を失ってしまったらしい。

自分がここにいるという事は、誰かが運んでくれたのだろうか。

「あ、翔さん！」

「……リップか」

霊体化を解き、自分のサーヴァントであるパッションリップが視界に移る。その顔は安心しきった顔そのものだ。

だが、翔は彼女の顔を見た時、視聴覚室での出来事を思い出し、顔を俯けてしまう。

自分は、取り返しのつかない選択をしてしまった……

リップは、令呪を使う必要があるものの、あの二人を救う手段を翔に教えてくれた。

だが自分はそれをしなかった。そしてあの二人を見殺しにしまった。

凜は生き延びただろうか、だが仮に生き延びたとしてもあの爆発の中では……

「幻滅したか？ 俺の選択」

沈んだ気持ちが生きたっていたせい、ふとそんな言葉が翔の口から漏れてしまう。

それを聞いたリップは、あの時の事だと理解したのだろう。

だがリップは彼を責めることはせず、ただ静かに首を横に振るう。

「幻滅なんかしていません。私もきつと翔さんと同じ選択をしたと思います」

リップは静かに語る。

自分もあの戦いを見てしまつて、勝てるのだろうかと思つたことを……

彼女もまた恐怖してしまつた一人なのだ。

だが、それを口に出すことなく、翔に選択肢を与えたのだ。

凜を助けるのか、ラニを助けるのか、あるいはどちらも助けられないのかを……

「そう……だったのか」

「だから、これも一つを選択肢だと私は思います。決してこの事で翔さんを責めたりしませんから！」

リップの微笑みに翔もまた笑顔を浮かべる。

そして、彼がリップの頭を撫でようとした直前、保健室の扉が開き、一人の少女と翔の視線が合う。

「……お邪魔しました！」

「待て志波！」

そして、ゆつくりと扉を閉めようとした白髪の少女。志波白亜を翔は呼び止める。

こつそりと扉を完全には閉めずに、続きを見ようとしていたのか、体の半分だけを、扉から覗かせていた白亜だが、やがて、扉を完全に開き、翔とリップの近くへと歩いて来る。

「いやーしかし、驚いたよ。ちよつと用事で視聴覚室覗いたら、翔くんが倒れていたんだもん」

どうやら、白亜が視聴覚室へと向かつた際には、翔がすでに意識を失つて倒れていたという。

それに驚いた白亜が、翔を保健室へと運んだらしかった。

どうやら、自分をここまで運んでくれたのはリップでは無くどうやら彼女らしい。白亜に礼を言う翔。

そして彼女が今来た理由とは、あの視聴覚室にあつた機材についてらしかった。

「翔くん。視聴覚室の壊れた機材を見たんだけどさ。あれ、どっかの戦いを見てたつてことでもいいんだよね？」

「!？」

核心を突くような、彼女の台詞に翔は動揺を隠せずに言いよどむ。その翔の反応を見た白亜は『やっぱりね』と言葉を漏らし、話を続ける。

どうやらなぜ翔が決戦場での戦いを見れたかを彼女は知りたいようだった。

決戦場のセキュリティレベルは最高だ。

それは例え令呪の奇跡があつたとしても、戦いを見ることは不可能なはずだと……

以前、白亜も同様のことをしようとしたらしいが、決戦場の障壁^{ファイアウォール}を破ろうとすれば、攻性の呪い^{プログラム}で逆に脳が焼かれるらしいのだ。

「攻性の呪い？ 確かにあの映写機に触れた時、とてつもなく痛かつたし、死ぬかと思つたけど、それだけだったな」

「それだけ……？ それは本当かい？」

白亜の問い詰めるような言葉に翔は静かにうなづく。

そして白亜は眼を閉じて考えるような仕草をした後、顔をあげ、再び翔を見つめる。

その顔は、とても疑問に満ちた目であり、一つの結論に達した顔だ。

「翔くん、君はいまだに記憶が戻ってないんだよね」

「そう……だな」

「そして本体の脳が焼かれても平気だった。それが何を意味するか、わかつてる？」

翔に対して、疑問を投げかける言葉、それに翔は答えられずに言いよどむ。

ここに来る前に失つた記憶、今まで他人から投げられた疑問の言葉。

本音を言うと、翔は次来るであろう白亜の、その先の答えを聞きたくはなかった。

白亜が無慈悲に言葉を放つ。この事から立証された仮説はこうだと……

「翔くん。今、君は本体がない状態よ」

その言葉に翔は固まる。

嘘だ。白亜の言葉なんて信じたくない。

だが言われてみればそうなのかもしれない。

記憶が欠落したままで、ウィザード魔術師としての技術を持っておらず、それなのに3回戦まで勝ち抜いた。

他の人から見れば、自分は謎の存在であるだろう。

だが何を言っているんだ。自分はれっきとした人間だぞ……？

「あ、ごめん。脅かし過ぎたね。それはこういう意味だよ翔くん。みんなは魂をデータ化してここにきている。それは当然、肉体は外の世界に残っていることを意味する」

でも翔の場合は、データしかない状態だ。

だから障フアイアウォール壁みたいなデータを習得してしまっても、脳にダメージが通らない。

それはなぜか、答えは簡単、どこにも繋がっていないから。

本体がないと言っても、単に繋がっていないだけの事。恐らく予選を通過したときに何らかのトラブルが発生し、肉体とのリンクが途切れる。

それを修復できないままここまで来たという事だ。

なるほど、言われてみれば確かにそうだなと翔は思う。

自分の記録のデータベースの役割を果たす肉体とのリンクが途切れている。それならば今の自分の、記憶が曖昧なのもうなずける。

「つまり、俺は記憶は思い出せないんじゃないやなくて、肉体という引き出しから、俺自身の記憶を引きだせていないだけなのか？」

「そゆこと、つまりよ。途切れたリンクさえ見つけければ、間違いなく翔くんの記憶を引き出せる」

「そっか……」

翔は微笑みながら、自分の手を見つめる。

良かった。これで記憶が戻るかもしれないのだ。記憶が戻れば自分が何者だったのかが理解できる。

なぜ自分がこの戦いに参加したのか、自分はどんな人生を歩んできたのか、知る事が出来る。

「やっつと、俺も胸を張って戦えるのかな……」

自分の胸に手を当てる翔に、それを見ていたりリップは静かに彼の表情を見て微笑む。

そしてその静寂を打ち破るかのように、端末の音が鳴り響く。どうやら4回戦の対戦相手が決まったらしい。

「これは……」

「翔くん、どうやら次の戦い。めんどくさいことになりそうだね」
だがそこに書かれた内容は、対戦相手の発表の内容ではなかった。

端末を確認し、その内容を見て、白亜が、顔をしかめながら、翔にそう言い放った。

「これはこれは、またずいぶんと壊してくれたようだな。二桁以上のマスターの血だけでは足りないかね？」

この聖杯戦争の管理者である言峰が、血を流し絶命したマスターに触れながら、その先の人物を見つめる。

その言峰の視線の先にあるのは、ピエロのような格好をした人物。そして、黒い甲冑に血塗れのマントを羽織った騎士。

その成り立ちからまるで血に飢えたような狂気すら感じる。

「ウーン、ナカナカオナカニハイライナイ」

「マスターであるランルー、そしてそのサーヴァント、ランサー『ヴラド三世』。私とゲームをしないか？」

この返答はヴラド三世と言われた男の槍の突きであった。

言葉に言わなくともランサーのその行動で、どの様な返答なのかはわかる。

あれは間違いなく『断る』という返答なのだろう。

その突きを、まるでわかりきっていたかのように、言峰はレイピア状の剣のようなものである、黒鍵で受け流す。

「なに、単純な趣向だ。これから君達には複数のマスターによる『バトルロワイヤル』をしてみよう。君達が勝てばもちろん、報酬は用意させてもらおう」

「ほう」

それを聞いたヴラド三世が、槍を下ろし、言峰を見つめる。

言峰がランルー側に提案した報酬は……

『今までのペナルティの白紙化』

『分解処分の取り消し』

『対戦相手全ての情報開示』

『ムーンセル側より令呪3画の贈呈』

そしてバトルロワイヤルによって対戦相手が数名でもいなくなれば、ランルー側が自動的に聖杯へと近づくことになる。

まさに破格の報酬。だがランサーはそれに返答することなく、彼自身のマスターの返答をただ待つ。

「イイヨランサー。ヒトツクライハスキナモノアルカモシレナイシ」

「そうか。ならば……」

ランルーの言葉を聞き、ランサーはその条件を飲むことを言峰に伝える。

それを聞いた言峰は不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。ならば数日後、残りのマスターにその詳細を伝える。君達も数日後、特設アリーナへと来るように」

そう伝えれば言峰は、ランルー達の前から姿を消した。

「マスター諸君、集まったようだな」

数日後、特設アリーナで声を上げる言峰、その中心に佇むのはランルーとそのサーヴァントであるランサーだ。

外野に集まるマスター達がざわざわと声を上げる。

翔は、中心に立つ彼らを見て、息を飲んだ。彼らは予選の時に乱入してきたものだ。

串刺しにされる人々、あれはNPCだったが、今思い出しても背筋が凍りつく。

「少し本戦から外れて私から少し違う趣向を用意させてもらった」
彼らは予選の時から警告を無視し続け、破壊、殺戮を繰り返してき

た違反者。

言峰は聖杯戦争の管理者として彼らに罰ペナルティを与えなければならぬ。

「ただここで、私が彼らを処分してもつまらないのでね。君達にはマスターランルーとそのサーヴァントであるランサーを対象にした狩ハンティング猟をしてみらおうと思う」

当然、この二人を仕留めたマスターには報酬を与えよう。言峰はそう言葉を続けた。

だがその言葉に他のマスター達のブーイングが起こる。それはそうだ。これは本戦とは関係ないルール。

彼らを満足させるには、それに見合った報酬が必要だ。

「当然、それに見合った報酬は用意してある。それはムーンセル側より令呪一画の贈呈だ」

その言峰の言葉にさらに、他のマスター達がざわつく。

令呪、それは奇跡を可能にする代物。そんな存在が一つ、自分の手持ちに増えるのだ。

「あや、寿々科翔。あなたも来ていましたか」

穏やかな声が翔にかかる。この声に聴き覚えがある。

三回戦の終わりにも声を掛けてくれた少年を翔は忘れるはずもない。

「レオか」

「ええ、ここであなたに出会えるとは……しかし、マスターランルー。彼女がなぜ異常な行動に出るのかはわかりませんが、彼女が持つ魔術回路は天性のもんです」

近寄りがたい……レオは静かに言葉を続ける。

いや、それよりももっと気になったことがある。レオは今、あのランルーと呼ばれた人を何と呼んだ……？

「おや、気づいていなかったのですか？ マスターランルーは女性ですよ？」

まじか……あの見た目をして女性なのか……

世の中何があるかわかったもではないなと翔は頭を抱える。

どうやら、戦いは始まっていたらしい。顔をあげれば、すでに何名かのマスターと、あのランルーのサーヴァントは交戦を始めていた。そして傍観するマスターもいる。その数は今のところは半々といったところだろうか。

「この戦い、傍観するマスターもいるようです。あなたは どうしますか、寿々科翔」

「そう……だな」

あのランサーとマスターを見て翔は考える。

複数のマスター相手に戦い慣れしている動き、それを相手にするにはかなりのリスクがある。

しかし、それを覆す報酬。報酬のために戦うか、リスクを回避するために、今はただ逃げるか……

その選択を覚められた時、ランサーのマスターの顔が翔に向く。

その刹那、言いようがない悪寒が翔の背筋を駆け巡った。

単純な殺意や殺気とは違う。絡みつくような、まるでそれに捉えられたら逃げられない蜘蛛の糸のような視線。

「ランサー、アレ、ホカノヒトト、チガウ。キニイッタ。スゴク、スゴク、オイシソウ」

「リップ！」

翔が叫び、霊体化していたリップが直後に姿を現し、翔に迫るランサーの槍を自身の腕で受け止める。

その一撃を受け、顔をしかめたリップが後退、自身の腕を構え、その腕に紅い魔力を纏わせる。

『微笑むサロメ』——！』

自身の纏う魔力を変え、その爪を振るうリップ。あの魔力は自身の攻撃を増幅させる魔力だ。

おそらく、あのランサーの前では、今の自分では防御は崩せないと判断したのだろう。

正にリップが攻め、ランサーが攻める攻防。彼女の攻撃を受け流しながらランサーは『やっと思のあるやつが出てきたか』と言葉を漏らす。

対するリップは、そのもどかしさに顔をしかめていた。

自身のスキルを使って、彼を攻めても、その槍捌きの前に、難なく躲かれてしまう。

この人物は、間違いなく不利な状況すらも自身の勝利へと覆す人物なのだろう。

それ故に、懐に入り込む事が出来ない。

「聖杯戦争の進行が止まっては困る。ここは僕も出ましよう。ガウエイン」

「はっ」

レオの一声に、彼の隣に立っていたガウエインがランサーとリップの間に割って入り、その槍を自身の剣で難なく受け流す。

どうやら、ガウエインの介入により、不利と感じたのだろうか、すぐさまマスターの隣へ後退するランサー。

「ランサー。モウアレ、ツカッチャツテモイイヨ」

「御意のままに」

ランサーが槍を新たに構え直した時、翔の背筋が震えるのを感じた。

あの技は……前に見たことがある。

予選の時に目の当たりにした技、大量の生徒が串刺しにされた。悪夢の宝具。

「リップ！ 下がれ！ 敵の宝具が来る！」

「妻よ！ これなる生贄の血潮をもってその喉を潤したまえ！

『串刺城塞』!!」

魔槍より放たれる静粛の一撃。その槍は周囲の地面より生え、アリーナそのものを地獄へと変えていく。

そしてガウエインが立っていた場所には、何者かを閉じ込めるように、そびえ立つ大量の槍。

今でこそわかる。あれは間違いなく彼の宝具。

そして、あれが出来るのは一人しかない。その正体は、ルーミアに名高い英雄。ワラキアの独立をトルコの侵攻から保った、キリスト教世界の盾とまで言われる高潔な武人。

そして彼は、かの有名な吸血鬼『ドラキュラ』のもとになった人物。その名前は串刺し公『ヴラド三世』。

「この程度の不浄、私には通りません」

何者かを閉じ込めるように、そびえ立つ大量の槍が一筋の炎により、難なく崩され、再びガウエインがその姿を現す。

見た所外傷はなし、まさに無傷と言ったところだ。

宝具をまともに受けたというのに傷一つ追わないとは……ガウエインもまた相当な化け物であることは間違いないだろう。

ガウエインは健在、リップもまた宝具を受ける前に後退、被害は最小限に済んだ。

あの二人が健在である限り、あのランサーに勝てるという希望がある。

今の状態なら勝てる。傍観を決めていたマスター達もこれで参戦してくることは間違いないだろう。

それをランサーは不利と感じる。

「妻よ。ここは一時引きますぞ」

「ハイ」

故にここは撤退の選択肢を取った。

それを追っていくマスター達。そしてそれを何も言わずに見つめているガウエイン。

「あなたは行かないんですか？」

「マスターより追撃の命令は出ていません」

リップの質問にガウエインは顔を変えることなく返答する。

まさに彼は、物語の騎士そのものの存在だ。

ランサーを見届けたレオは、考える仕草をし、翔がいる方向へと顔を向ける。

その翔へと向ける視線は、まさに興味深いと言った視線だ。

「寿々科翔。僕はあなたの成長がとても興味深い。あれを倒すのはあなたに譲りましょう。僕はもっとあなたの力を見てみたい」

「全く、見せ物じゃねえんだぞ？」

しかし、撤退したのなら、わざわざ追わなくてもいいだろうか。

だが、仮にそのままランサーが生き延びた場合、自分はどうなる。ただえさえ、先ほどの戦闘でもわかった様に一人では厳しい相手なのだ。

ランサーが生き延びて、彼らと再び一対一で戦うことになった場合、限りなく勝率は低いのは確かだろう。

となれば、今このタイミングで、他マスターと協力、ランサーを倒すというのが最も効率がいい選択肢だ。

「寿々科翔。あなたは本当に面白い人だ。あなたの成長、見せてもらいますよ」

翔が特設アリーナから出る姿を見つめながら、レオは静かにそう呟いた。

まるで、この先、何が起こるかわかるような、そんな瞳を翔に向けて……

「……は……」

ランサーを追いながら走る翔は、ある廊下についたとき、ふと昔のことを思い出した。

昔と言ってもつい最近のことであるだろう。だが翔にとっては随分前のようにも感じられた。

ここは予選の時、かつて自分がランサーに襲われた場所だ。

あの時は、白亜に助けてもらった。自分はランサーに、そして間違いないく戦い抜いて来るであろうレオに勝てるのだろうか……不安がよぎる。

「翔さん、大丈夫です。今は私がついています。私があなただの剣になりますから安心して下さい」

その心を読み取ったかのように、リップが翔に優しく語りかける。その声に、言葉に、翔は安心する。

あの時の自分はただ逃げる事しかできなかった。けど今は、きつと立ち向かう事が出来る。手にする事が出来る剣がここにある。

「……追ってきたか」

教室の扉を開ければ、ランサーの言葉、彼とそのマスターであるランルーが、こちらへと向く。

この教室も、かつて自分がいた所。まさかここで戦うことになるのは、運命というのは分からないものだ。

「ようやく見つけたよ！ あの時の決着、ここでつけさせてもらおうわ！」

ランルーでも翔でもない、女性の声が響いたと思えば、翔の隣に立つ白髪の女性。

彼の隣に立つ人物こそ、最初に出会った女性である志波白亜その人であった。

「翔くん。一人じゃきついでしょ。だから助太刀するよ」

白亜の掛け声と共に、彼女のサーヴァントであるランサーが、実体化する。

予選時に出会った彼らが、再びこの地にて出会う。それは同時に二幕目の幕開けの合図でもあった。

第18話 バトルロワイヤル

力を持つがゆえに道を踏み外す

道を踏み外すために、逸脱した力を願う

この矛盾もまた、人間の証である。

紛争のない世界

調和に満ちた世界でさえ、特例は現れる

「助かるぜ志波。リップ！ 魔力をまわす！」

「ありがとうございます！」

「ランサー！ 私に勝利を！」

「必ずや主よ、あなたに勝利をもたらしましょう」

槍を回し、構えるランサー。

自分の隣にいるのはかつて、共に戦った白亜のランサー。

そしてジャバウォックの行動を制限し、翔を勝利へと導いてくれた
サーヴァントのランサー。

戦力としては十分すぎるほどだ。

紅の槍の切っ先を白亜のランサーはヴラド三世へと向ける。

直後、開戦の火蓋を切ったのは、稲妻の如き槍の突きであった。

突き、それは基本技の一つ。

だがそれを放つのは白亜のランサー。英霊ともなれば、突きだけでも、小手先の技法のどれよりも早く対処が難しい一撃となる。

しかし、ヴラド三世は、それをいともたやすく打ち払い、白亜のランサーと同じような突きを放つ。

「やあー！」

だが、敵のランサーの突きは白亜のランサーに当たることなく、割り込んだリップの腕へと吸い込まれる。

そしてリップは後退。対するヴラド三世はランルーの傍から動かないまま、槍を構え直す。

その仕草に翔は違和感を覚える。

あのランサーは、恐らくだが、あの場から一步も動かない。ヴラド三世が白亜のランサーに敏捷で勝てないと判断。となれば、その敏捷を最初から捨て、高い耐久性を駆使した守りの戦法。守りもまた強さの一つ。自身に仇名すもの達は身分構わず大量に処刑したヴラド三世だからこそできる戦術という事か……

「なんという……」

白亜のランサーは感激の声を上げながらも、ヴラド三世と打ち合う。

ヴラド三世の攻撃に耐えきる事が出来ずに地面が歪んでいく。ヴラド三世の槍の一振りには攻撃の域を超えている。

まるで爆弾だ。一振りごとに風圧が起き、その場で爆弾が爆発しているかのようであった。

力は互角、だがヴラド三世の守りの戦術と、教室という狭い場所が、まるで彼の手助けをしている様にも感じる。

白亜のランサーは2本の槍を巧みに操り、ヴラド三世の攻撃をうまく回避しながら応戦する。

そして回避しきれない攻撃はリップが応戦、ヴラド三世の攻撃を弾く。

「くそ……」

「焦っちゃだめだよ翔くん」

歯を食いしばる翔を見て白亜が声を掛ける。

後退するリップとランサー。そのどちらもいい顔はしていない。

明らかに、こちら側が押されている状況。翔が焦るのも無理はない。だが冷静さを失ってしまっただけはそれこそ本末転倒。

何とも言えない感情を抑え込み、三人の戦いを見つめている。

「さすがは、ワラキアの独立をトルコの侵攻から保った高潔な武人。まさか貴方ほどの者がこの戦いに参加しているとは思わなかった。しかし、共闘しても防御が崩せない……か」

「翔さん。これでは手詰まりです」

「分かっている。けど……」

ランサーとリップの発言に翔は考える。

白亜のランサーとリップ、二人ならば、あの守りも崩せると思っていた。

だが予想以上に、あのヴラド三世は難敵。

あの防戦能力は、翔の予想を遙かに上回っている。そして厄介なところが一つある。

あのヴラド三世は、守りの戦術を崩す気は無いようだ。

どうにかしてあの守りを崩し、反撃の一手を与えなければ、勝ち目はないだろう。

そして……ヴラド三世が先ほど見せた宝具を翔は思い出す。

あれだけはここで発動させるわけにはいかない。

それを許してしまったが最後、この教室の狭さからして、翔と白亜の死は避けられないだろう。

故に、翔と白亜が出来る宝具の対抗策は、そもそもヴラド三世に宝具を解放させないということのみ。

「できるかどうかはわかりませんが……ランサーさん。私があんまり、なんとか崩してみます」

「その顔、なにか策があるようだな。ならば頼む」

リップはひっそりと翔に耳打ちをすれば、翔は静かに考える仕草をする。

暫く考えたのちに翔はリップの考えに頷き、一つのコードキャストをリップに使う。

そして彼女は正面からヴラド三世に迫る。

それに対するは、守りの構えで立ちほだかるヴラド三世。だが彼女が怯む様子はない。

『g a i n | a g i (3 2) : ! 『 g a i n | s t r (3 2) : ! 』!』
「やあー」

続けて放つはリップへ敏捷強化と筋力強化のコードキャスト。その二つを受けたリップは弾丸の如き速度を手に入れる。

だが、リップの一撃はヴラド三世の防御を崩すことなく、その攻撃を受け止める。

しかし全方位から襲い掛かる爪の連撃には、ヴラド三世が受け止め

るには容易かった。

だが、その刹那、ヴラド三世の表情が固まる。

リップに一撃を放とうとしていた時、自身の腕が動かないことにヴラド三世は気付いたのだ。

「貴様ら……小細工を施したのか……!」

ヴラド三世の槍を操る手が、見事に凍っていたのだ。

そして彼がリップを見てみれば、その両手の爪が冷気を放っているのが分かる。

不意につかれたヴラド三世はこちらにとって、とても優位となる隙を作り出す。

彼女の両手の冷気の正体は翔のコードキャスト。

かつてアリスとの戦いの時に使った『Wind_風 | mg_性i(与)』の応用である『ice_氷 | mg_性i(与)』をリップに対して発動していたのだ。

「払え、我が槍よ!」

それを見逃す白亜のランサーではない。

ヴラド三世がその隙に、自身の敏捷を用いてヴラド三世に近づき、赤の槍による連続の突きを放つ。

その連撃はヴラド三世が凍りついた腕では対応できない重さと威力。そして、完璧であったヴラド三世の構えを打ち崩した。

「ぐう!」

防御を崩されたヴラド三世に容赦なく、白亜のランサーによる斬り払いが放たれ、彼の体に大きな傷を作る。それは戦況を大きく変える一撃となった。

そしてさらにランサーが止めの一撃を入れようと、赤の槍を突き出すものの……

「ランサアアア!!」

直後にヴラド三世に対して、前方に魔力で作られた盾が出現する。

あれはコードキャストの一つなのだろう。立て続けに続く術式によってヴラド三世の目の前の魔力によって作られた盾が光り輝く。

間違いなくあのマスターは盾を強化した。ここにきて、まだあのよ
うなコードキャストがあつたとは……翔は歯を食いしばる。

間違いなくあのコードキャストは前方に盾を作り出す防御に特化
したコードキャスト。

その盾のコードキャストにより、白亜のランサーの一撃を防ぎ、ラ
ンサーが隙を見せた所で、ヴラド三世が一撃を放つ。

まさに完璧な戦術だ。もう槍の攻撃が緩むことはない。ランサー
の赤い槍は、真つ直ぐに魔力によって作られた盾へと吸い込まれてい
き……

「甘いな……その盾で他のサーヴァントの攻撃は防げようと、俺の槍
を防ぐことはできない」

「がはっ……！」

赤い槍は無慈悲にも盾を貫通し、ヴラド三世の霊核を確かに貫いて
いた。

あまりにも予想外の光景に翔は眼を見開く。

ランサーのあの槍はまるで、魔力の盾を気にしてないかのよう
に、貫通……いや、通り抜けたのだから……

白亜のランサーの槍に貫かれたヴラド三世がぐらりと傾き、仰向け
に倒れる。

その眼には、もう鋭さは感じられない。ただその両目からは、血の
色をした雫が重力に従い、滴り落ちていく。

ヴラド三世が倒れると同時に、体の先から消えていく感覚を感じ
る。

自分のコードキャストがいけなかったのだろうか、倒れたヴラド三
世に近づく。

「公爵……死ンジャウノ？」

自分のサーヴァントである公爵は負けてしまった。

なら食べないと、とても悲しいけど食べないと……

「いえ、それには及びません。この身は貴方に愛される資格がない。

怪物はこのまま消え去るのみ」

公爵の姿が黒に染まり消えていく。

なのに、なぜ食べてはいけないのだろうか。これまでずっと一緒に戦ってきたのに愛するなど彼は訴える。

——食べる食べると望みながら、その実、倒した相手を一口もしなかった哀しい女よ。

「……だから人間というものは美しい。正気を失いながらもそなたはまだ人間だった」

立ち上がり、自分を見つめる公爵。その顔は狂気に満ちて無く、とても優しい顔。

「その魂にはまだ救いの余地があります。故にあなたは煉獄へ、我が体は地獄に落ちるが定め」

「公爵……」

「それでは、しばしのお暇をいただきます……」

大事な家族がいなくなってしまう……

公爵……ランルー君にもね、愛している物、あつたんだ。

それはたくさん、いっぱい。

一番愛したのは、ランルー君のベイビー。

小さくて柔らかくて……

だけど、みんないない。ランルー君が愛した物はみんないなくなる。

だから、ランルー君は聖杯にお願いしようと思ったんだ。

世界中のみんなの事を好きになるって……

そうすれば、ごちそういっぱい食べられる。

このお腹には何一つ入らなかった。

あんなにたくさん消えてしまったのに……

みんなみんな消えちゃった。

お腹がすいたら悲しくなる。

御馳走のない世界なんて……

——ああ

いっぱい考えちゃったら、お腹すいたなあ……

ヴラド三世の血だまりを見つめていたマスターは、やがて静かに光となった。

あの二人も、願いをもってこの戦いに挑んだ者たちなのだろう。

それを思えば、やはり罪悪感を持つてしまう。

「よくやった、二人のマスターよ。では約束通り。君達に令呪を授けよう」

突然、背後から声を掛けられれば、そこには言峰が立っていた。

彼は翔と白亜に、短い処置を施せば、手に刻まれた令呪が一画増える。

これはマスターを一人倒して手に入れたもの、無駄遣いになど、できはしない。

「君達は、このまま勝ち進めばどこかで戦うことになるだろう。どちらも頑張りたまえ」

そう、今ので四回戦が終わったわけではない。

だが、翔は言峰から驚愕の真実をその後聞く。

翔の四回戦の対戦相手は、不在。

どうやらあのランルーこそが、翔の対戦相手だったそうだ。

対戦相手の不在、つまり翔はこれにて四回戦を勝ち上がったことになる。

「やりましたね翔さん！」

「ああ、お疲れリップ」

リップの頭を優しく撫でている時に、ふと夢の中の出来事を思い出した翔。

夢の中でBBという少女が話したリップはアルターエゴという存在である事。

それを今までリップ自身からは、話したことが無いのだ。

いや、どちらかというと、彼女は過去を話したくはないようにも見える。

彼女がそこまで過去を秘密にしているのは理由があるだろう。

きつと翔にも知られたくない過去が……

「見せつけるねえ翔くん……さあ、ランサー、今日は休みましようか」
ランサーは白亜のその言葉に軽く了承の返事をする、二人は個室
へと戻っていく。

それを見た翔とリップも今日は休もうと個室へと戻ることにした。

「……まあいいか」

先程は少しリップの過去が気になったが、余計な詮索をするのはや
めようと思った。

ここまで一緒に戦ってきたのだ。彼女の過去に何があっても、どの
ような生き方をしてきたかも、自分は自分なりにリップの事を理解し
ているはずだ。

彼女を理解し、受け入れる覚悟はもうできている。

だから、今は知らなくてもいいだろう。リップが教えてくれなけれ
ばそれでもいい。

この繋がりが消えることのないなら……俺は、このままでもいいの
だから。

第19話 最凶の刺客

避けようのない死

逃げようのない終わり

結末を前にしたとき、本質は表れる

祈りも救いも不要

戦いは今日、ここで終わる

その狭間で——どうか、見せてほしい

かつてそうであったように

人間の全てが

絶望の中で光を見出せるのかを

「そうですか……彼とついに当たるのですか」

「魔術師というものは、肉弾での戦いと違い、僅かな期間で急激に伸びることがある」

ここはとある場所、人目のつかないところで、二人は対面していた。

一人は、レオナルド・ビスタリオハーウェイ。西欧財閥の次期盟主である。

彼らが話しているのは、レオではない方の対戦相手の事だ。

レオではない方の、黒コートの人物の手には、端末が握られている。

その画像には、実力的にはかなり下のランクを位置づけられている

データと共に、写る『寿々科 翔』のデータだ。

ここまでは不正規な方法で奇襲をかけても、予想外の方法によりその事態を潜り抜けてきた彼からすれば、この翔の存在こそイレギュラーであり、警戒すべき対戦相手と思っっている。

「だが奴はここで終わる。聖杯は、あなたが手にするはずなのだレオ」
俺はそのためにここに在る。そう言い加える。

その彼は顔色一つ変えることなく、レオにはつきりとそう伝えた。

レオにそう語った、その人物こそ……

「ご健闘を……兄さん」

黒コートを羽織った青年である、ユリウス・ベルキスク・ハーウエイその人であった。

「う……」

翔は目覚める。だがそこは自分の部屋ではなかった。

確か自分は、あのヴラド三世との戦いが終わり、部屋に戻って倒れ込むように寝ていたはずなのだが……

ここは海の中だろうか、深く、けど上を見上げれば明かりが見える海の底。

だが足はつけるようだ。そんな不思議な場所に翔は目覚める。

「……って確か1回戦が終わった時の……」

ああ、ここは覚えがある。翔は1回戦が終わった後に見た夢の場所だ。

確かあの時は、自分の夢をぶち破ってキャツキヤ騒いでいたあの小悪魔的な奴がいる場所だ。

前はBBというやつに叩き起こされたが、どうやら、今回はそうではないらしい。

まず彼女の姿が見当たらない。それどころか、この空間自体がまるでノイズが走っているかのように、辺りが歪んでいる。

もしや、彼女の身に何かが起こったのだろうか……

「おいBB、いるのか？」

「おや？ 私はどこにいますけど？」

彼女が呼ぶ方に声を掛けるが、やはりBBはいない。

むしろ、彼女が言葉を発する度に、この空眼の歪みがひどくなってきているような感じもする。

翔が、BBが見えないことを口にすれば、BBは『そうですか』と元気がない声で返事をする。

調子が狂う。あんなに、はしゃいでいたやつが一体どうしたというのだ。

「おいお前、今日調子変だぞ？」

「健気でかわいいセンパイのために、少しづつ小出ししていこうか
なって思っていたのですが、もうこの干渉は叶わないようですね」
元氣のない声で、翔に語りかけるように彼女が言えば、言葉の続き
を彼女は口にする。

「センパイ手短に言いますね。五回戦の決戦で、詳細を省きますが、あ
なたは死にます」

「なっ!？」

B Bから言い渡された残酷な結末。それをいきなり聞いた翔は驚
愕の声を上げる。

自分が死ぬ……それはいつかはあり得るのではないかと思ってい
た事、だが聞きたくはなかった。思いたくはなかった。

「全く、自分でもどうかしてると思います。本当に焼きが回ったと思
います。だから……」

力を貸しましょう。B Bは静かにそれを口にした。

もし、4回戦、いや、それに準ずるものを無事に勝ち抜き、5回戦
目になったとき、翔にはあるところに行つてほしかった。

B Bはその行先を静かに翔に伝える。そこに自分はある力を残し
たという。

その力を、きつと翔には使いこなせると……

5回戦の決戦で翔の身に起こる、死を防ぐ事が出来るのは、翔と
リップの力が必要不可欠だと静かに彼女は伝えた。

「期待していますよ、未来あるコーハイさん？ 結果を私が知ること
はもうできないですけど、願わくば、リップを……彼女を幸せにして
あげてください」

「まってくれ! どういうことだ! 力を授ける? 俺が死ぬ? お
いB B!!」

それを考える間もなく、まるで目の前が塗りつぶされるように、視
界が黒に染まり始める。

目覚めの時のようだ。いくら翔が叫んでも、もうB Bの声が聞こえ
ることはなかった。

きつと、彼女の言葉には意味があるのだろう。

だが、今の翔にそれがわかることはなかった……

5回戦開始。

128人いたマスターとサーヴァントも、今では8人となった。ここまですると校舎も静かになり、騒がしさよりも静けさの方が多くなってきた。

バトルロワイヤル、あのヴラド三世は強敵だった。

白亜のサーヴァントが力を貸してくれなかったら、自分はもうなっていたかわからない。

「次の対戦相手は……あいつか」

翔は、端末のメッセージを確認し、あの掲示板の所へと歩いていた。そして、その対戦相手の名は確認する必要がなかった。

対戦相手の名前がかかれてある掲示板、この空間に足を踏み入れた時に感じたのだ。何度も味わった、あの凍りつくような殺気が……

「ようやくてめえと戦えるようだな黒コートの野郎」

「……」

彼は、振り向くことなく、背後にいる異様な存在に声を掛ける。

翔の問いかけに、彼は返答することなく熱を持たない瞳は、ただじつと、こちらを見つめていることが嫌でもわかってしまう。

他のマスターとは違う、段違いの殺気、威圧感。

それはまるで、何百、何千という針がこちらを突き刺している様であった。

「その眼を見ればわかる。随分と腕を上げたようだ。これだからわからないな、魔術師ウィザードというやつは……」

「そうかい、そいつは光栄だな」

翔が振り向けば、黒コートの男、ユリウスはゆっくりと歩みを進める。

それはまるで、殺気そのものが自分に近づいてくるようにも感じられた。

息を吸う事すらままならない。だが翔は、息を飲みながらも、彼を視線で追った。

「翔さん……」

「あいつだけは……気を付けなくちゃいけねえ。俺は一回、あいつのせいで死にかけたんだ。それだけはわかる」

今思い出しても、背筋がぞつとする。翔はあの予選の時のことを思い出していた。

ユリウスは眼を閉じ、背後を振り向けば、まるで霧が去っていくかのようにふらりと消える。

だが、あの時のように弱い自分ではないはずだ。

拳を握りしめれば、翔は彼とは違う方向を歩き、階段を下りる。

「あら、翔くん。対戦相手の看板を見てきたんだね」

「ああ、志波か」

階段を下りれば、どうやら食堂に向かっている彼女と遭遇した。

次の対戦相手が決まったことを彼女に伝えれば、彼女はなにやら、複雑そうな表情をする。

「ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ……彼は、プロの暗殺者よ」

白亜は言葉を続ける。

あれの生き方は間違いなく、翔とは真逆。戦いに感情を持ち込むようでは確実に殺されるという事は確か。

殺し合いや暗殺の化身ということとは彼女は、翔に伝えた。

「ということよ。ユリウスに挑むなら、万全な準備をした方がいいってことね。それはともかく、かれこれこの学園で伝わっていた都市伝説みたいなのを入手したんだけど、聞きたいかい翔くん？」

「……は？」

いきなり何を言い出すんだこの少女は……

翔の制止を無視して白亜は語り始める。

どうやら、この聖杯戦争に使われるアーリーナには1から7までの『月想海』と名付けられているが、どうやらこの学園のアーリーナ内には、1でも7でもない『零』というアーリーナがあるらしいのだ。

そして白亜はどうやら、その噂に興味があったらしく、その噂を頼りに情報を辿って行ったところ、なんとその『零の月想海』のキーの実物を手に入れたらしいのだ。

「だけどアリーナの前行っても、肝心なアクセスが出来なくてさ、結局これどうしようかなって考えていてね」

この零の月想海、様々な噂が絶えないらしく、聖杯戦争の没データとかが入っていると、この世の全ての情報が入っていると、ムーンセルのみが知る情報が入っていると、ないとか、様々な噂がされているらしい。

「零の月想海……」

この言葉に翔は聞き覚えがあった。

なぜだかはわからない、ただぼんやりとどこかで聞いたような覚えが……

記憶をたどっていれば、一つの答えに辿りつき、それを言った人物が鮮明に浮かび上がってくる。

確かこれを言っていた人物は……

思い出した。ここではないどこかで、確かにそれを言っていた人物がいた。

「志波、そのキーを俺にもらえないか？」

「おや？ どうして？」

「そんな都市伝説があるんだ。何か使えるデータとかあるかもしれない」

「……言うと思った」

白亜は微笑みながら、小さく呟くと、そのキーと思われる物を、翔に手渡す。

翔の手には、何やら四角いコードのようなもの。その中には難解複雑な術式が組み込まれているのが分かる。

だが翔には、なぜだか自分なら使えそうだと、思った。それがなぜだかはわからない。

「もし開いたら感想教えてねー」

白亜は手を振ると食堂に向かって走っていく。

それを見届けた翔は、静かにアリーナの入り口に向かい、彼女から貰ったそのコードを使う。

翔がコードを展開すると、そのコードが認証し、辺りの雰囲気が一

変する。

「どうやら、認証は成功したようだ。しかし、いとも簡単にアクセスできた事に翔は疑問を覚える。」

「なぜ白亜にはこれを開ける事が出来なかったのだろうか……」

「自分が思うには実力的にも魔術師としての腕も、白亜のほうが上手なはず。そんな彼女ならば、これを展開しアクセスできることなど容易いと思うのだが……」

「もしかすると、このキー自体に、何か仕掛けがあるのかもしれないが……」

「まあ、考えてもわからないことはしようがない。」

「今は、この中に入ってみる事にしよう。」

「……行きましょう」

「ああ」

「リップが実体化し、翔が彼女の言葉に頷くと、アリーナへ続く扉を開いた。」

「零の月想海……そこは今までのアリーナとは違い、海が広がるような光景では無く、まるで血が広がったかのような正反対の光景が彼の視界に広がった。」

「正直に言うと、こここの居心地は最悪だ。」

「viewmap(示)」

「そのコードキャストを使えば頭の中に大量の情報が流れ込む……それをリップにも見えるようにマップ出力すれば、このアリーナ自体はそれほどまで広くはないという事が分かった。」

「どうやらこのアリーナにエネミーは存在しないらしい。没データのたまり場であれば、没エネミーの一体や二体はいそうなのだが……まあないものを期待してもしようがない。」

「だが油断は禁物だ。何が起こるかかわかったものではない。」

「周囲に注意をはらいながら進んでいくと、なにやらリップが、なにかに気づいたように周囲を進み始める。」

「リップ……どうした？」

「あ、いえ……何か懐かしい感じがあつた気がして……」

「懐かしい感じ？」

何かに導かれるままに進んでいけば、リップが突然歩みを止め、周囲を探索し始める。

彼女が言うには、この辺りから、その懐かしい感じというのがしたらしいのだ。

その彼女の言葉を頼りに進んでいけば、翔の手に何かが触れたような気配がした。

「……これは」

その透明な何かを掴み、自身の魔力を通すと、まるで透明というペールを脱いだかのように、礼装が姿を現す。

今までコードキャストは全て使え、なおかつ自作もしてきた翔であつたが、その礼装の構成に覚えはなかつた。

となると、これが夢の中で彼女が話していた、ある力……

「もしかして……これが……？」

「このコードキャスト、使えそうですか？」

「分からないな。とにかく使ってみるか」

翔の身体に術式を組みあげ、それを唱えてみるが、特に反応はない。

これは研究が必要なコードキャストの分類だ。

ただ闇雲に使うだけでは意味はないのだろう。

もしこれが強力なコードキャストなら、あのユリウスとの戦いで有効なはずだ。

彼は本物の暗殺者……一つ間違えれば、刈り取られるのは間違いない自分だ。

ユリウスとサーバントの差を小さくするには少しでも多くの戦力が必要。

彼の力は今までのマスターとは違い強大だろう。

だから、出来る限りのことをやるとしよう。

第20話 蠍の一撃

「……翔さん、一つだけ話があります」

場所は変わり、あの零の月想海の探索を終えた二人はアリーナにてトリガーを習得、アリーナを蠢くエネミーを倒した時にリップがふと言葉を漏らした。

「あの人が相手です。きっと宝具を使わないと勝てない場面があるでしょう」

辺りにエネミーをいないことを確認してからリップは改めて翔に向き直る。

その顔はどこか、怯えた感じがして、でもしつかりと翔のことを見つめている。

宝具……それは英霊の象徴、その英霊の伝説そのもの、それを使えば必然的に、どのような英霊なのが分かる事となる。

だが、それには、サーヴァントの事をマスターがその英霊を理解していなければならぬ。

そうはリップの事はよく理解していると思っていた。だがそれは、今のリップの事だ。

彼女の事を理解するということは、彼女の過去を知らなければならぬ。それは必然的に明らかである。

つまり、宝具を使うという事は、翔自身も彼女の過去の事を、知らなければならぬ。

「翔さん、私の過去を知りたいですか」
顔を逸らせながら、声を小さくしつっ言うリップ。

過去を話す事は、彼女にとってそれほど勇気がいる事なのか……？ いや、違う。リップは、別の意味で勇気がいるのだ。

確かに人に知られたくない部分を話すには、とてつもない勇気がいるのを翔は知っている。

今まで身近に、リップの表情を見てきた翔には、今彼女が何を抱いているのが大体予測できた。

彼女は、パッションリップは……

——怖いのだ。

リップの過去を知り、自分に拒絶されるのが怖いのだ。リップの過去を知り、距離を作られてしまうのが……そんな彼女を見ているだけでも、心が痛む。

「リップ、俺は……」

「そこにいたのか」

「!？」

翔が話し終える前に、まるで影が分離したかのように現れるのは、黒いコートの男。

見間違うはずがない。あの姿、あの視線、あの殺気……

その姿は紛れもないユリウスであった。しかし妙だ、アリーナ内だというのにサーヴァントの姿が見当たらない。

一体何が起きているというのだ。

「やり残した仕事を片づけに来た。ここで消えろ寿々科翔」

間違いない。彼はここで仕留める気だ。

だがサーヴァントの気配がまるでない。感じるのは彼の殺気だけ。どこかで見えない一手が来ると彼は直感で感じた。

リップが翔の前に立ち、ユリウスから翔を守るように立ち塞がる。

「それは私の台詞です！　ここであなたを倒します！」

「いやいや、それはこちらの台詞よ。その奇妙な籠手はただの飾りか？」

「!？」

何かがぶつかる音、それを同時に見開くリップの目。

翔もまた目を見開き、リップの名前を叫ぶ。

この一瞬のうちに、リップは何者かに攻撃を受け、無惨にも空中に吹き飛ばされていたのだ。

今の声は間違いなく彼のサーヴァントの声……

だが翔も、リップも、そのサーヴァントの存在を認識すらできなかった。

地面に勢いよく叩きつけられ、声を漏らしながら体が震えるリップ。

彼女も、またあのサーヴァントの動きを認識すらできなかった。前から攻撃されたのか、後ろから攻撃されたのかもわからない。

まるでどこからか透明で、巨大な鉄の塊が直撃する。そんな感覚を彼女の身を残しただけ。

「リップー！」

しかし、そこには『何もなかった』。

リップが力なく地面に倒れ伏したその結果のみが、全てを物語っている。

彼女がうつすらと目を開け、周囲を確認するが、彼女の眼をもつてしても、攻撃した者の影すらも、写らなかった。

ただ驚き叫ぶ、翔の声を、黒コートのユリウスがいるだけ。

肝心のサーヴァントはなにもわからなかった。

「なにも……わからなかったなんて」

「終わったな、行くぞ」

リップが力なく言葉を吐いたのを見届け、ユリウスはまるで何事もなかったかのように立ち去ろうとする。

が、そのユリウスが何かに気付いたように、何も無い所を見つめる。

恐らく彼のサーヴァントが、なぜか立ち止まったのだろう。

「どうした。やはり首でも削ぎ取っておくか？」

「いや、それには及ばん。確かに心穴を衝いた。衝いたのだが……まあ良しとするか。抜かりはない。いづれ死に至ろう」

ユリウスのサーヴァントの言葉に、翔は彼の声が出た方向を見つめる。

今あのサーヴァントは、なんて言った。聞き間違えが無ければ……間違いなく『死に至る』という言葉が……

見れば確かに、リップは動かない。時折、苦しそうに呻くだけだ。

「しつかりしろリップー！」

そう言い、彼は術式を組み上げ、回復のコードキャストをリップに放つ。

だが、そのコードキャストを掛けた時、とてつもない違和感が翔を襲う。

効かないのだ。回復のコードキャストが……

これは普通の傷ではない。激痛によって叫ぶリップを見つめて翔は即座に理解した。

あのサーヴァントになにかされた。そう考えるのが妥当だろう。

翔はまだリップと話したいことがたくさんあった。

まだ伝えたいこともたくさんあった。

いつか自分の記憶を取り戻したら……自分の体が見つかったら……まだ伝えたいことが……

「待ちやがれユリウス」

そのためにはここでユリウスを倒さなきゃいけない。

彼を倒して、リップを助ける方法を聞きださなきゃいけない。

「くそつたれがあー！」

「……怒りで我を忘れたか」

自分でも考えられない速度でコードキャストを練り上げ、魔力弾をユリウスに目掛けて複数飛ばす。

だがその行動は彼には全て見えていたようだ。

彼もまた防御のコードキャストを使えば、翔が飛ばした魔力弾を全て消し去る。

いくら、魔術の腕が立つマスターと言えど、サーヴァントの守り無しでは勝てるわけがない。

翔にはそんな単純な考えすら、今は出来ないでいた。

「!？」

ユリウスがこの短時間で、短剣を翔に目掛けて投げる。

魔力弾を再び放とうとしていた翔に、その動作は遅れて確認できた。だがもう遅い。

その短剣が容赦なく翔の眉間を刺し貫こうと迫る。

それを防ぐ手段はない、彼にはただそれが自分に突き刺さるのを見つめているしかないのだ。

自分の急所だけは防ごうと腕を前に出したところで、翔の端末が宙へ浮き、輝きを始めた。

「翔くん！ 端末から侵入させてもらうよ！ そのまま動かないでね

！」

どうやらその声は白亜のようだった。彼女は翔の端末に、何らかの力で侵入し、強制転送のコードキャストを使ったようだった。

そのまま端末は激しい光に包まれ、翔は宙へ浮く感覚に包まれ、視界は白く包まれた。

それはまるで、目が潰れるほどの光。そして重さが忘れるぐらいの引力。

霊子で構成された肉体は、一度圧縮され、アリーナから摘出される。それはいわば二次元が一次元になるようなものだ。当然、翔の意識はそこで消える。

座標を合わせるため、白亜は一時的に翔の意識へ接続を試みる。

——その時に、白亜は見えてしまった。白亜は知ってしまった。

記録でしか残って無い記憶を……

「まあ、わかっていたことだけどさ。こうやってみるとねえ……」

その光景を見て白亜は静かに言葉を漏らす。

彼女が見ていたのは、30年前の記録。ムーンセルに記録でしか残っていない風景。

燃え盛る街。逃げ回る人々。

白亜は翔の正体の結論に辿りつく。

その結論は、翔は、翔の身体は……

「う……」

どれだけ気を失っていただろうか。

ぼんやりとする意識を振り払い翔は目を覚ます。

天井が白いことからここは保健室だろう。

「あいつは!?! リップは!?!」

目を開け、脳が覚醒し始めた時、少し前までの出来事を翔は思い出しベッドから勢いよく飛び起きる。

確か、アリーナでユリウスに襲われ、光に包まれた後の記憶がない

……

「わわわっ!?! わー!?!」

叫び声がする方を向いてみれば、飛び起きる翔に、驚いた白亜が盛大に転び、持っていたであろう、いちごミルクの紙パックが宙を舞い、彼女の顔に激突しているところだった。

その意味不明な光景に、頭をかしげる翔。

「いてて……扉開けた瞬間、いきなり飛び起きるのは心臓に悪いって……」

「わ、悪かったな……」

頭を擦りながら、ゆつくりと起き上がる白亜。

その後、白亜から説明を受ける翔。

「どうやら、自分はここに転送された後は、丸一日眠っていたらしい。昨日、アリーナでユリウスに襲われた際に、どういうわけか、白亜がそれに気付き、令呪を使い翔の端末にアクセスし、強制転送させたらしいのだ。」

そのショックで一晩眠っていたらしい。

「そこまでしてまで彼女は自分を助けてくれたという事。さらに令呪、あの奇跡を使ってまで、自分を助けてくれたという事か……」

「どうして彼女がここまで協力してくれるのかはわからないが、今は感謝の言葉を白亜に送った。」

「どうやら君のサーヴァントが、何かの攻撃をうけたみたいね。あなたが寝ている間に彼女を診せてもらったよ」

白亜は隠すことなく翔に説明する。

「最初は新手のウイルス攻撃の部類かと思ったが、どうやらそうではないらしい。」

「彼女が考えた末に発した言葉は、まるで『蠍の毒』のようだという事らしかった。」

「そんなひどいのか」

「ええ最悪ね、最悪中の最悪。彼女の魔力回路が完全に乱されてる。翔さんと彼女を繋げているラインが全く機能してないの」

「つまり、翔から送られる魔力が全く持つて届いてないという事らしかった。」

サーヴァントは確か、マスターの魔力供給が無ければ存在できないはずだ。それが出来ない場合は体を維持できないという事。

つまりリップは現在、自分の魔力だけで体を維持しているという事。

「そうね。彼女の魔力の量から察するに持つてあと数日ね」

「そんな、なにか方法はないのか!」

「翔くん。少し考えさせて。対策、考えておく。昼頃に屋上で会いましょう」

そう言うと、白亜は『これ差し入れね』と焼きそばパンといちごミルクのパックを置けば、保健室から出ていく。

こんな時にすぐリップを助ければどんなにいいだろうか。

今の自分に何かできることはない。つまり今は白亜だけが頼りなのだ。

どうすることもできない。その事實は、翔の心を深く抉るような気がした。

「リップ……」

隣を見れば、リップが苦しそうな表情で横になっているのが分かる。

その姿を見つめれば、自分だけでは何もできない。その事實が突き刺さるのを感じる。

今ここで、リップを助けになるだけの力があればどんなにいいだろう。

リップを助きたい。彼女をこの苦しみから救ってあげたい。

「……翔、さん?」

「リップ!!」

リップは細く目を開け、静かに翔の名前を呼んだ。

その表情は苦痛そのもの、それは彼女の受けた傷が重傷ということを嫌でもわからせる。

「ごめんなさい。私が……もつと、気を付けていれば……」

「違う! お前のせいじゃない!」

あの時、自分ももっと気を張っていれば……

肝心の時に役に立たないマスター。役に立たない自分。だから今までの恩返しとしてリップをいち早く回復させてあげたい。

試しにコードキャストで彼女の傷を癒す何かをかけてやればいいが、そんなものはないらしい。

自分の無能さに打ちひしがれながら、翔は、リップの頭を撫で屋上へと上がることにした。

朝に白亜と相談してから、時間が経過した。

翔は呆然としたまま屋上の柵に身を預けていた。

時間を言えばそろそろ昼頃だろう、白亜が言っていた時間だ。

彼女はなにか策を見つけたのだろうか。

自分は……無力だ。

リップの為になんにもできないなんて。

だが、どうすれば彼女を救える。

どうすれば、あのサーヴァントの倒す方法を探れる。

考えろ、考えろ寿々科翔。

「おう、ここにいたか。壮健で何より」

「なっ!?」

考えていれば何処からともなく声がし、声がした方向を見れば、中華の武術家然とした服装の男性がこちらを見つめていた。

サーヴァント連れていない今、敵サーヴァントに遭遇するという事は、紛れもない死刑宣告にも等しい。

この声は聞き間違うはずがない。あの時、リップを一撃で瀕死に追いやったサーヴァントだ。

「呵々、そう気構えるな。今は仕事の外。私用で気ままにぶらついてるだけよ」

「……俺を殺しに来たわけじゃない。そういうことか?」

少なくとも、話を通じるサーヴァントらしい。となれば、このサーヴァントがバーサーカーということはないだろう。

「そういうことよ。わしはそこまで酔狂ではない。何の理もない殺しはせんよ」

どうやら、このサーヴァントは本当にこちらを狙い来たわけではなさそうだ。

そう思っていれば、その男が、どこからか、お酒の入った壺を取り出す。

「どうよおぬし、儂と酒を飲まぬか。今回の我が主は堅物故、しかも訳ありで飲めぬ男だからな」

「いや、すまねえ。お酒は苦手なんだ」

「ぬ？　そうであったか、てつきりいける口と思ったんだがなあ」

残念そうに男が呟くと、その場に座り込むれば、どこからか酒器を取り出し、そこにお酒を注げばそれを一口で飲み干す。

この男は、問答無用で邪魔者を消すようなものではないらしい。

「あんたを見て思ったんだが、あんたは一戦を大事にするってやつか？」

「その通りよ。見かけによらず、おぬしには底知れぬ力を感じる。確かに儂は『一戦一殺』を心がけておる。一度の戦いでは一人しか殺さぬし、一人は必ず死んでもらう」

しかし、おぬしのサーヴァントもなかなかの腕前と見た。ユリウスのサーヴァントは、静かに翔に向かって言い放った。

まるで、あの場であのような攻撃をしていながらも、生きてると知っているような口ぶりで……

「誇るがいい魔術師、おぬしのサーヴァントはなかなかの腕前だ。一瞬だが儂の拳をずらしおった。今までの何倍も愉しいぞ。あれだな、殺すには惜しいというのはこういう時に言うものだな」

「殺すには惜しい……なら、リップは救えないのか」

この男はアサシンのサーヴァントであるが、それ以前に一人の戦士であるという事が翔にはわかった。

若干の期待を込めて、翔はそのサーヴァントにそう言い放つ。

「残念ながら出来ぬ相談だ。儂とて助けてやりたいのは山々だが、この拳は倒す事しかできんだ」

儂の拳に宿るのは『殺』のみ。

人体を効率よく壊す術里はあれ、大層な思想も思念もない。

余人を生かした事など、数えるほどもなし。

武人を謳うには程遠い殺人鬼よ。

サーヴァントはそう言うど、飛び上がり、翔に背後を向ける。

どうやら、本当に、この場で戦う事は無いようだ。

「故に、サーヴァントはおぬしの手で治せ。儂とて敵は万全でなければ愉しくない。おぬしのサーヴァントがもう一度立ち上がる時を待っておるぞ」

サーヴァントが空気と共に消えると、張りつめていた空気が一気に緩んだのを感じた。

どうやら、あのサーヴァントは去っていたらしい。

この事態を一刻も早く解決しなければならぬ。

白亜の言葉を信じ、翔は屋上を下りて行った。

第21話 回路修復

頭が痛い……

体中が痛い……

私はどこにいるのだろうか……

『……どうして、ここまでできたんですか』

うつすらと目を開ければ青く深い場所に自分がいるのがわかった。

どうやらここは深海のような場所らしい。

そして、誰かの声が聞こえる。

この声が聞き覚えがある。これは紛れもない私の声だ。

『あのまま校舎にいれば、ずっと見つめられていたのに、好きなままで幸せだったのに……』

この記憶が私が、あの場所にいたころの記憶だ……

——ノイズが走り、場面が変わる。

これは、その奥底に見える映像のようなものは、私がかつて『あの人』にやったことだ。

『……好き、好きなんです。大好きなんです。だから教えて下さい』

巨大な腕を『あの人』に、そして、その隣のサーヴァントであろう存在に向けながら私はこう言った。

その人が女なのか、男なのかわからない。

そして連れていたサーヴァントは、赤いドレスを身にまとった女性あつたかもしれない。

もしかしたら、赤い服を身にまとった男性であつたのかもしれない。

もしかしたら、着物を着た狐耳の生えた女性であつたのかもしれない。

いや、もしかしたら、黄金の鎧を着ていたサーヴァントであつたのかもしれない。

——どうしたら私を好きになってくれるんですか？ 私のどこがいけないっていうんですか……!?!

「目が醒めたかりップ。大丈夫か？」

暗闇の中でリップは眼を覚ました。

声が出た方を向けると、翔が彼女の視界に入った。

体に激痛が走るのを我慢しながら、リップはいち早く違和感に気付く。

あのサーヴァントに、自分と翔の繋がりを断ち切られたという事が、今の状態からわかった。

翔からの魔力が行き届いていない。

このままでは、自分の身がいつまで持つかはわからない。

「ごめんリップ。俺だけじゃお前を救う事は出来ない。こんなことしかできなくてごめん」

リップの額の汗をぬぐいながら、思いつめた表情で言う翔。

こんなにもリップが近いのに、彼女がどこか遠い所にいるような感覚になる。

それでも、彼がこんなにも近くにいて、静かにリップの頭を撫でている。

これだけでも、十分に体に良く効く薬だ。リップは静かに目を閉じる。

「翔くん、ごめんなさい！ やつと治す方法が見つかったよ！」

「ほんとか！」

保健室へ入ってきた白亜の言葉に翔は歓喜の声を上げる。

彼女の思いついた手段というのはこうだ。

まず彼女が、自作のコードキャストを使い、リップの乱れた魔力回路に侵入。

膨大な数であろう乱れた回路から、繋がりが途絶えた回路を見つけ修復。

それは広大な海の中から、一つの石を見つけるようなもので、それを考案した白亜も、このコードキャストを用いた修復方法は初めてらしく保証は出来ないと言った。

下手をすれば、白亜自身もその魔力の海に飲まれる可能性だってあ

る。

それでも、彼女はやってくれるというのだ。

自分が白亜を信じなくてどうする。

「それでも、俺はそれにすがりたい。頼む」

だが何かできることがあれば、自分も手伝いたい。

こんなに、助けてもらっているのだから、何か一つでも手伝ってあげることがあれば……

「そうねえ、じゃあ翔くんは誰にも入られないよう外で見張っててちょうだい」

「わかった」

それが白亜の役に立つというのならば、そうしよう。

彼女に追いだされるように、外に押し出され、扉をぴしやりと閉められるが、自分が居てはいけないという事は、恐らく自分がいれば気が散るという事なのだろう。

それに、外を見張っというて頼まれるぐらいなのだから、彼女の言っていた案は、それほど精密にやらなければいけないという事だ。下手をすれば白亜自身に何かが起こるかもしれないということ。

ならば、自分は任された、見張りというのを全力でやろう。

思えば……

少し白亜の顔が赤かった気がしなくてもないが、きつと気のせいだろう。

「少し情報を整理するか」

翔は、扉の前に立ちながら、情報を整理することにする。

ユリウスが連れている。見えないサーヴァント。

あの姿は、リップを始めて召喚したとき、そして屋上で見た2回ではあるが、その容姿ははつきりと覚えている。

中華の武術家然とした服装。しかし耐久力……それこそ2回戦にて、敵であるロビンフッドの宝具『祈りの弓』が腕に直撃しても、何とかなる耐久力を持っているリップを一撃で倒したあの攻撃。

その攻撃力を考えれば、バーサーカーと考えるのがいいが、あのサーヴァントは普通に会話できている。となればこの線は薄いだろ

う。

となれば、武術を使い、暗殺に長けた、もし服装から安直に中国などの英霊と考えれば……

「いや、それは考えすぎか」

安直な考えは敗北に直結する可能性もあるのだ。

ましてや、今回の相手はあの暗殺者であるユリウス。

もっと確証を得てから、サーヴァントの真名を当てなければ……

そして問題は、あの姿を消すやつだ。

ダン卿のサーヴァントも姿を消していたが、今回は根本から違うような気がする。

あれが、気配遮断の応用と考えてもいいが……それも決定づけるにはまだ早い。

「こんにちは」

翔が敵サーヴァントについて考えていれば、唐突に声を掛けられる。

その声から予想して、見上げれば、予想通りレオが立っていた。

「何の用だレオ」

「あなたの次の相手が兄さんだと聞いたもので、今のうちに別れの挨拶をしておきます。寿々科翔さん」

「やつぱりか……ハーウェイと聞いたからもしやと思ったが……あいつは、お前の兄なのか」

ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。その名前を聞いた時から、違和感を感じていた。

その違和感の疑問をレオに投げかける翔。

「少し違いますね。僕と彼は腹違いの兄弟なんです。ですが、その事実と兄さんが聖杯戦争に参加していることは何の関係ありません」

「関係ない……？ どういう事だレオ」

レオは少し目を閉じ、考えたのちに翔に語りかける。

「彼は単純にハーウェイ家次期当主の護衛としてここにいるのです」

護衛……つまりは、レオとユリウスが戦う事になっていた場合、どうなるか……

考えたくもない、彼にも何らかの思う事があってこの戦いに参加しているはずなのだ。

なのに……いや、これ以上の考えは、よそう。その結果は知ることはないのだから……

「それでレオ、お別れってなんだ？ まさか、俺はあの黒コートの野郎に勝てないって言いに来たのか？」

「その通りです。貴方では兄さんに勝てません」

「……ずいぶん、はつきり言ってくれるなお前。それなら俺の身長でも計って棺桶の一つぐらい用意しておいてくれや」

レオの言う通り、確かに力の差はあるだろう。

だが、こちらとて負ける気はない。

意思だけではどうにもならないことはあるかもしれない。

だとしても、やる前から勝敗は決まらない。

明らかに自分とユリウスの力の差は明白でも、勝負はやってみなければわからない。

今までだって、マスターと自分の実力差は明白であった。

だが、それに勝ってきたのは、諦めなかったからだと思ふ。

「だがなレオ。ユリウスは、俺にとつて倒す事が出来ないほど強敵かもしれない。それでも必死に喰らいついてやるさ。そうやってリツプと今まで乗り越えてきたからな」

レオは翔の言葉を聞き、少しばかり驚いたような表情を見せたが、やがていつも通りの表情へと戻る。

「それは……そうですね。彼とて絶対ではありません」

レオは静かに頷く。

その肯定は、こちらに向けられたものではないように翔には感じた。

それは、まるで、兄のユリウスに向けられたもののように感じたのだ。

「天の意思が下されるのなら兄さんにもそれは抗いようのない事。もし兄さんが敗北するならその時は不運だと思ひましょう」

——ただ、純粹に、彼には運がなかったと

腹違いではあるが、兄弟として随分冷たい考えのように翔は感じる。

レオはユリウスの勝利を願っていないのだろうか……

「冷たいようですが、僕の中には彼の勝敗で、揺れ動くものは何もありません。何より生を願う意味がありません」

最終的には自分が勝つような言い方。いや……

これがレオの考え方なのだ。

世界に君臨されることを約束された王者の思想。

少しだけはつきりしたことがある。

それは、前にも思ったレオ自身に何か欠けていると思った時。

ぼんやりとだが、彼に何が欠けているか、それがなんとなくわかってきた。

「兄の事を想うのは王の行いではありません」

ただ……レオは言葉を続ける。

「一つだけ救いがあるなら、それは無意味な死ではないという事。兄さんは僕が世界を統治する為の礎となります。それは人々にとって揺るぎない成果でしょう」

では失礼します。そう言い、レオは立ち去ろうとする。

「ではこれにて……いや、貴方がこれが最後ではないと信じる以上、お別れはまだ言えませんね」

「その通りだな」

二人がどんな関係だろうと、どれほど強かろうと、決意は揺るぐことはない。

現れた時と同じ、威厳に満ちた足音が遠ざかる。

レオに言われるまでもなく、ユリウスとの力の差は絶対だ。

だが……そう簡単に諦めない。

こちらは一人ではないのだから。

微睡みの中で、うつすらとリップの意識が覚醒する。

ここはどこだろうか。

海の中だろうか、深く、けど上を見上げれば明かりが見える海の底。そんな場所で、私は身を漂わせていた。

昨日は、ずいぶんと懐かしい夢を見た。

まさか、あの時の自分を夢に見るなんて思いも思わなかった。

「う……」

その時、ずきりと体が痛む感覚がする。

その痛みは毒のように、どんどん広がり、それは渦のように自分の意識を闇の中に引きづり込んでいくような感覚だった。

夢の内容を思い出すリップ。

あの時、私は一度、全てを失った。

このまま深海の闇の中に沈んだら自分はどうなるのだろうか。

「……私は」

このまま諦めてもいいのかもしれない。

この苦しみから解放されたらどんなに楽だろうか。

ふと、そんなときに誰かの顔を思い出した。

月海原学園の制服に身を包んだ、海のように煌く青い髪に、森林とも連想させる緑目。

その人はとても、感情が顔にすぐ出る人だ。悲しい時は、悲しい表情をするし、怒っている時は、怒っている表情がすぐにでる。

まるで一直線に走るを体現したような性格をしてるけど……

諦めることは絶対にしない。自分が休んでいる時に、マイルームで一生懸命コードキャストの研究をしていた姿。

自分が、こんな腕をしていても、それを受け入れてくれた時の姿。

「私は……」

そんな彼に応えたい。

そんな彼を守りたい。

そんな彼を支えてあげたい。

この手は、冷たいままでも、心までは怪物にならないように……

そう教えてくれたあなたのもとに、翔のもとに……

「帰りますー！」

時は朝になり、扉の前に立っていた翔の目の前に、一つの光の柱が勢いよく落ちる。

その目の色は翔とは対照的な赤い瞳、頭についているリボンもまた赤色であり、下半身はタイトなドレス姿に身を包んだ少女。

そして一際目を引くのは、腕の先にあるはずの手は金色に輝く巨大な籠手のようなもの。

彼女の決意をした表情の瞳を見て、翔は微笑む。

「お帰りリップ」

「長い一日になりましたね。ハイサーヴァント、アルターエゴ『パツシヨンリップ』、ここに帰還しました」

彼女の言葉から聞きなれない単語が飛び出すのを翔は聞き逃さなかった。

『アルターエゴ』。この単語は聞いたことがある。そう、それはあの1回戦の決戦前、夢の中にBBが侵入していた時に彼女が言っていた単語。

だがハイサーヴァントという言葉は聞いたことが無かった。

とすると、これこそが今まで彼女が隠してきた。話そうとしなかった彼女の正体に関わるもの。

それがリップの口から出たという事は……

「続きは部屋で話しましょう。そこで私が言う事は信じられないかもしれないかもしれません。でも全部真実なんです。それを翔さん、あなたに聞いてほしい」

「……もちろんだリップ」

翔も真剣な顔で彼女の言葉に答える。

自身の部屋にて、彼女が語るは一つの物語。

それは月の裏側の、溺れる夜の物語。

第22話 愛憎のアルターエゴ

「まず、翔さん。私の事、どこまで知っていますか？」

マイルームに着き、最初に話した彼女の言葉はそれであった。

思えば、自分はパッションリップのことについて何一つとして知らない。

強いて分かる事と言えば……

「アルターエゴという存在。BBから分かれた分身つてことぐらい……かな」

「え、その話……どこで？」

リップは驚いたような顔で翔の顔を見つめる。

当たり前だ。この話は彼女にしていけない。

故に彼女が翔の言葉に驚いたのは当然の事だろう。

彼は、1回戦の決戦前、突然、夢にBBが出てきて、それを伝えてくれたことを言う。

「あの人が……」

暫く黙ったのちに、リップは静かに語り始める。

「その話は本当です。私はAIによって造られた英霊複合体。複数の英霊の性質を持つ『ハイ・サーヴァント』なんです」

AIによって造られた人工サーヴァント。

それぐらいの技術を持つAIということは、彼女は未来の英霊なのだろうか。

「そして私を造った人こそBB。ムーンセルが用意した健康管理AI。サクラのバックアップです」

サクラのバックアップ。

まさか、聖杯戦争が始まって間もない頃に、リップと桜の容姿で姉妹と勘違いしたが、そんな関わりがあったとは……

今思えば、リップからの痛い視線も納得だ。

あの時は、地雷を踏んでいたと申し訳なく感じる翔。

「そして私と、もう一人のハイサーヴァント『メルトリリス』は、BBの眷属であり、月の裏側にいたんです」

「月の裏側？」

聞いたことない単語だ。

今までムーンセル内のデータを何度か覗いたことはあったが、そんなデータは、見たことも聞いたこともなかった。

それが、もし都市伝説的存在ならば、真つ先にあの白亜辺りが食いつくと思うのだが、彼女からもそのような単語は聞いたことない。

「それは、きっと語られることのない物語です。実はBBはある目的の為、何人かのマスターを月の裏側に落としたんです」

その本当の目的はリップにもわからない。

だが、パッションリップはBBの分身。だからこそぼんやりとだかわかることがある。

その根底は、BBの心の奥には、どうしても救いたい人が一人いたのだ。

その人の名前は『岸波きしなみ 白野はくの』。

だが、リップには、もう記憶が曖昧で、その人が男なのか、女なのかわからないという。

「だけど、ある一人のマスターがそのBBの記憶、プログラムを改変。誰かを救おうとした行動は、破滅の道へと変わっていたのです」

そして……私も利用された。

あの自己愛の獣に、利用され、自分は命を落としたのだ。

そのマスターの名前は『殺生院せつしょういん キアラ』。

彼女は、BBの全てを利用し、同時にリップも、メルトの利用された。

まるで、糸で動く人形のように……

「メルトと私は、BBの欲求。いわゆるエゴから作られました」

切り離れた愛憎、快樂、純潔、渴愛、慈愛の五つの感情から作られたアバター。

そして、その中の一つの『愛憎』。

愛憎のアルターエゴ。

それが、目の前の、パッションリップの正体。

「BBの防御的な性格、求愛欲求、愛憎から生まれたアルターエゴ。そ

れが私。そして彼女は、自分の中のエゴに適した女神を選び、その性質や力を抽出して組み合わせています」

その数は三つ。

まず一つは『パールヴァティー』。盲目的に、そして献身的に夫である破壊神シヴァを愛した美の女神。

二つ目はパールヴァティーの側面ともされる戦いの女神ドウルガー。

その者は十本の神剣を持っており、自分のこの爪は、その十の神剣が形を変え、具現化した物。

「なるほど……」

翔はリップの腕を見て呟く。

確か、初めてリップがアサシンと戦った時、彼が珍しそうな顔をしたのは覚えている。

今、思えばアサシンがそんな顔をするのは納得だろう。

そして彼女に組み込まれた三つ目はブリュンヒルト。

ブリュンヒルトとも呼ばれる、その存在は、恋した勇者に裏切られ悲しみと共に滅んだ戦乙女^{フルキユール}。

「私は月の裏側に落とされた一人に恋焦がれました。けど、盲目的な恋をあの人は否定しました」

だから戦った。あの人を自分のものにするために……

結果はリップの負け。

だが、あの時の自分は生まれたばかりで、何も知らなかった。

だから、あの人は許した。リップに罪はないと……

そしてパッションリップは解放されたのだ。

自分は、努力しようとした。自分を認め、いつかあの人に振り向いてもらおうと思った。

だけどその矢先に……

「私は、殺されました。先ほど言った殺生院キアラの手に落ちて……」
「そう……だったのか」

リップの言葉に、言葉を発する事が出来ない翔。

いろんな、しがらみから解放され、ようやく歩む事が出来るリップ

を、そのキアラというマスターは殺したのか……

「あと一つ。私達アルターエゴには、一つだけ許された特殊能力『i-d-e-s』というスキルがあります」

リップは説明を続ける。

彼女のイデスは『怪力』から進化した、いわばチートスキル。

どれほど巨大な容量であろうと『手に包んでしまえるもの』ならその爪で潰し、圧縮する事が出来る。

圧縮できるものはリップの手より小さいものだけ……ではない。

彼女の『視点上において、手に収まるもの』なら対象として扱うことができる。

さすがに大きすぎるものは、時間が掛かるが、その気になれば、超高層ビルなども圧縮できてしまうという。

今は、そのスキルは弱体化してしまい、ただの『怪力』としてのスキルとなってしまうているが、令呪などの補助があれば今では恐らくだが使えるようにまでなったという。

「それが私、ハイサーヴァント『パッションリップ』の全てです」

今まで頑なに話さなかった彼女の秘密。

それは今、彼女は勇気を振り絞って、話してくれた。

彼女の表情からするに、後悔はしていないだろう。

だが翔には一つ気になっていことがあった。

先ほど言っていた、リップが始めて恋焦がれた人についてだ

「なありップ。その恋焦がれた人に会えなくなつて、後悔はしていないのか？」

「今の私に、その記憶はないです。男の人だったか、女の人だったのかすら忘れていきますので……」

ですけど……と、パッションリップは言葉が続ける。

「あの人は、私達と前から向き合ってくれた。私が成長できたのは、あの人のおかげでもありました。あの人は『恋』というものを教わりました」

そして……リップは翔を見て、優しく微笑む。

「寿々科翔。あなたに会う事が出来た。今の私はそれだけで十分に幸

せです。あなたは私の呼びかけに答えてくれた」

だからこそ怖かった。

自分の全てを知られるのが怖かった。

自分が嫌われるのが怖かった。

「……リップ」

翔はリップに片膝を付き、彼女の金色の腕を見つめる。

彼女と初めて会った時、ただ自分の命の灯が消えるのを迎えるしかなかったとき『まだ終われない』とただ叫ぶことしかできない自分に手を差し伸べてくれた。

あの時の光景は今も色褪せない。

自分が、この聖杯戦争が終わり、元の世界に帰ったとしても、きつと忘れることはないだろう。

リップの全てを知った今でも、この気持ちが変わることがほとんどない。

翔にとって、リップとは紛れもなく尊い存在であった。

「俺はな、最初はあのように言ったけど、きつと心の片隅では、お前に怯えていたんだと思う」

静かに手を伸ばし、翔はリップに触れる。

それは紛れもなく、彼女の金色の腕の部分。それを見た時、リップは気付いた。

今まで、翔はリップの頭を撫でたことが数多くあれど彼女の、その腕の部分には触れたことが無かったのだから……

「リップ、俺はリップに相応しい人間になりたい。サーヴァントとか、マスターとか、そんな関係じゃない。俺はリップと対等の人間になりたい」

「翔さん……」

今、この時、翔は『本当の意味で』リップを受け入れた。

手を離し、立ち上がる翔。

彼もまた、今まで見せていた表情はなくなっているのを彼女は感じた。翔からもまた、決意の表情が見られるのを彼女は知ったのだ。

「お前がこのタイミングで、この話をしたかは、見当が付く。今回の対戦相手、アサシンのサーヴァントだな？」

「正解です。あのサーヴァントは今までの相手よりも数段上、下手すると、勝てないかもしれません。だから、この戦い、私は全てを出し切ります」

決意の色が見えるリップからのその言葉。

それを意味することは間違いなく……

「今回の戦い。私は宝具を使います。使う場面は翔さんに全てを任せます。今までの戦い、あなたと共に駆け上がり、そう思いました」
今まで自ら禁じてきた切り札。

パッションリップはそれを使うと言った。

それが意味することは、ユリウスが強敵であるという事の証明にもなる。

そのためには、まずあのサーヴァントの姿の見えない秘密を明かさなければならぬ。

そうしなければ、宝具を当てることすら、出来ないのだから……
彼女の決意を無駄にするわけにはいかない。

勝負の鍵は間違いなくリップの宝具。

それはこの戦いに勝利するための切り札になるだろう。

それから数日後、トリガーを入手し、校舎内へと戻った翔は改めて、あのアサシンのサーヴァントの対策を考える。

前にも考えたが、ダン卿のサーヴァントも姿を消していたが、今回は根本から違うような気がする。

加えてユリウスの実力から考えれば、あの仕組みが分からなければ、どうしようもできないように感じた。

「おや、翔くんじゃないか。リップの具合はどうだい？」

「ああ、志波か。もう元通りだぜ……だけど、今度は敵側で問題が……」

「ほうほう。聞かせてもらおうじゃないか」

翔は白亜に敵サーヴァントであるユリウスのサーヴァントについて話す。

特に姿が見えないということに、興味を示した白亜は、考える仕事をしている。

やはり透明化は、どのマスターも対策を考えたいのだろう。

「透明化のスキル、これができるのは三つの可能性だね」

順番に白亜は翔に説明していく。

まず一つ目は、特殊な装具、あるいは宝具等を使い、周囲に同化している事。

これは、前に戦ったダン卿のサーヴァントである『ロビンフッド』が使ったのが、これに当てはまるだろう。

となると、アサシンのサーヴァンが使っているのは、これではない気がする。

二つ目は、魔術等を使い、ただ単純に透明化している事。

三つ目は、集中力に依存し、気配を遮断している事。

「翔くんの言葉と、私の推測では三つ目あたりが怪しいんじゃないかって思っているけど……そうだ。そんなお悩みの君に、私から三つのプレゼントを差しだそう。ほれ、手を出すのだ」

「お、おう」

言われるがままに翔が手を出すと、白亜の手から三つの何かが翔の手の中に収まる。

どうやら、何らかのトラップか何かの類だろうか。

「私がさっき言った三つ。それぞれに対応するトラップだよ。いつか使うと思っ取っておいたけど、もう使う機会がなさそうだしね。あなたにあげる。相手の能力を探り、正体を掴めってね」

彼女が笑いながら、説明する。

この罠の性質は、同じ場所に置く事が出来ないという事。それを注意してくれというのが白亜の言葉だった。

まさか、彼女がここまでしてくれるとは思わなかった。

だがやはり気になる。

どうして彼女はここまで自分に対して協力的なのだろうか。

このムーンセルの戦いにおいて、基本的に自分以外は敵という事は彼女に理解しているはずだ。

なのに、ラニのマラカイトの一件の時もそうだ。

まるで全て知っているかのように、彼女は常に先回りし、情報を提供している。

さすがに、ありす達に自分共々吸い込まれた時は、動揺を見せていたが、基本的には全てがわかっている。

彼女の行動から、そんな気がしてならないのだ。

「なあ、志波。今まで気になっていたが、どうしてそんなに俺に協力的なんだ？ こんなことすれば、いつか俺達が敵対することだってあり得るかもしれないのに」

その言葉を聞いた白亜は、暫く黙りこむ。

そして少しの時間が経ったあたりだろう、静かに翔に語りかける。

「前に言ったでしょう。私はただ、あなたが気に入っただけ。それ以上でもそれ以下でもないし、そんなことはわかっている」

健闘を祈るわ。そう言つて、白亜は翔に背を向け、手をヒラヒラと振りながら、その場を後にする。

彼女の真意は分からない。

ただ何とも言えない、疑問を抱きながら、翔は白亜が去った方向を見つめているのであった。

「主よ、これでよいのですか？」

「いいんだよランサー、これでいいの。まさか最初に言ったこと、忘れてるわけないでしょ？」

「忘れるわけありません。あの言葉が無ければ、きつと主とすれ違いが起きていた。だからこそ、俺はあの言葉に感謝をするのみですから」

校庭に出た白亜は霊体化したランサーから心配の言葉をかけられる。

それを聞いた白亜は、心配する必要はないと言葉をかけ、近くの椅

子に座り、空を見つめる。

彼女が見上げた空は、一点の曇りなく、澄み渡った青空そのもの。それを静かに見つめ続ける白亜。

彼女がランサーに言った言葉、それは……

『私はきつと、途中から誰かのために動くと思う。それをあなたは見守って欲しいの』

もしかしたら、彼女の行動は、ランサーの……彼の忠義を踏みにじってしまう行為かも知れない。

だけど、ランサーは、それに納得し、それでもなお、白亜に仕える
と彼は言ってくれた。

むしろ、その言葉を感じているとまで彼は言ったのだ。

その言葉に白亜は、救われたのを覚えている。

そして彼女は翔の姿を思い出す。

がむしやらに突き進む彼を見て、白亜は思ったのだ。

——あの人なら、変えられるかもしれない。

——あの人なら、やってくれるかもしれない。

5回戦まで、突き進んだ彼を見て、彼女はそう思った。

彼は間違いなく、あのアサシンのサーヴァントを突破し、6回戦に進むだろう。

となれば、恐らく、次の戦いか、決勝戦で、自分は彼と戦う事になる。

そんなことはわかっていた。

いづれ来る翔との戦い……

その戦いで手を抜くつもりはない。むしろ全力で彼と対峙するのみ。

そこで自分が勝てば、翔はその程度の人間だったただけだ。

「さて、私もそろそろ切り札の最終調整をしておかないとね」

青空を見ながら、白亜は静かに誰にも聞かれぬ言葉でそう呟いた。

第23話 デッドエンド

——時は数日後……決戦の日。

「サーヴァントを失い、寿々科翔は脱落」

ここは五の月想海……その決戦場。

そこは、翔が2回戦で戦った場所に似ている木が生い茂る森の中であった。

ユリウス・ベルキスクハウエイは、その決戦場に立っていた。

この場所へ続くエレベーターをユリウスは使用していない。

彼は以前、決戦場へと不正規な手段イレギュラーを用いて侵入したことがある。

そのため、決戦場に侵入することは容易い。

そして、この決戦場で彼を、翔を待っていたのだが、彼が来る気配はなし。

つまり、それは寿々科翔は、脱落したという事を意味する。

だがおかしい。それならば、なぜ自分は勝利という事にならないのか。

それを考える最中、不意にユリウスの手の一部が、まるで映像が乱れたかのように、ぶれ始め、それを見て彼は顔をしかめる。

『どうしたユリウス』

「……問題ない。お前の無二打二の打ち要らずをくらい、生き延びたものなどいないからな」

映像が乱れたかのような、ぶれはすぐに収まった。

あと僅か、僅かなのだ……

もう少しで、レオの手に聖杯が届く。

この体がまだ持つまでに、あの女との約束を果たせれば……

「そうですね。ならば、私が最初に生き延びたことになりましたね！」
「!?」

突然の言葉に、ユリウスは声が出た方向を振り返る。

影から現れる、サーヴァント。

それは紛れもなく、ユリウスが仕留めたと思っていたパッションリップそのものであった。

だがありえない、どうして彼女がそこにいるのだろうか。

「なぜここにいるみたいな顔していますね。簡単です。私は貴方の一撃をくらってもなお生き延びた。それだけです」

パッションリップは自信満々に言う。

ユリウスが見渡すも、翔の姿は見えない。

だが、彼女がここに立っているという事は、翔が未だ生きているという意味にもつながる。

「死にかけていたのに威勢の良いことだ。だが肝心のマスターはどうした」

「あなたに不意打ちでもされたら御免ですからね。私が代わりに相手をしてあげます！」

未だに翔達はあのアサシンの姿を暴いていない。

よって今回は白亜から貰った罫を三つ仕掛けることが必要。

だが、アリーナで仕掛けるには分が悪すぎる。

なので決戦場で仕掛けることにしたのだが、それではあまりにも時間が無い。

そのため、リップがユリウス達の前へと立ち、時間稼ぎをする必要があったのだ。

しかし、相手はユリウス。この時間稼ぎがばれるのも時間の問題であるだろう。

自身の巨大な腕を構えるリップ。

それと同時にユリウスではない誰かの足音が、彼の前を通る。

姿は確かに見えない。

だが……

「姿は見えません。ですが、あなたがそこにいるのはわかっています」
彼は確かに、そこにいる。

翔が出した結論により、リップを一撃で倒したあの技の正体は掴めていた。

あれは打撃の瞬間、拳に乗せた魔力を相手の体内に巡らせ、全身の勁脈を乱す技。

それは、天地万物と武を同一とみる中華の奥義。

「呵々！ 上出来だ！ 二の打ち要らずと謳われた我が拳を見破ったか！ そうでなくては面白くない！」

拳法家、クラスはアサシン。そして中国の英霊。

一撃必殺を生む武術の達人の中の達人。

そして二の打ち要らず。

そのように呼ばれた拳法家など、歴史上では一人しか存在しない。

彼の真名は『李^り書文^{しよぶん}』。

『二の打ち要らず、一つあれば事足りる』と謳われる中国拳法史上、最強の拳法家の一人。

さらに彼は槍の扱いにも長け『神槍』ともいわれた人物。

同じ技をリップは二度もくらう気はない。

——だが、それは姿が見えればの話……

マスターを信じ、リップは背を向け、走り出す。

「挑発しておいて向かってこないとはな。追うぞアサシン」

ユリウス、アサシンは、走り去るリップを追う。

既に翔は決戦場に白亜から託された罠を、設置している。

ならば、あとはリップ自身が誘導するだけ。

森の中、視界が悪い状況でリップは走っていた。

この作戦を実行する前に翔から、敏捷強化のコードキャストをかけたもらっている。

これが効いている限りは、アサシンのサーヴアントに追いつかれる確率は限りなく少ないはず。

「もう少しで翔さんが仕掛けた一つ目の罠……」

この罠の性質上、同じところに複数は設置できない。

なので誘導は全て、リップにかかっているのだ。

ユリウスが追ってきていることは、彼が発する殺気でわかっていた。

つまり彼の居るところにアサシンもまたいるのだろう。

彼らに追いつかれたりでもしたら……確実に死ぬ。

罠の効果が通ることを信じ、彼女は翔の元へと走る……

「一つ、二つ……両方とも効果なしか……」

「翔さん！」

リップが携帯端末を見ている翔の前に走ってくる。

彼が見ているのは、この決戦場のマップ。

ユリウスたちの位置が分かるわけではないが、翔がセットした罠の位置はこの携帯端末と同期させ、反映させていたのだ。

そして、そのうちの二つは既に反応していない。

この罠は、一回発動すれば、反応は消えてしまう。

故に、この反応の消失は、罠の上をアサシンが通った証そのもの。反応が消えた二つの罠は『対装具トラップ』と『対魔術トラップ』。

この事からわかるのは、アサシンの透明化のスキルには、装具にも魔術にも関係していないということだ。

「もう逃げられない。覚悟は出来ているなリップ？」

「当然です。覚悟は既にできています」

既にユリウスは翔の視界にとらえられるほどの距離であった。

三つ目の罠は『対精神トラップ』。

これは、気の流れや経路による技に反応する。

これに、引つ掛からなければ、透明化の秘密を暴く事が出来ない。

「翔さん、来ます」

リップの言葉を受け、顔を前に向ける。

もう、翔の視界でも顔は分かる位置に、彼はいた。隠れて様子も見
る事も出来ない。

そして翔の背後は、行き止まり。もう逃げ場はない。

「仕留めろアサシン」

その一言で、勢いよく何かが迫るのを感じる。

それと同時に、構えるリップ。

以前に彼女自身がくらった一撃により、アサシンの気配は微妙ながらも掴んでいた。

だから仮に罠が効かないにしても、この一撃を防げる。

アサシンのサーヴァントが拳をリップに放とうとした瞬間……

「ぬおおお!?!」

今まで聞かなかった激しい音が決戦場内を駆け巡る。

その音の直後の光景にユリウスは眼を見開く。

今まで覆っていた彼のサーヴァントの透明化。

それがまるで霧が晴れるかの如く効果を失くし、翔が屋上で見たその姿、全てを晒していたのだ。

『対精神トラップ』。こうなることを見越して、リップの前に設置した

「何事だアサシン!?!」

「くハハハハッ! 天地を返しおったな! 大事だ! あやつらの知己は天仙までいるらしい!」

どうやら、何が起きたのかアサシンのサーヴァントは理解しているらしい。

一瞬だが、明らかに動揺したユリウスにアサシンは今起きたことを説明する。

「ユリウスよ。これは陰陽自在の八卦炉よ。儂の気功を儂に返したのだ。おかげで儂の『圏境』が破れおった」

ユリウスに自身の腕を見せるアサシン。

『圏境』。それは体術の究極。

中華の拳法家でもほんの一握りしか到達できない完全な達人の証。

それほどどの力を持ち『二の打ち要らず』とまで言われた拳法家。

彼の真名は『李 書文』で間違いないらしい。

だが、あのダメージからするに、この決戦場では間違いなく『圏境』は使えない。

「これまでの相手は戦いにすらならなかったからな。命の重みに優劣はないとは言わん。だがやはり、くびり殺すならやはり子鼠より虎の首よ!」

儂もまだまだ悪行から抜け出せん。

そう言い、改めて構えるアサシン。

ここが正念場だ。

この決戦場に、アサシン、ユリウスから鋭さの増した殺気があてら

れる。

だが翔は怯まない。改めて構えるリップを翔は見る。彼女もまた本気なのだ。そんな彼女に自分は応える。そして自分達は帰るのだ。あの校舎に……

「ここからが本番というわけか。ではいざ……我が拳は二の打ち要らず。初撃こそ肝要、武を交える前に是を討つ——この字、破れるか！」

「私達は進みます。あなた達を倒してその先に！」

——Sword, or Death

開戦を告げる鐘の音が鳴る。

両者はどちらか、ではなく同時に足を踏みだす。戦いの火蓋はここに切つて落とされる。

この戦いを制し、戻る事が出来るのは誰なのか。その答えは運命のみぞ知る……

「リップ！ コードキャストを使う！」

『gain | con (32) : !』

「ありがとうございます！」

まずは一撃を防ぐことが重要。

そう直感を感じた翔は、耐久強化のコードキャストをリップに与える。

初手の一撃がくる。

声と共に繰り出されるアサシンの一撃。負けじと自らの拳を突き出すリップ。

お互いの拳がぶつかり合い、その場所に突風が巻き起こる。

「やはり、この一撃ではその籠手は壊せん。ならば！」
「くっ！」

即座に腕をひっこめ、防御の体制を取るリップ。

襲い掛かるアサシンの二撃目。

その攻撃により、リップは後方へと吹き飛ばすも、即座に体勢を立て

直す。

リップを吹き飛ばすアサシンの一撃。

圏境こそ敗れたが、その威力は健在。

それを見せつけられ、歯を食いしばる翔だが、同時にユリウスも目を見開いていた。

「……信じられん。あのアサシんに一撃をくらわせたのだと」

「ほう。肉を切らせて骨を断つ……とはよく言ったものだな。その一撃、まずは見事と言っておこう」

アサシンの左腕を見ながら言葉を放つユリウス。

良く見れば、アサシンの右腕は血で染まっていたのだ。

アサシンがリップの防御を狙っていたように、リップもまた二撃目を狙っていた。

リップは既にアサシンの拳を一度その身に受けている。

なのでその技と威力は既に彼女は知っていた。

故に、リップの腕で二撃目を逸らし、翔のコードキャストで技の威力を実質半減させる。

加えて、リップの腕は触れるもの、全てを傷付ける刃。

故に彼女の防御は、驚異的な防御力を誇り、加えて触れるものにダメージを与える刃の防御と化す。

「あのまま倒れちゃえばよかつたのに……でもその右腕では思うように力は入らないはずですよ」

「ふん、確かに右は思うように動かん。これでは拳も握れぬわ。しかし、受けることで凌ぐとは大した度胸よ。昔日の己を見る様だぞ。ハハ！ 世界は広い！ こうでなくてはな！」

「愉しむなアサシン。いい加減本気を出せ。あのサーヴァントは耐えたとはいえダメージは健在。このまま仕留めろ。しかし……」

ユリウスはリップに指示を出す翔を見つめる。

あの翔という存在がいる限り、自分が想像していなかった展開が起こるのもまた事実。

ならば……

——先にあの男を始末する。

難解のコードキャストを詠唱し、その手に持つのは一本の短刀。それを片手に持ち、アサシンが走り出したと同時にユリウスもまた走り出す。

彼の狙いは寿々科翔の始末。

あの男が倒れば、彼のサーヴァントを倒すのも容易だろう。

「なっ!? あの野郎!」

リップがアサシンと打ち合ったと同時に、翔もまた自ら作り出した短刀で、ユリウス一撃を回避する。

サーヴァント同士の戦いの傍らで、マスター同士の戦いが始まる。

あの短刀は今まで見た短刀でも、翔は見たことが無い。

『shock (32)』!」

翔が弾丸のコードキャストを放つも、ユリウスの短刀に斬り裂かれ消滅する。

あれもまた不正規な手段を持って生み出されたコードキャストの一つなのだろう。

ともすれば、あれに対抗できるコードキャストは今存在しない。

今、この場で一からコードキャストを作り出すことも可能だが、それはユリウスが許さないだろう。

ならばどうする……横目でリップとアサシンの戦いを見つめながら考える。

「随分と余裕に見える。この場で考え事とは」

「この表情見て余裕に見えるかよ……!」

ユリウスの一撃を躲し、弾丸を放つ翔。

同じ手が二度も通用しないことは翔もわかりきっている。

再び、先ほどと同じようにユリウスが翔の弾丸を軽々と斬り裂き、消滅させる。

だが今度は、その先がある……

「かかったなユリウス……!」 『bomb (32)』!」

爆発の衝撃で吹き飛ぶユリウス。

だがこれでは短い隙になるだけだろう。

しかし、時間稼ぎとしては充分だった。

翔は弾丸のコードキャストの中に、爆発のコードキャストを仕込んでおいたのだ。

一からコードキャストを生み出せる隙を与えてくれなければ、この場で複数のコードキャストを組み合わせて使用するしかない。

咄嗟の考えはユリウスに多少の隙を与えたようだ。

今のうちにリップとアサシンの戦況を確認する。

「ほう。いくら打ち込んでも壊せぬ籠手とは、どこで作られたか余計気になるぞ」

「あなたに教える筋合いなどありません！」

共に破壊力の高い一撃を繰り出し、それを躲し、それを放つ。

正に一進一退の攻防だ。見る限りでは互角だろう。

支援のコードキャストを放ちたいが、それをさせてくれないのがユリウスだ。

視線を戻せば、彼が立っているのが既に分かる。

「細工を施したか……だがそれで俺に勝てると思うな」

ユリウスをまっすぐ見つめる翔。

先程から彼は、ユリウスを見つめる度、違和感が走っていた。

今もそうだ。

彼を見つめれば見つめるほど、何とも言えない感覚が翔を包み込む。

これは、今まで感じていた殺気とは違う。

彼はもつと遠い。何かを見つめているような……

「ユリウス。一つ聞きたいことがある」

「今さらなんだ」

「お前は、誰のために戦っているんだ」

その言葉に彼は眼を見開き、翔に襲い掛かる。

彼の投擲する短刀を翔は盾のコードキャストで防ぎながら言葉を続ける。

「ふざけたことを問うな！ 俺はレオの為に戦っている！」

「違う！」

彼の言葉を翔は否定する。

翔だって最初はレオへの忠義心で戦っていると思っていた。だが翔から見たユリウスは違う。

本当はレオの事などどうでもいい。そう思っただけで戦っているようにも見えたのだ。

彼の虚ろな瞳にはレオの姿など写っていない。

レオでは無くどこか遠い誰かが写っている様にも感じられたのだ。

「だったら、なぜ今もそんなに辛そうな顔をしているんだユリウス！」
ユリウスにとつて考えたくもなかった。

認めたくもなかった。

自分にはまだこんな感情が残っていたなんて考えたくもなかった。

それが、なにより、なぜよりによって、こんな奴に見透かされるなんて……

それがユリウスにとつて一番気に喰わない事だった。

初めて翔を狩り取った時から、ユリウスは気に喰わないことだらけだった。

翔のような小物が、なぜあのような霊格のサーヴァントを引ける。

なぜ、自分の不正規イレギュラーな手段をことごとく躲す。

お前の強さはどこからくる……

そして、なぜ自分の心を当然のように見透かす……

「くそー！」

ユリウスは手当たり次第に翔へと攻撃を放つ。

今のユリウスの攻撃は先程までとは違って出鱈目そのもの。

短刀の投擲を交わし、放たれた魔力弾を躲す翔。

彼は今、なにに突き動かされている。

その違和感の正体まであと少しな気がする。

翔が言葉を放とうとした時……

「きゃあああ!」

不意に聞こえたリップの悲鳴に、翔の視線はユリウスから離れる。

見れば、リップはアサシンの攻撃をくらい、吹き飛ばされている様だった。

リップを回復させなくては……その一瞬の判断が翔の命取りであつた。

彼の一瞬の判断、それは『ユリウスを急接近させる』ことそのもの、即ち翔の死を意味していた。

「隙を見せたな……！」

「しまっ……！」

彼がユリウスを見つめた時にはもう遅い。

何かがぶつかったような音がしたとおもえば、翔は眼を見開き、自分の身体を見つめる。

良く見れば、ユリウスの短刀が翔の身体に深々と突き刺さっているのが分かった。

一瞬遅れて現れる激しい痛み。

翔は自分の身体にユリウスの短刀が突き刺さっていることを知つた。

激痛に叫び、壁にもたれかかる翔。

そしてその隙を逃さず、止めと言わんばかりに、新たな短刀を作りだし、翔へと突き刺そうとする。

「無様に死ね……！」

翔はユリウスの腕を押さえ、止めようとするが、力が入らない翔を嘲笑うかのように、短刀の先が彼の身体へと入り込んだ。

ユリウスは力を込めた。思うように刃先が前に進まない。なので強引に突き進める。

ここで断念するわけにはいかない。彼の始末は目の前だ。

不意に翔の抵抗が緩んだのを感じた。短刀が翔の体内に、まるで肉に突き立てた包丁の様に奥深くめり込んでいった。

「ぐ……」

鮮血が口から漏れる。

呼吸が乱れる。

もう自分は立つことすらできない。

どうやらBBの言っていた5回戦で死ぬという予言は当たつていったようだ。

薄れゆく意識の中で、彼はリップを見つめる。

どうやら自分はこのままのようだ。

回復のコードキャストすらもうつことはできない。

「くそ……俺は……まだ」

翔が言葉を発した後、体全身の力が抜け、彼の意識は闇に包まれようになる。

意識にノイズが走る。自分はここで終わるのか……？

手や足の先の感覚が、徐々になくなっていく。形もなくしているのだろうか。

だが、それを調べる余裕は既になく、彼の意識は途絶えた。

第24話 宝石煌めく七つのヴェール（ダンス・オブ・ザ・セブンヴェールズ）

体全身が痛い。

ここはどこだろうか……

うつすらと翔が目を開けると、暗闇の中であった。

確か自分はユリウスに刺されて意識を失って……

目を開き、周囲を見渡すも、ユリウスはおろか、リップも敵のアサ

シンもない。

聞こえるのは、呻くようなノイズのみ……

■■■妬■■■し■■■い

———まだ、死ね■■■い。

そのノイズは声のようだった。

強烈に感じる負の感情。

それに全身がさらわれそうになるも、何とかこらえる翔。

「これ……まさかユリウスの……」

この、どす黒い執念はなぜか翔に覚えがあった。

これはあのユリウスがあてた殺気にも似ている感情。

その執念が直接、翔に入り込むのを感じる。

直後に感じる激しい頭痛。

その痛みにも、頭を押さえ、膝をつく翔。

内臓を引きずり出されるような痛み、臓物の中にいるような強烈な

悪寒。

だが、翔はそれに飲まれることなく、頭を押さえながらも正気を保

つ。

———落胆、その成り立ちは侮蔑、あるいは差別。

———嫌悪、侮蔑、即ち憎悪。

———その成り立ちは、嘲笑、あるいは不当。即ち■■■

■■■

———あらゆるモノからの無関心。

この一方的な感情は何だ。

その者は拒絶された。

だから拒絶した。

その者は否定された。

だから否定するしかなかった。

地獄の底を這いずり回るような、一方的な不可解。

「■■■■ハ■■■■イの■■■■まれ■■■■な■■■■く」

ノイズの中に微かに声が聞こえた。

憎悪そのもののノイズを掻き分け、彼は声に集中する。

■■■■の反応実験を開始する。肝臓を一つ摘出する。

痛覚を確認する必要がある。麻酔は使用しない。

失敗だ。失敗だ。失敗だ。失敗だ。

不要ですらない。あつてはならない。この個体は利益を生

む価値が無い。

—— 価値が無い。能力が無い。失敗作だ。デザインミスだ。

—— なんとという失敗作。無駄だ。無駄だ。非常に罪深い。全く

持って許されない。

—— この個体から一族の権利を全て剥奪。次の個体に計画を移

行する。

—— 平均的な個体から作られたのならまだ許せる。だが地上で

もつとも尊い生命からこのような粗悪品が作られるなどと。

その叫びを聞いて翔は非常にどうしようもない感覚に包まれる。

なんなのだこれは、さつきから聞いていれば失敗作など粗悪品など

と……

そのような、言葉の連続に怒りすら込み上げてくる。

だが今は、感情に身を任せてはいけない。

込み上げる感情を収め、意識を集中すれば、映像が流れ、人影が写

る。

姿からしてあれは女性だろう。

「アリシア様。こちらにおいてでしたか」

この声は……

いくらか若い気がするが、確かにユリウスのものだった。声が出たのにも関わらずその姿は見えない。

彼はどこにいるのだろうか。

いや、この視点からすると、今見ている映像が彼の目を通していうことだろう。

「あら■リウス。ど■■した？」

ユリウスの声に、アリシアと呼ばれた女性が振り向く。

だが、その顔ははつきりしない。

まるで、顔そのものに影がかかったような感じだ。

「はい。旦那様がお呼び■■■ます」

「そう。も■そんな時■なのね。あ■まり■かほ■と日差しが気持ちよか■たもの■からつい、時■を忘れてし■ったわ」

「さあ、■急ぎを」

「ふふっ。あ■■ことは、もう少し■たせてもバ■■たら■■わ。

それにユリウス。あなただって、あの■■■子だからお父様■■

■■びすれば、いの■■■くて？」

会話のところどころにノイズが走り聞き取れない。

むしろ、会話が進むことにノイズがひどくなっていくように感じられる。

この記憶……自分はこの経験をしていない。

となれば、これはユリウスの記憶だろう。

「い■■■私は、そ■■■は■■■いません。ハーウエ■■跡■■

■して、■要な■■まれ■■■ので■■■んで」

若い声のユリウスは言葉を続ける。

「ハ■■■イは、レ■■■だ■■■(ぎゃ)■■■」

ノイズがひどくなり、ついには声さえも聞こえなくなる。

これはユリウスの記憶。だがなぜ自分が見ているのだ。

もしかしたら……ユリウスに短剣で刺される直前、翔は彼に刺されまいと必死に彼の腕を掴み抵抗した。

その時に、彼の記憶を自然に、自分は読み取っていたのか……？
あくまで推測でしかないが、これが最も自然だろう。

だが、触れただけで記憶を読み取るなど、普通に考えればありえない事。

ひよっとしたら……

「あいつ、なにかを伝えたいのか？」

独りで言葉が出る。

あの黒い感情の下、深く潜れば、そこにあるのは悲鳴だった。

もっと深く集中してみる。

意識のその奥へ……再び……

集中させれば、再び黒い思念がこちらを侵食してみようとしてくる。

——集中しろ。この思念の声の主……

同化しようと浸食してくるノイズを躲し、その先の意識へと進む。

意識を集中させれば、先ほどと同じ映像が流れだしてくる。

だが、今回は先程までより鮮明だ。

もっと深く意識を集中させているからだろうか……

「さあ、お急ぎを」

声は先程までよりも鮮明に聞こえてきた。

この言葉からするに、今までノイズがかかっていたところの部分だろう。

それが、今回ははっきりと聞こえてくる。

「ふふつ、あの人のことはもう少し待たせておいてもバチは当たらないわ。それよりユリウス。あなただってあの人の息子なのだから、お父様とお呼びすればいいのではなくて？」

「いいえ、私には、その資格はございません。ハーウェイの跡継ぎとして必要なものを持って生まれませんでしたので。ハーウェイの子はレオ様ただ一人ですのぞ」

その言葉にアリシアは『そう……』とのみ言葉を発した。

だが沈黙の時間はそう長くなく、アリシアは『あの子はどうしてる？』と言った。

あの子……とは間違いなくレオの事だろう。

ユリウスの言葉によれば、彼は今、記憶野に直接焼き付ける、新し

それは、ユリウスが、ユリウス・ベルキスク・ハーウエイは……
彼は、西欧財閥に生まれながら、絶望の世界で、何の希望が無いまま生きていたという事だ。

翔が、考えていけば、暗闇の空間の中に、赤黒い丸い空間が顕現し、彼は身構える。

「おいおい、なんだこれは」

その直後、目の前の光景に翔は言葉を漏らした。

赤黒い空間の中から、どす黒い赤い液体が漏れ出してきたのだ。

その液体はやがて形を作り、一人の人の姿を作り出した。

その姿は、まるで……

「ユリウス……」

「一つだけ、疑問がある。俺は今、そんな自分でも理解できない感情に縛られている」

その言葉に翔は首を傾げる。

だが疑問とはなんのだ。

彼は一体何を言っているのだ。

「分からないのか！ そうか、まだ分かっていないのか！ お笑い草だ！ お前の真実、お前の正体を知っているのは俺だけか！ 作り物め！ お前などに比べれば、俺などまだ生きている！」

彼はなにを言っているのだ。
理性を失ったかのような、声。だがその眼にあるのは憎しみと……義務だ。

彼は今、強い義務感を持って、ここに立っている。

「他のマスターどもに倒されるのならいい。だがお前はダメだ。滅びであれ生存であれ、ここは我々の世界だ。命運は、選択は『今を生きるもの』が決める」

彼は言葉を続ける。

お前は俺と同じ路傍の石だと……

そのままでは救いがない。這い上がらなければ生存できない。脆弱な存在だと。

「だからこそ、お前にだけは倒されるわけにはいかない。この時代の

清算は我々の手で——、レオが——、我が弟が、王になる、ならないと」

黒いユリウスは言葉を続ける。

「そうだ、そうだと、それだけが俺の仕事だ。それだけが俺の足かせだ」

コードキャストを詠唱し、短剣を生み出し、それを手に持つ黒いユリウス。

そして、ゆっくりと翔に迫る。

「ああ、何もかもどうでもいい。楽にさせてくれ。お前を殺せば、オレの役目は終わる」

——最期だ。俺にお前を殺させてくれ。

男は静かに。はつきりと翔に告げた。

走り出すユリウス。

短剣は真っ直ぐ、翔に向けられている。

コードキャストの弾丸を放とうにも、あの短剣には容易に引き裂かれる。

かといって、複数のコードキャスト詠唱は間に合わない。

このままでは、自分の死あるのみ……

こんなところで終わりたくない。

「まだ死ねない……まだ終わってたまるものか……!」

あいつにここでやられるわけには行かない。

こんなところでやられたら、リップとの約束はどうなる。

ここから戻ってリップを助けたい。リップと一緒に戦いたい……

だから、こんな場所で、死ねと言われても聞くものか……!」

『なら紡ぎなさい』

なにかに呼ばれた。

静かな声で、だけど近くに『それ』はいる気がした。

紡ぎなさい……確かに翔にはそう聞こえた。

『口を開きなさい』

「

『それ』が言う前に、口は動いていた。

……ああ、ようやくわかった。

あの時、零の月想海で拾った一つの奇跡。

拾った当時はその詳細が分からなかったものだ。

今まで、どんな手段を用いても解明できなかった一つのコードキャスト

今ならその全てが分かった気がした。

理解した。言葉を……自分自身を紡ぐ。

これが……零の月想海で拾った術式の正体。

『宝石煌めく七つのヴェール』!!』
ダンス・オブ・ザ・セブンヴェールズ

彼は、翔は、この術式を紡いだ。

直後が変わる、彼の気配に黒いユリウスは立ち止まる。

寿々科翔の、パッションリップの、想いが具現化した極致の形。

それがこの術式の正体。

その内容が、脳に刻まれるかのように入ってきた。

その効果はただ一つ……それを知り、翔は静かに笑う。

でたらめもいいところだ。

しかし、このような術式なら、1回戦、2回戦で見せた翔の力も納得がいく。

1回戦などで使えたのは、翔には元々、BBの授けたコードキャストに似た力があつたため。

それが今、彼女の助けによって今こうやって具現化できたのだ。

「いくぜユリウス、これが俺と……リップの力だ!」

術式を紡ぎ、一つの槍を握る翔。

その槍は、大盾と見紛うほどの巨刃を付けた大槍であり、なぜだか、とてもリップの持つ力に似ていると直感で彼は感じ取った。

間違いなく、彼女の……パッションリップの中に組み込まれた女神の一つの宝具だろう。

その大槍を構え、翔は言葉を紡ぐ。

「死がふたりを分断つまで!!」
フュンヒルデロマンシア

放たれた一閃は、白く輝く光となり、黒いユリウスを斬り裂く。

そして、勢いが衰えぬまま、光はその闇を斬り裂き、一筋の道を生

み出す。

だがその光に目を背けることなく、彼は真っ直ぐ光へと向き、歩き出した。

翔の視界が白く染まっていく。

今度こそ……彼女と共に戦うのだ。

第25話 死がふたりを（ブリュンヒルデ・）分断つ
まで（ロマンシア）

倒れていた翔が突如、光の柱に包まれ、ユリウスは、後ずさる。確かにユリウスの手には、翔を突き刺した感触が残っていた。なのにこれは何だ。

なぜ光の中で、彼は命が吹き込まれるように立ち上ったのだ。

「……地獄の底から、舞い戻ってきたぜ」

光が収まり、そこに立つのは仕留めたはずの寿々科翔。

だがそこにいるのは、今までの彼ではない。

この短時間で、彼は何かを見つけたようだ。

ユリウスには、それがなんなのかまではわからなかった。

だが、今の彼は、先ほどまでとは違う。

それだけは、分かっていた。

「さあユリウス、仕切り直しだ。決着をつけようぜ」

先程まで聞いたことが無いコードキャストを紡ぐ翔。

彼に纏う魔力、その全てが一つの物質に集約される。

ユリウスですら解読ができない、何重にも連なる難解なコード。

だがそれを目にしたとき、ユリウスは眼を見開く。

あれは並大抵の魔術師には到底扱えような……いや、むしろこれは魔術といえるのだろうか。

寧ろこれは魔術師として測定できるかどうかの範囲の埒外の種類だ。

「貴様、どこでそれを……」

「……俺を信じてくれたやつが、託してくれた決着術式だ」

そして彼の周囲に現れるは、七色に輝く石のようなもの。

ユリウスはそれを見たことがなくとも名前は知っていた。

錬金術士が誰もが夢見た至高の物質

それは、金属を金に変え、癒すことのできない病や傷をも瞬く間に治す神の物質とされる。

その物質の名前は『賢者の石』。

「つ……なるほどな。よくて10分しか使えないか……」

そのような規格外のものを持った存在をムーンセルは無視などできない。

つまり、翔はムーンセルによる防衛プログラムによる攻撃を、今現在その身に受け続けているのだ。

これにより、常時肉体に負荷がかかり続けているため、この術式が機能している間、仮に限界時間一杯まで使うと肉体が消滅するのは間違いないだろう。

これは無理やり勝負を決着へともっていく術式といってもいいだろう。

「行くぜユリウス！」

その手に、一振りの聖剣を創り出し、翔は走り出す

ユリウスには、その剣を見た瞬間に理解した。

あれが……究極の聖剣であると。

その剣でユリウスを斬り裂くのは容易い。

ユリウスもまたその足を活かし、翔と距離をとる。

——その筈だった。

ドロメウス・コメーテウス
「『彗星走法』！」

「なにっ！」

まるで概念を真つ向から反逆するか如く、ユリウス以上の速度、いやそれはもはや瞬間移動ともいえる速さで、ユリウスを追撃した翔。

彼が使ったのは、『あらゆる時代の、あらゆる英雄の中で、最も迅い』というアキレウスの伝説が宝具として昇華したもの。

広大な戦場を一呼吸で駆け抜け、フィールド上に障害物があっても速度は鈍らない。

その速度は最早、瞬間移動にも等しく、視界に入っている光景全てが間合いとされるほどの速度となるのだ。

それによって即座に、ユリウスに近づき翔の聖剣が彼に向かって振り下ろされる。

余りのことに回避することができない。

だがこのままではその身を切り裂かれることは誰が見てもわかること。

咄嗟の判断であった。

「くっー！」

自身の持つ短剣を、防御に使うユリウス。

だがまともに打ち合えば、ユリウスの短剣は、聖剣と打ち合った途端に粉々に破壊されてしまうだろう。

彼の予想は的中し、聖剣と一度打ち合った彼の短剣は、真っ二つに折られ、その役目を終える。

だがそれによって翔に一瞬の隙が生じたはず。

彼はそこをつき、即座に再びコードキャストで短剣を生み出そうとする。

「甘っー！」

だがそれよりも早く、聖剣を逆手に持ち替えた翔は、その柄の部分でユリウスを勢いよく突く。

それは彼が短剣を創り出すよりも早く、容赦なく吸い込まれるかのようにユリウスの腹部へと直撃した

「!？」

言葉もまともに発せず、彼の身体は勢いよく吹き飛ぶ。

マスターの魔力の乱れを察知したアサシンは、一瞬ではあるが、ユリウスへと気配を向ける。

だがその一瞬こそ、リップが狙っていた場面であった。

翔は回復のコードキャストを瞬時にリップに放ち、彼女は万全な状態へとなる。

準備はこれにて全て整った。

「リップ、宝具をー！」

「わかりました。私の想い、受け止めてくださいー！」

リップは集中し、自らの腕に全ての魔力を込める。

そして、その二つの腕は膨大な魔力を纏いながら、アサシンへと襲い掛かった。

決戦場を破壊するようなような、速度で飛び回るそれは、まるで爆発

物がそのまま飛び回っているかのようであった。

「ハハハ！ 面白い！ それが宝具か！ ならばこちらも相応のもので応えなければならぬ！」

飛び回る腕に傷つきながらもアサシンは笑いながら拳を構える。

間違いなく彼も宝具を放つのだろう。

飛び回る腕は彼に十分すぎる傷を与え、そしてリップの元へと戻ってくる。

そしてその巨大な腕を立てに大きく広げる。

その姿を一言で言うならば、巨大な怪物の口だ。

「我が八極に二の打ち要らず……」

「死がふたりを……」

リップが、アサシンが、どちらが先とは言わせず両者が、同時に足を踏みだした。

アサシンが、勢いよく足を叩きつけた床は、周囲の地面を割り、静かにリップを見据える。

リップは、その開いた腕を、アサシンへと向け、静かに彼を見据える。

「七孔噴血、巻き死ねい！」

「分断つまで!!」

同時にアサシンが全力を込めた一撃が放たれた。

突進していたリップもまた、両手を、獲物を喰らうかのように勢いよく閉め、両者は激しくぶつかり合った。

次の瞬間、吹き飛んだのはリップの方であった。

宝具同士が同時に炸裂。

パッションリップは、アサシンの宝具を完全に防ぎきれたわけではなかった。

それはアサシンもまた同じ。

見れば、拳を突き出したアサシンは、その口から鮮血が吹き出ており、その場に力なく倒れた。

「——勝負、あつたな」

静かにアサシンが言葉を漏らす。

この戦いに終わりを告げた一撃、宝具をアサシンは全て受け入れた。

翔が持つ星の聖剣が、光と共に消えると同時に、彼とリップ、ユリウスとアサシン、二つを隔てる壁が現れ、ユリウス達のほうの背景が赤く染まる。

少しばかり時間が経ち、アサシンがゆっくりと起き上がると、ユリウスの傍らに歩み寄った。

黒いコートの男は、膝から崩れ落ち、地に蹲っていた。

「ユリウス、詫びは言わんぞ。しかし礼は言おう。久々の娑婆。おぬしのおかげで存分に戦えた」

彼の腕に刻まれた令呪は赤く輝き、静かに消えていく。

アサシンの様子から察するに、彼のほうは、後悔などしていないのだろう。

「さあ、最期だ。顔を上げろ」

「……………」

「どうしたユリウス。むっ…………おぬしなにを…………」

「俺は…………俺はまだ死ねない!!」

絞り出すような声で男は叫んだ。

その叫び声は周囲へと響き渡り、翔達を緊張の渦へと再び引き戻す。

祈る様に手を合わせ、うわ言のように『死ねない』叫び続けるユリウス。

凍った瞳に揺らぐ光は狂気なのかそれとも別の「何か」か。

先程、暗闇の中にいた翔はその「何か」がどういふものなのかわかっていた。

「ぐ…………あああああああ!!」

なにか呪文プログラムを唱えかけたユリウスは苦痛の叫びをあげた。

押し寄せる苦痛に耐えきれず、彼の身体は蠕動する。

あまりにも痛々しく見えるその姿に翔は思わず壁へと駆け寄った。

膝を折り、苦痛に顔を歪め、身体は蠕動してもなお、死デリートを拒む。

この男にそぐわぬ生への執着。

「……………」

先程、彼の心に触れた翔には、なんとなくだが、何のために戦っているのか少しわかった気がした。

彼はハーウェイや聖杯などどうでもいいのだろう。

まだ彼が殺しに手を染める前、たった一人彼の名前を呼んだ人がいた。

不要ですらない。

あつてはならない。

生きる価値が無いと罵倒された彼に、命の意味を教えた人。

彼はそのために戦っていた。

———あの子を……レオを、守ってあげてね

その目的のために、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイは戦った。

彼は、その人の願いを叶えるために戦い続けたのだ。

ここで彼を倒すという事は、ユリウスの意義を壊すという事。

だから、彼は、^{デリット}死を拒んでいる。

そんな哀れにも見える、ユリウスを翔は救いたかった。

ただ強く願う。

翔の左の手の甲を壁に押し当て、翔は願った。

この目の前の男に救いの手を……

それが正しい事なのかなど、考える暇もなく、翔の左手から閃光が

一筋ユリウスに向かって放たれた。

「……令……呪!? お前、なにを……!」

それを見つめたユリウスが驚きの声を上げる。

ユリウスが見た翔の左手には、4つの令呪があつたはずだ。

それが1つ消えている。

まるで、苦しみから解放されたように、膝を折りながら呆然と佇む

ユリウスはただじつと翔を見つめている。

「……馬鹿な奴だ」

ユリウスは深く息を吐き、翔を見つめていた。

その眼には、今までのような憎しみの色は既がない。

「本当に理解できない。が、お前は俺を憐れんでいるのだな……なぜ

令呪を使った」

「お前の過去を俺は見た……だから、ユリウス。俺は、お前の心に触れたかった」

「俺の……心……？」

ユリウスは静かに呟く。

生気のない孤独な瞳。冷たく凍った表情。

けれど、極度の対峙を繰り返すうちに、その奥に潜む熱に翔は魅せられていた。

たった一つの約束の為。それはある意味、翔にも同じことが言える。

「……そんなことを言われたのは生まれて初めてだ」

これまでユリウスに近づく者は、蔑みながら利用方法を算段するか、恐れへりくだるかのどっちかだった。

だが翔は、ただ真っ直ぐと彼の目を見つめていた。

どんな絶望の淵に立たされても、翔の目には強い光が宿っている。ユリウスにはそんな翔が妬ましかった。いや、羨んでいたのだろう。

「戦いの最中、お前は聞いたな。何のために戦うのだと……」

静かにユリウスは語る。

翔の予想通り、彼はハーウェイや聖杯など、どうでもよかつたのだ。

幼い頃、たった一人、彼の名前を呼んだ女性がいた。

改めて語られる、ユリウスの過去。

不要ですらない。

あつてはならない。

生きる価値が無いと罵倒された彼に、命の意味を教えた人。

「その女の人は今も？」

「いや、あつけなく死んだ。レオの後継を盤石にするために、女は、身内からの暗殺で殺された」

だがきつと最期はその女性は静かに笑っていたのだろう。

自らを殺そうとする人に対して『レオを守ってくれ』と言葉を遺して……

「今思うと、まるで映画の様に現実感がない。出来の悪い、悪趣味な、映画のような出来事だった」

ユリウスは今こちらを見ていない。

まるで深い思い出の中にいるのだろうか。

その口から語られる言葉を翔は静かに聞いていた。

静かに今、彼の口から語られる言葉こそ、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイの本当の姿なのだろう。

「だが、それが俺の目的になった。俺は女の遺した願いを叶えたかった。この手を血に染め続ける俺を、人は幽鬼と恐れ、嫌悪した」

だが、ユリウスはそれでもよかった。

彼は、女性の願いを叶える自分になら、意義を見出せなかったから。

そして翔は、そんな彼の意義を壊しながらも、彼に止めを刺さなかった。

それはなぜか、その答えは、先程の言葉にある。

——翔が死にかけた時に、聞いたあの会話。

あれを聞き、もつとユリウスの心に触れたかったのだ。

その根底には何があるかを翔は知りたかったのだ。

ユリウスは、ゆっくりと立ち上がる。

そして、ためらいがちに、壁越しに右手を差し出し、その壁に触れる。

「……おかしいか？ 決してほめられた人生ではないが、一人も友人がいないまま逝くのは情けない話だと思っただけ」

「なんもおかしくないぜ。俺がお前の初めての友人になってやる」

言葉を発した翔にユリウスは、一つの変化に気付いた。

翔の瞳からは、間違いなく涙が溢れていた。

ユリウスの為に、彼は泣いている。あの様子からすると無意識に

……

そうか……と彼は感じる。

そんなものでも、美しく見えるときがあるのだ。

自分の為に流される涙というのは……

「時間だ。すまん。面倒な男に付きあわせた」

ユリウスの目がアサシンに向けられる。

その身体のほとんどが消えかかっているのにも関わらず、その孤高の拳豪はそこに立っていた。

彼の目にアサシンは全てを察したのだろう。

ただ満足そうに柔らかな笑みを浮かべる。

「この結末もまた良しというやつよ。ユリウスよ。此度の戦い、存分に愉しめたぞ。改めて礼を言おう」

中国の拳法史にその人あり。

実践において、最強の一人と謳われた孤高の拳豪『李り書文しょぶん』。

その人生と同じように武に生き、武の因果によって果てた第二の人生。

それは、辺りを揺らす咆哮を、あげることなく満足そうに虚空へと消えた。

「ああ……満足だ」

黒き冷気を放つ暗殺者もまた、静かに笑みを浮かべ、跡形もなく空に溶けた。

「お疲れリップ。お前の宝具、凄いな」

「えへへ、翔さんこそあのコードキャスト、かっこよかったです」

「そうか？ まあさすがに今回は死にかけたけどな」

勝利の証である出口が自分を招いている。

自分はこの5回戦を勝ち抜いたのだ。

戦場から校舎に戻る。

この校舎に残るマスターは翔を含めて、これで4人。

その一人が、無言でこちらに歩いて来るのを彼は感じ取った。

「……驚きました。まさか兄さんを破るとは……僕も認識を改めないといけませんね」

それはレオ本人であった。

たった今、自分は腹違いとはいえ、彼の兄であるユリウスを倒した。そう考えればレオがここにいるのは当然だろう。

この戦いの結末は、彼にとって無視できないものがあつたはずなのだから……

「あなたは強い。賞賛に値する程に」

「……恨まないのか？ 俺を」

「奇妙な事を聞きますね。僕があなたを恨む道理などありません」

驚いている様子もなくレオは淡々と言葉を紡いでいる。

そこには、肉親を倒した相手への復讐心などが全く感じられなかった。

これを聞くには翔には気が引けたが、それでも気になったのだ。

ユリウスを倒した自分が憎いかと。

「今の僕にあるのは、予想を上回ったあなたの健闘への感想だけです」

「……そうかい」

その言葉には嘘も偽りもない。

レオの口調、目、表情、仕草。どれを見てもそう答える事しかできなかった。

「だけど、僕の中に今までとは違うあなたへの関心が生まれました。

これは紛れもない事実です」

「……」

この瞬間、翔は熱を感じた。

まるで太陽に焼き尽くされるかのように……

これは錯覚……ではない。

レオはいつも通り優しく微笑んでいるだけだが、レオの中での、翔という存在が変わつたのだ。

これはレオの心境の変化だ。

彼はきつとこう思ったに違いない。

レオによくやく寿々科翔という個が見えたと……

彼にとつて素晴らしい敵として心境を変えたのだ。

「前にも言つたはずだぜレオ。俺は生き残るさ。リップと共に」

「ええ、ぜひそうしてください。もしかしたらあなたこそ、僕の最後の相手かも知れない」

穏やかに照らしていた太陽が突如、その灼熱性を露わにしたような

感覚。

障害となる確かな敵、初めてレオは翔に対して感情を向けた。少し前の翔なら、身体が、これ以上レオと向き合うなと警告していただろう。

しかし不思議と翔は、客観的に事実を受け止める事が出来た。いくら、コードキャストを自作できるとはいえど、自分の魔術師としての技量はレオには遠く及ばないだろう。

それこそ、翔とレオには、蟻と獅子程の差がある。

「……変わりましたね。あなたの様に僕を真つ直ぐ見つめた人は数少ない。これは、ますます君という存在に興味がわきました」
きつと今のままでは正面から戦っても勝ち目はないだろう。

だがその恐怖を寿々科翔は打ち勝った。

あのレオとは違う威圧を持っていたユリウスと相対したというのもある。

だがなにより、傍らにいるパッションリップの存在が翔に勇気を与えていた。

「では、いずれ戦える日を楽しみにしていますよ。また会いましょう」
そう言つてレオは去り、完全に見えなくなる。

天に座す太陽の如く、改めてレオの存在が遠く敵わないものだと感じた。

世界の王になる運命を持って生まれた、選ばれた存在。

その距離は、地面歩く蟻と、天にそびえ立つ塔の如く、今は絶望的なまでに隔たれているのだろう。

だがそれでも翔は、その王に向けて進み続ける。

どんな手段を用いても、彼は戦い続けるのだ。

そう、たった一つの目的。生きるために……

第26話 必滅の（ゲイ・）黄薔薇（ボウ）

認めよう。

殺し合うことは避けられない。

肉親でさえ、隣人でさえ、競い合う相手なのだ。

それが人間の本質だ。

動物を絶命させ、資源を食い荒らし、消費するだけの命。

しかし、ならば――

彼らの争いには、何の意味があったのか。

5回戦開幕。

残るマスターも僅か4人となった。

寿々科翔、レオ、残り2人。

携帯端末が鳴り響き、翔は2回の掲示板への対戦相手の看板の前に立っていた。

掲示板には、いつも通りに次の対戦相手の名前が表示されている。

その相手は……

「掲示板を破壊して、情報を見させないようにしても面白かったんだけどねえ。それじゃあ卑怯すぎるかなって思ってたさ」

「志波……」

次の対戦相手は、最も今まで翔に対して協力してきた人物であった。

そして同時に、知れば知るほど謎を深めていった正体不明のマスター。

目の前の少女には随分と助けられた。

だがそれと同時に、この聖杯戦争で起こることを全てを知っているかの雰囲気を見せていた。

――彼女の名前は『志波 白亜』。

二本の槍を持つランサーのマスター。

彼女の實力は、はつきり言つて不明だ。

強いて分かるのは、あのランサーの赤い槍は魔力を遮断する効果のようなものがあるという事。

「前にあなた聞いたよね。なんで私があなたに協力するか。それはきつとあなたが暗号鍵トリガーを入手する過程できつとわかる。精々、頑張りなさい」

それを言えば、彼女はヒラヒラと手を振り、その場からいなくなる。今まで彼女の協力があつたからこそ掴めた勝利もある。

だがここからは、自分一人の戦いだ。

それを、知らせるかのように、懐の携帯端末が鳴り、暗号鍵トリガーの生成を知らせる。

彼女の言葉の意味はまだ分からない。

翔もまた導かれるように、アリーナへと足を進めた。

「……なんだこの気配」

「気配だけじゃありません。これ、アリーナ全体が書き換わつています」

確かにリップのいう通り、アリーナの気配が今までと違っていた。

止むことなく降り続ける雨。

それは地面を黒く染めるほど勢いよく降り続けているが、不思議と翔達が雨で濡れる事は無かつた。

これは、この雨が、目の前に広がる街が、再現されたデータだからだろう。

簡単に言えば、翔達は雨の降る映像を見せられていると言つた方が正しい。

そして一際目を引くのが、積み木の家のように崩れた大邸宅や、かつては見上げるばかりの無表情なコンクリートの構築物であつたビルが無惨に崩れている。

この光景はまるで、大規模な災害後の跡地のような場所であつた。

——私は言われた。

翔達がこの跡地を、歩いている最中、声がした。

これは、前から録画されていた音声か何かだろう。

そして、この声は、聞き間違いがない。間違いなく白亜の声だ。だが今までのような明るさはどこにもない。

どこだか遠くを見つめているような、そんな気がする声だ。

——私は魔術師ウィザードではないと、正確にはマスターとも違うと。

——私は過去に存在したデータ。所謂NPCなんだ、と……

NPC……？

彼女は元々、人間ではなかったと……？

翔が困惑していると、録音されていたであろう白亜の音声は続けられる。

——だけど、私のサーヴァントはそれを肯定し、私に一筋の希望を見出してくれた。

——そして、私は最後の敵を破り、ムーンセルの中核へとたどり着いたマスターの一人。

——だけど、聖杯を手に入れることは出来なかった。

聖杯を手に入れられなかった……？

ということは、白亜はどこかで戦いに負けたという事になるのか？
だとしたら、今まで協力してくれた彼女は誰なんだ。

「翔くんは気になるんでしょね。なら私はいったい何者なのかと……」

録音されたデータとは違う声がしたかと思うと、目の前の地面にカード型のデータが突き刺さる。

翔が拾ってみれば、それは一つ目のトリガー。

決戦場に赴くために必要な一枚だ。

「なぜこれ？」

「私の分取ったら、偶然目の前に生成されてね。せっかくだからあげちゃおうと思っただけ」

微笑みながら彼の質問に返答する白亜。

敵となっても、この性格は相変わらずのようだ。

ただ断つても、彼女なら平気で押し付けてきそうなので、ここは

黙って貰っておくことにしよう。

だが、気になるのは、今日の前にいる白亜はいったい何者なのかという事。

彼女もそれを分かっていたようで、静かに言葉を紡ぐ。

「私、実はこの聖杯戦争を全部知っているんだ。最後の敵を倒し、勝ちあがった私。そこで私は、最上層であるサーヴァントに負け、命を落とすとしたの」

白亜が指を鳴らせば、彼女の頭上に映像が流れ始める。

この映像は、今までの白亜の記録か……？

シンジ、ダン卿、ありす、ランルー、ユリウス、凜、レオ。

翔も戦ったことがある、協力してくれたこともある人物達が映し出され、その者達が白亜に敗れ、静かに消えていく。

これは、間違いなく彼女の記録。

彼女のいう事が正しければ、白亜は、今映し出された人たちを倒し、ついに聖杯までたどり着いたのだ。

「レオを倒せば聖杯に辿りつくと思っていた。だけど実際は違った」
そこに写るのは、巨大なムーンセルの中核の前に佇む、白亜とそのサーヴァント。

彼女の隣に立つサーヴァントは、影がかかっていて、姿は良く見えない。

そして、白亜の前に佇むのは、白衣を着ており、眼鏡をかけた男性。

「そのサーヴァントは『救世者』^{セイヴァー}。私はそいつに負け、命を落とした……はずだった」

再び、白亜が指を鳴らせば、次の場面に切り替わる。

そこでは、釈迦のような存在が放った攻撃に、サーヴァント、白亜が貫かれている場面であった。

その攻撃によりサーヴァントは消滅。

崩れた床より、落下しながら意識を失おうとしている白亜。

「私は祈った。こんな奴に聖杯を独り占めにさせてはいけない。どんな手段を使ってもあいつを止めたいと……」

彼女は、死を迎える直前に、ムーンセルにそれを告げた。

——私を、聖杯戦争開始前の時間へ戻してほしいと
そして、ムーンセルは、その願いを聞き入れた。

なぜ独り占めされていたはずのムーンセルが、その願いを聞き入れる事が出来たのかはわからない。

だが、彼女が目覚めた時は、聖杯戦争が開始される前の、作られた
日常……所謂、予選の時まで時が遡っていたのだ。

それが、なぜだかは今でもわからない。

だがきつと、そのような奇跡的な出来事が起こったのは、彼女が生
身の人間ではなく、存在そのものがNPC故だったからだろう。

「私ではあいつに勝てる力が無いかもしれない。だから私は探した。
私が敗れてもなお、この世界を変えてくれる力を持つ人を」

彼女が最初に体験した聖杯戦争では見なかった人物……

その人物は今、白亜の目の前にいる。

「それが、あなたよ、寿々科翔」

白亜は、指を突きだし、翔を指さす。

正直、翔には何を言われているかさっぱりわからなかった。

世界を変えてくれる？

そのために、彼女は自分に協力していたというのか？

わけがわからない。

ただ自分は生きるために戦っていただけなのに……

「当然、手は抜かないわ。むしろ全力であなたと対峙する。そこで私
が勝てば、あなたはその程度の人間だっただけ」

これが、今まで謎に包まれていた志波白亜の全て。

彼女は人間として生まれていなく、ムーンセルが再現したNPCな
のだ。

それが何らかの不具合によりマスターとしての力を得た。

そんな彼女にも目的があり、決勝戦まで勝ち抜いた。

——だが彼女はそこで敗れ、死に際に一つの願いを残したのだ。

そして彼女はここにいる。

聖杯戦争の行く末を経験し、その道を再び歩む少女。

それが彼女、志波白亜なのだ。

「だから翔くん、力不足ならここで倒れて頂戴。ランサー！」
「御意」

白亜の呼び声と共に、緑色の鎧を纏い、赤と黄色、二本の槍をもつランサーが目の前に現れる。

ありすとの戦いや、ヴラド三世との戦いでは心強い味方であった白亜のランサー。

だが敵となれば、これほどまでに恐ろしい相手が今までいただろうか。

加えて、二回の共闘をしているので、こちらの手の内も白亜は把握している。

一つ前に戦ったユリウスよりも違った意味で手強い相手となりそうだ。

——だが、こちらにも策はある。

それは前の戦いで発現した翔の術式
『ダンス・オブ・ザ・セブンヴェールズ』
『宝石煌めく七つのヴェール』』。

あの術式だけは白亜も知らない。

故に彼女に勝つには、この術式の使用タイミングが命だ。

「志波、本気のようにだな」

「翔くん、負けるつもりは？」

「そんなものないさ。お前と一緒に先に進むさ。志波とランサーを倒してな」

「そう。なら全力で来なさい。でないと死ぬわよ」

彼女は本気だ。

白亜の今までとは違う雰囲気を見て、翔は察する。

だが、こちらとて負けるつもりはない。

「ではお見せしよう。我が必殺の槍を」

「ハイサーヴァント、パッションリップ。参ります！」

自身の巨大な腕を構え、両者がぶつかり合う。

戦いは、口上なくして始まった。

リップから放たれる腕の攻撃を、ランサーは眉一つ動かさず迎え撃つ。

力だけ見れば、間違いなくリップの方が上だろう。

だが、その力を上回る技量が、リップとランサーの差を埋めていた。さすがは三騎士のクラスで呼ばれるだけあって、一筋縄ではいかならしい。

『セラフより警告　アリーナ内でのマスター同士の戦闘は禁止されています』

今立っているアリーナが警報により赤く染まり、そして響き渡るアノウンス。

数分にも満たない時間で強制的に戦闘は終わる。

だが、それでもこの戦闘で相手のランサーのことが少しでもわかれば……

「いギー！」

ランサーは紅の長槍をリップに目掛けて突き出した。

常人なら黙視する事すら敵わない一撃。

だがリップとてサーヴァント。彼女に常識など当てはまるはずがない。

「援護するリップ！ 『g a i n | s t r (3 2) : 』 !」

「やあー！」

翔が援護のコードキャストを放ち、リップがランサーに向けて攻撃を放つ。

それだけで十分であった。

強化されたリップの力、その間に人間がいれば、瞬く間に引き裂かれてしまう一撃がランサーの槍を巻き込む。

地面がリップの一撃により歪み、ランサーは顔をしかめる。

「なんという……」

今の一撃でランサーは力で敵わぬと察したのでだろう。

彼は二本の槍を巧みに操り、リップの攻撃をうまく躲し応戦する。今までの戦いでランサーの戦いは、リップも翔もある程度は分かっていた。

その中でも注意すべきは、あのランサーの持つ赤と黄色、二本の槍。

赤色の槍は、ランルーの戦いで見ていたから大体の効果は分かる。あれは魔力で編まれたもの全てを遮断する槍とみて間違いない。だが黄色い槍の効果は、完全には分からない。

ジャバウオックで見た時は、あの黄色い槍に斬り裂かれた箇所のダメージが残っていたようにも感じたが……

「……ダメージが残る？」

いや、明らかにおかしい。

いくらダメージが大きかったとはいえど、ジャバウオックの治癒する時間があつたはずだ。

だが、翔が対峙したジャバウオックは傷が塞がっていれど、黄色い槍に刺された箇所の動きが鈍かった。

まさか、槍のダメージが残っているという事は……

「よそ見は禁物よ、『g a i n | a g i (3 2) ・ ! 』」

「感謝する。我が主よ！」

白亜がコードキャストを放ち、サーヴァントと言えども、目で追う事が難しい俊足をランサーは手に入れる。

このままでは一撃がリップに入る。

魔力の盾を生成しても、ランサーの赤い槍によりそれは意味ないものとなる。

咄嗟の判断だった。攻撃を防げないのならば、その前にランサーを退ければいいの事。

「『g a i n | a g i (3 2) ・ ! 』」

白亜と同じ敏捷強化をリップにかけ、彼女もまた素早い動きが可能となる。

正に乾坤一擲。防御を奪われたことの不利を、防御を捨てることの利点で覆す。

それはまさしく、潔い決断である。

決して白亜にとっては、嫌いでは無い判断だ。

しかし、この場に限って言わせてもらえば……

白亜はあえて翔に言葉を放つ。

「それは失策だったよ。翔くん」

「穿て……『必滅の黄薔薇』！」

両者がお互いを通り抜ける。

翔にも白亜にも、それがスローモーションのように見えた。

もし白亜が敏捷強化のコードキャストを放たなければ、ランサーは今頃、リップによって斬り裂かれていただろう。

だが彼女が放った敏捷強化とランサーの敏捷。

それは悲しいまでにリップと相性が悪かった。

ランサーの黄色い槍はリップの左腕を深く斬り裂き、リップの一撃はランサーの身体を掠める。

「ぐう……い！」

その一撃にリップは吹き飛び、地面へと倒れ込む。

その直後、ノイズのようなものが走り、二人はマスターの側へと強制的に戻される。

セラフが介入し、戦闘を強制終了させたのだろう。

「なるほど、簡単には勝たせてはくれないか。良いがな、その不屈ぶりは！」

ランサーの傷が白亜によって治癒される。

翔もすかさず、リップに治癒のコードキャストを掛けるが、何かがおかしい。

傷は塞がったことから、治癒は間違いなく効いているはず。

だから、今の治癒のコードキャストによって、完治していてもおかしくは無いのだが……

「傷が治らない……い！」

やはりそうだった。

翔は自らの失策を悟る。

一度、穿てば、その傷を決して癒させぬ呪いの槍。

それがランサーの黄色い槍の正体であった。

本来であれば、リップはいまの状態ですべて完治しているはずだ。

だが、リップの左腕はダメージを負ったまま……

つまり、今のリップは『左腕にダメージを負った状態』が完治している状態なのだ。

そしてそれを放つ前にランサーが言った『必滅の黄薔薇』という言葉。
葉。

——魔を断つ赤槍。

——呪いの黄槍。

そして右目の泣き黒子……

もし翔の予想があつていれば、あの泣き黒子から『魅了』の魔術が
発せられているはずだ。

となると、あの英霊の正体は……

「フィオナ騎士団、随一の戦士。輝く貌のデイルムツド……」

「今までの共闘から導き出したんだね。やるねえ……ランサーの真名
を暴くなんて」

サーヴァントの治癒能力とコードキャストで何とか止血だけでは
きている。

だが左腕を見つめるリップの表情は苦痛そのものだ。

自らの失策に、歯を食いしばる翔。

「これであなたのサーヴァントの左腕は思うように動かないはず。い
い成果だわランサー。今回はひとまず撤退しましょう」

「御意」

彼女が一つの道具を取り出せば、即座にその場から消えるランサー
と白亜。

その場に残されたのはリップと翔のみ。

そんな中、ただ翔は立ち尽くしていた。

自分の失策によって、リップに深い傷を負わせてしまった。

やはり、自分はまだまだ弱い。

戦う抜くという決意をしたのにも関わらず、その事実が彼を突き付
けていた。

「翔さん」

「リップ?」

戦いを終えたリップが、ゆっくりと翔の隣に来る。

その瞳の奥には心配を感じさせるような物を感じる。

こんな失策をしてしまった自分を彼女は心配してくれているのか。

「えっと、こんな時にどうやって言えばいいかわからないけど……」
一呼吸おいて、リップが翔に語り掛ける。

「私は何があっても翔さんのサーヴァントです。あなたの前に立つものは誰であろうと迎え撃ちます！」

まるで翔を元気づけるかのように、自らの右腕を高く掲げる。

「それに左腕が使えなくなつて、右腕があるんです！ これでどんな敵だつて潰してペツチャンコにできちゃうんですよ！」

彼女の行動に翔は目を見開く。

それがサーヴァントであるパッションリップにとつてはきつと当然のことなのだろう。

しかし、彼女のその言葉は、翔にとってかけがえのないものであった。

彼女は左腕にダメージを受けてもなお、頑張つてくれるというのだ。

ならば、自分がそれに応えずして何になる。

相手はとてつもなく強い、そしてこちらは左腕は思うように使えないというハンデができてしまった。

だがそれでも戦い続ける。

今後戦う相手が誰であろうと、最後まで戦い続ける。

「……すまねえ、ありがとなりリップ」

彼女の言葉で何か吹っ切れたかのように笑顔になる翔。

彼の表情を見れば、それに釣られてリップもまた微笑む。

この先、どんなことがあつてもリップは自分のために戦つてくれるのだろう。

目を閉じ、リップが召喚されたあの日のことを思い出す。

今でも色褪せることのない光景。

彼女は自分という存在を信じてくれている。

ならば、自分もリップのことを信じよう。

自分を信じてくれたパッションリップの気持ちに最大限に応えてあげよう。

今の翔には、その気持ちが沸き上がっていた。

第27話 gain (解放) | Beag—allt a
ch&Mor—allt a ch (ベガルタ モラル
タ)

数日後、翔はマイルームでデイルムツドについての情報を収集していた。

白亜のランサーの真名、それは彼が宝具を使用したおかげでその正体を掴むことができた。

しかし無傷で……ではない。

その代わりとして、こちらのサーヴァントである、リップの左腕が思うように使えないというハンデを背負わされてしまったのだ。

真名を隠すか、正体を明かしこちらの戦力を削ぐか……

どちらも捨てがたいものではあったが、彼女、志波白亜は後者を選び取った。

「『デイルムツド・オディナ』……」

ケルト神話におけるフィオナ騎士団の最盛期。

癒やしの水を司る大英雄『フィン・マツクール』が首領を務めた時代において最強とも言われる筆頭騎士。

彼の宝具は、魔を断つ赤槍である『破魔の赤薔薇』。

そして呪いの黄槍である『必滅の黄薔薇』。

二つの宝具は、派手さには欠けるものの、どちらも厄介な宝具である。

改めて彼の宝具を確認しよう。

——まず紅の長槍『破魔の赤薔薇』。

この宝具は刃が触れた対象の魔力的効果を打ち消す。

こちらのコードキャストや、魔力で編まれた鎧などの防御を無効化させるための能力を持った宝具。

実質、この槍の前では、魔力で編まれた鎧や盾などは通用しないと
思った方がいい。

現に、ランルーの戦いで、彼女の編み出した盾のコードキャストを

無効にしているのだから……

——そして、黄の短槍『必滅の黄薔薇』。

こちらは、治癒不能の傷を負わせるというとんでもない代物だ。通常の解呪は不可能であり、この槍で付けられた傷は、あの槍を破壊するか、デイルムツドが死なない限り癒えることがない。

「唯一救いなのは……」

しかし、デイルムツドはまだ本来の力を出し切れていない。

それもそのはず、生前のデイルムツドは、二槍流や二刀流だけでなく、剣と槍を同時に扱うという。

ランサークラスで召喚された彼は、その剣を使用することはできない。

それが、翔にとって、唯一の救いであるだろう。

「なにかわかりましたか？」

「まあな、生前の彼は剣と槍の両方を使っていたという情報があっただけでも大きな収穫だろう」

リップからかかる声に翔は返答する。

昨日のうちに翔は、痛覚を和らげるコードキャストを自作し、それをリップにかけている。

それゆえ、彼女から翔にかける声は昨日と違い、苦痛に満ちていない。

「コードキャストの効果はどうだ？」

「はい。おかげで激しい戦闘以外は何かなくなっています」

明るい声で返答するリップ。

となれば、効果は十分のようだ。

本来であれば、完全に左腕のダメージをなく彼女を万全な状態にしたい。

なにより、彼女を痛みから解放してあげたいのだが、さすがは英霊の宝具。

翔の実力ではこの程度が限界のようであった。

「そういえば気になったんですけど、5回戦で翔さんが使ったコードキャストって……」

「ああ、あれか」

自分なりにまとめた例の決着術式のデータをリップへと見せる翔。それを見たりップは、驚きの声をあげる。

—— 『ダンス・オブ・ザ・セブンヴェールズ 宝石煌く七つのヴェール』』

零の月想海にて翔が手に入れた決着術式。

使用者であるマスターの魔力を全て消費し疑似的に『賢者の石』を複数作成、それを媒体とし発動する。

その効果は、S.E. R.A. P.Hに登録されたサーヴァント全てのスキル、宝具を、BくAランクの習熟度で発揮可能できる術式。

そして賢者の石は、想像を絶する膨大な魔力量を持ち、かつ魔力が無尽蔵に供給される。

だからあの時、彼はユリウスとの決戦の時に、サーヴァントの宝具の一つを使用することができたのだ。

一回戦などで使えたのは、翔自身に、B.Bの授けたスキルに似た力があつたため……翔はそう思っている。

彼女は、B.Bはそれを、いつでも具現化する力をくれたのだ。

「めめめ、めちやくちゃじゃないですか!？」

リップからこう言われるのも無理はない。

翔も初めてこれを使ったとき、でたらめもいいところだと思ったくらいなのだから。

だが当然デメリットも存在する。

—— それはムーンセルからの攻撃だ。

この術式発動中は、ムーンセルによる防衛プログラムが作動し、常時肉体に負荷がかかり続けるため、発動限界時間一杯まで使うと肉体が消滅する。

つまり彼の身体を考えれば、もって術式発動限界時間は約10分。

正に試合を、決着へと持っていくための術式だ。

「でも出力方法は、使用者である翔さんの全魔力ですか。となると無闇に連発はできないんですね」

「あと賢者の石の破壊も弱点だ。これが破壊されれば膨大な魔力の供給が追いつかなくなって術式が自然消滅する」

翔の周囲に展開される賢者の石。

それが破壊された場合、術式による魔力供給が追いつかなくなるため、術式が自然崩壊し、使用不能になる。

術式が自然消滅すれば、その時点で負けが確定だろう。

こちら全魔力を使っており、さらには術式の反動で動けないだろうから……

だがその反面、これは間違いなく強力な武器となる。

決戦までの期間に少しでもこの術式の使い方を勉強する必要がある。

今日も、リップの今の状態での戦闘に慣れるためにアリーナへと向かう翔であった。

二つ目のトリガーを入手し、アリーナから帰還しても白亜は一切顔を見せることはなかった。

できればもう一度、今のリップでどう戦えるか確認しておきかけたが、彼女も手の内をこれ以上、晒すつもりはないのかもしれない。

しかし、トリガーを入手されている形跡があることから、どうやら白亜達とランサーは、トリガーだけを手に入れて早々退散したようだ。

それを、疑問に思いつつも、翔とリップはアリーナにて特訓。

ついに、決戦の日である。七日目がやってきた。

「あちらも何か準備している可能性があるな……」

今日、白亜との決戦がある。

今までの行動からして、彼女が何も準備しないとは考えにくい。

恐らく、今まで考えてもいないようなことを、決戦場でするかもしれない。

こちらの戦い方もいきわたっている以上、今までのどの相手よりも気を付けないといけない相手だ。

——そしてこちらはリップの左腕が、思うように使えないというハンデがある。

アリーナでの特訓は、そんな状態でも、様々な戦い方ができるようにしたものであった。

その成果が実を結ぶかなど分かりはしない。だがやらないよりはましだ。

「この戦いが終われば残り二人……」

そう、この決戦で自分か白亜、どちらか一人しか帰ってこない。

ここまで来て白亜に負けるつもりなどない。だがそれは彼女も同じだ。

この聖杯戦争も終わりが近づいてきているのだ。

最初の頃であれば、白亜と自分は天と地ほどの差があったはず。

だが今はきつと、彼女に追いつき、そして追い越せる実力になっていると信じていたい。

「大丈夫です。翔さんと私ならきつと勝てる！」

「ああ、そうだな。俺とリップなら、きつとあいつも追い越せる！」

リップの言葉に笑顔で返答する翔。

こうやって、自分を守ってくれる相手がいる、

翔はこの戦いが終わり、再びこの校舎を見るのだ。

ランサーを、白亜を倒して……

「翔さん、少しづつですけど、変わってきましたね。今までも頼もしかったのに、なんだかささらに頼もしくなった感じですよ」

「ば、ばか……突然何を言うんだお前は……」

リップの言葉を聞いた途端、恥ずかしさが湧き出てしまった翔は、さっさと支度を整えて、マイルームから出る準備を行う。

ついに決戦の時だ。

「久しぶりだね。翔くん」

そして、迎える決戦の日。

トリガーをセットし、決戦場のエレベーターの浮遊感に身を任せていると、向かい合う影のうち一つから声が聞こえる。

視界が明るくなり、姿を見せるは、志波白亜とそのサーヴァントで

あるランサーだ。

「おお、リップちゃんの左腕、ずいぶん動かせるんだね。こりやあ計算狂ったかな。いや、ただ翔くんの実力を甘く見すぎていた……だけかな」

リップの左腕を見つめながら、そのような言葉を放つ。

さすがは、白亜といったところだろう。彼女の左腕を見ただけで、どれぐらいの効果のあるコードキャストを使用したのか分かったようだ。

彼女がいる以上、こちらの情報、戦い方の大半は知っているはずだ。恐らく彼女は、翔の実力を考えつつ、弱点を突く特訓を行うことも当然可能だ。

間違いなく、彼女は、彼女なりに勝ちを狙う作戦があるはずだ。

「ここまで来たのなら、覚悟は出来て居る様ね。だけど私の願いは変わらない。あなたを倒し、あいつを倒して、ムーンセルの在り方を変えろ」

「俺の目的も変わらないさ。俺はまたあの校舎へ戻る。リップと共に！」

「なら証明してみなさい！あなた達のほうが、私とランサーよりも強いということをね！」

エレベーターが止まる。決戦の場へと到着したのだ。

着いた場所は、珊瑚があり、熱帯魚が優雅に泳ぐ南海のような場所。

その光景は幻想的な光景だった。

だがこれから起こるは、二人の生死を分ける戦い。

「勝者が更なる道を歩み、負けたものは、分解されこの歴史から消える。どちらが勝るか決着をつけましょう。ランサー！」

「我が主に、勝利をもたらしましょう！」

ランサーと白亜が構える。

ここまで導いてくれた恩人にして最大の敵、志波白亜。

そして彼女と共に歩むのは、ケルト神話にて『フィン・マツクール』が首領を務めた時代において最強とも言われる筆頭騎士。

そんな存在のひととの戦いが、今ここに始まるのだ。

「最強だろうと何だろうと、私が全部ぺちゃんこにしてあげます！」
「フィオナ騎士団が一番槍、参る！」

どちらも、マスターを聖杯にたどり着かせる、その二人の意思は、誰よりも強い。

だがこの決戦で、生き残るものはただ一人。

つまり、お互いの意思がぶつかり合い、その想いが強い方が生き残る。

この戦いは、そういう戦いなのだ。

——Sword, or Death

どちらからではなく、両者が一斉にぶつかり合い、戦いの火蓋がここに切って落とされた。

一撃目は、ランサーが優勢となった。

大きく切り払われる形で後方へと吹き飛ぶリップ。そしてそれを追うランサー。

「リップ！援護する！『shock(32)!!』」

今の一撃で隙をさらしたリップへの追撃を防ごうと弾丸のコードキャストを放つ翔。

しかし、その弾丸は、向かい側より飛んできた弾丸によってかき消され、相殺される。

「甘いわ。そんなものではランサーには届かない！」

翔よりも正確な狙いかつ威力の高い弾丸。

ランサーに全力を出させつつも、彼女もまたコードキャストを用いて戦い余裕を見せている。

そして、ランサーの二本の槍。

赤の槍を使えば、魔力のある攻撃は遮断、そして黄色い槍を使えば治癒不能な傷を負う。

この試合、長期戦になればなるほど翔達のほうが不利となる。

だが、短期決戦などという事は、あの白亜が許さないだろう。

『微笑むサロメ』……」

『gain敏捷(32)！』

彼女の金色の巨大な爪を構えれば、同時にリップの魔力が変わる。その魔力は守りを捨て、攻撃に特化されたもの。

リップがそのスキルを使うと同時に、翔が彼女に敏捷強化のコードキャストを使う。

同時にランサーが、目視の適わぬ神速の連続の突きを、彼女の体の部位を、ほぼ同時に狙ってくる。

「やあー！」

「せいっー！」

ランサーの突きを防ぎ、威力を高めたリップの一撃。

一撃が来ることを予想したランサーは、突きの構えを解き、そのまま下から突き上げる弧を描くような払いによって受け流す。

敏捷などはリップより上なランサー。

しかし、筋力では唯一リップに負けている為、彼女の一撃の重さをそのままランサーが受け止めようものなら、その身ごと碎かれる。

もしくは力負けして吹き飛ばされるか……

故にランサーは受け流しという選択肢をとった。

十の力を、十で受ける必要はない。

その中の一の力を使えば、十の力の動きを逸らすことも、ランサーならば造作もないこと。

彼がやったのはそれだった。

「ランサー、下がりなさい」

白亜の言葉を聞いたランサーが、後退し、白亜の隣へと立つ。

リップも同じように下がり、翔の元へと戻る。

「何か策があるのか？」

「翔さん……私、なんか嫌な予感がします」

心配げな表情で、向こう側を見つめる。

確かに、翔も同じような感覚を先程から抱いていた。

向こうが何をしてくるかにはわからない。

だがこの後に、とてつもなくやばいものが飛んでくるのではないかという感覚だけが先程から感じているのだ。

「翔さん、どうしましょう」

「分からない。だが志波の補助は厄介だ。だから俺が志波を引きける。だからリップは引き続きサーヴァントを狙ってほしい」

「わかりました。ならそれに従います」

リップが前に出ると同時に、ランサーもまた前にでる。

「どうやら作戦会議は同時に終わったらしい。」

「そつちの話し合いは終わったようね。なら見せてあげるわ！私の切り札を！」

白亜が叫ぶと同時に目の前に出現する解読不能なコードが連続する。

それが何重にも連なり、白亜は通常の聖杯戦争では不可能な一つの可能性を見つけた。

本来ではあれば、これはあり得ない現象である。

だがムーンセルは全ての平行事象を観測する。

あれは魔術なのだろうか。

いや、もしかしたら魔術という範囲を超えたものに当たるかもしれない。

『gain | Beagal & Morallattach』
『!!』

その瞬間、ランサーは光に包まれる。

そして現れるは、今までの緑を基調とした鎧ではなく、青を基調とした鎧に身を包んだ、雰囲気すらも変わったランサー。

そして、なにより翔が驚いたのはそのランサーが持っている武器だ。

今までは赤い槍と黄色い槍の二本であつたはず。

——それが赤の槍と、赤の剣へと変わっていたのだ。

「嘘だろ……」

さすがの翔も言葉を隠し切れなかった。

彼女はランサーのデイルムツドに、セイバーのクラスを追加したのだ。

つまり今、翔達の目の目に立っているデイルムツドは、ランサーであり、セイバーのクラスであるのだ。

確かに、これが彼女の切り札ともなれば納得がいく。

彼女は、デイルムツドの全盛期を今、ここに取り戻したのだから

……

「さあ翔くん。そろそろお別れね。だけどあなたを倒すには、このデイルムツドこそふさわしいわ！」

「我が主の言う通り、今の俺はランサーでありセイバーである。フィオナ騎士団が一番槍『デイルムツド・オディナ』——推して参る！」

翔と白亜の隣の人が同時に消え、火花を散らす。

ランサークラスで召喚された彼は、その剣を使用することはできないのが唯一の救い……だった。

だが今の彼はランサーでありセイバー。

つまり今まで使えなかった二振りの剣を使うことが可能となったのだ。

想定していなかった最悪の場面が今、ここに体現された。

第28話 消えぬ意志

剣と爪の軌跡が交差し、火花を散らす。

今のランサーの実力は未知数だ。彼は今、セイバーでありランサー。

そして何より、気になるのが、赤い槍と共に握っている赤い剣。セイバーで顕現した彼が新たに持つ、剣となれば、おのずと絞れてくる。

『shock(32)！』

だが今はそんな悠長に考えている場合ではない。

彼ができることは、白亜の補助のコードキャストのタイミングを与えず、こちらはリップのサポートをする。

厳しいが、それが今、翔にできる事なのだ。

『mg|wall()！』

だが翔のコードキャストが直撃する直前、突如、地面が下から槌で叩かれたかのように隆起する。

彼のコードキャストは、その壁に直撃し、何事もなかったかのように消え失せる。

まさにあの壁は、詠唱通り、城壁そのもの。

彼女のコードキャスト種類は、攻撃だけでなく、防御もしっかりと備えている。

『start-up』

静かに紡がれた白亜の一言。

それがトリガーだったのだろうか。

この決戦場のありとあらゆるところから、魔力弾が飛び出し、翔に殺到する。

ただ一つの魔力弾であれば、翔が防ぐことも可能だろう。

問題は、それが四方八方から襲い掛かっているということところだ。

彼の眼では、襲い掛かる魔力弾を半分も見ることができないだろう。

ならば……

「見様見真似！ 『魔^魔力^力壁^壁展^展開^開（ ）！』」

白亜の魔力弾を察知し、それと同等の魔力の障壁を、翔の全方位に展開する。

彼の使えるコードキャストの中には、盾を展開するコードキャストがある。

しかし、それでは四方八方から放たれる魔力弾全てを防ぎ切る自信はない。

仮に防げたとしても、途中で限界が来て砕け散ってしまうだろう。故に彼は見様見真似であるが、白亜の使った障壁のコードキャストを使ったのだ。

「へえ……やるじゃない」

白亜が賞賛の声をあげる。

恐らく彼女の放った魔力弾は、彼の使える防御のコードキャストを、破れるような威力の弾丸だったのだろう。

翔へと向けられた弾が、障壁とかち合えば、ボロボロと崩れ消えていく。

攻撃の手は緩めるつもりはない、すでに次の一手を翔は紡いでいる。

翔が白亜に向け、コードキャストを放とうとした直前、その刹那であっただろうか。

白亜が、ニヤリと口元に笑みを浮かべたのは……

「さすがに、あれじゃあ無理か。ならばロードローラーよ！」

「なっ!?」

無茶苦茶、とはこのことを言うのであろう。

上空に不穏な気配を感じ、翔が空を見上げてみれば、そこには圧倒的な質量を持つ鉄の塊が降下して来ていたのだから。

あれは言わずとも一目でわかる。

よく建設現場などで見かける、地面をローラーで押し固める建設機械だ。

その重量は……言うまでもない。直撃すればペしゃんこに、なる程である。

それをいかなる方法を使ったのかは不明だが、遙か上空へ浮かべ翔の頭上に落としてきたのだ。

弾丸で障壁を弾くことはできれど、あんな物を砕くことは不可能。そしてあれが翔に直撃すれば、彼の身体は跡形もなくなるだろう。

「空からロードローラーだ?!? いくらなんでも無茶苦茶だろ!?!」

誰もが予想しない一撃。

だがそれは、同時に効果のある一撃でもある。

ロードローラーによる押し潰しなど、恐らく白亜だけが思いつく一撃だろう。

いくらコードキャストの全てが使え、自作すらできる翔でも、あれ程の攻撃を防ぎきるのは無理だろう。

だが翔にはリップがいる。

いくら白亜が予想外の一撃を使えるとは言えど、さすがにロードローラーの雨を降らせることはできないはずだ。

「リップー!」

翔が言うよりも早くリップが、ランサーとの戦いから離れ、空高く飛び上がる。

そして、その巨大な腕で落下するロードローラーを受け止めれば、それを白亜へ向けて投げ飛ばす。

彼女の腕力は、ランサーすらも上回る。

故に、力押しではあるが、リップは落下するロードローラーを受け止め、投げる事ができたのだ。

「ランサーー!」

白亜の呼びかけに応じるように、目の前へと現れ、ロードローラーを一刀両断するランサー。

英霊の宝具ならば、ロードローラーの鉄など、容易に切り裂くことは可能。

真つ二つになった、ロードローラーは、力を失いその場に大きな音を立てながら地面に落ちる。

「(これが志波の全力じゃないはずだ……)」

リップの腕力を知っている白亜なら、ロードローラーを投げ飛ばす

ことなど容易に想像できたはずだ。

となれば、ロードローラーはそれを準備するための罠。

切断されたロードローラーの向こう側、そこで翔は一つのコードキヤストを紡ぐ白亜を見た。

『拘束状態付与add | bind () : 』

反射的に翔は悟る。

ロードローラーを迎撃したことで二人には僅かな隙が出来ている。そのデカブツという、生命に直結する、致命的な存在を排除したことで心に少しの安心が生まれていた。

だがそれこそ、白亜の狙っている、二人の致命的な隙であったのだ。

『身体が……!!?』

『動かない!?!』

白亜の放ったのは、拘束のコードキヤスト。

サーヴァントには数秒しか効果が無いものの、一撃を与えるためには十分である。

それにランサーの敏捷性が加われば、絶大な効果を発揮する。

『ゲイ・ジャルグ穿て……『破魔の赤薔薇』!!』

槍の一突きがリップへと迫る。

迫る位置は勿論、英霊にとつての心臓部分となる霊核の位置。

あれをくらえば、霊核が砕かれ、彼女は光と消えてしまうだろう。

それだけは許すわけにはいかない。

『状態異常回復cure () : 』!!』

なんとかコードキヤストを紡ぎ、リップの拘束状態を解除すれば、迫る槍の一突きをその腕で弾く。

ランサーの必殺の一撃を何とか防ぐことができた。

だが……

『甘い!!』

彼の声と共に放たれる赤の剣の降り降ろし。

彼女はそれをも自らの腕で防ごうとした。

だが次の瞬間、リップは目を見開き、自分の状態を確認した。

——赤の剣が自身の腕をすり抜け、リップの体を切り裂いていた

のだ。

「リップ！」

「今……のは？」

即座に後退を指示し、その場から離れるリップ。

そして回復のコードキャストを掛ける翔。

傷はすぐに塞がったものの、体力の消耗が大きすぎる。

「今のは……『憤怒の波濤』か……！』」

「名答」

翔の言葉に白亜が返答する。

『憤怒の波濤』……』

ケルトにおける海と異界の神マナナンによって授けられた剣。

デイルムツドが操る多くの武器の中で最も強力な物を挙げるとすれば、この恐るべき魔剣を措いて他ない。

—— 一撃必殺、初撃必勝。

抜き放たれた魔剣はデイルムツドに確実な勝利を与え、敵対者に敗北と死をもたらず。

その能力は、物理的な防具や防御をすり抜ける力を持つ。

『破魔の赤薔薇』が魔力的なものをすり抜ける力を持つならば、

『憤怒の波濤』はその反対。

今の彼には、物理的な防御も、魔力的な防御も意味をなさない。

「考えている場合かしら！あなたにとっておきを見せてあげる！」

その言葉と共に、コードキャストを紡ぎ白亜は走り出す。

その利用場所は……弾丸でもサーヴァントの強化でもない。

ただ単純明快な“自身”の肉体のブースト、それを最大限出力すること、まるで瞬間移動したかのように翔との距離を詰めた。

「魔術師が接近戦!？」

「人のこと言えるのかしら！」

いくらここまで戦いを制してきた翔でも、戦っているマスター自身が近接戦闘を挑んでくるなど、計算外であったのだろう。

彼の顔が驚愕に染まる。

「これは私の趣味じゃないわ。だけど様々な戦いの中で、近接格闘礼

装全種があるのは知っている。様々な手段を確かめている私にとって、それを極めているのは当然のこと！」

その速度は一時的にサーヴァントすらも上回る。

そしてそれが傷を負っていたリップならなおさらのこと。

だが彼女の肉体ブーストの効果が多く見積もって数十秒……

もしも効果が切れてしまえば、力では翔には勝てないだろう。

つまりここで攻め切ることができなければ、白亜が敗北するのは自身もよくわかっている。

「くらいなさいー！」

「ぐっ!？」

翔へと放たれる一撃。

そのたつた一発の攻撃は単純にしてシンプルな突き。

しかし、肉体ブーストを乗せた一撃は、その攻撃がシンプルなほどであれど最強の一撃となる。

その一撃の重みは翔の精神すらも破壊し尽しそうなほどであった。

「優雅に飛んで……逝きなさいー!はああああああ!!」

零距离より放たれる、魔力が上乘せされた一撃。

その攻撃はミサイルが直撃したかのような轟音を響かせ、破壊という姿をしたその一撃は、翔の体を容易く浮かせ、壁に叩きつけた。

手応えはあった。

よく彼を観察すれば、肉体の消滅は免れているものの腹部は挟かれている。

この勝負は、間違いなく彼女の勝利だ。

「翔さん!？」

「隙を見せたな……!」

翔の魔力が大きく乱れたのか、視線を一瞬逸らしてしまうリップ。

だがその一瞬の隙を英霊であるランサーは、見逃すはずが無かった。

即座にリップの懐へと入り込み、斜め下より大きくパッションリップの体を憤怒の波濤で切り裂く。

「ぐう!？」

激しい痛みが身体中を駆け巡る。

即座に反撃を試みるリップ。だがおかしい、ランサーが即座に後退した直後に身体の異変に気付く。

腕が、上がらないのだ。

そしてそれに続くかのように、足の力が抜け、膝をつく。

だがそれは、ランサーの宝具のせいではない。

先程のダメージ等が蓄積され、彼女の体に限界が来てしまったのだ。

「腕が……上がらない……」

「……やれやれ、一人の敵を倒すのにこんな大盤振る舞いしたのは久しぶりだわ」

正直、白亜の体にも限界が来ていた。

だが大盤振る舞いをした価値は、あると思っている。

しかし、これは同時に失望でもあった。

彼になら、この先を託せるかもしれない、その思いが粉々に砕け散ったのだから……

翔から視線を離し、リップを見つめる白亜。

彼女もあと一撃を加えれば、終わるだろう。

もはや反撃する気力も残されていない。

白亜は静かに手をあげ、執行者のごとくランサーに指示を出す。

「ランサー！ 宝具開放！ 一撃でパッションリップを倒しなさい！」

「了解した。この一撃、主の勝利のために放つ！」

ランサーが武具を構えると同時に、歯を食いしばり、立ち上がるリップ。

彼女の体力的に、もう戦いが続けられないのは自分でもよくわかっていた。

——故にここで勝負を決める。

「まだ……終わっていません！」

「宝具開放!!」

英霊パッションリップは、両手をロケットパンチのごとく勢いよく撃ち出し、英霊デイルムツドは自らの 憤怒の波濤を構える。

高速に飛び交う腕により傷を負いながら、彼は遙か上空に飛翔した。

その飛翔は人智を超えた超跳躍。

出力を最大開放したモラルタは、伝説に語られる「マナナン神の脚」にも似て、三本の刃となつて敵を寸断する。

通常時が”初撃必殺”ならば、最大出力は”一撃必殺”。

「生死を分かつ境界線……見定める！」

「この一撃で……潰れてください！」

強大な刃に対するは、強大な猛獣の口。

だが白亜は確信していた。この宝具の勝負はランサーが勝つ。

——ランサーでありセイバーのデイルムツドには、『激情の細波』という宝具が存在する。

デイルムツドが操るもう一つの魔剣。

これもまた海神マナナンに授かった武具のひとつ。

防御を司るこの剣は、戦いでは力を発揮できない。

だが、一度だけこの剣が真の力を発揮するときはその所持者であるデイルムツドが危機に瀕した時……

この剣は自らを犠牲に、所持者を守るのだ。

故に一度しか使えないこの剣、だがこれがあればこの対決も勝負が決まったも同然。

激情の細波が、デイルムツドを守り、憤怒の波濤により勝負を決める。

今、この場はランサーと自分、そしてリップに注意を向けていればいい。

白亜はそう確信した。

——しかし。

——それが彼女にとって致命的な隙となっていた。
「……………!? 翔くん!?なぜ生きて!?!」

理屈はわからない。

翔は、完全に絶命していたはずであった。

コードキャストを使っている気配も感じられず、なぜ彼は蘇生を果

したのか……

だが彼から落ちる魔力の破片を見るに、彼は絶命などしておらず、無茶な方法を取っていたのはわかった。

「まさかあんた、自分の体内に防御のコードキャストを!？」

「ああそうさー！そしてここが正念場だー！」

セイバーのデイルムツドに激情の細波ベガ・ルタがあるのは翔も知っていた。自らの周囲に防御のコードキャストを張れば、白亜は自分への警戒を緩めなかつただろう。

故に彼は、あの一撃を受ける直前、自らの体内に防御のコードキャストを張つたのだ。

彼が唯一、白亜にまだ見せていない、切り札。

あの決着術式の準備は、警戒心が強い彼女の前では発動しづらかつた。

故に、自らが絶命したかのように見せる演技をする必要があつただ。

——発動の準備は、すでに整つた。

「行くぜ……これが俺の、俺だけの力!『宝石煌く七つのヴェール』!!」
そして白亜が、先程まで聞いたことが無いコードキャストを紡ぐ翔。

彼に纏う魔力、その全てが一つの物質に集約される。

志波白亜ですら解説ができない、何重にも連なる難解なコード。そして周囲に、複数現れる七色の宝石。

魔術をも凌駕するその物質を目にした瞬間、その魔力を察知した白亜は驚愕に染まる。

「やらせない! shock弾丸(32)！」

白亜が弾丸を撃つときにはもう遅い。

彼は即座に一本の赤い槍を作り出し、デイルムツドに向けて勢いよく投げたのだ。

「『死がふたりを分断つまで』!!」

「見えた!『憤怒の波濤』!!」

三本の刃が、猛獣の口が、そしてデイルムツドに向かう一本の赤い

光……

その全てが激突しあい、爆発を起こす。

白亜が、翔が、リップが、デイルムツドがその爆発により吹き飛ばされる。

この勝負は、激情の細波があるデイルムツドの勝利……

——ではなかった。

「まさか……俺が自らの宝具に敗れるとはな……」

鮮血をまき散らしながら地面に叩きつけられるデイルムツド、そして転がるは、激情の細波と、破魔の赤薔薇……

だがその赤き槍は彼のものではない。

その証拠に役割を、終えたかのように光となって消えたからだ。

この宝具は刃が触れた対象の、魔力的効果を打ち消す。

故に翔はこの槍を使い、デイルムツドが持つ『激情の細波』を一時的に無力化したのだ。

このためには、自分が槍を投げるまで、白亜の注意を逸らす事。

そして、リップの宝具発動と、同時に投げる事。

この二つの、高難易度の条件をクリアする必要があったのだ。

「……私達の負けね」

勝負あったのだろう。

彼とリップ、白亜とランサー、二つを隔てる壁が現れ、白亜達のほうの背景が赤く染まる。

自身の左手を見る、先程までであった令呪の三画が消えかかっている。

「……翔くん。来て頂戴、そして障壁に左手を」

「？」

言われるがままに、障壁に近づき、左手を当てる翔。

そして白亜は障壁に左手の甲を当て何かを呟けば、彼の左手に熱が走るのを感じた。

「っ!?! お前……!」

そこにあるのは、新たに三画が書き加えられた令呪。
表情が驚愕に染まる翔に白亜は静かに微笑む。

「最初に言ったよね？ 勝者が更なる道を歩み、負けたものは、分解されこの歴史から消える。私は過去に存在したデータ。だから証なんて残るはずもない。だからここに私が生きた証を残す」

彼女は元々、人間ではなかった……

だが彼女の前のサーヴァントは、それを肯定した。

そして彼女は前に進んだ、だけど彼女は破れた……

その記録は存在するはずもない……だけど彼女だけが知っている。

「私が消える前に、翔くん。あなたに伝えなければいけないことがある。それは他ならぬ、あなたのことよ」

「俺の事を？」

白亜は静かに翔に語り始める。

「前にユリウスのサーヴァントから逃がすために強制退去させたでしょ？ あの時にさ、私はあなたのことを知ってしまったの。結論から言うわ。あなたには、記憶が無いらしいけど……それは当然のこと」

……待て、何を言っている？

「翔くん。あなたの体のリンク先はどこにもない。記憶なんて初めから……なかったのよ」

翔の記憶。

そのようなものは、初めからなかった。

それが意味していることは……

「だとしたら……」

震える声で翔は言葉を紡ぐ。

そして両手を見つめながら……

「俺はいつたい誰なんだ……う？」

静かにそう言葉を紡いだ。

今明かされる翔の正体、それは人間ではないという事。

自分は、ただ肉体とのリンクが切れて思いだせなくなっているだけ。

そう思っていたのに……

その事実には、リップは何も答えることができなかつた。

「今ここにいるあなたは私と同じ。過去の聖杯戦争はおろか、聖杯戦争以前の記録は、何一つとして存在しない」

——肉体からのリンクが無い、ではない。

——肉体そのものが無いのだ。

「ここにいるNPC達はムーンセルが地上の人達を参考にして再現された所謂AIよ。あなたもそういう存在だった。しかし、それが何らかの不具合でマスターとしての力を得てしまった」

歯を食いしばる翔。

今の思考にあるのは2つの自分。

——なるほど……と、頷く自分。

——そして、どうして……と噛みしめる自分だ。

「俺が……AI」

いつか……

記憶が戻つたらリップに語りたいたい……そう思っていた。

コードキャストも自作もできるし、自分はもしかしたら凄い人だったのかもしれない。

そのほかにも自分の故郷。

自分の家族。

自分が、どういう人間だったか。

そんな話をしたいと心の中でずっと思っていた。

——なのに。

だが、実はこれは予感していたことでもあるのだ。

あまりにも、おかしすぎた。

自分の記憶の戻らない期間が長すぎると……

そして、ありすの言葉……

——せっかく同じだと思つたのに。

——ようやく、同じ人だと思つたのに。

自分の正体が、分かるような出来事がこれまでに、何度かあつた。ただ、自分はただ、それに気づかないフリをしていただけだ。

この身体は、この思考は、人間のものではない。
ただの再現、データの塊。

——0と1の集合体だ。

「ぐっ……」

白亜が苦しそうに膝をつく。

最早、立っていられる状態ではないのだろう。

それでもなお、彼女は翔を見つめ、言葉を紡ぐ。

「翔くん。正直に言うわ。この聖杯戦争を勝ち上がったって、あなたは帰れない。聖杯を手に入れて何を願ってもこのセラフから出られない。言葉を変えるわ……『セラフの中でしかあなたは存在できない』。」

つまり……彼女はこう言いたいのだ。

死にたくない、というのが今までの戦いの理由ならば、もういいのだと。

これ以上戦いで、傷つき悩む必要はないのだと。

「翔くん。あなたが勝ち進むうえで、この命題は避けては通れないだよ。だって、最後に苦しむのはあなただもの……」

これは誰の問題でもない、自分だけの問題。

だが……ふと、白亜を見つめる翔。

このことを、自分に問いかけている彼女もまた、ムーンセルが地上の人達を参考にして再現されたNPCであった存在だ。

そんな彼女もまた、このことで苦労したのは目に見えてわかる。

彼女は、一体どんな選択をしたのだろうか……

「だから……問うわ、翔くん。それでも、データにすぎないあなたに、この聖杯戦争を戦い抜く理由があるの？」

その答えに、回答は用意していなかった。

腕を降ろし、目を閉じ、そして開く。

今まで記憶喪失だと思い込んでいた自分。

いつか思い出すはずだと思っていたのだから、回答が用意されていないのは自然だろう。

ただのデータである自分が、生きている人間と戦い命を奪う。

その空虚さを考えれば……余りにも恐ろしい。だがそれでも、死にたくないと願う自分が全く変わらなかったわけが無い。

戦った仲間達を思い出す。

データである自分を、親友と言ってくれたシンジ。

迷いながら戦う自分に、道を記してくれたダン卿。

似たような存在でありながら、進む道を探したあります。

自分に心を開いてくれたユリウス。

そして、白亜に出会った。

——かつて創造物はヒトと認められなかった。

——かつて物語に命は宿らないと考えられていた。

命があるものは、初めから命を持つモノだけだと。

その論理は、今も世界の掟なのだろうか……

——いや、違う。

断じてそれを認めるわけにはいかない。

目の前の彼女は、このムーンセルに再現されたNPC。

聖杯戦争の行く末を経験し、なお進んでいた彼女。

人間でなければヒトではないという諦めは、彼女の決意を汚すこと

となるのだから……

「翔……さん」

そして、隣存在を見つめる。

パッションリップ、彼女もまた作られた存在であった。

様々な、しがらみから解放され、ようやく歩もうとしたときに、命

を落とした少女。

——色々な事があり、悩み考え、それらが全て無かったことにて

きるだけでも？

——始めから作り物だったと結論付けることができるかも？

それは、ひどく何かが違う。

「確かに俺はデータだけの存在だ。だけど、そのデータだけの俺でも、

勝ち抜いた先に何かあるかもしれねえ」

そして……

聖杯ならば、データだけの自分にも何かをもたらしてくれるかもしれない。

そうでなくても、勝ち進む理由は十分にある。

今の自分には、願いがある。

「翔さん……あなたの願いは……」

「決まっているさ」

リップの問いに、静かに答える翔。

その後、今この場で……

——告げた。

自分の願いを……その願いに、迷いはない。

その言葉に、白亜もリップに静かに微笑み、頷いた。

そして……

「俺の願いと一緒に、お前の願い、俺が背負うぜ。志波」

その言葉に白亜は一瞬、目が見開いたかと思うと、静かに笑い、立ち上がった。

「主よ……すまない。私は、あなたを聖杯へと導けなかった」

傷だらけのランサーが立ち上がり、白亜と向き合う。

お互いの体は、既に黒ずんできており消滅も時間の問題であろう。

「いいのよデイルムツド。あなたはよく頑張ったわ。騎士として精一杯、私に尽くしてくれた。それだけで、私は幸せ者よ」

「……有難き幸せ。このデイルムツドの悲願を果たしてくれただけでなく、全盛期の力を使わせてくださった。これ以上の幸せがどこにありましようか」

「……見事だったランサー。いや……デイルムツド・オデイナ」

惜しめない賞賛の声が、翔の口より零れ、デイルムツドは障壁の向こう側を見る。

「フィオナ騎士団が一番槍……あなたの腕を見せてもらった。全てが、噛み合わなければ俺は今頃リップと共に、その剣と槍により葬られていたであろう」

「この戦いの勝者に称えられるとは……俺の槍も剣も、捨てたものではないらしいな。」

デイルムツドは誇らしげに笑いながら、どうにかその口を開く。彼の体が光となり、消えていく、しかしその顔は、春風のごとく笑っていた。

——生前には叶えられなかった。忠義としての生き様。それを此度の聖杯戦争で叶えることができた。

彼の望んだ……最も欲しかった生き様を手に入れることができた。だからデイルムツドは、消えゆく我が主を見つめ、静かに言葉を紡ぐ。

「おさらばです、我が主よ。どうか旅立った先にも幸あらんことを」

——騎士として忠を尽くしたデイルムツド・オディナ。

——ランサーのクラスで召喚された彼は、恨み言一つなく消えた。

光となるデイルムツドを見送り、白亜の身体は翔へと向く。

「翔くん。これだけは、忘れないでね？」

彼女は目を閉じ、そして……開く。

「私達は、今ここに……確かに生きているのよ」

静かに翔へと言葉を紡いだ。

その言葉の意味を、彼はしっかりと受け取った。

頷く翔、微笑む白亜。

そしてその言葉を最期に、彼女もまた光となった。

第29話 最終決戦

最も弱きものが

最も強き者に挑む。

迷いと嘆き

決断と成長に満ちたその道程こそ

人間の証である。

聖杯は強きものにのみ与えられる。

最後の二人は、ともに性質の違う強者となった。

であれば――

もう一度君に贈ろう。

光あれと……

――熾天の玉座にて君を待つ

決勝戦、開幕。

128人のマスター、128人のサーヴァントによる闘争。

それも残りあと2人のみとなった。

マイルームの静寂を破るかのように、端末から電子音が鳴る。

『二階掲示板にて次の対戦者を発表する。』

これが最後だ。

聞きなれた電子音から端末に視線を向ける。

それを聞いた翔とリップは、同時に立ち上がる。

「翔さん。最後の相手はやはり……」

「間違いなくあいつだ。というかあいつ以外考えられねえ」

最後の1週間で、今ここに始まった。

あんなに賑わっていた廊下には誰もいない。

ただ静寂を切り裂く二人の足音が響くのみ。

そして端末の指示通り、掲示板に移動すると、既に先客の姿があった。

「やっぱりお前か。レオ」

やはりというべきか、掲示板の目の前に立つ人物は翔の良く知る人

物であった。

レオ・ビスタリオ・ハーウェイ。ガウエインを従えし、最強のマスター。

「こんにちは」

レオはいつも通りの優しいな微笑みを向けてくる。

その一歩後ろには彼のサーヴァントである、ガウエインが剣のごとく佇んでいた。

レオとはまた違った穏やかな瞳。

だが彼は円卓の騎士の一人。

今は、敵意も戦意も感じられない。

そこにあるのは、鉄の忠誠心と、主へのゆるぎない信頼だけ。

「おや、掲示板がようやく変わったようです」

レオの言葉に翔は掲示板に目をやる。

こうして掲示板を見るのも、これが最後だ。

浮かぶ文字はわかっているが、それでもなお掲示板を見続ける。

マスター：レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ

決戦場　：七の月想海

「これで……僕達は正式に討つ者、討たれる者の関係になったわけですね」

「ああ、これが決勝戦。俺とお前だけの戦いつてことだ」

「ええ、改めて……よろしくお願いします」

涼しい顔で言っただけのけるが、声に微妙な変化があったのを翔は見逃さなかった。

これは戦いへの緊張ではない。

——高揚だ。

この少年の王は、この戦いに期待を抱いている。

「不思議なものですね」

翔を見て、レオが口を開く。

「最後に、僕の前に立つのがあなただと正直、想像できませんでした。最初に見たときのあなたとは全く違う。長い様で短かった、この戦いがあなたを成長させたのでしょうか」

「そうか。お前にそう思ってくれるなんて、俺も捨てたもんじゃないな」

「ええ、今ここにいるあなたは決勝で戦う相手として最もふさわしい。実力だけじゃない、その魂の在り方もだ。ふふ、こんな気持ちは初めてです。まるで恋する少女のようで少し照れますね」

はにかむようにレオは笑った。

まるで、生まれて初めて、人間らしい感情を楽しめたというように。

「これがどちらの為に用意された運命なのかは分かりません」

ですが……レオは言葉を続ける。

「今ではあなたとの戦いが僕が王になる必要な一歩であるような気さえします。故にあなたに敬意と心からの感謝を。僕がまだ知りえない世界の側面を見せてくれるあなたに」

彼の言葉に嘘はない。

レオは偽りのない敬意を翔に払っている。

そして、同じくらい彼は信じているのだ。

——自らの勝利を

——自らの正しさを

——勝つのは自分だと誰よりも強く確信している。

「っ……」

その言葉に翔は、目を開く。

微かにだが、ようやく分かった……彼に何が足りないかを。

聖杯戦争、初日に彼に出会い、何かが欠けているような感じの雰囲気を感じ取った正体。

それはきつと……

「レオ。気持ちはわかりますが、これ以上の親睦は不要かと。彼らは既に障害である存在です。言葉を交わす時は過ぎました。好敵手と認められたのなら尚更です」

「そうですね。ありがとうガウエイン。少しばかり、僕も熱にあてられたようだ」

翔が一つの結論を導き出そうとしたとき、それはガウエインの言葉によって遮られた。

彼の言葉を聞き、レオは背を向け去っていく。

その別れの笑顔は、いつもより穏やかな感じがした。引き返すレオを見つめる翔。

思い起こせば自分は、いつもレオの背中を見ていた気がする。

住む世界や、見ている場所があまりにも違い過ぎて、彼の言葉はまるで異国の言葉を、話しているかのようなようであった。

——勝つ事を当然としてきた少年。

——勝利以外の未来を許されない王。

——生まれながらの絶対者。

そんな彼と対等になったとはとても思えない。

だけど……

たった一つの頂。その頂きを目指してたどり着いたこの場所では、見える景色は同じはずだ。

「勝つぞリップ」

「はいー」

——さあ、勝負だ。最後の王よ。

思いのほか、精神は落ち着いていた。

今までの戦いが、走馬灯の様によぎる事もない。

戦いへの不安で呼吸が乱れることもない。

焦りも、気負いもない。

ただ一つ、微かな驚きがある。

こんなにも落ち着いている自分自身だ。

それだけが意外だった。

情報を集めに図書室へ行こうとしたとき、ふとある一つの扉の前で足を止めた。

そこは、もう誰も居なくなり、片づけられてしまった一つのマイルーム。

6回戦で自分と戦い、消え去った志波白亜のマイルームであった。「翔さん、どうしたのですか？」

「わからない。だけど、誰かがここを開けると俺にそう言った気がするんだ」

翔の言葉に首をかしげるリップ。

誰に言われたかは翔でもわからない。

だが、何かに導かれて気がするのは確かだ。

その導きを信じ、扉を開ける翔。

彼女のマイルームは、既に片づけられており、一つの教室へとなっていた。

何の変哲もない教室、その片隅に何か光るものを見つけ、その場所へと足を進める。

「これって、礼装の箱……？」

リップが首をかしげながら言葉を紡ぐ。

触ってみたところ、軽い鍵のような魔術がかかっていたが、直ぐに解除できそうだ。

翔は、その鍵を解除し、礼装の箱を開ける。

「……？」

その中に入っていたのは、鉛色の石球だった。

これが白亜のマイルームにあったという事は、彼女が最後まで取っておいた切り札なのだろう。

程度、説明データが入っていたので、それを覗いてみることにする翔。

「っ!? これは……！」

これは礼装と言えるのだろうか……

だが、これを使えばガウエインとの戦いで強力な武器となる。

しかしその為には、こちらにも様々な準備が必要だ。

「……志波、お前の武器、使わせてもらうぜ」

礼装の箱を閉じ、それをしまう翔。

果たして、これを用いた作戦が成功するかもわからない。

だが、これを手にした瞬間、暗闇が続く通路に一筋の光が見えた気がした。

白亜のマイルームから出て、数十分。

翔とリップは、図書室でレオのセイバーの情報を集めていた。

今回、最強の相手を戦うにあたって最も幸運なのは、相手サーヴァントの真名がわかることだ。

円卓の騎士の中でも屈指の実力者ガウエイン。

警戒するべきはやはり彼の持つ聖剣『ガラティーン』であろう。

だが同時に、もう一つ警戒するのがある。

『聖者の数字』……ムーンセルの聖杯戦争では、事実上太陽の沈んだ時間に敵と戦うことは許されていない。つまり俺達はこれを突破しなければ、ガウエインに勝ち目はない」

『聖者の数字』。

その効果は、午前9時から正午までの3時間と、午後3時から日没までの3時間の間、力が3倍になる能力。

故に戦うときには、本来の力が3倍になったガウエインと戦わなければならぬ。

全ての力が3倍になったガウエインは、恐らくリップの腕力を以てしても押し返される。

「だから、あの時、ヴラド三世の宝具を受けても……」

「あ、でも翔さん。本の下の方を見てください」

リップが声を掛けたのは、ガウエインの伝承。

どのような英霊であれ、例外がなければ、弱点というのは必ず存在する。

伝説によれば、ガウエインは日没まで耐えたランスロット卿により討たれ死んだ。

これを解釈すると、一度でも傷付けられた相手には、その効果を発揮できなくなるといふ弱点……という考えにもなる。

つまりガウエインの弱点は『落陽』。ということは日に落とせばいいのだが……

「つまり目標は、どうにかして日を遮断して、セイバーに攻撃を当てるか……」

日の当たらない場所に誘導する……という手が最も最善なのだろうが、そんな手にレオ達が乗るはずもないだろう。

となると……自らの決着術式を使い、ガウエインをこちらから、引きずり込む手が最も有効。

だがその様な宝具などあるのだろうか……？

それに決着術式の発動には時間がかかる。

そんな隙を、レオが許すはずもない。

考えれば考えるほど、泥沼に引き釣り込まれるような感じだ。

「あいたつ」

翔も考えると同時に、リップも考えていたのだろう。

思考を巡らせながら歩いていればいつの間にか、本棚に激突しているリップの姿がそこにあった。

そしてその振動により、一冊の本が落ち、彼女の頭に激突する。

それが痛かったのだろう。リップはその場でうずくまってしまった。

「おいおい……気を付けろよ？ここの本が全部落ちてきたら、俺もリップも埋まっちゃうほどだからな」

「うううう……ごめんなさああい」

涙目のリップの頭をさすりながら、本を手に取る翔。

そして戻そうとしたとき、その本の題に目をやる。

そして彼の手が止まったかと思えば、その本をめくり、内容を確認する。

「ん？翔さん？」

「……これだ。これがあればガウエインの『聖者の数字』を突破できるかもしれないねえ」

彼が見たのは、ある伝承。

ガウエイン関連でも、円卓の騎士関連でもない、全く別の伝承。

だが、寿々科翔ならば、その伝承すらも武器となりえる。

全くの偶然から、彼は一筋の攻略を見出したのであった。